



B
5244
Y67A1
1940
v.4

Yoshida, Norikata
Yoshida Shōin zenshū

East
Asiatic
Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

[illegible]

第一卷

第一號
昭和三十一年四月一日起發行

岩波書店

東京市神田區一ツ橋

[illegible]

錄同願錄(一)中月記(本發還)

第二回配本 第十卷 (一九二日)

[illegible][illegible]

6

5/

26

「うなび」にのみ、み

1

(1) 減感化の程度

四、感化教育の効果

以てその抱負の心を察す

三三三
七七九

に向つて是れを語れば、驚愕せよ

してその結果どうしようかと

・王豹・臨邛・見ざるに至らず、

昔者王季子西伯也

「女」(6833番 京川、110)

1994

(2) 抱負

うして先生は自らの長た

。 景 西 。

又その實施上の要點は次の様

に入れば、多くは其の頭蓋！

三二一

かに関ければ理があるか。如し。

[illegible]

1940
10.4

これ遣はさざれ候が御師弟の因みに存じ奉り候(前巻二五八)

これ遣はされ候に御師弟の因みに存じ奉り候に
(前卷三) 四三八、四三二、四三〇頁

[illegible]

○ 留子 5 年 2 年

[illegible]

習字に就いて別に述べた事なきはなない。

そこで先生は先づ富永にその事を詫びて居る手紙がある。

[illegible]

○室換へ

[illegible]

○友愛の詠

廣 瀨 敏 子

松陰の和歌

——
蛙に友愛・尊皇愛國の詠についで

の出發であり根本の力でもある。

[illegible][illegible]

(イ) 二小田一安五三〇、
「在獄」人十二人中七人服

第 三 卷
第 二 章
第 一 節

朝 代 の 変 遷
朝 代 の 変 遷
朝 代 の 変 遷

(大正) (昭和) (平成)

[illegible][illegible]

九重の機も御心留ほへば手にとる所蘇ものみみぞふなり

[illegible][illegible][illegible][illegible]

は、孝道・方愛の一切をとりまとめ、感謝、慰撫、訣別の無量な吟詠であ

諸君に心づかすに、今日この道士として示す最も、

一
 東
 山
 子
 集
 卷之五
 七
 八
 九
 十
 十一
 十二
 十三
 十四
 十五
 十六
 十七
 十八
 十九
 二十
 二十一
 二十二
 二十三
 二十四
 二十五
 二十六
 二十七
 二十八
 二十九
 三十
 三十一
 三十二
 三十三
 三十四
 三十五
 三十六
 三十七
 三十八
 三十九
 四十
 四十一
 四十二
 四十三
 四十四
 四十五
 四十六
 四十七
 四十八
 四十九
 五十
 五十一
 五十二
 五十三
 五十四
 五十五
 五十六
 五十七
 五十八
 五十九
 六十
 六十一
 六十二
 六十三
 六十四
 六十五
 六十六
 六十七
 六十八
 六十九
 七十
 七十一
 七十二
 七十三
 七十四
 七十五
 七十六
 七十七
 七十八
 七十九
 八十
 八十一
 八十二
 八十三
 八十四
 八十五
 八十六
 八十七
 八十八
 八十九
 九十
 九十一
 九十二
 九十三
 九十四
 九十五
 九十六
 九十七
 九十八
 九十九
 一百

[illegible][illegible]

[illegible][illegible][illegible][illegible]

[illegible]

いで赫々の光を思ふ。

[illegible][illegible]

に經を以て経問のその一經。ひびしをなすを云ふに則ち。からるゝ
ふのを讀むに經けり。けりしものなり。けりしを以て美經の中經に
たり。とし一經に二月六日の十三號に於て

[illegible][illegible][illegible][illegible]

ちのYに對し、餘數りなを留めおきて、そのりなを十
 になひ、餘をなひの箇内りまのりなと相を五。を留め、そのりなを
 ちのりなと相し、なひの箇内りまのりなと相を五。を留め、そのりなを
 ちのりなと相し、なひの箇内りまのりなと相を五。を留め、そのりなを

一 是より腹をうんと欲し、
性根を失ひ、
王政を行ひ、
大直を失ふ

[illegible]

吉田松陰全集

第四卷

B
5244
Y67A1
1940
V. 4



山口縣教育會編纂

編輯校訂委員

西	玖	廣
川	村	瀬
平	敏	
吉	雄	豊

000七生院 四月十五日

[illegible]

墨文正龍其志即讀意一榮之世張正體

野山獄文稿

野山獄文稿目次

謝詞 附 金子重輝序狀 (別紙)

延喜式を読む 甲寅冬……………一七

従弟玉木彦介に興ふる書……………一八

金子重輝に興ふる書 附 敬告二册……………一九

堀河宮本朝兵衛に興ふる書 十二月二十六日……………二〇

赤川湊水に興ふる書 乙卯正月二十七日……………二一

金子重輝序 正月……………二二

文保新太郎の東役を論る序 二月……………二三

臥し字に對する説 三月朔日……………二四

上棟式制 時市の御禮に贈る……………二五

赤川湊水に對する常談に對する序 三月六日……………二六

金子重輝の謝詞……………二七

浮屠清狂に與ふる書	三月九日	三二
妻木士傑に復す	三月二十七日	三六
白寸吉助に與ふ	四月一日	三八
三藤元	四月二日	二九
清狂に與ふ	四月四日	三三
中村道太郎に與ふる書	四月八日	三一
清狂に與ふる書	四月十日	三二
東原貞二に與ふる書	四月十八日	三四
清狂に與ふ	四月二十日	三三
海防篇を讀む	海防篇、海國圖志解編	五月四日
諸友に與へて食子生お爲めに哀詞を求むる書	五月五日	三八
松小五郎に與ふる書	五月六日	三八
松小五郎に與ふる序	五月七日	四二
曾員青木新藏に與ふる書	五月十九日	四一
林藤橋に與ふる書	六月二十六日	四三

清原に興ふる書	六月二十六日	四七
實龍聖藏に興ふる書	七月二十七日	四七
土屋玄之介に興ふる書	八月二十九日	四九
甲寅嘲頗評判記を読む	七月	五〇
徳、字は有國の説	七月四日	五二
南心氣齋先生に興へて獄舎問答を寄する書		五三
寛、字は土室の説	八月六日	五四
縮、字は守約の説	八月七日	五五
矢之介に興ふる書	八月十二日	五六
読菜齋別序		五八
其三に興へて詩を論ずる書		五八
實月堂三に題す	八月十五日	六〇
浮城聖淵の撰録小品を読む	八月十五日	六〇
山崎の江戸に遊學するを語る序	八月二十二日	六一
蟹田子雲主に興ふる書	八月二十三日	六二

土屋恭平江戶に遊學するを送る序	八月二十七日	六五
良三の東役を送る序	九月六日	六七
獲善問答跋	九月七日	六九
久武介に復する書	九月十三日	七〇
浮屠顯霖に復する書	九月十三日	七二
太華山縣先生に興へて講孟劄記の評を乞ふ書	九月十八日	七五
哈喇呼吐喀誌に跋す	十月二十八日	七七
道丈に興へて古柯書作を論ずる書	十月二十八日	七八
顯霖に興ふる書	十一月一日	八一
朝宗、字は士海の説	十一月十五日	八三
道丈に興へて講孟劄記を示す書	十一月十五日	八四
室約藏する所の説苑に題す	十二月	八五
居る室集を読む	十二月二十六日	八六
往事を記す	十二月晦日	八八

延喜式を讀む

延喜式五十卷、記載詳悉、千載の下、草莽の士、仰ぎて之れを讀まば、百官の後に從ひ、廟堂の間に立ちて、身其の事に預るが如くならしむ。此の書存して今に至り、世に流傳する、亦何の幸ぞや。欽明の朝、佛法の中國に流入すより、ここに至るまで六七百年たるのみ。而るに今此の書を閲するに、修法・講經・供養・布施・賜祭・修葺の事半ばに過ぎ、亦何を甚だしきや。然れども神祇を崇信に列ね、僧尼は則ち各式に附見して、款一て別に條を立てず。是れ古の遺訓にして、編者の微意ここに存せり。

(二) 實に興教堂の御路(おみち)に興へし書を讀みしに、陵戸を詢すること極めて剴切にして、人を以て疎略せしむるに足れり。然れども使らに漢唐を引きて證左と稱し、倭山(やま)は使戸(しこ)五嶋、功臣の墓は墓戸(むす)三層と、式に明文あるを知らず。而して今は別を證知するは、尤も疑くべしと爲す。

(一) 叔父王
太父之弟の嫡
子。本卷一八

次の人、武帝
に長す。

(二) 三國志

王に封ぜらる

(四) の旨

或都王額に住

は、

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

王に封ぜらる

從弟玉木彦介に與ふる書

彦介足下、宣聞く、昔東方朔は年十二のとき、書を學ぶこと三冬にして、文史用ふるに足り、曹植は十歳餘にして、詩論を誦讀し、辭賦十餘萬言、陸雲は六歳、荀勗は十歳餘、皆善く文をつくる。陸績は六歳にして袁術に見え、孔融は十歳にして李膺に遇る、皆其の奇として嘆ずる所となりと。古人かくの如き類甚だ多し。今足下も亦十歳、當に自ら表見する所あるべし。知らず、近日修むる所は何の業ぞ、讀む所は何の書ぞや。僕足下の國史を讀まんことを望む。漢事に明かにして國事に茫乎たるは、學人の通病なり。故に宜しく先づ國史を讀むべし。國史は近古より始めよ。上古は幽遠、中古は悠緩にして、其の史皆讀み難し、幼學の及ぶ所に非ざればなり。近古は又宜しく尋定より始むべし。今且く陰德記を把りて一讀せよ。記は刻本世に多くあり、字畫楷正にして、地名・人名並に旁訓を附す、文又頗る文綯にして、讀者をして樂しみて信むことを忘れしむ。漢書記・古田語に比せば、大いに幼學に便なり。僕又足下

名師の士。直

不實。

附錄二

野山參

然し、何の儀もこれに當へん。是下官に云く、一戰ハ敵ひて復に遇ふ、吾れの體ハ
 一陽重官に至り、邪難ひて縁ん一と。今果して勝あり、僕に坐して事なし、或は寇
 其の害を患へ、或は是下の病を憂へて、暫くも懷に忘れず。國つて罪へらく、人の疾
 病あるは、猶ほ國に寇賊あるが如しと。國善く寇を退けば則ち民安り、身善く病を除
 けば則ち體安し。其賊にば則ち勢振す、體安からば則ち氣和なり。勢振はば天下に強
 弱なく、氣和ならば天下に無事なし。是下も亦寇賊を患ふる者なれば、宜しく其の身
 の病を以て天下の病を制り、天下の病を以て其の身の病を治むべし。時雖れ大寒なり、
 千萬自愛せよ。龜言二則、別に錄して以て示す、一笑せば幸甚なり。

龜言二則

山の龜しく且つ蛇くして、人の體ゆる能はざるもの、吾れは則ち從容として之れを越
 え、而も體勞れず。或の深く且つ蛇しくして、人の涉る能はざるもの、吾れは則ち從
 容として之れを涉り、而も足を濡らさず。是を天下の至難至險にして、人の爲す能は
 ざるもの、吾れの體從容として之れを爲すは、其れ睡だ夢のみなるか。甲寅の歲、吾

其處に坐して賦に下り。獄中に編輯文史の製しむべきものなく、徒は又因相解るを許さず。唯だ夢みるを以て樂しみなすのみ。或は海外異域の遠きに遊び、或は千古草昧の前に生る、其の樂しき言ふべからず。退いては默し、默しては倦み、倦みては睡り、睡りては夢みて以て樂しき、言が能事畢る。言が能事畢る。言が能事畢る。

山丘の歳、吾れ始めて策を負ひて西遊す。其の後四方を跋渉して、艱苦備さに皆め、足跡天下に遍きこと、今に至るまで五年なり。今は則ち一室に幽囚せられて、復た寸歩をも移さず。乃ち往事を追思し、慨然として獨り笑ふ。蓋し其の身の之れを履むに方りては、處々皆苦しかりしも、之れを追思するに及んでは、處々皆樂し。苦の甚だしかりしものは、樂も亦甚だし。苦の小なりしものは、樂も亦少なし。飢ゑて食を得ざるときは甚だ苦しく、渴して飲を得ざるときは甚だ苦しく、勞れて休むを得ざるときは甚だ苦しかりしも、其の食を得、飲を得、休むを得て、之れを追思せば、則ち一瞬するのみ、ここをもて知る、苦の時は暫しにして、樂の時は久しきを。(四) 故言謂へら、一天地も猶も以て一瞬なる能はず」と、是れ苦の味なり。「物我れと皆盡くるなきなり」と、

是れ雖の轉なり。佛氏は又三世を説けり。而して一瞬の前は過去なり。一瞬の後は未來なり。二者を去らば、窮ち竭世なるもの義はくぞや。嗚呼、是れを知らば則ち興に道に邁くべきなり。而るに世の人、其の暫しの苦に堪へずして、其の久しき樂を失ふは、何ぞや。

同囚富永彌兵衛に與ふる書

鳥獸遺言の一書は、讀者をして勃然沛然として忠義の心を興起せしむ。其の吾が黨に疑するもの、是に證照たらんや。世人の學を疑す、蓋し博聞強記以て談説に資する書あり、能文巧詞以て名聲を釣る者あり。實才弱く力薄くして、二者と倫たること能はず。二者と倫たることは又其の疑する所、獨り忠孝節義のみ、性の類ふ所にして、及ふなしと雖も、亦靡かに余ててこれに幾からんと欲す。寅向に國事を憂慮して狂愚の言を盡し、此れに坐して獄に下る。獄中古人の言行を觀るに、片善寸美と雖も皆感發する所あり。況や此の書の精忠告誡、紙表に洋溢せるものに於てをや。昨此の書を借

（二）
鳥獸遺言
一書は
讀者を
して
勃然沛
然とし
て忠義
の心を
興起せ
しむ。其
の吾が
黨に疑
するもの
、是に
證照た
らんや
。世人
の學を
疑す、
蓋し博
聞強記
以て談
説に資
する書
あり、
能文巧
詞以て
名聲を
釣る者
あり。
實才弱
く力薄
くして
、二者
と倫た
ること
能はず
。二者
と倫た
ること
は又其
の疑す
る所、
獨り忠
孝節義
のみ、
性の類
ふ所に
して、
及ふな
しと雖
も、亦
靡かに
余てて
これに
幾から
んと欲
す。寅
向に國
事を憂
慮して
狂愚の
言を盡
し、此
れに坐
して獄
に下る
。獄中
古人の
言行を
觀るに
、片善
寸美と
雖も皆
感發す
る所あ
り。況
や此の
書の精
忠告誡
、紙表
に洋溢
せるも
のに於
てをや
。昨此
の書を
借

「老兄、此の書は、
老兄に示す。老兄之れを讀まば、亦必ず感發する所あらん、實願はくは預り
聞かん。實、老兄と目し、語言を交ふと雖も、未だ肺肝互に渾々を得ず。且に此の書に
因つて、以て前意を轉はん」とす。老兄若し「夷齊慕操均(四)」是れ黃土となる。實の狂
と愚と、事に於て何ぞ益せんや」と曰はば、實則ち一默あるのみ。如何ぞや、如何ぞ
や。二十六日、實白す。

赤川淡水に與ふ書

高田孤單、方て是下諸友を思つて、前も見るべからず。忽ち書及び清人記する所の新
聞一通を得たり。欣慰何ぞこれに加へん。僕知識暗劣にして、洪範(五)の計、豫め甚の虞
政を盡ること能はず。但だ支那人の爲めに深く悲しむものあり。支那人は常に自ら尊
びて中華と爲は、外國を賤しみて犬羊と爲す。而るに一たび變じて蒙古となり、再び
變じて滿洲となれり。所謂中華の人、蓋し平かなること能はざらん。然れども其の害、

統一を以てたとす。二、（二）を以て、大國の害をさる所、明教の怨さざる所の者も、其の
 實際を統一するにありては、詞を擧げて以て天子と爲して疑はざりき。況や乃ち蒙古
 と漢洲とを疑はんや、又の以て賊と爲す所の者を、子は以て君と爲すべく、子の以て
 君と爲す所の者を、孫は以て賊と爲すべし。忠孝の訓、これを空言に載すと雖も、實
 事に照す能はず。且て今やの如きもつ、彼れ皆習俗（そく）と爲す。然れども蒙古・漢洲の如
 きに至りては、人心雖も或は之れを惡むことを知れり。是れ洪饒の其の民を偏る所以
 なり。夫れ洪饒は中原の人なり。中華の人を率ゐて、漢洲の賊を攻む。其の名、正と
 謂ふべし。漢洲は一帯の夷子なり。王命を奉じて亂賊を討つ、其の名、正と謂ふべし。
 然らば而ち二、三十八の民、孰れに従ふを正と爲し、孰れに従ふを逆と爲さんや。是
 れ舊來の支那人の爲めに深く悲しむ所なり。然れども洪饒の黨をして、初めより髮
 を剃らず、襪を穿たず、天子の地を踐まず、天子の粟を食はず、崇禎（しゅうてん）の正朔を奉じて
 今日に至らしめば、則ち吾れ其の誰に属せん。而れども支那寧んぞ此の人あらんや。
 然るに則ち洪饒の義は、遂に興すべからざるなり。然れども是れ何ぞ言ふに足らん。

洪饒は、
 明の世に
 蒙古を
 討つた
 人なり
 洪饒は、
 明の世に
 蒙古を
 討つた
 人なり

洪饒は、
 明の世に
 蒙古を
 討つた
 人なり
 洪饒は、
 明の世に
 蒙古を
 討つた
 人なり

(四) この
文は當然死す
以てしても皆
皆死する詩で
ない

封疆の臣民、皆當に之れに死すべし。德兆の臣民、皆死すべからざれば、

國を治むるの爲に絶つて死すべし。天下無あらば、德兆の臣民、皆當に之れに死すべし。邦國あるは、封疆の臣民、皆當に之れに死すべし。德兆の臣民、皆死すべからざれば、則ち皇統は天壤と爲りなけん、封疆の臣民、皆死すべからざれば、則ち茅土は山河と爲ることなけん。此の義は萬國に卓越して、支那以下の能く及ぶものなきなり。儒

南國に在りと雖も、猶ほ德兆の數、封疆の内に在り、區々の心、自ら己む能はず。唯た望むらくは足下諸友此の義を明かにして、支那人の笑ふ所となるたからしめんのみ。聞く、足下兄弟國へ歸るの後、漸兵・矢介相難いで歸り、良藏の歸るも亦近きに在り。〇〇社の文通、當に復た一振すべし、歎想に堪へざるなり。不宣。

洪藏の辭は固直情を混一するに足らずとは、足下何の見る所ありて之れを言ふや。

傳文島の形勢を觀るに、廣西に起る者は西北に難關を取り、流に順ひて東南を略するに難くはなし、今則ち廣西に起り、江西を過ぎて南東に據りしは、彼れ蓋し敵師を用ひ、敵て封疆を利せんと欲せしならん、形勢に暗きに非ざるなり。固國當永業

曰く、「洪鐘の言を受けること流るるが如し。是れ常人に非ざるを見るに足る」と。僕も亦以て然りと爲す。然れども此の記章々にして、得着は固より未だ盡くは盡かず、失着も亦或は洩らすあり。之れを要するに、未だ遽かに其の成敗を論じ易からざるなり。

此の記、悠然として手を起し、順治・康熙を歴數して、道光・咸豐に及ぶ。是れ大篇の作法なり。而るに結末には乃ち一の收束の語をも着けず、又絶えて起手と喚應せず。意はに作者未だ稿を脱せざるならん。

編輯探微にも亦執筆は洪と稱し、而して建元の事なし、此の記と合す。清商乃ち云ふ、「明の亂、朱某、元を愛德と建つ」と。其の妄誕なること疑なし。

金革知來抄序

詩人の言は至情に發し、至理に歸す。故に其の人を感ぜしむること婉にして切、其の人に入ることを徹にして深し。三百篇以下、漢・魏となり、唐・宋となり、詞に繁簡あ

而歸に出づ

り、謂に新古あれども、哲人^{あやかし}の旨を得ざるものなし。吾れ近讀の絶句を讀むに、逸^い書の少年の語作に至りては、往々金蓮^{きんれん}を繼とし、死して旅はざるの風あり。描抄^{えいしやう}して以て眞跡に似す。御弟^{みでい}彦介、將に父に従ひて相撲を改らんとす。因つて擧げて以て贈と稱す。尙に瘦澤^{しやうさく}疾^はし、頭^{かぶ}に觸れ之を長せしめば、僅々たる數輩も亦將に壯士の氣を發するに足るものあらん。孔子曰く、「往^いを告げて來を知る者は、與に時を言ふべし」と。彦介其れ亦來を知るや。

久保清太郎の東役を送る序

吾れ清太郎と通家の義あり。家居へ近く同學相益し、兒たりし時より甚だ馴る、今已に十數年たり。而るに未だ嘗て其の喜懼^{きこ}の色を見ず。吾れ固より之を愛とす。吾れ常に誦す、後世は文藝日に隆にして、士論日に密なり。善^よと稱し、嘉^よせず、過は苟も恕^{ゆる}まず。ここを以て士風漸く剝薄^{はくはく}に趣き、才を忌み能を害し、甚だしきは善類^{ぜんるい}相賊^{さうさく}ふに及ぶ。其の端^はの成る所、誠に寒心すべきのみと。噫、其の善くかくの如くならざる

こと、吾れ獨り清太氏に望むあるなり。清太氏將に江戸に役せんとす。吾れ曾て清太氏の爲めに大都交遊の盛たるを道ひて悉せり。今乃ち此の行あり、亦何ぞ嘔々せん。行は清太氏、往いて陶嶺(二)の背に跨り、右に三峯の秀を撫し、左に八州の廓を俯し、浩然として長嘯せば、或は自ら得る所あらん。

(三) 弘、字は穀甫の説

叔父王先生の令嫡彦介は寅(寅)に於ては從弟たり。書來りて曰く、「某の日、吉なり、將に就せんとす」と。寅乃ち先生に請うて曰く、「吉は冠して字(おきな)す。其れ以て之れに字せらるるものありや」と。先生曰く、「未だしなり、汝爲めに之れを擇べ」と。寅、弘、字は穀甫と爲さんことを請ひ、且つ之れが説を爲りて曰ふ。士は以て弘穀(三)ならざるべからず、任重くして道遠し。惟だ弘のみ以て天下の至重に任ずべし。惟だ穀のみ以て天下の至遠を致すべし。之れを萬の韃牛の大倉の粟を運ぶに譬ふべし。弘にして穀ならざるものは、鐵牛にして行くべからざるなり。穀にして弘ならざるものは、野

牛にして耕すべからざるなり。猪獐狸の類に益なきのみ。人師々の身を以て霄壤の間
に生れ、心は天地に通じ、道は古今を貫く。上に君父の大神を荷ひ、下は師友の重責
を負ふ。弘なるもの或は以て賢なくんば、庸ち弘にも非ず、以て毅なることなく、毅
なるもの或は以て弘なくんば、而ち毅にも非ず、以て弘たることなし。古に曰く、
「道は成人の道なり」と。成人の道、蓋し此れに過ぎざらん。弘、字は毅甫の説を
傳へる。

士規七則 毅甫の加冠に贈る

淵子を教誨せば、嘉言林の如く、躍々として人に迫る。顧ふに人讀まず。卽ち讀
むとも行はず。苟に讀みて之れを行けば、則ち千萬世と雖も得て盡すべからず。
噫、復た何をか言はん。然りと雖も、知る所ありて、言はざること能はざるは、
人の至闇なり。古人これを古に言ひ、今我れこれを今に言ふ、亦何ぞ悔まん。士
規七則を作る。

一、凡そ生じて人たるは、宜しく人の禽獸に異る所以を知るべし。蓋し人には五倫あり、而して君臣父子を最も大なりと爲す。故に人の人たる所以は忠孝を本と爲す。

一、凡そ皇國に生れては、宜しく吾が宇内に尊き所以を知るべし。蓋し皇朝は萬葉一統にして、邦國の士夫世々、祿位を襲ぐ。人君民之益ひて、以て祖業を續きたまひ、臣民君に忠して、以て父志を繼ぐ。君臣一體、忠孝一致、唯だ吾が國を然りと爲す。

一、士の道は義より大なるはなし。義は勇に因りて行はれ、勇は義に因りて長す。

一、士の行は賢能がざるを以て勇と爲し、巧詐あやふさ過を文いるを以て恥と爲す。光明正大、皆是れより出づ。

一、人古今に通ぜず、聖賢を師とせずんば、則ち鄙夫のみ。讀書尚友は君子の事なり。

一、徳を成し材を造するには、師恩友益多きに居り。故に君子は交游を慎む。

一、死して後(二)にむの四字は言簡にして義廣し。(三)堅忍果決、確乎として抜くべからざるものは、是れを合きて衡なきなり。

右生規七則、約して三編と爲す。曰く、「志を立てて以て萬事の源と爲す。交を
擧げて以て仁義の行を精く。書を讀みて以て聖賢の訓を稽ふ」と。士苟にここに
得ることあらば、亦以て成人と爲すべし。

赤川淡水の常陸に遊學するを送る序

古言盛衰の學と爲すや、上は南教經藝の大より、下は歌章音樂の小に至るまで、師承
する所あらざるはたし。ここに以て能く業の舊を守り、其の微を守りて失はざりき。
韓詩・左司を繼て通氣相尋き、名教漸進し、授受の義、徒に之れを曲學小數に寓すれ
ば、而も亦未だ嘗て失墜せざりき。徳川氏興りて師道循盛んに、學者目に眩け、英
才輩出ず、而るに近日讀書精古の士、前輩を輕んじ、師儒を輕んじ、天下皆是れな
り。而して書が舊は特に甚だし。ここに以て止まずんば、吾れは恐る、師道地を掃ひ、
名教曲りて存することたからんを。是れ固より宏才萬學の士、起ちて之れを振ふに待
つべしあるたり。吾が友赤川淡水は讀書みず是り、志高く氣概なり、直し後進の領袖

なり。爾時、東のかた常陸に遷ひ師を求めて之れに従はんとす。夫れ常陸の學は天下の推す所にして、其の老輩碩師、皆師承する所あり。今淡水遠く往いて之れに従ふは、固より以て其の學の蘊を盡さんと欲すればなり。嗚呼、淡水、師道を慢るなかれ、私見を立つるなかれ。取捨去就、唯だ先生に是れ聽かば、則ち古道及び難からざるなり。君れ小少より好みて書を讀み文に作ると雖も、未だ師承する所あらずして、自ら疑ふ。淡水往いて、師として之れに事ふるを得ば、亦幸に斯の言を以て之れを鎮せ。

三月六夜。

浮屠清狂に與ふる書

佛上人の名を聽むことここに十年、而して遂に相見るに因縁なし。向に辱くも上書(一)の稿本を垂示せらる。一讀して快と稱し、覺えず案を拍つて曰く、「方外に寧んぞ此の時務を知り國事を憂ふるの奇男子あらんや」と。已にして反覆して之れを思ひ、私心甚だ悦ばず、竊かに之れを駁議するあらんと欲して、未だ暇あらずりき。聞く、上人

(一) 月俵、周防國遠馬、年として名あり、
年十月京都本
事、
事、
事、

今日を見て「中村兄弟・土海海諸子」と、家兄伯叔の家に見せし、僕等がわけて岸壁に在り、諸子の後に従ふを得ず、乃ち一書を壁下に走らす。壁下、幸に諸子と之れを識せられぬ。

夫れ天道は兩端にして、人の能く測る所に非ず。乃ち安りに之れが説を信ずは天を測ふるに近し。孔子春秋を著して災異を紀すれども、事類を善かざるは、蓋し天地かゝるの如きは何ぞ人事に失ありて乃ち然らんと言ふに過ぎず。固より漢儒の易の説・漢儒の説は、天を測ひて人を欺くが如きに非ざるなり。僕生來未だ嘗て天地を語らず、謂へらく、人道を明かにするなく、人事に切たることなしと。今上人の書中に、去年の近況を載けて之れを觀とす。上人真に以てかくの如くおもへるか。抑、之れに觀りて以て人を欺むるか。二言皆安否の「天道提るるに足らずの説」に如かざるなり。然れども人の言を聽くには、其の志を采り其の説を略らば、斯ち可なり。劉向・班固等を讀せしが如き、案んば提舉に應へるを以てこれを尠ることを得んや。彼に上人の志、世間風氣、益々武備を精にして備して之れを待つに歸せば、則ち未だ深く答むる

に足らざるなり。天子に請ひて幕府を討つ事に至りては、殆ど不可なり。古より眞
 主の親る、一朝の憤懣の能く歎す所に非ず。成湯の葛に於ける、之れに牛羊酒食を饗
 るに至り、文王の紂に於けるも義里の囚となるに至る。古の人、人の罪愆を觀ること、
 則ち其の身に在る如ごとく、速むべくんば則ち之れを諫め、疾すべくんば則ち之れを
 規す。其の深切なることかくの如し。我が藩、近年來大義を舉げて以て幕府を規束す
 るもの、至らずと爲さず。然れども之れを成湯・文王に比せば、能く少しく愧づるた
 からんや。今征夷職を願しくすと雖も、其の人才治績固より諸藩の能く及ぶ所に非ず。
 故に天子の命に奉じ、天下の憤に乘じて、一朝にして之れを斃すとも、我が君相の爲
 す所、豈に大いに前人に満ぐるることなくんば、則ち所謂天下の兵を動かすのみなり。
 仁義の爲か他國の爲めに建白せしが、意は常にここに在り。上人乃ち遽かに放罰を以
 て言を爲す、抑々又何の説ぞや。僕曾て匈奴の秦・漢に於けるを觀るに、其の勢力殆
 ど相敵するに足る。而して悍然として其の土に雄據せしは、晉代を初めと爲す。晉已
 に魏を破ふ、其の君臣遠隔あるなく、同類相賊ひ骨肉相食む。其の都を徙すに至りて

（三） 勸告の
ありあるをい

も、尚ほ得あることを知らず、遂に論議するに至る。後世之れを哀しまざるものなし。兄弟姉妹に闘争あり、其其の害を憐れむ。大敵外に在り、豈に國內相害むるの時ならんや。唯だ偏に諸侯と心を結せて、軍府を規諫すべく、終に強國の連國を策すべきのみ。是れを之れ圖らずして、國國の正義を陳らんとす、國未だ臣すべからずして、衰弱之世に處ひ、外夷從つて之れに委せん。豈に勿々にすべけんや。凡そ此れ皆大義の圖する所にして、而して偏私に臨勢に居りて之れを言はんや。然れども勢は成敗の分ある所にして、固より亦之れを度外に措くを得ざるなり。上人吾が藩の力と徳と義とを觀る、無く天下の諸侯を合するに足るや、能く征夷の罪を圖すに足るや。二者或は未だ是らずんば、則ち 聖天子未だ遠かに其の請を允したまはざるや必せり。昔昔の劉弘は疆域の説を以て進むる言を諫せり。世には世に世を愛へ國に忠なる者あり。吾れは愚る、上人其の言頗る倣ふことを得ざらんを。然りと雖も、上人の此の説を諷くるは進し亦無あらん。上人曰く、「非常の變に處して非常の事を成す者は、必ず非常の善狀ありて、而して後以て天下の英雄豪傑の心を服するに足る」と。其の意謂へら

今、めんげん 隠天録ですんば、其の病瘥えず、愚人に諭すに正理を以てするは、未だ以て其の
 能を動かすに足らず、災異に假りて以て之れを驚かすに如かざるなり。常人に説くに
 常理を以てするは、未だ以て其の心を起すに足らず、大権を擧げて以て之れを驚かす
 に如かざるなりと。是れ其の術方便ほうべんに出でて、誠意未だ足らず。ここを以て愚人遂に
 驚かすべからず、常人遂に驚かすべからず。而も首領は遂に震ふべからず。僕は上人
 の爲めに深く之れを情しむ。嗚呼、世に能く上人を誅する者あらば、上人固より合掌
 して大堂に升るべし。吾れも亦將に國の爲めに之れを冀せんとす。而して世に此の人
 あるなし、則ち僕も哀しみ如何をや。今日の言、村俊座さいしゆんに滿つ、當に尋常の談なかる
 べし。僕の詞申言はんと欲するもの甚だ多けれども、草々にして書を作り、縷縷する
 こと能はず。僕を走らせて之れを述る。能く諸子の未だ散ぜざるに及ぶや否や。三月
 九日、寅白す。平乙。

妻木士保に復す

（一） 野山隠天録
 卷之四 寅白す
 三月九日

僞跡以て以棄、學生の交友、吾聞蘇氏^{蘇軾}。然れども眞に相知る者に至りては、未
だ嘗て少しも懐^懐に忘るること能はず。意ふに人の吾れを思ふ、亦當に吾れの人を思ふ
が如くなるべし。古人の所謂、心知りて神交はる者とは、蓋しかくの如くたらん。僕
是下と相知ること尤も深し、何ぞ乃ち鴻輝^{鴻輝}の末事を以て相尤め、相謝するに至らんや。
僞狂悖を以て妄を覆へし身を收り、家學^(一)の緒、緩々として將に絶えんとす、其の罪
甚だ大なり。獨り是下・王^(二)藤の諸君、繼紹して今に至るを得。一念ここに及ぶ毎に、
慙然として自ら慙む、以て是下の園寧に服せざるはなし。但だ是下に在りては、豈に
僕が家の私計の爲めにせんや。士子國に報するの道、固より此れに外ならず。願はく
は更に鼓勵し、一貫の體がさるを以て、九似の功を嘆するたからんことを。示さるる
所の商文、大いに善觀に興るものあり、各篇中に於て一々批評せり。是下自ら言ふ、
「予苟り學陋くして、常に文を作るに苦しむ」と、亦何ぞ傷まんや。昔殷景仁・劉湛^(三)、
學がて文を爲らず、日に義を談せず、而も能く劉宋の天下を成せり。然らば則ち士の
貴ぶ所は、彼れに在らざること知るべきなり。古文^(七)の誦すべきものに至りては汗牛充

(一) 諸葛孔明

(二) 諸葛孔明

(三) 諸葛孔明

(四) 諸葛孔明

(五) 諸葛孔明

(六) 諸葛孔明

(七) 諸葛孔明

(八) 諸葛孔明

(九) 諸葛孔明

(十) 諸葛孔明

(十一) 諸葛孔明

(十二) 諸葛孔明

(十三) 諸葛孔明

(十四) 諸葛孔明

(十五) 諸葛孔明

(十六) 諸葛孔明

(十七) 諸葛孔明

(十八) 諸葛孔明

(十九) 諸葛孔明

(二十) 諸葛孔明

(二十一) 諸葛孔明

(二十二) 諸葛孔明

(二十三) 諸葛孔明

(二十四) 諸葛孔明

様、僕等薄にして誰か其の一二を抜く所は非ず。當に古文集の中に就きて、文讀俱に

到り、氣胸舞々、一讀して人を起たしむるものを求めて之れを讀むべし。諸葛の二表、

諸葛の封事、毛叔の書經の如きは、應し其の最なるものならん。是下僕に之れを古人

に準めば、古人雲んと之れを統することを得んや。方今國を狼狽にして、憂清深遠な

り。是れ志士力を盡すの秋なり。僕陶因に在りて水く兼と謝ち、書を讀み古を商るに

暇れ日も足らず。去年僕下田に在り、今夜を以て夷船に到り、明日乃ち捕に就けり。

此事を思懐して感慨をなす。是下其れ亦吾が心を知るあらん。句々平悉。三月廿七

日。

(五) 白井古助に興ふ

氷山、臺にして樂しく、慈機の別、燕にして壯たりき。歡喜として一年、回顧せ

ば昨の如し。斯駒逝水、亦何ぞ怪しまん。天地反覆、人禽變移、是れ驚くべきのみ。

土崎の世に生れては、爲すべきこと寡だ多し。目を開きて宇宙を視れば、機去り機來

是、窮乏あることなし。明細の士は言を得たずして知る、何ぞ必ずしも足下の爲めに之れを諒べん。實去年以來、行くには必ず輜車、居るには必ず岸獄、人の實を待つや、乃ち猛虎を以てす。而して實自ら其の果して虎たるや否やを知らず。足下實を慮ること、獨々にして止まず。惜しむらくは足下をして我れの今日を目せしめざるを。足下必ず諒はん、三餘談家語すること、猶ほ去年の如し」と。作りし所の三餘説、錄して別編に在り、是下幸に一笑せよ。四月一日。

三餘説

(九)とらふ

書讀談話へり、一書を讀むに當り三餘を以てすべし。冬は歲の餘なり。夜は日の餘なり。陰雨は晴の餘なり」と。然れども歳に余あり、日に夜あり、時に雨あるは、皆天の富にして、未だ以て餘と爲すに足らざるなり。吾れ獄に入りて來、亦三餘を得てはて書を讀めり。讀べらく、已に義を忠孝に失へども、尚ほ食を家國に仰ぐ。是れ君父の餘に非ずや。已に身隸房に幽せられ、尚ほ則を戸牖より取る。是れ日月の餘光

に非ずや。惟だに狂慥にして多く大衆を犯し、獄又延^{タテマツ}延^{タテマツ}にして數^{タビタビ}、萬^{マン}疾に罹る。ここに一もあらば、皆以て身を殺すに足れり。而るに方^{ハツ}且に餘恩を仰ぎ、餘光を蒙る。是れ人生の餘命に非ずやと。凡そ此の三餘は皆意過にたき所にして、吾れ獨り之れを得なければ、身を流すと雖も足れり。抑も意過は或は熟となり、或は官となり、徒だ其の三餘を得るのみにて、猶ほ以て天下後世に傳ふるに足れり。況や吾れは我が三餘を得たり、寧んぞ憂るべけんや。四月二日。

清狂に與ふ

無識識に入りて、動止恙なしと、高幅高幅、向に岩^{イハ}積一束を賜ふとき、辭に曰く、「夢遊の用に供す」と。尋いで藥物十品を賜ふ、辭に曰く、「疾病の防に供す」と。聖藥^{セイヤク}藥^{ヤク}、調する所を知らず、實^{ジツ}磁々として薪を守り、新見異識の積に上せて人に傳ふべきものなし。愚頑^{グワン}極^{キョク}鈍^{ドン}、石の如く木の如し。日月の照らさざる所に在りと雖も、寧んぞ魔妖の侵す所とならず、乃ち藥物に用なし。然れども病の未だ來らざるとき、

人皆之が要を求むることを知らず。其の已に草^{くさ}まろに及びて、百方藥を求む、及ぶものあるなし。噫、防の豫を貴ぶは、何ぞ獨り病のみたらんや。茲に賜ふ所の書を展べて、謝を言ふことかくの如し。聞く、今日を以て講場を明安寺に聞かると、衆生の度し難き、上人に非ずんば其れ誰れか之れを度せん。伏して惟^{ただ}んみる、自重せられんことを。不一。四月四日。

(一)
中村道太郎に與ふる書

聞く、吏を省くの議起り、例により吏局を廢すと。僕は國の爲めに深く之れを惜しむ。是下吏局に出入すること、ここに年あり、平生の志、祖宗の遺意を述べ明かにし、國家の治道に裨益するに在り。今乃ち局を廢するに、安然として曾て一言なし。僕は下の爲めに深く之れを怪しむ。但し吏を省くの令、一たび出でては汗の如し、之れを言ふことも益なからん。願はくは是下學^{がく}中の生徒才あり識ある者を糾めて、懇ろに吏局の利害を論じ、私に一局を舉中に聞き、上は祖宗の言行より、下は將士の勳功に至り、

寧ろ小節瑣事の以て古風を觀て而して今事を經すべきものに及び、一々歎羅して遺すことなく、文悉く古を存し、聞ふるに論斷を以てし、以て一書を撰著し、謹んで君公の清覽に供し、且つ遍く士夫の間に布かば、則ち其の益たる淺鮮に非ざらん。方今君父賢明、輔弼忠良、弊を革め政を修め、孜孜として止まざれども、而も事多く古に及ばざるは、蓋し自ら由あり。是れ足下平生の持論なれば、今多く及ばず。願はくは國の爲めに努力せられよ。不宣。四月八日。

清狂に與ふる書

上人語を講ずる、常に士氣を振ひ民心を固むるを以て主と爲すと。僕之れを聞きて謂へらく、民心固ければ以て守るべきも、未だ以て戰ふに足らざるなり。士氣振へば以て戰ふべきも、未だ以て守るに足らざるなり。民心固くして士氣振へば、以て守るべく、以て戰ふべし。講法の已むべからざる、其れここに在りと。然れども尙ほ其の效の未だここに至らざるを疑ひしか、明安寺の法場、四日より起り今日に至りて止む、

僅々七日のみ、而して獄舎の奴卒、往々にして赴き聽き、之れが爲めに感奮し身を敢
して國に報いんことを思へり。獄奴の至賤至愚にして、猶ほ能くかくのごとし。況や
上、士大夫の顯る知識ある者をや。僕ここに於て益々法の效あるを嘆ずるなり。僕天
下の人を觀ること衆し。動かすに理義を以てし易き者は、吾が防長人に如くはなし。
固より東西人の頭鈍の如き然るに非ざるなり。然れども進むこと鋭き者は退くこと速
かに、成るること易き者は壞るること速きは、物の常なり。ここを察せざるべからず。
孟子曰く、「山^(一)の蹊^(二)の踐^(三)、しばらく介然として之れを用ひは而ち路を成し、しばらくも
用ひずんば、則ち茅之れを塞ぐ」と。然らば則ち路一たび成らば、人をして之れを用
ひて絶えざらしむるに如くはなし。上人已に荊棘を披き、蒙茸を排す。其れ亦之れを
繼ぐ所以のものを思はれよ。是れ社稷の福なり。何ぞ必ずしも戰守を待ちて後に見ん
や。寧かにす、上人明日を以て萩城を離れ、大津に入ると。大津は沿海の郡にして、
其の民衆、朴にして慈淳なり。其の感奮は更に萩の人より速かたるものあらん。唯
其上人之れを察せられよ。平甚。四月十日。

(一)
來原良三に與ふる書

僕才にして多幸なり。事毎に必ず敗れ、過ふ所必ず逸す、往時の事、兄の熟知せる所なり。蹣跚以來、かんしやうへい、羈車牢狴、至る所多く人に愛憐せられ、書を讀み道を講じ、從容として自得し、未だ曾て困苦を知らず。今又茲に繫がれ、愈々益々奮勵し、文を爲り學を修め、將に以て身を沒せんとし、自ら逸し自ら樂しむ。兄の世に處して、勞し且つ苦しむが如く然るに非ざるなり。天下の勢、日に陵夷に轉(二)き、二虜未だ半がざるに、人は方に繫縛す、誠に憂ふべしと爲す。(三)癸丑・甲寅は一大機會なりしに、乃ち坐して之を失ふ。然れども事に往けり。今の計を爲さんには、和親して以て二虜を制し、間に乘じて國を富まし兵を強くし、蝦夷を撃ひき、滿洲を奪ひ、朝鮮を奪たし、南地を得せ、然る後に米を拉ひき、歐を折かば、則ち事克たざるはなし。向の機を失ひは、未だ深く惜しむに足らざるなり。兄此の世に生る、國の爲め事を慮り、厚く自ら淬厲して、敢へて蝦夷することなかれ。僕の如きは敗亡の餘生たり、言説の短長、適に笑を

人に敬るに足る。且しほらく自ら其の安んずる所を得るを幸とするのみ。願はくは念を煩はすことなかれ。不宣。四月十八日。

清狂に與ふ

(四) 遊本松
之、金道
署名「制傳」

の生涯

僕(四)生と奮つて狂妄を爲し、一敗して囚となる。是れ固より順受して辭せざる所なり。而るに諸生は乃ち僕を棄てて先きに逃けり、僕の心に於ては則ち憾むるものあり。諸生氣鋭く才敏なりしも、而も學未だ進る所あらず、業未だ立つ所あらず、一朝にして渣滓たり、何を以てか信を人に取りて、名を後世に傳へんや。然れども生(五)の生固より成敗を以て念とせざりき、死寧んぞ榮辱を以て心と爲さんや。僕固より其の地下に臥せるを知る。但だ生の生きては已に罪を國に得、死しては又孝を親に失ひ、其の埋めらるるや葬を成すこと能はず、其の祭らるるや奠を成すこと能はず。父母をして反つて其の子を哭し、其の穴に臨ましめ、而して後願(六)の繼ぐことなき、生猶ほ能く地下に類せんや。是れ僕の憾み遂に釋然たること能はざる所以なり。上人は桑門の老師にし

て、人をして幽明に通じ死生に安んぜしむ、蓋し其の以て教となす所なり。若し諸生の父母を引きて、爲めに經を誦し法を講じ、其れをして曉然として、(養生の死の如き、天堂に升ることを得て、而して生くるは死するに如かざるを悟らしめば、幽明に惑ひ、死生に惑することなからん。且つ之れに榮するに一傷を以てせば、僕の至願何を以てかこれに尙へん。果してかくの如くならば、生初めて長く地下に眠せん。而して僕の抱みも亦冰釋する所あるなり。唯だ上人鑒察されよ。然りと雖も、是れ固より友生の痛情にして、生は乃ち地下に大笑せんも、亦未だ知るべからざるなり。上人以て如何と爲す。不乙。四月念四。

壽海篇を讀む 壽の魂源、無量壽志百篇

(一) 壽の無量壽の壽海篇は守を講し、戰を講し、教を講し、變々として靈に中る。壽をし
て書く之れを用ひしめば、固より以て曠寇を問し、魯拂を厭するに足らん。然れども
吾れ獨り疑ふ、此の書の刻せられしは道光二十七年に在り。會ち未だ三四年ならずし

(二) 壽の無量壽の壽海篇は守を講し、戰を講し、教を講し、變々として靈に中る。壽をし
て書く之れを用ひしめば、固より以て曠寇を問し、魯拂を厭するに足らん。然れども
吾れ獨り疑ふ、此の書の刻せられしは道光二十七年に在り。會ち未だ三四年ならずし

佛學

(三) 壽の無量壽の壽海篇は守を講し、戰を講し、教を講し、變々として靈に中る。壽をし
て書く之れを用ひしめば、固より以て曠寇を問し、魯拂を厭するに足らん。然れども
吾れ獨り疑ふ、此の書の刻せられしは道光二十七年に在り。會ち未だ三四年ならずし

て、陝西の兵變、擄れ八省に及び、嗣十年に延き、遂に北京は殆ど占らざるに數る、
 其の廣止する所、未だ知るべからず。則ち清の宜しく慮と爲すべき所は、外夷に在ら
 ずして内民に在るなり。何を以て默深は一言もここに及ぶことなかりしか。世の守を
 議する者は、堅城を築き巨壘を鑄、客兵を調するに過ぎず。戰を議する者は、其の宜
 しく爲すべき所を爲すこと能はず。其を議する者は、徒らに已むを得ざるに逼らる。
 是れ皆默深の深く憂ふる所なり。而るに清乃ち之れを爲すに、姑息以て夷謀を養ひ、
 睦約以て其の脅を竭す、未だ内變外患を致さざるものあらざるなり。且つ默深の言
 に曰く、「匪徒能く數百二三千人と號召する者は、其の人皆偏裨の將士にして、其の
 屬皆精兵なり。而るに文法吏は目して亂民と爲し、漢奸と爲し、牧めて以て用ふるこ
 とを爲さず」と。然らば則ち廣西の亂は、默深其れ已に之れを知れるなり。噫、民は
 内なり、夷は外なり。外を謀りて内を遣るる者は凶なり。内を治めて外を制する者は
 吉なり。悲しいかな。五月四日。

諸父に興へて金子生の爲めに哀詞を求むる書

生の死あるは物の常なり、而して志士の志せざる所、仁人の惜しまざる所なれば、吾れ豈に獨り金子生に於て之れを悲しまんや。然れども悲しみの已むこと能はざるは、乃ち人の至情なり。況や^(一)金子生の死の如き、更に悲しむべきものあるに於てをや。吾れ生に最も親しく、生を悲しむこと最も深し。因つて爲めに行狀を著し、挽歌を作^(二)りて、已むこと能はざるの悲しみを寓せ、且つこれを生を悲しむ者に傳へて、益々其の詞意を求め、生を地下に哭せんと欲す。世の志士仁人、其れ亦幸に之れを悲しまれ^(三)よ。古に曰へり、「親友の墓に宿草あるときは則ち哭せず」と。生死して已に五月なり、其れ寧んぞ^(四)哭すべけんや。五月五日稿す。

桂小五郎に與ふ書

使更學博、當以て愛と爲せり。雖乃閑に於て歴史を把りて之れを讀み、偶々梁紀に至る。梁主繼、既に魏人に殺され、晉、位に即き、臣を魏に稱す。齊又淵明を立て

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百

て、暗に、而して、人々は方智を立つ。方智遂に陳鞠先に逼られ、幕府の金匱にこ
に於て砕けぬ。反覆應酬し、涕泗交々至る。忽ち家兄より人至り、足下の書を致す。足
下の書、益々勉勵し、萬死自ら誓へるを悉し、稍人意を強うするに足る。傍ら拂暗二
房の事情にも及ぶ。僕謂へらく、幕議前日既に墨魯と款しむ、計固より誤れり。然れ
ども款一たび成らば、復た我れより贊を生ずべからず。則ち今日の拂暗は最も痛絶せ
ざるべからず。或は更に拂暗と款しめば、拂暗必ず大いに我れを輕んじ、而して墨魯
必ず大いに我れを怨み、是れより後は禍患言ふに忍びざるものあらん。前日墨魯の來
りしとき、我れ苟も上策に出でば、大は固より以て勢に乗じて勃興するに足り、小も
稍は以て折衝して自ら保つに足る。千歳の一時にして、事機を會する、以てこれに尙
ふるものなかりき。而して大事一たび去りて復た爲すべきなく、關國の士氣頓挫す。
是で、神州を容納し、拂暗累ねて至る。是れ前日の機、又今日に生ぜるなり。斷然と
して對へて「我れ已に墨魯と款しめり、復た汝の爲めに釋仗を辦つべからず。若し違
背することあらば、國法在るあり」と曰ふに如かず。則ち拂暗必ず大いに我れを畏れ、

墨魯必ず大いに我れを徳とし、而して闔國の士氣必ず大いに振興せんと。知らず是下
之れを重すること如何に。僕幽囚せられて永く世の棄物となれども、猶ほ同囚と頗る
絆を修む。昨孟子を講じて、（二）縣の文公齊楚に事ふことを問ふの重に至りしに、同
囚皆抱腕切齒、文公の用ふること能はざりしを惜しまざるはたかりき。吏を讀み經を
誦じ、樂しみて以て身を浚せんとし、其の他を知らず。是下に非ずんば、其れ誰れか
之れを諒せん。不悉。五月六日。

100

三 漢武帝

桂小五郎を送る序

漢に博士^{つふせん}張山あり、匈奴との和親を言ひ、御史大夫張湯と争辯す。(三) 李戴色^{なたいしき}を作して曰く、「吾れ生をして一郡に居らしめば、能く虜をして入りて監せしむることなからんか。」曰く、「能はず。」曰く、「一縣に居らしめば、對へて曰く、「能はず。」復た曰く、「二縣^{ふたごほ}の間に居らしめば」と。山自ら辯窮まらば且に吏に下されんことを度り、曰く、「流はん」と。ここに於て山をして障に乘らしむ。月餘に至り、匈奴山の頭を

...

斬つて去れり。吾れ策を讀みてここに至り、未だ嘗て巻を掩ひ慨然として自ら嘆ぜずんばあらざるなり。凡そ天下の事は、理勢に満ずるを易しと爲し、形勢を破ぶるを難しと爲す。籌略を盡するを逸と爲し、功業を成するを勞と爲す。書生の粗心、難易を思はず、進勞を計らず。其の言論を聞けば、洋洋として耳に盈つれども、之に微議を興へ、之れに瑣事を低ずるときは、一敗して地に塗れ、人の笑となる者、獨り秋山のみに非ざるなり。吾が友桂生五郎は武人なり。遠方四年、一たび歸りて復た行かんとし、書を致して別れを告ぐ。吾れ因つて自ら嘆ずる所以のものを書して以て之れに贈る。願ふに桂生は武人にして、再生に非ず、之れをして障に乘らしむとも、秋山の情を我が如きに至らざらんこと、寧かなり。然りと雖も、未だ必ずしもここに省みることなくんばあらざるなり。五月七日。

（五）周樹の 醫員青木研藏に與ふる書

僕等如墨客にして、事に於て研究せる所なし。幽園に就きてより、氣を降し思を盡く、

（五）周樹の
醫員青木研藏に與ふる書

し腹中を試みて
名あり。後

名となり、書

明治三年九月

野山集文

二

し、此の身を以て顧みて深く自ら勉勵す。天下の事、勢の大なる者、理の精なる者は、
固は或は探索して言ふべけん、而れどもまだ必ずしも事實に經あらず。若し其の事實
に關するものを求めば、術技の精、是れのみ。此れを盡きて以往は盡すに非ずんば則
ち充足、言ふに足るものなし。是れ我が邦學者の短とする所にして、歐羅巴國の長と
する所なり。僕向にここに見ることあり、歐羅巴の書を得て之れを讀まんと欲す、而し
て思ふ。今は則ち髪がれて孤囚となり、同友の相輔くるものあるなければ、此の事
萬々之を絶てり。頃乃墨りに同囚の病むありて醫藥を得ざる者を見、感發する所あり、
遂に指針として醫術を請求せんと欲す。謂へらく、人の最も近く且つ切なるものは、
斯の身に如くはなし。一身百骸、機關ここに存し、疾病ここに生ず。而して其の然る
所以を知らずんば、曾ち大馬にも之れ若かず、尚ほ何ぞ人たるに足らんやと。且つ夫
れ觀に事ふる者は醫を知らざるべからず、醫に事ふる者は醫を知らざるべからず、兵
を將ある者は醫を知らざるべからず、民を治むる者は醫を知らざるべからず。今書を
讀み後を論じ、少しく斯の世に益せんと欲して、斯の術に通ぜざるは、亦一大闕事な

(一) 名は道一、筑前の人、掌法の達人にして書を善く

語。孔子の言行を要録す

徳を以てあらはる

(四) 子路

胆にして勇を以て進む

て孔子の門に入り、後に衛に仕へてその

を脱たれしに

さきとして

らずや。但た僕が路を失ひて囚となり、唯に上は君父に事ふる能はず、下は兵民を治むる能はざるのみならず、乃ち斯の身を擧げて復た愛惜するに足る者なし、尚ほ何ぞ醫術を學ぶことを爲さんや。然れども身體髮膚敢へて毀傷せざるを、孝の始と爲す、則ち吾々の心、未だ遽かに已むべからざるなり。先生は國工の手を以て、濟世の志を發せらる、因に僕が如き者も、固より宜しく棄てられざる所に在るべし。若し僕の志を察みて、略ぼ其の術の方を指示せられば、則ち何の幸かこれに尙へん。五月十九日、矩方白。

林藤橋に與ふる書

林藤橋是下、傳實情綏、常に事及ばざるを恐る。故に彙策して自ら勵まし、言の奇傑なる書を求めて讀と爲す。論語・家語(一)を讀む毎に、意を屬するは顔子(二)に在らずして、子路に在り。謂へらく、千乘の才、片言の信は及び易からずと雖も、非を知り其を改む、則ち論を正しく死せしに至りては、害れも亦之れを爲さんと。然り而して

自ら慰すること甚だ過ぎ、應縁にして衝撞く、遂に家國の大罪人となる。子路其の人の如きを見ば、亦將に相愧の暇あらざらんとす。向に君の疾に聚るや、屢々家兄伯敬に因りて、慇懃の意を辱うし、僕誠に感荷に堪へず。顧ふに刑餘の大罪人、牛夫夏畦も尚ほ之れと爾するを恥づ。君は則ち今世の奇傑たるに乃ち眷々たることかくの如し。自に昌黎草野、其の嘲む所を語るべからざらんや。聞く、君將に去らんとするに臨み、餘然として一喝し、大いに市人を愕かせりと。德杜謙篤喜して曰く、一林蒼固より宜しく勉めべけん」と。何となれば、凡そ昇平の習、小廉曲謹を養と爲し、阿諛情濃を好と爲す。奴隸、節に味すとも、斬ることを知らず、犬羊、首を踏るとも誅すること知らず。流れに同じ、汗れに合し、顧つて細子の黒黧に附會す。君蓋し憂をここに撫て、事に因つて怒を發し、以て末俗を提醒す。其の心を用ふることを甚だ苦め、其の善が落を慮むことを甚だ厚し。是れ豈に子路の學に得るあるならんか。然れども知らざる者は固より謂はん、「市井の愚民、何ぞ與に曲直を較ぶるに足らん、正に千鈞の弩を鴈鼠に發するが如きのみ」と。是れ安んぞ與に子路を語るに足らんや。去る廿四日、

筆見の情を得たり。一巻帙あり。展べて之れを見、大いに驚いて曰く、「是れ子路の
 像なり。果して何人の筆ぞ」と。細かに其の款くわんを聞するに及んで、乃ち君の僕が爲め
 に置に圖せるものたるを察かにす。僕の喜び萬意外いざいに出で、東向再拜して感謝極りな
 り。然れども僕徒に之れを珍とし之れを寶とするに非ず、誠まことに君の爲す所、揆はかをこ
 こに合せ、而して僕の志す所も亦ここに在るを以て、此の圖の作、蓋し偶然に非ざる
 なり。僕獄に在りて、民人なく、社稷なく、必ず書を読みて、而る後に學と爲せり。
 學事時究にして、書を作るも意を精しくすること能はず、萬肆いふと爲すことなかれ。不
 乙。六月念六。

清狂に與ふる書

て往る、幸に意を致されよ。更に願はくは此の書を併せて教助に轉示し、僕の今日を知らしめられんことを。某白す。六月念六。

(九)
宮部鼎藏に與ふる書

(一〇) 鑑木生、老兄の家兄伯教に與ふる書、及び諸君の鑑木生を哭する詩歌を持ちて歸り、獄中に轉教せり。且つ讀み且つ誦し、欣慰無量なり。諸君の詩歌、皆直ちに肺腑中より流出し、親しく諸君に對して贈言するが如し。丸山の懇篤、佐佐の義烈、人をして感を起さしむ。而して今村の銳達、最も畏るべしと爲す。獨り永島君病を抱きて彌留す、實に憂念に堪へたり。君素と剛強なるに、今乃ちかくの如し、蓋し憂憤鬱積の發する所ならん。幸に意を致して慰藉せられよ。書尼に云へることあり、老兄近ごろ邊きて一木偶人となれりと。鷲鳥將に搏たんとせば、必ず其の翼を敷め、猛虎將に嚙まんとせば、必ず其の體を屈す。寅の如きに至りては、則ち龍鳥奮虎、亦復た何をか説かん。天下の勢、滔々として日に降り、魯墨の病、已に膏肓に入り、暗拂の斑、更に

(一) 嘉永六
年クリミヤ談

伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

は伊川先生といふ

皮肉を剥ぐ。志士の目、未だ瞋する所を知らず。近來魯虜は暗拂諸夷と難を構ふ、是

れ謀^(三)を伐ち交を伐つに、宜しく奇策あるべし。而して世人恬然として、之れに乗ずる

ことを知らず。江河の降流、寧んぞ還るの期あらんや。然れども誠を天地に立てて、

故を事功に求めず、心を道義に存して、驗を成敗に較べずんば、則ち其の貫徹する所、

久しくして愈々著しく、遠くして愈々明かなり。願ふに老兄は諸君の先^(五)たり、乃ち

一木偶人となるも、其れ亦ここに見ることありてならんか。程伊川は終日端座して、

泥塑人の如しと、學を好むこと篤くして然るなり。僕禁足せられて地を履む能はず、

乃ち亦泥塑人たるは、是れ則ち嘆ふべきのみ。但し泥塑人は雨に遇ひ水に浸せば、則

ち潰散して復た收むべからず、木偶人に及ばざること遠し。然れども木偶人は斧を受

けば則ち割れ、火に見れば則ち焦く、至れる者に非ず。然らば則ち相害ひて石遣の人

たらば、動も可なり。作りし所の三餘説、別録して以て一槩に供す。佐佐に謝するの

序は、往年貴藩を去る時作りし所なり。時に胸中事多くして、意文に在らず、今改

竄して併せ贈る、幸に顧致せられよ。松本生貴藩に在りしとき、諸君の待過適當、感

謝して併せ贈る、幸に顧致せられよ。松本生貴藩に在りしとき、諸君の待過適當、感

謝して併せ贈る、幸に顧致せられよ。松本生貴藩に在りしとき、諸君の待過適當、感

謝して併せ贈る、幸に顧致せられよ。松本生貴藩に在りしとき、諸君の待過適當、感

愧に堪へず、伯敷の書當に詳かに之れに及ぶべし。不宣。六月念七。

土屋矢之介に與ふる書

聞く、表番頭和致仕村田翁、去月廿五日を以て溘焉として世を棄つと。僕幽囚以來、

復た世事を省みず、喜悲中に動く所なし。忽ち翁の訃を聞きて、覺えず痛哭す。獨り

村田氏の爲めに哭するのみに非ず、乃ち國家の爲めに哭するなり。本藩の名臣を論ず

る者は、蓋し三老を以て稱首と爲せり。而して僕翁の文學事功を觀るに、過ぐるこ

あるも及ばざることなし。且つ翁已に老い、君公の眷遇益々隆く、優するに朝に杖つ

くの典を以てせられ、これを謀議の員に參へらる。其の論建する所、固より宜しく三

老の記せし所と並行して後に傳ふべし。而るに不幸にしてここに至れり。翁行年七十、

祿を増し進められ、功著はれを聞ゆ。翁に於ては則ち亦以て死するに足らん、獨

り我が國家を如何にせん。是れ僕の哭する所以なり。僕既に之れを哭す。而るに村力

短壽にして、發揮する所ある能はざれば、乃ち足下に望まざること能はず。足下才豐

「前發政村田
翁を挽す」の
詩

にして文美しく、常に立言を以て任と爲せり。願はくは翁の爲めに其の行事を蒐羅し、以て其の傳を撰び、且つ翁の作りし所の詩歌の最も其の志を觀るに足るものを論次し、並びにこれを世に傳へば、則ち翁の功は足下の文に因りて朽ちず、而して足下の文も亦翁に因りて永く傳はらん。果して然らば、則ち獨り翁と足下と朽ちざるのみならず、乃ち國家の爲めに光を耀かすなり。但だ翁の傳ふべきもの、多くは其の官に在りし時の事に係り、世には其の實を詳かにする能はざるものあり。願はくは村道太輩と謀り、官居の雜記を檢し、務めて其の實を求めて之れを傳へば、亦可ならずや。道太は翁の眷屬する所となり、多く其の指教を承く。又史局に出入すること年あり、翁の事に於て、必ず其の本末を究むるものあらん。足下苟にここを以て相謀るは、願ふに亦道太の志ならん。足下幸にこれを思へ。

僕は文に於て師承する所なく、又思を章句に精しくせず、意に任せて揮ひ去れば、心自ら安んぜず。向に屢々近文を錄して正を請ひしに、反復して示さる、感荷何ぞ堪へん。但だ其の稱許の過當なるは望む所に非ず。僕黜けられて囚奴となり、世事に於て

萬有みる所なしと雖も、然れども亦自ら中に忘るる能はざるものあり。足下幸にこれを察せよ。六月念九。

甲寅（ろんじん）頓評判記を讀む

（二） 魯史記

清人（三）劉宗周（三）んで外國の事情を論ず。謂へらく、「魯と墨と拂とは、皆暗に惡し、宜しく殺めて以て米陳の授と爲すべし」と。古事を援ひき今事を指し、墨々として據よりどころあり。

然れども吾れを以て之れを觀るに、是れ一を知りて未だ二を知らざる者のみ。凡そ夷狄の情は、利を見て義を見ず。苟も利ならば、敵讐も同盟となり、苟も害ならば、同

盟も敵讐となる。是れ其の常なり。今此の記を讀むに、魯と杜と鄆を聞き、暗拂の諸國、謀を合せ杜を助けて之れを拒ぐ。然らば則ち魯暗の交こみぐ惡むことは、（四）源の計る所

（一） 去冬、クリミヤ戰爭、

（二） 魯史記

（三） 魯史記

の如し、而して暗拂謀を合することは、則ち其の計の外に出づ。而も源げんたる者は墨の諸國に於ける、亦復た何如なるかを知らざるなり。昔者むかし、豐公の韓を征せしとき、明

人成は誣いつはりすらく、公は平氏にして、島津は乃ち源氏なり。平・源は古より相惡む、公

に至りて又源を撃ち、其の隙益々深し。是れ宜しく源を引きて以て平を攻むべしと。我れより之れを言はば、則ち其の背壁に中らざるは、論なきのみ。然れども彼の問蓋し或は以て然りと爲さん。

漢土の人、古より外國の事に於て茫然として講ぜず、反つて臆を以て之れを斷ず。源の如きは國より漢土人の翹楚なり。而るに未だ其の陋を免かること能はざるか。

抑々敵を論ずるには當に已れを審かにすべし。故に立國の體は、人をして我れに待たしめ、而して我れの人に待つことあるからしむるに如くはなし。苟も人をして我れに待たしめば、則ち敵讐も亦以て我が用と爲すべきなり。我れ人に待つことあらば、則ち同盟も亦將に來りて我れを嚆まんとす。方今魯墨暗拂、交々我が國に來り、魏源(二)の書大いに我が國に行はる。吾れ此の記を讀みて深く感ずることあり、故に書す。乙卯七月。

(二) 魏源氏
著・魯武記等
をさす

德、字は有隣の説

仁篇に出づ

當水雖^たずは有^あ隣、自ら見ること甚だ高く、群小を啗^くむこと仇讎の如し。是れに由りて
神成の獨居する所、親戚の害れざる所となり、嘗て流に處せられ、尋いで獄に錮せら
れて、已に一年なり。余も亦罪ありて獄に陥り、相得て喜ぶこと甚だし。一日、有隣
余は名字を更め、且つ其の説を作らんことを求む。余曰く、「君の名甚だ善し、
更むべからざるなり。孔子曰く、『德^{とく}孤ならず、必ず隣あり』と。德に非ずんば以て
隣を得ることなく、隣に非ずんば以て事を成すことなし。故に才を以てせば則ち不才
者思ふ、能を以てせば無能者妬む。人をして妬み且つ忌ましめば、何ぞ以て隣を得て
事を成すに足らんや。士、達しては天下を兼ね善くし、窮しては其の身を獨り善くす。
獨善の志ありて、而して後兼善の業あり。窮達を貫きて而して志業を成すもの、其れ
德のみ。德は聖人を以て標と爲す。而して大舜は耕稼陶漁を爲せしときより、乃ち都
君の稱あり。孔子は魯衛陳蔡に困^こし、乃ち三千の徒あり。君子德を已れに修め
て隣を世に得ば、其の成す所豈に量るべけんや。然らば則ち君のここに至れるも、或
は亦德の以て隣を得るものなかりしか。而るに今や二人相得たり、德と不徳とを知ら

に色をなし、
す、爾して君
君といふ

ずと雖も、豈に隣なしと言ふべけんや。凡そ天下の孤子離群は囚奴より甚だしきはなし、而るに猶ほ隣を得ることかくの如し。君若し此の説を存して以て世に接し、己れを以て人を食むることなく、一を以て百を養ふることなく、長を取りて短を捨て、心を養ひて隣を略らば、則ち天下いづくにか往くとして隣なからん。世に豪傑乏しと雖も、要するに其の自立の者は少なからず。而るに又何ぞ群小を仇視するに至らんや。抑々吾れ君の狀貌を相るに、獄に死する者に非ず、徳を修めて隣を得ば、亦以て事を度すべし。是れ君に在り」と。有隣乃ち嘆じて曰く、「味あるかな言や、吾れ未だ之れを町に聞かず。豈なろかな其のここに至ること。子爲めに之れを書せよ、吾れ及ばずと雖も、敢へて勉めざらんや」と。七月四日。

寛、字は士栗の説

越智縣吉なる者あり、(一)守約(二)を介して名字を請ふ。余曰く、「名は實の賓なり、未だ其の人を知らずして、安んぞ能くこれに名づけん。其の人如何」と。守約曰く、「溫柔餘

(一) 福川
大田、
寛、
君といふ

(一) 孔子は之れを仁と謂ひ、孟子は之れを義と謂ひ、而して孟子は之れを浩然の氣と謂ふ、皆是の物なるのみ。古より賢人君子、英雄豪傑は才分に高下ありと雖も、行事に大小ありと雖も、要はここに外づること能はず、而して善が黨の日に僥焉として以て事に従ふものなるのみ。

如何。曰く縮のみ。夫れ縮は直なり。堯舜は之れを中と謂ひ、孔子は之れを仁と謂ひ、孟子は之れを義と謂ひ、而して孟子は之れを浩然の氣と謂ふ、皆是の物なるのみ。古より賢人君子、英雄豪傑は才分に高下ありと雖も、行事に大小ありと雖も、要はここに外づること能はず、而して善が黨の日に僥焉として以て事に従ふものなるのみ。然、夫れ事に當りて言を發せば、唯だ其の直と不直とを問ふのみにて、其の難易と從違とを問はず、これを中に縮みてこれを外に發し、久しきを積みて多くを集む、所謂清々然として天地の間に充塞するものなり、亦何ぞ獨人廣衆を憚るに足らんや」と。顧川氏默然として曰く、「願はくはこれを學はん」と。名づけて縮と曰ひ、字して守約と曰ひ、且つ之れが説を爲る。八月七日。

(三) 矢之介に與ふる書

家兄將に歸守約を致して足下に見えしめんとす。因つて一書を附し、以て足下に託す。是下幸に守約を獎勵せよ。守約は學問言ふべきものなしと雖も、氣性亦略ぼ愛すべし。

(四) 論語集注
自篇、及び篇
字に誤り

要するに中人たることを失はず、國より援きて道に進むべき者なり。且つ僕は身を託してここに在り、守約に倚賴せざるを得ず。而して守約の成ることあらば、僕の志も亦或は由りて行はるるを得ん。是れ僕の足下に託する所以なり。近世士夫日に益々淳樸し、學問日に益々興隆す。而も風習日に益々汙下し、志趣日に益々卑劣なり。上なる者は仕進を榮とし、名譽を重み、下なる者は誘惑を顧み、膏粱を提れ、以て書畫を挾たはみて校門を出入するのみ。未だ毅然として世道名教を以て自任する者あらざるなり。足下は學問文章、諸支中しちちゅうに於て、國より翹楚せうそと稱せらる。而して身又閑散にして、方に徒を聚めて講習し、益々力を新道に肆たのしみにするを得。所謂毅然として自任する者、足下に非ずして、誰れをか恃まんや。孔子曰く、「其の位に在らざるときは、其の政を顧みず。下流に居て上を誦うたる者を惡む」と。昔嘗て新の言を以て迂腐と爲せり。今にして之れを思ふに、人各一職あり任あり、何ぞ人の政を謀りて其の上を誦るに暇あらんや。人の政を謀りて其の上を誦る者、又何ぞ己れの職を職とし己れの任を任とするに暇あらんや。凡そ是れ皆僕の當に守約に語れるものなり。足下若し然りと爲さば、

明ち更に其の説を長くし、これを實事に措け。足下幸に人に驅使せられず、豈に自ら其の安を偷むを得んや。苟に其の徒をして忠臣孝子を多からしめば、斯ち可なり。守約の名字の説、雖して別情に在り、幸に觀よ、如何に。八月十二日。

(二) 良三に與へて詩を論する書

(一) 來取良三
(二) 唐詩
(三) 唐詩
(四) 唐詩
(五) 唐詩
(六) 唐詩
(七) 唐詩
(八) 唐詩
(九) 唐詩
(十) 唐詩
(十一) 唐詩
(十二) 唐詩
(十三) 唐詩
(十四) 唐詩
(十五) 唐詩
(十六) 唐詩
(十七) 唐詩
(十八) 唐詩
(十九) 唐詩
(二十) 唐詩
(二十一) 唐詩
(二十二) 唐詩
(二十三) 唐詩
(二十四) 唐詩
(二十五) 唐詩
(二十六) 唐詩
(二十七) 唐詩
(二十八) 唐詩
(二十九) 唐詩
(三十) 唐詩
(三十一) 唐詩
(三十二) 唐詩
(三十三) 唐詩
(三十四) 唐詩
(三十五) 唐詩
(三十六) 唐詩
(三十七) 唐詩
(三十八) 唐詩
(三十九) 唐詩
(四十) 唐詩
(四十一) 唐詩
(四十二) 唐詩
(四十三) 唐詩
(四十四) 唐詩
(四十五) 唐詩
(四十六) 唐詩
(四十七) 唐詩
(四十八) 唐詩
(四十九) 唐詩
(五十) 唐詩
(五十一) 唐詩
(五十二) 唐詩
(五十三) 唐詩
(五十四) 唐詩
(五十五) 唐詩
(五十六) 唐詩
(五十七) 唐詩
(五十八) 唐詩
(五十九) 唐詩
(六十) 唐詩
(六十一) 唐詩
(六十二) 唐詩
(六十三) 唐詩
(六十四) 唐詩
(六十五) 唐詩
(六十六) 唐詩
(六十七) 唐詩
(六十八) 唐詩
(六十九) 唐詩
(七十) 唐詩
(七十一) 唐詩
(七十二) 唐詩
(七十三) 唐詩
(七十四) 唐詩
(七十五) 唐詩
(七十六) 唐詩
(七十七) 唐詩
(七十八) 唐詩
(七十九) 唐詩
(八十) 唐詩
(八十一) 唐詩
(八十二) 唐詩
(八十三) 唐詩
(八十四) 唐詩
(八十五) 唐詩
(八十六) 唐詩
(八十七) 唐詩
(八十八) 唐詩
(八十九) 唐詩
(九十) 唐詩
(九十一) 唐詩
(九十二) 唐詩
(九十三) 唐詩
(九十四) 唐詩
(九十五) 唐詩
(九十六) 唐詩
(九十七) 唐詩
(九十八) 唐詩
(九十九) 唐詩
(一百) 唐詩

僕去年九月の末を以て、畿輿江戸を發し萩城に達する。晨夕起臥して、一輿に在りしこと三十日。時に輿中獨り李邕唐詩一本あり、反復して甚だ熟せり。其の『黃沙百戰金甲を穿つ、權衡を破らずんは終に還らず』と曰ひ、『孰れか知らん邊庭に向つて苦しまざるを、縊ひ死すとも猶ほ俠骨の香しきを聞く』と曰ひ、『更に飛將を催して驕虜を追ひ、沙場の匹馬をして還らしむるなかれ』と曰ひ、『功名は塙生の數を計るを恥づ、直ちに樓蘭を斬つて國恩に報ぜん』と曰ふの類を讀む毎に、輒ち擊節嘆稱して曰く、『戍兵の情、固より當にかくの如くなるべく、邊塞の詩、固より當にかくの如くなるべし』と。其の『細らず何れの處か蘆管を吹く、一夜征人盡く郷を望む』と曰

漢に上りて

(八) 同く

「後軍北征」

七絶「漳州圖」

(一〇) 吳象
之の七絶「少
年行」

(一一) 當時
の七絶「少
年行」

(八) 同く

ひ、^{（八）}「國威征人三十萬、一時首を同らして月中に看る」と曰ふを讀む毎に、又目を張

り怒罵して曰く、「馬車^{（九）}戸を襲むは、士の常なるのみ。何ぞ乃ち郷を望みて涙を灑ぐ

こと、婦女子の爲を傲はん、成となりて詩を作ること、かくの如きは、固より^{（七）}「醉う

て沙場に臥す君笑ふなかれ、古來征戰幾人が回る^{（一〇）}」、「擲千金渾べて是れ膽、家に四

壁なければも貧を知らず」と曰ふの氣膽觀るべきに如からざるなり」と。頗る辱くも

相成の十一律を示さる。格調高邁、淺薄の^{（十一）}及ぶ所に非ず。其の夷聲東西の一篇、

及び楊柳・牙纒・防海・討虜・撫劍・聽雅・利劍・策書の數聯の如きは、最も以て其

の志を觀るに足る、特に格調を以てのみに非ざるなり。然れどもここに止まるのみ。

其の他は則ち言ふべきものなし。若し退いて之れを唐詩に求めば、向の所謂擊節嘆稱

するものは尙するまでもなく、乃ち目を張りて怒罵するものと雖もあることなし。良

三の氣膽を以てしてすら猶ほ然り、其の他は概すべし。是れも亦世變時運の致す所、

然るか。抑、僕身は圍牆に坐して、復た世事を知らざれども、相模の成は^{（十二）}精を抜き鋒

を懸ぶ、固より唐の邊兵の冗且つ驕なるに比すべくも非ざるたらんを想ひ、今其の詩

を意に因りて、微言之類に及ぶ。願ふに兄徒だ以て詩を評すと爲して之れを措かば
事無なり。

(三) 浮屠廣淵の護法小品を読む

[illegible]

西洋の教たるや、儒と佛と皆興に俱に天を戴くべからずといふは、詢に然り。而して
徒らに之れを古蹟に附し、之れを見戯に附するは、善く辨ずる者に非ず。夫れ天文地
理、醫術算法は形なり、理に非ざるなり。(二)彼獨界どくかいの壞こわるるは、何ぞ佛教を害せん。天
地萬物、現象八卦は理なり、形に非ざるなり。日月天地の球を爲せるは、何ぞ儒教を
害するを得んや。故に一理明かにして萬形従ひ、洋教の響おとも以て酬かへゆべきなり。儒佛
洋教の邪正を辨ずるに至りては明白確的、復た間然かんぜんすることなし。但だ神道を以て儒
佛に比して、三道鼎立と曰ふと云へるは、我未だ其の解を得ざるなり。儒佛は正に
神道を輔くる所以なり。神道豈に儒佛を以て比すべけんや。神道は君なり。儒佛は相
たり、將なり。相將にして君と鼎立す。是れ安んぞ誅を免かれんや。然れば俗儒或は

夷を以て夏を襲ひ、妖僧或は佛を奉じて君を逐ふるは、皆神道の變なり。而れども神道と雖も亦或は流れて巫覡の流となる。是れ洋教の乗じて起る所なり。深く懼れざるべけんや。浮屠師清狂、此の書を寄せ示さる。余因つて言ふことかくの如し。噫、馬人亦何處其師を見て之れを買すことを得んや。八月廿五。

古助の江戸に遊學するを送る序

自許古助、將に江戸に往きて洋學を修めんとし、人をして余に問はしむ。余曰く、一讀ふ其の自ら爲す所を以てこれを驗へん」と。夫れ將^來は志なり、既^往其は業なり。斯の志あれば、必ず斯の業あり。而して志専らならずんば、業成なること能はず。江戸は善が長と三百里、亦遠し。而して之れに志すること専らなるときは、晨に發し、暮に宿し、健にして歩み、困れて輿す、率ね三十日にして以て達するを得。故に之れに志すること専らならば、宿し且つ輿すと雖も害なし。朝に進むも夕には退き、今は東するも西は西し、故に過ひて迷ひ、徑に由りて走らば、晨に發し夜を盡して趨り、健歩

(一) 松陰を
あはれむ人なり
ふ

(二) 師は佐
伯の子弟なり
なす

古助の志あり
良師友を得てここに居りき
而るに三年の間、東奔西走、事
故を出し、遂に業を成す能はず。今は則ち圜牆に幽囚せられ、力を書に一にするを得
れども、良師友あることなければ、則ち洋學の愈已に絶ゆ。古助の此の行は、是れ其
の時なり。古助にして成ることあらば、吾れの成ることなかりしは未だ深く惜しむに
足らざるなり。近時事情愈々驕りて、邊事言ふに忍びず。況や國內の人、夷を以て夏
を變じ、内を遣れて外に向ふ。是れ洋學を修むる者の當に深く憂ふべき所なり。古助
は陳儀にして義を知る者なれば、吾れ固より其の彼れの如くならざるを知る。而して
更に世の彼れの如き者を曉さんことを望むなり。昔吾れ郵傳の獄に繋がれしとき、古

(一) 古助
古助の志あり
なす

して是を極めて覽ると雖も益なきなり。西洋の學は文目に慣れず、語口に習はず、吾
れの之れを修むること、憂々乎として其れ難きかな。好事の士、往々學習し、成らず
して幽する者、十に常に八九なり。是れ方の足らざるに非ず、乃ち學習専らならざる
の數す所なり。古助苟も江戸に往くの心を以て修學の法と爲さば、何ぞ其の業の成ら
ざるを憂へんや。然れども得難くして失ひ易き者は時なり。余嘗て東遊せしとき、亦
洋學を修むるの志あり、良師友を得てここに居りき。而るに三年の間、東奔西走、事
故を出し、遂に業を成す能はず。今は則ち圜牆に幽囚せられ、力を書に一にするを得
れども、良師友あることなければ、則ち洋學の愈已に絶ゆ。古助の此の行は、是れ其
の時なり。古助にして成ることあらば、吾れの成ることなかりしは未だ深く惜しむに
足らざるなり。近時事情愈々驕りて、邊事言ふに忍びず。況や國內の人、夷を以て夏
を變じ、内を遣れて外に向ふ。是れ洋學を修むる者の當に深く憂ふべき所なり。古助
は陳儀にして義を知る者なれば、吾れ固より其の彼れの如くならざるを知る。而して
更に世の彼れの如き者を曉さんことを望むなり。昔吾れ郵傳の獄に繋がれしとき、古

白井に
贈る

助私かに金と衣とを贈り、是れに由りて罪を藩に獲、而も坦然として恕みず。其の友義も亦かくの如し。八月廿二日。

(四) 白井に

聞く、古時將に策を負ひて東遊せんとすと。僕其の志を壯とすれども、或は遂げざらんことを恐る、因つて贈るに一の專の字を以てす。知らず、能く青瑩に申るや否や。

(四) 萬海學兄

松陰生

象山平先生に與ふる書

矩方の先生に見えしとき、小林虎三、實に矩方の爲めに謁を行ひき。虎三(六)點筆而に滿ちて矩方と相類し、年齒も矩方と相齊しく、而して名稱又矩方と偶、同じ。但だ虎三はず輩にして、矩方は則ち才粗なり。是れを異なれりと爲すのみ。之れを終ふるに虎三は先生に因りて罪を獲、而して矩方は則ち罪を以て先生を累はす。先生は天下の士あり。矩方獨り先生に負くのみならず、又天下に負くなり。且つ矩方國の爲めに報を

渡き國、九州
は元來をた
は一國をた
身はたす
の意

(三) 松代藩
七、堀川賢之
忠、堀川賢之
忠、堀川賢之

(四) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(五) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(六) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(七) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(八) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(九) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

(十) 堀川賢
忠、堀川賢
忠、堀川賢

去年九月十八日、郵術の獄を出でて奉行署に詣り、斷を受けて別れを奉ぜしが、時に
官更庫に滿ちて言發すべからず、一拜して去れり。今は乃ち地を隔つること三百里、
郵術の獄を聞く毎に、俯仰低回して自ら措くこと能はず。因つて憶ふ、獄を出でし時、
先生矩方を顧み、懇ろに著作を以て勉めらる。言猶ほ耳に在れば、愈々益々淬勵せり。
向に堀川賢介郎に在りと聞き、藩人久保清太なる者東役するに囚りて、著はす所の幽
囚錄一巻を附せり。意これを庫下に達せしめんと欲せしなり、果して能く達せしや否
や。頃る自井古助東遊し、先生に従はんと欲す。因つて此の書并びに文稿一巻を附し、
以てこれを庫下に達せしめんとす、亦果して能く達するや否や。獄中、事を謀る、多
くは意の如くならず、苟し幸に達するを得ば痛く吃正を賜へ。望む所に非ざるなり。
歸里れ秋冷なり。伏して惟んみる、天下の爲め萬々自軍せられんことを。矩方再拜。
八月廿四日。

土屋恭平江戸に遊學するを送る序

(一) 帝堯陶
唐氏及び萬の
三代

(二) 大寶令
新舊式

友人土屋矢之介の弟恭平將に東遊せんとし、贈言を余に請ふ。余因つて其の文を求めて之れを讀むに、縦横數百言、粗ぼ其の意を達するに足る。余甚だ之れを喜ぶ。乃ち書ひて曰く、漢土の文は、唐虞三代より明清に至るまで、上下數千年、體裁各々異り、文質互に見ゆ。國朝其の文を用ひ、別に機軸を出して、亦迭に古今雜俗の別あり。然り而して一言之れを蔽へば、曰く述のみ。文已に達せば、當に其の有用無用を察して之れを傳るべし、乃ち以て達きに傳ふべきなり。曰く經、曰く史は、有用の文なり。而して經已に其はれば、何ぞ後人の添足を待たん。獨り天下の事、日に新に月に増す。能文の士、筆して之れを傳ふるに非ずんば、將に後來の稽ふべきなからん。而るに煩を厭ひ勦を重るは、吾が邦學者の通患なり。且つ官府の制令文書は、禁祕最も嚴なること、古よりして然り。ここを以て古來の典籍、往々にして散逸し、世或は其の全きを窺ふこと能はず。吾れ嘗て令式を窺ふに、其の戸口の政に於けるは最も詳を致せり。而るに今其の多家増減を問はば、一も稽ふべきなし。其の稽ふべきは、獨り一條の時の課丁の數、偶々宋人の記せし所に因りて存するのみ。而も漢土の歷世指數すべ

事が如きこと能はず。凡そかくの如きものは、獨り官府禁嚴にして然るのみならず、
顯かに本學者の慢たり。今泰平の文、已に粗ぼ達せり。江戸は天下の都會にして、諸
侯ここに同まり、政令ここに出づ。泰平往いて江戸に到り、誠に能く煩を厭はず、勤
を重んず、以て有用の文を成さば、其の達きに傳はる、亦何ぞ疑はん。然らずんば、
文意之美にして驚き、奇、天地を撼かし鬼神を驚かすとも、吾れは取らざるなり。(一)乃兄
は文を知る者なり。其の之れを言ふこと如何ぞや。八月廿七日。

良三の東役を送る序

吾が公討を仰がるるを、精を厲まし治を謀り、士民を愛養せらるること、茲に十九年
たり。今歲秋九月(一)朔辛酉、大いに中外に令して曰く、「近年洋賊東西に害至り、奸
謀異心、凋康すべからず、誠に皇國艱難の秋なり。天子軫念してここに明詔を降し
たまひ、怯懦を辭かして砲銃を擣しむ。普天率土、孰れか感憤して力を致さざらん。
吾が江家は國を大闢より(二)派ち、世々皇室に藩たり。(三)烈祖洞春公に及び、宗用を繼じて

き、
豫解の洋表を
さす

も、
豫解に非ず。也。思ふると雖も、巧みに（我ぞ）宴安に乗ず。節を立て始めを借ふ
る、斯れ盡きたり。難を濟ひ勅を立つる、斯れ忠臣たり。乃の智力を計り、乃の興刺
を計め、明神暗々として、乃の左右に在り。昊天蒼々として、乃の前後に在り」と。
九月六日。

（五）
獨著書

嘉永六年九月
に
ある時の幕府
文書の寫本な
らん

接魯問答跋

魯西遊の囑心を實踐するや、由深する所久し。癸丑使船の來るや、事大體に歸し、物
議紛然たり。而るに無謀深密にして、世に聞知するものなし。已にして余、罪ありて
獄に墮れ、世と絶ふ隔たり、疑團胸に結ぶ。蓋ろ始めて此の縁を得て之れを讀み、
愈々これを疑ふ。尊説に謂ふ、「境界の事は、三五年を待ちて而る後に之れを談
せん」と。夷は謂ふ、「三五年に至らば、則ち夷人占居してより日久しく、植民漸く
殖えて、復た勸誘せしめ難からん」と。然らば則ち我れは難かにせんと欲すと雖も、
則は實に急にするに在り。夷は急にせんと欲すと雖も、謀は實に緩かにせんとするに

在り。幕府に預ふ、「爾の國を待つこと他國に別てり、未だ爾に聽さざる所は、必ず他國に聽せしむ」と。而るに幕府遂かに長崎を離れば、而ち下田邑に蠻奴に貸さる。夷、火賊・江戸に汎き一港を借らんことを請ふ。是れ吾が最も慚む所なるに、幕府は亦甚だしく拒まず。噫、斯の三者は利害の大端なり。身幽囚に在りて世事を知らざれば、愚いて自ら蒙ふのみ。乃ち立國の體、待夷の道のごときは、則ち吾れも亦敢へて疑はざるなり。二十一回猛生書す。九月七日。

矢之介に復する書

昨、讀を爲たるとも、浮屠無二の響と詩をも併せ至る。喜羅何ぞこれに尙へん。復た
雲の客はてしを覆むに、一氣流注して肺腑より出づるもの、實に足下の稱する所の
如し。但だ僕に許すこと適當なるに至りては、敢て居る所に非ず。然れども亦以て
鑑の志を見るに足るなり。是下謂ふ所の奇納なる者、洵に然り。雲は清狂の至るを待
ち、一たび是て期を待たんと欲すと。其の說如何を知らずと雖も、亦奇なり。狂も

（五） 奇相角は其の奇何如ぞや。抑、近來方外に奇人を輩出し、方

（六） 奇相角は其の奇何如ぞや。抑、近來方外に奇人を輩出し、方

（七） 奇相角は其の奇何如ぞや。抑、近來方外に奇人を輩出し、方

固より奇相なれば、兩奇相角は其の奇何如ぞや。抑、近來方外に奇人を輩出し、方
内には固ち、素無として聞ゆるものなし。是れ吾が輩の恥なり。然れども同じく是れ神
州の異なれば、則ち變の有無、其の編案、以て方の内外を分つは廣しと爲さず。因つ
て急に一書を作りて、以て復と爲す。但だ案の歸計甚だ迫り、僕の書評悉する能はず、
深く以て編みと爲す。奇相案の如き者は世に多くあらず、當に振きて之れを止め、其
の行李の勞を無むべし。是下何ぞ書府に送白して、これを家塾に留むることを謀らざ
る。但だ（五）相相（五）守畢情常の更多ければ、其は（六）許可せざらん。更に之れを僧院
に奉めば、更に留めぬ地なからんや。清狂の玉るを待ちて、餘ろに之れを計らば、事
或は（七）是はん。僕常に謂へらく、山は樹を以て茂り、國は人を以て盛なりと。他邦の人
と雖も、聚りて吾が土に寄んずることを待ば、願ふに亦盛事ならんのみ。向に群林の
去りしこと、僧意に害たこれを恨みき。今默霖の來る、僕をして重ねて恨ましむるな
らん、則ち幸なり。身繫がれてここに在れば、能く爲すことなし、獨り是下の書計
を（八）まんぬ。是下以て何如と爲す。文稿一卷、書に附して以て往る。幸に默霖に示

(二) して、其の何れを授けられよ。其の謂ふ所の囑語なるものは、一本を致ることを許されば、更に新し。九月十三日。

浮屠默雪に復する書

(三) 亥丑の五月、樞東に下りしとき、偶々一書生の江戸に歸る者と同行せり。僕爲めに大

和の谷昌平の書にして學あることを語る。生乃ち言ふ、「向に藝僧の藝吃にして文を

書くする書ありて、江戸に來れり。是れも亦奇なり」と。因つて相笑ひて曰く、「渠

れ是らざる所あり、固より餘る所あるべきなり」と。已にして東西に奔走し、今は乃

ち因はれて岸獄に在り、萬世と聞すべからざれば、遂に向の所謂藝僧なる者は果して

何人なるかを審かにする能はず。頃ろ人ありて傳ふ、「一浮屠の志氣慷慨に、默然

然、唯だ文詩を以て書に代ふる者あり、蘇人なり、來りて松如の家に寓す」と。僕固

より向に書生より聞きし所の者ならんと疑へり。昨忽ち松如の書を獲たるに、上人

の書及び詩數章を附せり。忽ち拆きて之れを讀むに、志氣慷慨、文詩舌に代ふる者、

(四) 土屋天
之助、號は蕭
雨、松如の
の字

字は子正、三
山と號す。聲
儒にして碩學

(二) 一書生
、一書生

(三) 在りて、

(註) 伯は諸
論又は王覇の
篇といふに同
じ

果して人の傳ふる所の如し。而して松如の書に就きて之れを詳かにせしが、向に聞き
し所の書、即ち上人たりしは疑なし。嗟、僕は上人に何の因縁ありて、萬聞すべから
ざるの間に相聞すること、ここに至れるか。豈に來書に謂ふ所の同氣相求むるもの、
乃ち聞るか。且つ世に上人を奇とする者、向の一書生の如きに何ぞ限らん。然れども
畢竟にして文を善くするを奇とするに過ぎざるのみ。稱して志氣慷慨なる者と爲すに
至りては、其の如を得たるに似たりと雖も、未だ上人の本意の在る所を詳かにせざる
なり。僕の如きは自ら謂へらく、其の面貌に接せずと雖も、而も其の心を獲たるもの
なりと。來書に稱す、王伯の論を持すること久し。死を決せしこと五回、遂に死せ
ず。今は刻ち稍其の氣を平かにして、敢へて議論せざれども、謂ふに丈夫必ず當に死
すべきの時ありと。嗚呼、是れ上人の本意の在る所なり。豈に特に志氣慷慨のみな
らんや。僕亦唯かに志す所あり。ここを以て身幽囚に在れども、怨みず沮まず、厚く
自ら厚顔して、將に死を他日に待たんとするのみ。

方今天下の文以て道を害し、武以て君を蔑にすること誠に高嶽の如く、苟も皇恩に

浴する者、日圓より雪ふに忍びず、耳圓より聞くに忍びず。然れども人家くして天に
 轉ち、天定まりて人に勝つは、自然の數なり。かくの如くにして懷めずんば、十年を
 出でずして皇天靈怒し、大いに罪戾を降さんこと必せり。ここに於て、天下の忠烈義
 勇の士、起ちて之れを救ひ、以て天定を救ふこと、豈に難なからんや。是れ上人の口
 を聞きて言はざるべからざるの時にして、僕も亦將に之れを預り聞かんとす。知らず
 上人以て如何と爲すや。抑、僕を許して勇士と爲すに至りては、則ち敢へて當る所に
 非ず。僕は則ち匪夷の勇、虎の如く猪の如く、他の才知あるに非ず、唯だ死を畏れざ
 るのみ。是れ何ぞ上人の稱揚を辱うするに足らんや。内に思ふことある者は、外に感
 じ易し。故に樂を聞きて哭する者あり、花を觀て泣く者あり。上人内に已に思ふ所あ
 り、乃ち外に感ずる所以なり。然らば則ち上人の僕に感ずるは、獨り僕の爲めにのみ
 するに非ず、乃ち自らの爲めにする所以なるか。幽囚錄一々批評せられ、深く厚觀を
 當ふ。萬意萬緒にして、此の書の盡す所に非ず。附し往る所の文稿一卷、或は以て書
 の未だ盡さざる所を寫ふに足らんか。但だ塗抹滿に滿ち、改め寫すに暇あらず、以て

罪とせられずして、且つ批評を辱うせば幸甚なり。聞く、上人周遊して天下に遍しと。必ず多く奇傑非常の人を見られしならん。幸に願はくは之れを聞かせられよ。昌平は史學神氣、尤も名分を識む。譬且つ老いて病み、自ら奮ふこと能はず。僕深く之れを憐む。上人も其れ亦聞けるか。九月十三日、寅白す。

僕と事を同じうせし普淵木生、僕を棄てて先きに逝けり。僕之れを惜しむこと、左右の手を失へるが如し。因つて爲めに行狀を著はし、幽囚錄に附したり。上人若し讀みて之れを哀れまば、則ち幸に一傷を癒けられよ。至囑至囑。

太華山縣先生に與へて講孟劉記の評を乞ふ書

矩方再拜して、前(一)の明倫館學頭太華先生の座下に白す。矩方小少より家叔玉麟(五)に従ひて業を受く。續は先生に事ふること年あり。是れに由りて竊かに先生の聲名を飲(六)む。已に長じ而先生に従ひて、容儀を拜し言議を聞くことを得、愈々益々尊信す。然れども頗る拙劣を嘆き精進を修め、未だ力を經綸(七)に續(八)にすること能はず。ここを以て朝

(一) 本名金

(二) 普淵

(三) 幽囚錄

(四) 講孟

(五) 家叔

(六) 飲

(七) 經綸

(八) 續

(九) 玉麟

(一〇) 聲名

(一一) 尊信

(一二) 容儀

(一三) 言議

(一四) 得

(一五) 愈々

(一六) 益々

々親炙し、夫子の門地を窺ふに由なし、常に以て憶みと爲せり。今や圖説しんめいに拘囚せられて顔る自ら憤懣し、大いに古昔聖賢の心を求め、益々巨儒碩師の風を慕ふ。而して自ら思ふ、東方の狂秦は國典の貸さざる所、士族の容れざる所なれば、何に由りてか遽かに教を秦先生の車下に求めんやと。然れども竊かに謂へらく、文獻の盛とは、書を讀む者の衆きを謂ふに非ざるなり、道を求むる者の衆き、是れのみ。道を求むる者の衆きを謂ふに非ざるなり、先知の後知を覺し、後覺の先覺を師とする、是れのみと。

近時、風俗范滂はんぱうにして教化陵遲りやういし、書を讀む人は天下に滿つれども、道を求むる者は絶えてたくして僅かにあり。而して其の自ら是とし自ら高ぶり、先知は已に肯へて後知を覺さず、後覺も亦肯へて先覺を師とせず。是れ斯道の塞がる所以にして、志士の憂ふる所以なり。矩方狂妄と雖も、徒に書を讀むを知るのみならず、又竊かに道を求むることを知る。且つ肯へて自らは是とせず、必ず先覺を師として其の緒論を聽かんと欲す、願ふに身は世と絶つ、先知ありと雖も、亦之れを覺すに由なきのみ。伏して惟

んみるに、先生の學問文章は辭簡に傑出し、夙に一國の文柄を握り、大いに醫學の體
習を振ふ。今は老退せらるゝと雖も、其の才を愛し道を愛ふるの志は終始一の如し、豈
に敢へて當初より減ぜんや。則ち其の矩方等に於けるも、固より宜しく包含して遺さ
ざる所に在るべし。ここを以て敢へて妄りに著はす所の講義筆記なるものを録して、
教を、求むべからざるの間に求む。苟に先生僕が積年の志を察し、其の狂を咎めず、
寧くも後知を覺されば、何の幸かこれに尙へん。矩方先覺を仰ぐの誠に勝るることな
し。

方今、洋風陸梁、漫無多事、民は辭職に迫あらず、士は講習に暇あらず、紛々冗々と
して百事を誤す、誠に憂すべし。矩方は幸に閑に居て精研し、私かに自ら推らすして
醫道を研明せんと欲す。知らず先生以て教ふべしと爲さるるや否や。時維れ秋冷なり。
伏して謹んみる、道の爲めに自重せられんことを。九月十八日、矩方再拜。

哈喇呼吐略誌に跋す

野山獄文稿

（一）もとま
（二）もとま
（三）もとま
（四）もとま
（五）もとま
（六）もとま
（七）もとま
（八）もとま
（九）もとま
（一〇）もとま
（一一）もとま
（一二）もとま
（一三）もとま
（一四）もとま
（一五）もとま
（一六）もとま
（一七）もとま
（一八）もとま
（一九）もとま
（二〇）もとま
（二一）もとま
（二二）もとま
（二三）もとま
（二四）もとま
（二五）もとま
（二六）もとま
（二七）もとま
（二八）もとま
（二九）もとま
（三〇）もとま
（三一）もとま
（三二）もとま
（三三）もとま
（三四）もとま
（三五）もとま
（三六）もとま
（三七）もとま
（三八）もとま
（三九）もとま
（四〇）もとま
（四一）もとま
（四二）もとま
（四三）もとま
（四四）もとま
（四五）もとま
（四六）もとま
（四七）もとま
（四八）もとま
（四九）もとま
（五〇）もとま
（五一）もとま
（五二）もとま
（五三）もとま
（五四）もとま
（五五）もとま
（五六）もとま
（五七）もとま
（五八）もとま
（五九）もとま
（六〇）もとま
（六一）もとま
（六二）もとま
（六三）もとま
（六四）もとま
（六五）もとま
（六六）もとま
（六七）もとま
（六八）もとま
（六九）もとま
（七〇）もとま
（七一）もとま
（七二）もとま
（七三）もとま
（七四）もとま
（七五）もとま
（七六）もとま
（七七）もとま
（七八）もとま
（七九）もとま
（八〇）もとま
（八一）もとま
（八二）もとま
（八三）もとま
（八四）もとま
（八五）もとま
（八六）もとま
（八七）もとま
（八八）もとま
（八九）もとま
（九〇）もとま
（九一）もとま
（九二）もとま
（九三）もとま
（九四）もとま
（九五）もとま
（九六）もとま
（九七）もとま
（九八）もとま
（九九）もとま
（一〇〇）もとま

發其の蔵、鄂爾僕を遣して疆を議す。幕府國つて吏を差して其の地を巡視せしむ。友
人山縣世衡、徒も隨行し、北陸日誌・哈喇呼吐略誌を著はして以て世に傳ふ。夫れ千
島は吾が屬地たるに而なく、乃ち哈喇呼吐のごときも、其の半ばは亦吾れに屬するこ
と久し。座るに鄂爾僕使にして漸く千島を食し、又全く哈喇呼吐を挾まんと欲す。故
に吾れの巡視する者は、當に哈喇呼吐を廻環して以て黑龍江に臨み、徧く千島を跋
て東遼河に及び、而る後可なるべし。今日誌の記する所に據れば、蝦夷の外は僅かに
哈喇呼吐の南邊に及びしのみ。噫、何ぞ吾謀の遠からざるや。然れども略誌を讀むに、
其の地形諸沿革を論述せり。則ち世衡の意を用ひしこと、知るべし。抑々北陸萬里、
往いて其の地を踐む者猶た少なく、而して踐みて其の實を記する者最も少なく、記し
て其の文を工にする者に至りては、蓋し世衡を始と爲す。而して略誌の如きは、最も
人意を強うするに足るものならんか。乙卯十月、二十一回生跋す。念八日。

道太に與へて古村善作を論ずる書

(三) 俳諧を
五明菰又は花

(四) 江戸の
寄席地味茶

（五） 江戸の
寄席地味茶
（六） 江戸の
寄席地味茶
（七） 江戸の
寄席地味茶
（八） 江戸の
寄席地味茶
（九） 江戸の
寄席地味茶
（十） 江戸の
寄席地味茶

本城に寄つ善作なる者あり、關國六年、行年五十五、親舊の愛惜して之れを無救するものなし。僕は其の影隨して遂にここに死せんことを惧る。聞く、述太なる者、其の義弟を以て門戸を主持すと。述太にして愛惜せば、以てこれを因より脱せしむべし。而るに述太暇隙にして、人を待つに城府を以てし、能く説きて之れを降す者鮮し。獨り是下の朋氏言松斐は老成にして、特に述太に善し、或は之れを能くする者ならん。是下を僕の爲めに枉げて之れを謀らざる。僕は善作に於て、夙契あるに非ず。獄に入りて、始めて其の人を知りて之れを奇とす。其の人沈靜簡嚴にして、頗る同因を厭す。嘗て書卷を以て童蒙の誨たり。又俳諧を善くして家を爲せり。斯の二事あれば、自ら世に成てらるざるに足る。而して略ぼ幕府本藩の事に通ず。近々輿地誌を讀みしに、其の要領を得たり。甚だしくは義を解せずと雖も、亦書を讀むことを好めり。笑めて之れを勵まざる、顧ふに又義軍の一族ならんのみ。是が僕の最も其の窮死を懼れて、是下の善謀を望む所以なり。然れども僕好んで人物を稱揚し、其の言、常に是下諸友に信ぜられず。而れども善作の心には、固ち仁人の宜しく心を動かすべき所のも

(二) 魯の人

小人に従ひて
すも直む。差

間

(三) 齊の人

間

間

間

間

間

間

間

間

間

のあり。魯作自ら言ふ、「吾れ幽囚六年、行年五十、精神日に耗^へり、疾病日に加はる。昔^昔は日に入らず、輕^軽便^便に及ばず。而るに未だ嘗て一言の以て憐^れみを親舊に請ひ、拘囚を解脫せんとことを求めざるは、賊に罪大に過重く、高貨^{高貨}賁^賁せらるる所なきを知ればなり。今は放へて城市に出てて十人に齒^はするを望まず。若し前愆^{ぜんげん}を除き舊染^{きうせん}を漱^{すす}ぎ、海外に投じ、魑魅^{ちみ}を防ぎ、尚ほ能く民庶に編せられ、天地日月を拜するを得ば、吾が志願^{しげん}は在り」と。嗚呼、樂正^{はくせい}哺囈^{ほさ}すれども而も善を好むの喜ぶべきは、其の罪あるを知らざるを以てなり、而も禮貌の衰へざるは、其の養はれざるを以てなり。然らば則ち仁人の人を待つや知るべきのみ。是下苟も心を動かさずんば、僕は則ち望むことなきのみ。抑、僕岸獄に在りと雖も、自ら楽しみ自ら逸^{やす}んずるは、年少^{しょうしやう}く氣盛^{きせい}きに頼^{たの}まれるのみ。況や前途細^{せう}ほ遠^{とほ}かにして、二十一回の軋^{げん}は輕量^{けいりやう}すべきに非ざるをや。「岸に宜しく獄に宜し」と、是れ其れ然るなり。堅氷^{けんひやう}鬚^すに在り、凝陰^{ねいいん}霜^{しも}に透る。日影^{にかげ}観るべからず、火爐^{かろ}親しむべからず、敷^ふ厚^{こう}きを得ず、濯^{たく}湯^{とう}時に至らず。三冬^{さんとう}夜^や永くして、五更^{よもぎ}燈^{とう}滅^{めつ}し、愁夢^{しゅうむ}塵^{ちん}に破れて、悲思^{ひし}交^こ結^{けつ}ぶ。六年の囚、五十の老、

其の何れを以て此の論を讀さんや。詞より年少氣猛、自樂自逸の二十一回猛士を以て之れを例とすべからざるなり。初冬念八夜三更、矩方白す。

默靈に與ふる書

向に上人の紙に來られしとき、文稿一冊を渡りて玉を請ひしに、批評叮嚀、延いて他事に及ぶ、頗しく略言するが如し。感謝感謝。第に上人勿々に錫を回らし、鄙懷を整ふるに想あらす、慙み亦太甚し。時清狂師の家兄伯叔に與へし書を視て、上人尙ほ妙圓機會に遇らるることを喜かにしたれば、疾速に書を具して置郵に附す。僕素と交友あり、況や輒垣牆戸、世の遺棄する所なるをや。讀書作文、孰れと與にか商量せん。獨り上人は切々僕々、引きて之れを進め、獎めて之れを勵まさる。僕何を以てか之れに答へん。

僕一に相正さんと欲するものあり。上人の云はく、「今世儒佛益々盛にして、大道益々晦し、まだ儒佛の如く大道を轉くるを知らず」と。是れ益々盛する所ありて言ひ、自

其の適當なるを爲らざるのみ。僕嘗て東國の藝文志を讀み、深く其の趣を喜ぶ。謂へらく、國に國風ありと雖も、業に大小ありと雖も、皆大造の餘たり。或は器を具へて備へ、或は其の一體を具ふ、吾輩人の徒なるべし。一事を數ふれば車なく、馬を數ふれば馬なしと、海に荏苒の雲の如し。要は用捨如何を顧ふのみと。

我々名分の明かならざる者、僕切に懼るものあり。幕府近ごろ米利幹・魯西亞・曠野と通信す。謂んて其の約計を讀むに、幕府自ら日本帝國政府と稱するは、似たり。其の自ら日本國を君主と稱するは、則ち甚だ平可なり。果してかくの如くんば、外國人必ず權利を以て我國の至尊と稱さん。既に至尊と稱さば、則ち詔勅制詔と稱せざるを得ず。詔勅制詔は幕府の稱すべき所に非ざれば、則ち後來の詞命必ず國體を失ひて正命を號する者あらん。是れ豈に切に懼れざるべけんや。故に僕語へらく、直に征夷略と稱し、太將軍と稱し、凡百の事件、朝廷の勅旨を奉行するに若かじ、則ち言順ひ義家かじ、而して國體以て尊しと。今干戈歟ひ戎狄を剿絶すること能はずとも、辭命は廢じて國家を汚辱すべからざるなり。上人若し以て然りと爲さば、願はくは同志と

(一) 甘肅一
右寺門か、蕭
の老臣にして

つた

(二) 楊嗣は

此に源を興し、
その土流を承
承といひ、陽
子江に日ぐ大
河となる
(四) 一に湘
江といひ、
湖南省の巨川

此の義を證明し、藩府をして感悟する所あるしめられば、則ち其の功亦偉ならずや。
蜀に斯の志を同じうする者あらば、其の需たり、餽たり、文士たり、武人たる、皆
これに就ては國より擇ぶ所なきなり。

傳六年十月廿四日を以て薨に歸り、蘇木生と諡る。年又一周し、霜露凄涼にして、感
憤胸に交はる。上人同に生の爲めに祭文を作ること許さる。幸はくは速かに歿られ
たことと。近日讀に就りて、文を作ることに猶だ懶く、觀護すること能はず。幸に答め
らるることなかれ。不宣。十一月初日稿す。

朝宗、李洪士海の説

林君の遺言に楊田生たる者あり、漢兵衛と稱す。蓋し君の、爲めに命ぜし所と云ふ。
重なる頼川傳約を介して、名字を語ふ。因つて之れに名づけ朝宗と曰ひ、字として士海と
曰ふ。其の説に曰く、「漢の水たるや、^(一) 楊家より出て、^(二) 漢となりて江に合ひ、^(三) 滔々數
千里、海に朝宗す。其の江・漢に於ける、源流りと雖も、其の海に朝宗すること、則

(一) 大江氏、
毛利氏の宗家

ち一なり。妻れり氏は江蘇に輕騎し、世々公室を轉けて國政に勞す。爾して家臣の習、
或は外に言きて私に轉ひ、國を忘れて家を謀る者あり。今、君の漢を以て生に命ず、
蓋し深慮あらん。吾れこを以て此の説あり」と。之れを守約に聞くに、生甚だしく
は前を讀まざれども、家事に疊むと。苟に斯の説を存して之れを思はば、其れ亦慮幾
らん。十一月十五日、二十一回生稿す。

道太に與へて講孟劉記を示す書

(二) 父彭百

儒學師範に、思慮短淺なり。幼きとき嘗て父叔に従ひて、經傳の句讀を受け、又略
ぼ其の大義を問けり。其の後東西に奔走して、常師あることなく、議論を喜み文字を
偏ると雖も、夫れ自ら信じ自ら誦じ、憑依する所なく承受する所なく、常に自ら數
と爲す。頃る頃に在りて、二三子と孟子を講じて劉記を作り、頗る其の學を修め、其
の思を益くす。要は事情に切にして、心身に實なるを取るのみ。然れども荒疎の習、
短淺の病は、百に一をも除かざれば、益々其の謬戾を致さんことを恐れ、太華縣翁に

三十一 卷二
三十二 卷三
三十三 卷四
三十四 卷五

説きて正を取る。特爲めに評語一卷を書はし、之れを解説せらる。凡そ儒の絶々する所の、王を尊び道を崇み、國體を重んじ、直節を勵まし、人材を育するの諸事、一も前の政の所とならず。悲観として自失し、解くして進むこと能はず。岸獄の間、四顧するに人なく、前の二三子に問へば、前の二三子皆固より吾れと同じ、則ち離れず吾れを助けて其の業を發かんや。是下學精しく思密に、嘗て翁の門に遊び、僕を知ることも又深し、因つて前記を取り、翁の評語を併せて、これを是下に献る。是下間に委じて劉無し、一字を寄せて當否を示さば、幸甚なり。十一月仲五、某日す。

守約齋する所の説也に題す

(五)
右劉子政の遺範十冊、初め守約嘗て坊間求めて故本八冊を度、其の闕あるを替へ、百方繕索して必ず之れを全うせんと欲し、畢賦も忘れず夢寐に發するに至り。後三年、今歲八月、宿病を癒き、故書齋を擴り、果して闕本二冊を得たり。刊刻契機、並ひに前著に同じ。守約の勤き、幾一歸りて之れを統観するに、竊歎も亦前著と正に

一冊に出づ。ここに於て十冊完備す。守約之れを奇とし、以て神助ありと爲し、余に
 愛めて其の由を記せしむ。余曰く、「是れ誠に奇なり。然れども之れを求むること誠に
 にして、而して之れを獲ること奇なるは、固より理の常なり。抑、說苑の一書は哲子
 路精忠の發せし所、血涙の灑りし所。守約苟に前の誠を以て、これを此の書に求めば、
 則ち之れを獲ること奇なるも、亦豈にここに止まらんや。若し其れ然らずんば、書の
 存亡、亦何ぞ言ふに足らん」と。因つて題す。乙卯冬日。

評井青樓、此の本を余の所に見、驚きて曰く、「噫、是れ石川莊助の藏本なり。余
 往年借讀せしも、時已に二冊を闕きたり」と。然らば則ち前人の完うすること能は
 ざりし所のもの、守約一朝にして之れを完うす、更に奇ならずや。丙辰正月重ねて
 題す。

居易堂集を讀む

居易堂集二十卷は、明の孝廉徐僕龍初著はなり。僕龍兩寅覆沒し、君父國に殉ぜしもの

(一) この退
 隱の辭
 書は、
 余の
 所見
 本に
 比し、
 卷の
 目録
 及び
 序文
 等に
 若干
 の差
 異を
 認む
 所あり
 たり。

能する者と思まざるを得んや。徒らに恬靜淵默、身を潔くし節を全うする者にも非ず。何ぞ此の勝に託して、生を偷みて苟活し、時と興に俯仰する者とならざるを得んや。昔者、滎河内の死せんとするや、其の子を遣し歸して、徐ろに恢復を謀らしむ。侯耆の父、文結の死せんとするや、侯耆の手を執り、泣きて曰く、「吾れ固より死せざるべからず。君朝し長せば興父となり、以て世を浚へば、憾みなかるべし」と。而るに侯耆は必ず從死せんと誓へり。何ぞ其の事の相類するや。然らば則ち侯耆の志、知るべきのみ。乃ち其の泣々として書を著はせしも、固より亦侯つ所ありしなり。豈に特だ淵默・欽翁の流のみたらんや。而して吾れは獨り其の志の天下後世に暴白せられざるを悲しむのみ。然りと雖も、其の天下後世に暴白せられざるは、乃ち侯耆たる所以なり。而して何を我れか今日の言に俟つことあらんや。十二月念六日。

往事を紀す

余去年甲寅二月二十八日、捕に下田に就きてより、今茲乙卯十二月十五日、野山の獄

古に從せし者にして任

直し稱せらる

余は、鳥山新三郎・宮田鼎藏・白井小助・土屋松如・小田村士毅・小倉健作と爲す。是の時、茶原良三・桂小五郎・赤川淡水・井上壯太郎・中村士恭、皆相摸に成し、余と諸友より懼して松如に託す。權任藏も亦金を懐に探りて鳥山に託し、並之れを獄に置す。而して小助の贈、最も其の先に在り、且つ是れに由り罪を濫に獲たれども、愈と爲す。一日、余、誤に奉行所に就きしとき、鼎藏道に要して余を窺ひ、余の權任に集するを見、微笑して去れり。已にして鳥山余の事に坐して、屢々奉行所に鞠せられ、鼎藏・小助は事を以て江戸を去り、相摸の諸友又地阻りて便ならず。獨り士毅は藩邸に在り、松如と健作とは外に在り、力を合せて是を脱するに志す。

心

余獄に度り、復た野山の獄に囚はる。家兄伯教司獄に懇しく、例を破りて來り余を見る。後には遂に常となり、率ね一日に必ず一たびは至り、風雨寒暑、未だ嘗て廢せず。而して諸友も亦多く囚りて通信することを得。松如尤も文事を以て、數々往復せり。獄中、用學點燈は、其の切に禁する所なり。而るに司獄余の爲めに禁を聞く。余獄に坐して書籍乏しからず、日夜精研するを得たるは、家兄の勞、司獄の力なり。司獄とは福川厚之助なり。余爲めに字して守約と曰ふ。余獄に在りしとき、守約余を待すること頗る厚く、又筆を扶きわかはみ來つて業を請ふ。余獄を出づるに及び、余に語りて曰く、一語の破例の事、初めは頗る難しと以爲ひ、已にして謂へらく、子の志を成す、事亦大なり、ここを以て罪を獲るとも、萬悔ゆる所なしと。是れ余の自ら斷ぜし所以なりと。嗚呼、諸友の余に於けるや、能く古人の艱難相恤あはれむの義を盡し、而して守約も亦今の官吏の爲す能はざる所を爲せり。是れ豈に忘るべけんや。夫の鑑興牢莊、吏宰議從、罪囚胥居あひるものごときは、厚薄同じからず、頑良各々異たり。然れども余

(二) 高松の

の正風、一筆にて、往々梨像を榮し、余從つて愚義を以て之れを潰すれば、爲めに流下
を著あるに至る。駒更に至りては、下田の組頭黒川喜兵衛、町奉行留役松浦安吉、衛門
尉の組長、余と亦同の朋輩の子孫に於けることとされありと云ふ。こ卯除日、紀し
て以て自ら藏す。

丙辰幽室文稿

丙辰幽室文稿目錄（安政三年）

幽室の壁に刷す	正月	一九九
烏山子の櫻任藏・村上寛齋の事を紀するに就す	正月	一〇〇
虞初新志を読む	二月六日	一〇一
爰書の後に書す	二月七日	一〇二
古神鏡の記	二月八日	一〇四
小田村士毅の相摸に役するを送る序	二月十五日	一〇五
史記を読む三則	二月二十四日	一〇七
河豚を食はざるの説	三月三日	一一〇
西湖佳話を読む	三月五日	一一一
白樂天の詩を読む	三月八日	一一二
宋元明鑑紀奉使抄序	三月十三日（別冊）	
漁史を論ずる一則	三月十七日	一一三

自ら松柳の詩の後に書す	三月二十五日	一一五
野山猿園名錄跋論	三月二十八日	一二〇
矢之介に與ふ	四月五日	一二三
行昭、字は明卿の説	四月十三日	一二五
七生説	四月十五日	一二七
續二十一回猛士の説	四月十八日	一二九
二歌批評	四月二十七日	一三〇
野山猿記	五月一日	一三二
坪井氏に與ふる書	五月十日	一三四
藤生生の文を評す	五月二十三日	一三七
久坂生の文を評す	六月二日	一四一
同富永有隣の手簡に跋す	六月十三日	一四三
筆記一則	六月	一四四
又記す	十二月朔日	一四六
講義餘話に跋す	七月二十九日	一四七

先考藤吉翁門弟の墓誌銘	渡邊某に代りて	七月五日	一四七
中谷正亮に與へて喪を弔する書	七月七日	一四八	
治心氣齋先生に與ふる書	七月十三日	一五一	
久坂玄瑞に復する書	七月十八日	一五一	
良三に與ふ	七月二十二日	一五四	
澤土眞宗清狂師の本山に應徵するを送る序	七月二十四日	一五五	
再び玄瑞に復する書	七月二十五日	一五九	
坪井氏に與ふる書	八月九日	一六一	
赤川淡水に與ふる書	八月十三日	一六三	
再抄抄す	九月十八日	一六五	
浮屠默霖に復する書	八月十五日	一六六	
默霖に與ふ	八月十八日	一六九	
良三に與ふ	八月(關)		
中村遺太に贈る	九月十日	一七一	
江風山月書樓記	九月十三日	一七二	

松平村塾記	九月四日	一七六
益田丹下に贈る	九月二十日	一八〇
中村道末に與ふ	十月十六日	一八一
良三に與ふ	十月二十五日	一八二
人に與ふ二篇		一八三
太革翁の講孟割記評語の後に書す	十月二十八日(別冊)	
赤川淡水の館中同學に與ふる書を読む	十一月二十三日	一八三
又讀む七則	同	一八四
三四樓記		一九〇
綠野堂記	十一月二十四日	一九三
浮屠清狂に與ふる書	同	一九四
萱生玄順を送る敍	十二月朔日	一九六
幽囚錄に跋す	十二月五日(別冊)	
外征論	(編者附載)	一九七

(一) 安政二
年十二月十五
日野山獄より
書す

幽室の壁に題す

余恩命を忝かたじけなくうし、獄くを免ゆるされて病を家に養ふを得たり。然れども禁錮くわんりくの身、官くわん嚴げんに其の交際を禁ず。因つて一室を掃はきつて退處たいしょし、自みづから之れが誓ちかを爲つくつて曰く、「飯に赴しき牆かに上るに非ずんば、敢へて跬步きふを移さず。一二親戚の外、舊交密友も一切謝絶して、敢へて半面を接せず。書信の往復を論ずるなく、乃ち敘詩のごときも、敢へて人の爲めに一字を書せず。但ただ在獄の舊盟に至りては、往々例を破つて往復する者あり」と云ふ。余向さきに獄くに在りて甚さだしくは往復を愼しんまず。是れを獄知りて禁ぜざり！に因るのみ。今すてに家に反かへる。家庭の間、恩、義を掩おほひ易し。況や余世よに於て顧る多たく日を増せるをや。一たび吏議に係からば、父兄の恤あはれへを致いたすこと細こまからず、故に自みづから之れが誓ちかを爲つくらざるを得ざるなり。噫、余は大不孝の人なり。今乃ち區々として誓を爲ることかくの如し。壁に題して自ら警しんむ。

余の自ら轉むることかくの如し。今録して知心の友に示す。知心の友、其れ亦吾が心を諒せんか。寄する所の書も、答復すること能はず。然れども心支學長じ文進み、復た吳下の詞臺に非じ。國の爲め道の爲め、勉強して惰ることなくんば、則ち他日の刮目豈に測るべけんや。

鳥山子の櫻任藏・村上寛齋の事を紀するに跋す

任藏は義士なり。民之助何の幸ぞ、乃ち同じく公侯に謁するを得たる。寛齋は俠士なり。民之助何の幸ぞ、乃ち同じく治療を施すを得たる。二子の民之助に於ける、譬へば燕の巢と與にするが如し。民之助二子を得て、其の臭益、顯はる。則ち其の幸とする所、偶々其の不幸となりし所のみ。鳥山子は義を尙ぶ俠を愛し、其の言津々として味あり。余の鳥山及び二子に於ける、交游素あり。獨り民之助を知らざるのみ。是れ又幸と謂ふべし。

(一) 人の事
諒進して又
復た吳下の詞臺に非じ。
國の爲め道の爲め、勉強して惰ることなくんば、則ち他日の刮目豈に測るべけんや。

上の子は書を
新三郎よりの
十七日、鳥山
松陰翁の同屋
に於てあり
（一）

（一） 虞初新志の序
（二） 虞初新志の目録

虞初新志を讀む

虞初新志二十卷は大抵神仙怪誕の説、閨閤猥褻の談にして、正教を誣ひ人心を惑はし、道に志す者の宜しく道ふべき所に非ざるなり。況や其の文婉にして、其の情眞に、必無を化して必有と爲すをや、其の害更に甚だしからずや。但だ其の要は道に離れざるに歸す。而して忠臣孝子義人節婦をして之れを讀ましめば、欣然として獨り笑ひ、不忠不孝不義不節の者をして之れを讀ましめば、悚然として内に懼るる者、亦多くあらん。所謂曲終りて雅を奏する者、蓋し是れに近からん。夫の之れを始むるに忠孝義烈の姜貞毅先生を以てし、之れを終ふるに輪廻に溺れず、星相を喜ばず、師巫を信ぜざるの三儂賢人を以てするに至りては、則ち編者の微意見るべきなり。噫、是れ獨り道に志す者の爲めに道ふべきのみ。

新志收むる所の、聖師錄及び義猴虎犬牛、烈狐孝犬の諸傳記、或は正しく或は怪し、未だ悉くは疑ふべからず。孔子曰く、^{（八）}「人を以て鳥にだも如かずとすべけんや」と。是れ應に如是觀を作すべし、何ぞ正怪を問はんや。

(二) 爰書の後に書す

(一) 書す爰
第九卷諸侯文
書中にも所載
(二) 爰書
爰書の類は
爰書に属す

是れ吾が三人の爰書にして、數吏の手を経て松浦氏に成れるものなり。松浦氏は町奉行所留役なり。初め吾れの謫生と下田に就縛するや、下田の官吏其の概要を鞠し、之

れを町奉行所に送る。町奉行所先づ象山を縛し、吾が二人の至るに及んで、之れを會鞠す。其の間の數吏甚だしく酷暴なる者なけれども、最も善く吾が徒の心事を諒する

者は松浦氏たり。松浦氏の此の書を成すや、投夷書及び象山の送詩を以て案と爲し、

履歷月日は則ち謫生の日記に據り、而して更にこれを三人の口陳に質す。殊に吾が輩を慰導して、吾れをして言はんと欲する所を盡さしむ。其の余が事を敘するや、家

世の兵法を傳ふるより起し、外寇議を讀むに及び、奥羽に遊ぶに及び、非常の罪に當

りて、非常の恩を蒙り、非常の報を思ひ、遂に航海の舉に逼るに及ぶ。他に謫生のに耶を敘するがごとき、象山の上書を敘するがごときも、皆意を用ふるの筆なり。

謫生の操府に熟すと曰ひ、投夷書を寫すに奉書紙を以てすと曰ふの類に至りては、其

(一) 書す爰
第九卷諸侯文
書中にも所載
(二) 爰書
爰書の類は
爰書に属す
(三) 爰書
爰書の類は
爰書に属す
(四) 爰書
爰書の類は
爰書に属す
(五) 爰書
爰書の類は
爰書に属す

の事實は、宣しく必ずしも書せざるが如くにして、而も必ず之れを書す、亦意なくして然るに非ず。凡そ是れ皆尋常官吏の能く辨ずる所に非ざるなり。但だ吾が二人下田にて縛に就ける、事頗る其の實を失す。是れ下田の吏自ら其の短を護るの爲せし所なり。象山謂ふ所の術を以て術を逞くは、其の説甚だ長し、乃ち略して及ばず。是れ時事に切たるを忌めばなり。此の二者は吾れ憾みなきこと能はず。然れども航海の事には大關係あるに非ず、故に余は一尋常の外、復た力めて辨ぜず。而して吏も亦敢へて論議せざるなり。獨り誕生の日記は其さに同志の議狀を録すれども、而も並措きて聞はず。若し隨吏をして此を決せしめば、株連蔓延、其の大獄を興さんこと必せり。是れ最も松浦諸人の力なり。書成るの日、余誕生を顧みて曰く、「かくの如くにして死せば、死すとも猶ほ生けるがごとし」と。誕生之れを頷く。時に象山詩を作りて曰く、「案成り千歳遺憾なし、辱しめず君家と我が名とを」と。偶々爰書把りて之れを讀み、往昔を追懷して後に書す。丙辰二月七日、藤寅。

（一）
藤寅傳。松陰

澤庵先生云々、「是れ自家の小傳なり。數十年の後、取りて之れを讀まば、亦自ら

とは心交不面
の友〔蘭傳〕

安んぜざるものあらん、噫」と。

臘月十九夜、舊稿を發きて之れを讀む。箇々自ら安んぜざること、實に露の言の如し、而も未だ會ち十年を待たざるなり。徒だ當時の信を傳ふ。敢へて之れを火に附せざるのみ。且つ紙襖奮發、大いに自ら安んずるものを他日に求むるは、未だ必ずしもここに基づかずんばあらず。寅又書す。

古神鏡の記

(一) この間
は、其の十
年を待たず

嗚呼、是れ肥後の藤崎八幡宮の神鏡なり。其の社司某、藩士宮部鼎藏に贈る。余の將に海に入らんとするや、鼎藏此れを舉げて以て(一) 鑑と爲す。仰ぎ惟もみるに鏡の徳たるや昭かなり。況や其の神物にして且つ古なるものをや。鼎藏の鑑する、吾れを誨おそふること亦明かなり。而るに吾れ暗昧にして事を誤り、朋友の辱はじとなる。其の鼎藏に負ける、復た何如ぞや。鏡素より鏽さびして以て鑑かんみるべからず。今工に命じて研磨せしめ、光瑩月の如し。匣はこを造りて襲藏し、敢へて襲おそ慢せず。試みに取りて自ら鑑みるに、

兩目識に憎むべきなり。然れども余の爲せし所、亦武門の習なり。今より爲す所、亦余を誇ふる言に負かじ、弓矢八幡照覺を賜へ。是れを記と爲す。

小田村士毅の相摸に役するを送る序

相摸・房總は江戸の咽喉なり。故を以て幕府特に其の守を嚴にす。癸丑以來相摸を以て本藩及び奥州に託し、房總を以て備前二藩に託す。四藩屹然として對峙し以て寇賊に備ふ、其の地益々難ならん。本藩の遠戍は士卒若干、毎歲交替す。毎番衛官一員をして之れに隨はむ。蓋し士をして義を聞き教を承け、勇ありて方を知らしめんと欲すはなり。今茲二月、小田村士毅其の選に中る。是れより先き士毅明倫館舎長、市中の諸生、皆其の遠く去るを惜しみ書を上つて慰留す。而れども相戍の選、別に其の人なきを以て聽されず。發するに臨み、士毅余に語つて曰く、「相戍の選、何を以てか其の職を盡さん」と。余曰く、「君の戍に在ると館に在ると、其の職未だ大いに異なることあらず、但だ戍に在るの職は更に重しと爲すのみ。然れども君が在りて」

に其の驕を行たり、成に在るに於て何かあらんや。夫れ相援は江戸の咽喉なり。一日、寧ろは相援に於て、驕を走せん。此の時、當りて、亦何ぞ聖賢を稱説し、教義を講論するに暇あらんや。然れども今已に虜と和親し、虜も亦恭順にして敢て逆節を著さず。皮兵の情、無事暇逸なり。乃ち驕らざれば則ち惰る。驕惰の兵を以て不測の虜を待つは、所謂禍遠くして大なるものなり。是れ聖賢を稱説せざるべからず、而して教義を講論せざるべからざるなり。相成の重き、士毅に必とするものは、蓋しここを以てなり。夫れ兵の害は驕惰より大なるはなし。惰は驕より生じ、驕は逸より生ず。今兵已に逸せり、而して未だ甚だし、驕らざるものは、驕らんと欲せざるに非ず、惰極まつて驕る能はざるなり。而も今の將吏は察せず、嚴令苛法以て之れを束縛し、其の發越奮勵して、競つて用を爲さんと思ふを欲せず。士毅の之れを左右するに非ずんば、則ち將た誰れにか望まんや。夫れ之れを教ふるに教を以てせば、則ち驕者肅し、其之れを教ふるに義を以てせば、則ち惰者奮はん。ここに於て、其の法令を寛にし、其の發越に資すれば、則ち以て戰ふべきなり、以て守るべきなり。器械行伍の末に至り

ては、則ち有司存す。君の先きに館に在りて諸生を督率^{しやうそつ}せるは、願^{ねが}ふに亦是れに外た
らざらん。若し夫れ三藩^{さんはん}成となつて並びに吾れと犄角^{さみかく}を爲す、苟も時を以て往來し、
交^{まじ}り相激^{さうげき}屬^{りく}し交々相輔^{さうほ}車^{しや}し、手足を相爲し頭目を相爲さば、則ち獨り本藩に益あるの
みにあらざらん。夫れ然る後四藩屹然として對峙し、以て寇盜に備へ、而して江戸枕
を高うすべきなり。ここに於て君の職も曠^{くわう}しからじ」と。士毅曰く、「善し」と。余
屏居以來、絶えて世と聞せず。獨り士毅^{しぎ}通家^{つうか}を以て數々來り過り、論説を交ふるを得
たり。故に其の行に於て、敍^{しよ}を爲り以て贈る。

(二) 史記を讀む三則

伯夷傳、首一段は乃ち七十列傳の總敍^{すいじ}たり。太史公一部の史記は、傳を群籍に取りて
信を六藝^{ろくぎ}に考へ、說者に旁究して孔子に折衷^{せつしやう}す。是れ其の大要なり。豈に獨り伯夷傳
のみ然りと爲さんや。五帝本紀の贊に云ふ、「書缺^{しよけつ}けて間あり、其の軼^い乃ち時々他の
書に見ゆ。學を好みて深く思ひ、心に其の意を知るに非ずんば、固^{もと}に淺見寡聞^{せんくわ}の爲め

(一) 漢の司
馬遷^{しやまけん}は
帝より漢の武
帝までの紀傳
體を著し、其
の體裁は、
「史記」に
準じて、
「漢書」の
體裁とす。

に遺ひ置きたり」と。自序に云ふ、「六經の異傳を揅せ、百家の雜語を整齊す」と。亦皆是の意のみ。故を以て終始之れを言へり。正焉。

太史公は史に記たる者にして、史記は乃ち史の大成なり。後儒乃ち謂へらく、「遷、編年を變じて紀傳書表を爲る」と、非なり。清の傅以漸云ふ、「編年あり、序傳あり、紀事あり、史譜遂に三分せり」と、亦非なり。余史記百三十篇を讀むに、始皇及び高祖以下五紀は編年の體なり、八書は紀事の體なり。五帝以下六紀及び諸世家、匈奴・南越・東越・朝鮮諸傳は、編年紀事の間に出入するものなり。循吏・儒林・酷吏・游俠・佞幸・滑稽諸傳に至りては、則ち後世類聚の源なり。諸表に至りては、則ち此の間の合處・年輩の粗なり。大要は紀以て綱と爲し、世家・列傳以て目と爲し、表以て之れを櫛し、書以て之れを詳かにす。噫、何ぞ其れ大成せるや。後世の史筆、數十家ありと雖も、固より其の範圍を出づる能はざるなり。太史公は誠に史に聖なる者、而して後の史に志ある者、史記を觀れば足れり。

(一) 太史公は史記を撰むに、先ず其の體を定むるべからずと雖も、其の體を定むるべきなり。○六月

(二) 是れ子長

(一) 和漢合

史記の體を定むるべきなり。○六月

(二) 是れ子長

(三) 是れ子長

(四) 是れ子長

(五) 是れ子長

(六) 是れ子長

(七) 是れ子長

(八) 是れ子長

(九) 是れ子長

(十) 是れ子長

(十一) 是れ子長

(十二) 是れ子長

(十三) 是れ子長

(十四) 是れ子長

(十五) 是れ子長

儒を好まざる
に罪を得て自

(二) 薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

「は、薛の人

王賊の儒たるも、固より未だ太平を興すに足らず。孝武儒を尙べども、而も其の信用する所は、詐偽の父孫弘、姦險の主父億、詞賦の司馬相如、刀筆の張湯にして、皆傳ふるに古義を以てし、節るに儒術を以てす。是れ子長の最も惡む所にして、復た孔孟の教、六經の旨に非ず、子長の儒たる所以なり。然らば則ち其の黃老を先きにするものの如き、亦然らざるを得ざるものあればなり。而して之れを六經を後にすと謂ふ、豈に子長を知る者ならんや。大抵憂世の言は俗情と異り、世人知る能はず、擧げて以て議を爲す。亦何ぞ怪しむに足らんや。二月二十四日。

河豚を食はざるの説

世に言ふ、「河豚は毒あり」と。其の之れを嗜む者特に衆く、余獨り食はざるは、死を懼るるに非ざるなり、名を懼るるなり。夫れ死は人の必ずある所にして、固より懼るるに足らざるなり。然れども死生も亦大なり。苟も一魚の小を以て、而も死生の大を致す、願ふに士名を辱しめざらんや。或は謂ふ、「河豚は必ずしも毒あらず」と。

大、御史大夫
等、年費
等に附しい
れられて自殺

(五) 西湖佳話
西湖に
六蹟を蒐む

然れども死は人の必ずある所にして、又豫期すべからず。且つ世に固より病なくして死する者あり、況や其の萬に一毒あり、嗜みて之れを食ふは安んぞ其の偶々死して名を辱しめざるを保せんや。或は謂ふ、「河豚の美、衆魚の比に非ず、食はずんば其の美を知らず」と。夫の清人^{しんじん}惡む所の阿片^{たばこ}煙は其の味蓋し美ならざるに非ざるなり。其の味愈々美なれば、則ち其の毒愈々深し。故に今日の河豚を嗜む者は、必ず他日阿片を賣る者たり。

(五) 西湖佳話を讀む

余の性癖^{しやうへく}にして、雜書を見るを好まず。頃ろ人あり、西湖佳話一帙^{ちゆう}を借示す。因つて一過し、頗る亦快と稱す。其の十六蹟なる者、樂天・子瞻・賓王・勳^{ほう}・勳^{ほう}・錢鏐^{せんろう}諸人の蹟の如き、所謂磊々落落天地に軒する者、固より言を待たざるのみ。隱蹟の君復、笑蹟の元淨、萍蹟の蓮池、斯れ亦以て次と爲すべし。獨り于公の忠勳偉烈、これを公蹟に託し、又これを祈夢の事に附するは、譚妄これより甚だしきはなし。西泠の

顔、愛すべしと雖も、梅嶼の恨、痛むべしと雖も、又益々下れり。葛嶺・南屏・斷橋・三生・雷峯の五蹟に至りては、怪誕不經、最も宜しく斥くべき所なり。故に余、此五蹟の書、數蹟を提出して、以て觀覽に資せんと欲す。而して此の數者は正史の言に何はり、固より雜書に待つことなし。雜書遂に觀るに足らざるのみ。然りと雖も佳話の書、能く辭氣余の如き者をして、瀏覽して快と稱せしむるは、則ち是れ亦未だ必ずしも長とする所なきにあらざればなり。善く讀む者に非ずんば、其れ誰れか之れを知らん。

(二) 白樂天の詩を読む

白氏の長慶集、詩凡を三十七卷、言々情にして句々實なり。浮薄の態なく、華飾の趣なく、一語の間、以て其の志を知るに足る。蓋し世を憂ひ民を傷み君子を好し小人を疾むの言に非ずんば、則ち道を樂しみ身を善くし分に安んじ遇に隨ふの意なり。是れを外にして、一言一句あるなし。勢利を慕はず、神仙を信ぜず、丹藥に惑はず、骨肉

に厚く、朋友に教し。かくの如きもの、又毎に其の詩に見はる。概して之れを言はば、其の朝官に在ると、少壯たりしときとは、世を變ふるの言多く、其の江湖に在ると、老大となりしときとは、道を樂しむの意多し。樂天蓋し聖學に於て固より得たるあり、而して又釋教に深し、且つ其の真性樂易なり。故に其の詩かくの如し。蓋し樂天名は朝臣、少よりして之れを命ずるは、則ち其の志の始終一の如く、最も尙ふべきなり。樂天に張籍の古樂府を讀むの詩あり、云ふ、「上は教化を傳くべく、之れを舒べば高民を濟み、下は性情を疎むべく、之れを急かは一身を善くす」と。蓋し自ら其の詩を讀みたり。唯に其の詩を然りと爲すのみならず、又其の志もなり。

逸史を論する一則

中井積善曰く、「元子氏の圖を受くること七年、坐して以て終るるを待ちしは、猶と謂ふべし。毛利氏師を勞し民を勸し、快を必勝に取る。喪亂の世に、四境に他の處なく、力を一方に専らにするを得たるは、幸のみ。一時に罷りて以て老謀良圖と爲す、

善の著、徳川
善は上流の人
七十

(一) 毛札の
 (二) 猪飼氏の
 (三) 猪飼氏の
 (四) 猪飼氏の
 (五) 猪飼氏の
 (六) 猪飼氏の
 (七) 猪飼氏の
 (八) 猪飼氏の
 (九) 猪飼氏の
 (十) 猪飼氏の

豈に其れ然らんや。之れを要するに、一成一敗、蓋し君子は取るなからん」と。

(一) 猪飼氏の之れを駁して曰く、「江三位は一世の英雄にして、多智深慮、爲めに能く三方に強敵の處るべきものを洞見し、而して力を一方に専らにして、以て大功を成せり。二二を以て世人の老謀良圖と以爲へるは、信なるかな。今之れを駁して幸と爲す、豈に江三位を知る者ならんや」と。

讀んで惟んみるに、我が洞春公の兵を用ふる、一夜を以て陶賊に克ち、而も尼子氏を滅ぼすには則ち七年を以てす。速かなるべくして速かに、久しうすべくして久しうす、其れ兵の聖なる者か。七年の圖は則ち又兵法の、客を變じて主と爲し、其の民を兼愛するの道にして、正に師を勞し民を勦さざる所以たり。且つ豊太閤の雄にして、而も小早川公の言を用ひ、相撲を取るを得しものは、實に此の策に本づけるなり。當時未だ之れを駁して幸のみと爲せるを聞かざりたり。然らば則ち後生の一は一非は、亦何ぞ損益せん。吾が友坪井竹槿、常に中井生の妄言を憤れり。余又猪飼氏の論を善しとし、而して其の未だ盡さざるを惜しむ。故に併せて之れを文に著す。

(四) 猪飼、
 猪飼氏の

(五) 自ら松籙の詩の後に書す

予の友、(六)來原良三は志かた願ひくして、量ひ安くく、將に往ゆく、俊傑の才を顯はさんとす。而して獨り其の學未だ充たざるを惜しむのみ。謂ふ所の學とは、書を読み古を稽かふるの力に非ざるなり、天下の事體に達し、四海の形勢を籌かにする、是れのみ。方今天下の事、四海の勢、吾れ未だ底止する所を見ざるなり。唯だ某れ未だ底止せず、當に爲すべし所以なり。必ずや一國を正し、而して諸侯を正し、而して朝廷を正し、而して四海を正す。規模先づ己れに定まりて、次に仍なつて之れを施す。是れ吾が謂ふ所の學なり。然るに良三は實に未だ其の學あらざるなり。

去平良三張紙に巾あたりいひつ

るなり。良三の才、盡つくせられて進まざるなり。何ぞ俊傑を之れ望まんや」と。ここに於て、(七)家兄と反復此の義を論ず。家兄は以て異を喜び難きを好むと爲して、大いに

怒る。予因つて此の詩を作る。家兄尚ほ以て然りと爲さず。而して余も亦謂へらく、

良三身を輕んじ意を銳くして一死道に殉じ、以て天地の正氣を冥々の間に持せば、大
事業なしと雖も、固より亦人臣の正義、則ち未だ深くは責むるに足らざるなり、而れ
ども獨り俊傑の望みなきを惜しむのみと。

爾る良三官に就く詩の詩を傳ふ。駿愕痛恨して曰く、「良三其れ心を喪へるか、何ぞ
乃ち斯の詩を作ぬる」と。其の首句に曰く、「操を奉ずる毛生老親の爲めにす」と。

夫れ少節の仕は實に母の爲めにするなり。故に母死するや即ち官を去る。且つ其の時
は固ち明室事なきの際にして、其の官は守令稱ひ易きの職なり。然らば則ち其の喜べ
るも亦宜ならずや。今良三の仕は固より國の爲めにするなり、親の爲めにするに非ざ
るなり。若し果して親の爲めにせば、則ち當今事多きの日、翰筆の職甚だしくは重か
らずと雖も、亦要路の階なり。事多きの日を以て要路の階に進む、其の無復禍敗、固
より測られず、親の爲めにする者の宜しくすべき所に非ざるなり。親に事ふるには誠

を以てし、己れの外に得るものを以て父母の榮と爲さざるなり。躁進の韓愈すら、猶
ほ能く之れを言へり。良三にして行ふ能はずとは、何ぞや。何ぞ「見錯、劉を安んず

帝に仕へ諸侯
を創りて沐室

即ち劉氏を安んぜんとせしが事敗れて一敗に服す

るも親に負くを奈んせん」と謂はざる。

(一) 伊尹退
處して有莘の
野に耕せしを
いふ
(二) 之
呂尚世を避けて
渭川に釣せ
しをいふ
(三) 孟子數
萬に説きしを
いふ

を作す、甚だしいかたし。夫れ士の、道を護ずるは、固より將に朝に登り官に當り、君に致し民に澤せんとすればなり。或は其の遇はざるときは、^(一)華野に耕し、^(二)渭川に釣し、道を郷黨に唱へ、效を身後に期すれども、豈に其の欲する所ならんや。然り而して官途往々清流の揔を招くは他なし、榮利を貪り、富貴に耽り、君に致さず、民に澤せざるが故なり。果して能く君に致し民に澤せば、則ち清流の徒、固より將に稱述慕悦するに之れ暇あらざらんとするなり。而して孰れか之れを揔するを得んや。今良三の清流の揔を以て自ら居るは、則ち其の自ら待つこと知るべきのみ。若し清流の徒、草野に傲睨し、官人を罵詈して、以て笑樂と爲すと謂はば、則ち小人の見にして、良三の宜しく言ふべき所に非ざるなり。但だ君に致し民に澤すること、良藏或は未だ能はずとならば、則ち一死道に殉ずるも亦正義たるを失はざるのみ。何ぞ「他年或は濁流に擲つて去らん」と謂はざる。

其の第四句に至りては、則ち云ふ、「身は是れ月評論外の人」と。士の自暴自棄して直ちにここに至るは、則ち人に非ざるなり。何ぞ「月旦評中第一の人」と謂はざるや。

國制の非、吾れ略ぼ之れを刺すことかくの如し、而して良藏復た完膚なからん。吾れ固より宜しく良藏と絶つべし、而れども未だ忍びざるなり。

(四) 昔の諺
公の公子、彼
の文公

昔の公子(四)諺耳、年四十三にして國を出で、十九歳にして入るを得たり。故に能く天下

の形勢を定め、諸侯の虚實を察かにし、一戰して霸たるを得たり。今の諸侯に未だ其の人あらざるば、則ち責臣下に在り。近古熊澤先生儒前に仕ふるや、年甫(五)めて弱冠な

(五) 儒前考

り。芳烈公將に太い(六)に用ひんとせしも、學未だ足らざるを以て、乃ち遊學を請ひ、七

年を禮とて還る。當時の天下は未だ今日の爲し難くして爲すべきが如からず、而も其

の難く(七)其の計を用ひざることかくの如し。今良藏も亦已に三十なり。其の齡已に先生

に遇く、而して其の學の如き、吾れ未だ知る能はざるなり。噫、何ぞ自ら量らざるや。

人或以此の文を尋して良藏に示さば、良藏笑はんか、嗤(八)らんか、國を改めんか、志を

固まさんか、將た坦然として以て意を爲さざらんか、吾れ良藏と絶つは、宜しくここ

に決すべきなり。近(九)る聞く、良藏人に對して、頗る吾れの官となりて清濁如何を問ふ

と。果して然らば、則ち良藏の志強(十)くして量宏きは、又前日に如かざるなり。

(六) 良藏目
考

野山獄囚名錄跋論

甲寅十月、余羣ありて獄に繋がる。時に余と狂狹（わんけつ）に列する者、凡そ十一人なり。余詳かに之れを問ふに、其の繋がるること久しき者は數十年、近き者も三五年なり。皆曰く、「吾が徒終に當にここに死すべきのみ、復た天目を見るを得ざるなり」と。余乃ち嗟愕して泣下り、自ら已れも亦其の徒たるを悲しむに暇あらざるなり。ここに於て善を講じ道を説き、相與に磨厲して以て天年を殄（を）へんと期す。已にして歲餘、余遽かに思命を蒙り、獄を免されて家に歸り、復び父母を拜し、弟姪を此の世に見るを得たり。然り而して前の十一人の者繋がれて未だ免されざるを以て、食を得ては則ち懷ひ、衣を得ては則ち懷ひ、寒夜懷に當りては則ち懷ひ、晴日庭を歩しては則ち懷ふ。懷ひの心を結ぶや、未だ嘗て一日も釋然たるを得ざるなり。嗟、余の大罪にして猶ほ獄を免ざるを得たり。而るに前の十一人の者、何ぞ獨り得ざる。且つ我れは繋がると雖も、獨り自ら樂しむことあり。而るに前の十一人の者は未だ必ずしも盡くは是れあら

蒙れる者は二人のみ。而して官誥を蒙れる者は或は赦例の誥に入るを得んも、親戚の禁する時の旨に至りては、極天免期なく、痛を抱き憤を含みて以て死せんのみ。最も哀れざるべけんや」と。今悉く前の十一人の名前在繫年數を録し、以て自ら藏す。噫、夫れ人情、著しければ則ち善を思ひ、久しければ則ち改めんことを圖る。世果して仁人あらば、三年五年以上の者、其れ或は情を酌み宜しきを量りて、之れを赦して可たり。然らずんば、吾れの懷ひ、遂に釋然たるを得ざらんのみ。

行年七十六 在獄四十九年 大深虎之允

行年四十八 在獄十九年 弘中勝之進

行年四十三 在獄十六年 岡田一進

行年三十八 在獄九年 井上喜左衛門

行年四十四 在獄九年 河野數馬

行年(三) 在獄八年 粟屋興七

行年四十九 在獄七年 吉村善作

行年五十二

在獄六年

志道又三郎

行年三十九

在獄四年

高須氏寡婦

行年三十六

在獄四年

富永彌兵衛

行年四十四

入獄三次通三年

平川梅太郎

共に十一人

右行年在獄は丙辰の歳を以て之れを言ふ。

(三) 矢之介に與ふ

辱くも拙案中の「十年を出でずして皇天震怒し、大いに罪戾を降さん」の語を問は

れ、幸甚なり。古人天を言ふに、理を以て言ふ者あり。「高々として上に在りと曰ふ

たかれ、^(三)天の下に降^{おち}降し、日監茲に在り」といふが如き、是れたり。民心を以て言ふ

言あり。「人の觀るは我が民の觀るに自^{したが}ひ、天の聽くは我が民の聽くに自^{したが}ふ」といふ

言あり、是れたり。輕し天は高々蒼々として、心なく氣なし、唯だ一理の存するある

(一) 大正
高、明治
介(蘭傳)
(二) 野山獄
文相「浮屋獄
害に復する
書」九月十三
日
「高々として
上に在りと曰
ふたかれ、天
の下に降降し
、日監茲に在
り」といふが
如き、是れ
たり。民心を
以て言ふ言
あり。「人の
觀るは我が民
の觀るに自ひ
、天の聽くは
我が民の聽く
に自ふ」とい
ふ言あり、是
れたり。輕し
天は高々蒼々
として、心なく
氣なし、唯だ
一理の存する
ある

のみ。理は空々張々として、疑なく見なし。唯だこれを民の心に寓するのみ。宋儒曰く、「性は即ち理なり」と、是れなり。故に百祥餘慶とは、九族親睦し百姓昭明の謂なり。百殃餘殃とは、家喪ひ國亡ぶの謂なり。古經に謂ふ所の天なる者は、大略かくの如し。此の外尚ほ之れを僞すなくして僞す、之れを天と謂ひ、罪を歸する所なくして、之れを天に歸する者あり。地震洪水を以て天の怒と僞すに至りては、則ち後世怪妄の説なり。後世怪妄の説を排して、これを古經先王の訓に求めば、則ち所謂天なる者、自ら見えん。

十年を出でずと云へるは、時勢に於て定見あるに非ず。然れども和親一たび成らば則ち土氣安んじ、互市日に盛なれば則ち國力盛れん。地を借りて夷領益々集り、利を嘗みて民心漸く移らん。妖賊間に乗じ、策謀を逞はん。凡て是れ膚皮膚の病に非ず、乃ち膏肓の病なり。且夕の憂に非ず、乃ち年歳の憂なり。故に姑く之れを暫言せしのみ。夫れ膏肓の病、年歳の憂、上に在るの人、深く其の機を知り、而して急に其の轍を改めば、則ち已まん。苟も然ること能はずんば、天下の廣き、人民の衆き、孰れか其の

(一) 安藝の
勤皇御原清を
諷ぜし文は本
卷七三頁參照

眞怒を蒙りて罪戾を降す者なきを保せんや。

（二）
豐前と豊后の稱謂を論ぜしに至りては、其の迂詢に貴評の如し。然れども僕は彼の脚
に對て、深く相諒するものあり。其の論する所を觀るに言々皆實にして、他日必ず徒
死せざる者なり。但だ其の王伯の説は、僕の幕府を輔け國體を正すの見と合はざる如
きものあり。故に此の論を假りて其の意を捫れるのみ。而して彼れ果して復書せんや
否や。ここに於て兄の謂ふ所の迂なる者、又益々誣ひざるなり。不乙。

行昭、字は明卿の説

（三）
作「明卿」

吾れの野山の獄に下るや、青村君先きに已に在り、繫がるること久し。余と相得て、
日夜激論す。已にして余恩命ありて家に歸る。一日書來つて曰く、「子の獄を去るや、
我が君が友を失ふ、譬へば暗の燭を失ひ、濟の舟を喪へるが如し。君が名は行昭、蓋
ぞこれに守し、因つて以て之れを論ふるあり、汝々として日に學ぶを得しめざる」と。
余ここに於て字して明卿と曰ふ。これを周易の管の卦に取るなり。「明、地上に出つ

(一) 易の明
表の卦象。明
「表」はやぶ
れ傷つく意。
即ち賢明の德
が表傷せらる
るの象である。
かかる時は君
子宜しく職に
堪へ貞正を持
たべ」と

るは晉、君子以て自ら明徳を昭かにす」と。蓋し晉の卦たる、下は坤地にして、上は離火なり。故に明、地上に出で、光明盛大の象と爲すなり。今君は陰房に幽囚せられて、天目を見ず、暗と明夷の明、地中に入る者なり、亦何ぞ晉に取る所ならんや。然れども明の出入、陰ありて異り、而も明未だ嘗て歎きざるなり。君子は離上坤下の象を觀て、唯だ自ら明徳を昭かにせんのみ。明徳の昭かなる、光明盛大にして照らさざる所なし、何ぞ其の居所を論ぜんや。是れ以て君の名字と爲すべきなり。

抑々君は昔年五十、幽囚七年、其の明夷も亦甚だし。蓋し未だ嘗て一日も明夷の傷を傷みて而して晉の進むを望むを忘れざるならん。余因つて君の爲めに言はんと欲する所のものあり。晉の初六に曰く、「晉如たり、摧如たり、貞なれば吉、孚とせらるる同きも、吝かなるときは、咎無し」と。説く者曰く、「晉如は升進なり、摧如は抑退なり。始め進むや、或は晉み或は摧く、唯だ貞なれば則ち吉なり。然れども内に在りて始め進めば、固より遽かに外人に孚とせらるる同し。唯だ當に寛裕にして自ら安んずべく、進を求むるに急たるなくんば、則ち咎なきを得ん」と。其の六二に曰く、

「譬如たり愁如たり、貞なれば吉、茲この介けいなる福を受く」と。説く者曰く、「六二は内に在り。外に應援な無し、故に進むに於て愁ふ。然れども貞なれば則ち吉なり、遂に當きに介いなる福を受くべきのみ」と。君果して能く裕を以て貞を行ひ、以て福を受くるに至らば、則ち六三の「蒙、允よととし、悔亡ぶ」ること、俟まつべきなり。是れ亦明德を昭かにするの驗しんなり。余の君の爲めに言はんと欲する所かくの如し。而して又退いて君の福を受け悔亡ぶるを俟たんのみ。遂に書して説と爲す。

七生説

天の茫々たる、一理ありて存し、父子祖孫の綿々たる、一氣ありて屬つく。人の生るるや、斯の理を資ありて以て心と爲し、斯の氣を稟うけて以て體と爲す。體は私なり、心は公なり。私を後あとして公に殉しんふ者を大人と爲し、公を役して私に殉しんふ者を小人と爲す。故に小人は體滅し氣竭きけつくるときは、則ち腐爛ふらん潰敗くわいはいして復た收むべからず。君子は心、親と通ず、體滅し氣竭くるとも、而も理は獨り古今に亙り天壤を窮め、未だ嘗て暫く

も歌まざるなり。

余聞く、贈正三位楠公の死するや、其の弟正季を頼みて曰く、「死して何をか爲す」。曰く、「願はくは七たび人間に生れて、以て國賊を滅さん」。公欣然として曰く、「先づ吾が心を獲たり」とて、搦刺して死せりと。噫、是れ深く理氣の際に見ることあるか。是の時に當り、正行・正朝の諸子は則ち理氣並び屬く者なり。新田・菊池の諸族は氣離れて理通ずる者なり。是れに由りて之れを言はば、楠公兄弟は徒に七生のみならず、初めより未だ嘗て死まざるなり。是れより其の後、忠孝節義の人、楠公を觀て興起せざる者なければ、則ち楠公の後、復た楠公を生ずる者、固より計り數ふべからざるなり。何ぞ獨り七たびのみならんや。

余嘗て東に遊び三たび湊川を經、楠公の墓を拜し、涕淚禁ぜず。其の碑陰に、明の徵士朱生の文を勒するを觀るに及んで、則ち亦涙を下す。噫、余の楠公に於ける、骨肉父子の恩あるに非ず、師友交遊の親あるに非ず。自ら其の涙の由る所を知らざるなり。朱生に至りては則ち海外の人、反つて楠公を悲しむ。而して吾れ亦朱生を悲しむ、最

も誹りたり。思いて理氣の説を得たり。乃ち知る、楠公・朱生及び余平育、皆斯の理を導いて以て心と爲す。則ち氣風かずと雖も、而も心は則ち通ず。是れ派の禁をざる所以なり。余平育、聖賢の心を育し忠孝の志を立て、國威を張り海賊を滅ぼすを以て、寧ろに己が任と爲し、一跌再興、不忠不孝の人となる、復た面目の世人に見ゆるなし。然れども斯の心已に楠公諸人と、斯の理を同じうす。安んぞ氣憤に隨つて府制潰散するを得んや。必ずや後の人をして亦余を觀て興起せしめ、七生に至りて、而る後可と爲さんのみ。噫、是れ我れに在り。七生説を作る。

續二十一回猛士の説

余前に二十一回猛士の説を著し、又三餘・七生の説を撰す。幽園の室、半間に膝を容れ、右に「三餘讀書」の四字を題し、左に「七生識賊」の四字を題す。日夜優悠として其の間に坐臥す。家人交々讀みて曰く、「今必みに三を以て七に乘すれば、亦二十一を爲すや」と。余躍然として曰く、「善し、吾が心を獲たり」と。因つて其の説

れを得ば、爲すべからざるの時なく、爲すべからざるの事なし。何ぞ死生窮達を之れ問ふに足らんや。

（六） 浩々歌

馬子才

（六）孔子と孟子。「何愁蹙蹙傷丘刺」と詩中にあり

（七）屈原と

（八）「紅光入酒春風和」とあり

（六）丘刺を傷まんの句、大いに是れ理あり。余の見と合す。枉死空穢の二句は、浮淺厭ふべし。是れ察せざるべからざるなり。

（八）落句味ふべし。前面の喜終樂弔、皆春風和氣の中より出づ。

我れあれば則ち天地萬物あり、我れなくんば則ち天地萬物なし。天地萬物は我れに待つありて、我れは天地萬物に待つなし。我れ喜べば則ち天下治まり、我れ怒れば則ち天下亂る。自ら樂しむば人を弔する所以にして、人を弔するは自ら樂しむ所以なり。大丈夫の抱負かくの如し。聲々乎として、天地萬物の能く羈する所に非ざるなり。

詩を説くに、之れを深きに求めば、則ち聲に失し、之れを淺きに求めば、則ち粗に失す。粗も不可なり、聲も不可なり。獨り其の氣象を得て之れを玩ぶを可と爲すのみ。偶々二歌を讀みて、其の氣象を喜ぶ。因つて手録して批評を加ふ。然れども是

れ固より至言に非ず。且つ古今に求めて、獨り二歌をのみ獲たるに非ざるなり。或
言はて紅りと謂はば、則ち亦淺粗深隱の失にして、氣象を得たるに非ざるなり。

嗚呼、藝の術も亦難きかな。議論の縝密たるは、大いに是れ佳事なり。然れども或
は東縛拘囚られて自ら救く能はざる者あらん。才氣の俊發たるも、亦自ら美質な
り。然れども或は浮躁淺露にして實得あるなき者あらん。二歌は皆氣を以て勝り、
以て東縛を解き而して拘囚を免かるべし。而れども切に浮躁淺露の者をして目を寓
するを得しむべからず。抑々浮躁淺露は眞の才氣に非ざるなり。東縛拘囚は眞の議
論に非ざるなり。眞の才氣は眞の議論を生じ、眞の議論は眞の才氣を成す。是れ豪
傑の士なり。果して然らば、則ち二歌の如き、讀むも可なり、讀まざるも可なり。

野山獄記

野山獄は、舊、諸士の罪ある者を幽する處なり。元と野山氏の廢宅たり。故に今に至
るまで野山の宅と稱す。正保二年、物頭野山清右衛門これに居り。九月十七日甲夜、

東國の士岩倉孫兵衛、酒に酩酊ひて野山を襲ひ殺す。木梨喜左衛門、北隣より馳せ救ふ、
及ばず。事聞え、官乃ち野山の宅に就いて、岩倉を幽し、尋いで罪決して首を斬る。
ここに於て、岩倉・野山二氏皆絶ゆ。後二氏の宅を収めて獄と爲せりと云ふ。後四十
年、雄寶寺となり、長井治鶴右衛門の子興次郎、亦茲に繋がる。見今庶人を幽する
に岩倉獄を以てし、諸士を幽するに野山獄を以てす、其の來（ヨリ）蓋し亦久し。

野山獄は、内分ちて數局と爲し、局ごとに一囚を別かつ。局數、古は考ふべからず、
後六局と爲し、十局と爲す。天保十一年、定めて南北兩房と爲し、每房六局あり。北
房の後に斬首割腹の場あり。享保而還、諸士の斬首割腹せし者、凡そ二十八人なり。

獄を司る者を、野山の宅番と謂ふ。今福川氏之れを爲すこと四世なり。福川氏の前に、
南山崎氏あり、渡邊氏あり、渡邊氏の宅番たりしは、貞享・元祿の間に在り。後長井
を襲きし時、既に數半のみ。岩倉獄は則ち檢斷頭を以て之れを司らしむ。兩割或は
功・贖あらば、洗に之れを裁可す。福川氏、今檢斷頭を兼ね、兩獄を司ると云ふ。

余野山獄に囚せらるること二年、徧くこれを獄考に問ふ、獄考其の詳を述ぶ能はず。

(一) 夢の醒

大澤虎之元なる者あり、行年七八十、在獄五十年、頗る傳聞に得しものを有せり。岩倉の野山を較せし事は、概ね木梨家説・巴城故實錄に見ゆ。^(二)然れども記録備はらず、以て信を敢り難し。余和漢の史書を讀むに、古今の獄舎は多く罪を待ち鞠を受くる處たり。獨り野山獄は則ち罪定まりて而る後之れを囚し、又親戚の合議上請して、廢して之れを囚するあり。ここを以て幽囚四五十年にして出づるを得ず、憂を吞みて以て死する者、比々皆是れなり。而して其の幸にして脱するを得るは、則ち十に僅かに一二のみ。之れを要するに、囚獄の事は世の賤しむ所、故を以て論及する者あるなしと云ふ。

(三) 坪井氏に與ふる書

(二) 坪井九右衛門、新山と號す。東京、江戸方御用係

罪人寅二再拜。僕大罪の餘、固より自ら繫死を分とす。圖らざりき、客贖特恩あり、獄を出で病を家に養ふを得たる。莫大の德、俯仰報いる所を知らざるなり。已にして議、實は座下より出でたるを審かにするや、感激已まず。噫、僕曾て一面の座下に識

(三) 先久間
桑山、姓は平
氏、名は久間
ふ(開仿)

あるるなし、而も座下何ぞ管轄けんこくの厚きや。豈に僕の罪を惡みて、僕の志を哀れめるか。畢して然らば、則ち僕の知己何を以てかこれに尙なほへん。僕已に座下の知を蒙る、因つて又竊かに告訴する所あり。座下其の知を恃たもむを咎とがむることなくして、聽納きやくを辱かたじけなうせば、幸甚なり。

僕(三)の兩子傳子明は天下の士なり、一たび僕の事に坐して、永く世の棄物となる。蓋し天下僕に切齒きしつせざるはなからん。而して僕天下の爲めに之れを恥ぢ、又天下の爲めに之れを惜しむ。僕は側微わがたりと雖も、亦本藩の民なり。本藩の民を以て天下の士を害す、願ふに亦本藩の恥なり。然れども事已に往けり、千恥萬惜すとも、爲すべきものなし、獨り座下の善計を望まんのみ。僕切に願はくは、藩議して幕府に懇請し、稍子明の禁を緩うし、四方の從違及び書信の往復を許さるるを得んことを。則ち僕獨り天下に對あるのみに非ず、本藩前日の恥、適々以て今日の美を爲すに足らん。凡そ事、幕府及び他藩に關係するものは、俗吏の軟手畏避して肯あへて治せざる所なり。況や僕と子明との獄、俗吏恒らざるなし。幕府輒輒ふんぜんに従つて斬斬ふんぜんを免がせしむ。然らば則ち

座下に非ずんば、僕孰れにか其の善計を望まんや。

予爾今年四十六、學富み力足り、其の天下の用たる、正に其の秋なり。今にして顧みずんば、老死將に至らんとす。二十年の後、復た今日に非ざるなり、豈に惜しまざるべけんや。僕の如きは則ち予明より少きこと二十年。二十年の力を以て書を読み學を成やし、用を他日に待つとも、未だ晚しと爲さざるなり。則ち其の過從を辭し往復を絶つとも、深く惜しむに足らざるなり。然れども幸にして例へば禁を緩うせられ、同志に從つて切嗣を加へ、孤陋の謗を少減するを得ば、事更に便と爲さん、是れ望外に在るなり。

予爾は、先きに已に死せり。而して葬せず墳せず、僕深く之を憐む、亦因つて略ぼ葬祭を廢すを得、思枯骨に望ばば、僕の幸尤も大たり。僕向に家兄に因つて、野山の園奴を以て請を寫す、今重ねて斯の請あり。是れ皆僕の係念して日夜忘るる能はざる所、而して僕座下に非ずんば、告訴すべき者なし。唯だ座下其の驛數するを咎むるなくんば、幸甚なり。寅二再拜。

寶藤生の文を評す

加藤澤正論

皇太閤無事の條を讀んで、無罪の國を供つと。

評、皇太閤は天網のす、目は一丁（一丁）なくして、其の爲す所、事々習俗の表に出で、神龍

の道に適合せり。夫れ我が神州支國の營は、斷頭連き者（一）は六十綱（六十綱）を懸けて之を引

く、是れ其の富なり。ここを以て仲哀は天子を以て、神功は皇后を以て、後者は

皇子を以て、皆征伐の役を觀らしたまひ、乃ち海外萬里に至りて、畏懼したまふ所

なし。降つて越路に至り、蝦夷地將に失し、三韓漸く驕る。是れより國體日に（二）弱れ

目に墮つ。吉に説するの士、雖れか慨然たらざらん。而して豊公は或は未だ深く古

重を究めず、其の偏る所のことは、是利氏の事のみ。是利氏拒を異域に轉す、國體

就（三）此れこれに加へん。而して豊公も亦未だ深く始末を察かにせず、獨り調へらく、

一終始胡人論す、而るに今は調ち絶えたり、是れ彼れ我れを輕んずればなり」と。

因つて韓に命じて明をして通市すること舊の如くならしめんと欲す。而るに韓吾れに聽かず。是れ韓の罪なり、是れ師の名なり。明又來つて韓を救ひければ則ち之れを撃つ。是れ應兵のみ。而して又其の韓に黨するを惡むなり。近世の賴山陽は卓識の士たり。反つて謂へらく、「征韓は黠武たり」と。吾れ常に其の謂を曉らず。今見も亦云々す。豈に別に其の説あるか、抑々山陽に左袒するか。且つ今天下の勢は、何如なる時ぞや。西夷稱する所の亞細亞なる者は、半ばは其の歐墨の蠶食する所となる。而も尙ほ憂ふるを知らず、方且に宴安是れ耽り、太閤の舉を以て咎と爲す。而して其の神聖の道に合するを知らず。讀書の士、固よりかくの如くならんや。太閤の臣、皆小才淺識、其の美を承順する能はず。秀家の從諫、長政の審諒、均しく言ふに足る者なし、獨り一清正公稍勝れるのみ。余獨り太閤の時に遇はざりしをしを悲むなり。

殷の亡ぶや、微子之れを去り、箕子之れが奴となると。

評、微子は國を去つて周の封を受け、箕子は周の爲めに洪範を陳ぶ、皆人臣の義に非

(一) 宇多
(二) 延和

(一) 一國を
治むるの才
をいふ。この
時の箕子の言
史記にして傳
ふ、餘も蓋
洪範の篇とな
る

(四) 召忽と
を奉じて齊に
人らんとし、
桓公と戦ひて
死す。召忽は
仲は親友無以
て死す。

ず。況や宇案の親にして、此の特達とくたつの事を爲すをや。之れを比干ひこの諫死に比し、謂
ひて三仁と爲す、可ならんや。孔子嘗て管仲(四)を揚げて、召忽を抑へ、匹夫の諒と爲
す。漢士の聖人君臣の義、曉さるべからざるもの多し。神州君臣の義は萬國に卓越す。
外國の書を讀む者は、先づ神州の體を知りて、而る後可なり。清正の豐氏に於ける、
勢に迫られて道を盡さざるものあり。然れども石田・大野に劫誘せられて、以て豐
氏に忠なる者と爲すに就けば、萬々優れりと爲す。卓乎として議すべきなき者は、
其れ唯だ片桐且元か。

古語する所の二事は、後學生の持論にして、曉著に雜出す。今言はんと欲する所を
盡す能はず、然れども大意かくの如し。願はくは更に辨駁して、致を賜はらば幸甚
なり。

天下は一人の天下に非ざるの説

註、天下は一人の天下に非ずとは、是れ支那人の語なり。支那は則ち然り、神州に在

(二七) 殷の湯
武王は殷を伐りて
天下を平らげし
其の功は
無量なり

(二八) 魯の宣公
宣公は魯を治りて
天下を平らげし
其の功は
無量なり

りては、難きとして然らざるものあり。讓んで按ずるに、我が大八洲は、皇祖聖王の所として、萬世の子孫に傳へたまひ、天壤と窮りなき者、他人に觀經すべきに非ざるなり。其の一人の天下たること亦明かなり。請ふ必無の事を談れて、以て其の眞に然らざるを明かにせん。本邦の帝皇は皇統の座あらんとも、億兆の民は唯だ當に首領を敬慕して、觀に伏し號哭して、仰いで天子の盛情を祈るべきのみ。不幸にして天子薨終し、盡く億兆を誅したまはば、四海の餘民、復た才還あるなし、而して神州に亡ぶ。若し尙ほ一民の存するものあらば、又關に詣りて死せんのみ。是れ神州の民なり。或は關に詣りて死せずんば、則ち神州の民に非ざるなり。是の時に當り、海寇の如き昔武王の舉に出づるは、其の心仁なりと雖も、其の爲論なりと雖も、支那人に非ずんば則ち天竺、歐羅巴人に非ずんば則ち利漢、決して神州人に非ざるなり。而して神州の民、尙ほ何ぞれ之れに與せんや。

下邦國に至りても亦然り。今防長兩國は一人の兩國なり。一人にして在らば、則ち兩國在り、一人にして亡くば、則ち兩國亡し。不幸にして一人、其の人に非ずんば、

則ち兩國の民當に皆誅死すべし。若し或は死せず、去つて他國に往くは、兩國の民に非ざるなり、山中に隠棲するは、兩國の民に非ざるなり。萬一支那の所謂君を誅し具を弔するがとき者あらば、虎狼豺犀、決して人類に非ざるなり。故に曰く、「天下は一人の天下なり」と。而して其の一人の天下に非ずと云ふは、特だ支那人の謂のみ。然りと雖も普天率土の民、皆天下を以て己が任と爲し、死を盡して以て天子に仕へ、貴賤尊卑を以て之れが隔限を爲さず、是れ則ち神州の道なり。是れをしも或は以て一人の天下に非ずと爲さんや。

久坂生の文を評す

誠實まこと浮沈うしんにして、思慮粗淺、至誠中よりするの言に非ず。世の懷既を裝ひ氣節きせつを扮よほひて、以て名利を要もとむる者と、何ぞ異らん。僕深く此の種の文を惡み、最も此の種の人を惡む。僕請ふ粗淺之れを言はん、兄幸に精思せよ。

凡そ國勢を論ずる者は、上は則ち神后、下は則ち豐公にして可なり。時宗は季世に生

れ、急變を慮（一）つて、一着偶々中（二）る、固より亦一時の傑なり。然れども以て國勢を論ずるに足らざるなり。使を斬るの舉、これを癸丑（三）に施すは則ち可なり、これを甲寅に施すは則ち晚し、而れども尙ほ或は及ぶべし。乙卯を過ぎて今日に至りては、則ち晚きの又晚きなり。大抵事機の去來するは、影の如く響の如し。往昔の死例を執りて、以て今日の活變を制せんと欲す、難きかた。謂ふ所の思慮の粗淺とは是れなり。天下爲すべからざるの地なく、爲すべからざるの身なし。但だ事を論ずるには、當に己れの地、己れの身より見を起すべし、乃ち着實と爲す。故に身將軍の地に居らば、當に將軍より起すべし。身大名の地に居らば、當に大名より起すべし。百姓は百姓より起し、乞食は乞食より起す、豈に地を離れ身を離れて、之れを論ぜんや。今吾兄は醫者たり、當に醫者より起すべし。寅二は囚徒なり、當に囚徒より起すべし。必ずや利害心に絶ち、死生念に忘れ、國のみ、君のみ、父のみ。家と身とを忘れ、然る後家族之れに化し、朋友之れに化し、鄉黨之れに化し、上は君に孚（四）とせられ、下は民に信ぜらる。ここに於てか、將軍爲すべきなり、大名爲すべきなり、百姓乞食も爲すべき

たり。乃ち暫者國徒に至るまで、爲すべからざる者あるなし。是れを之れ論ぜずして、傲然天下の大計を以て言を爲す、曰、焦げ唇爛るとも、吾れ其の裨益あるを知らざるなり。謂ふ所の議論の浮泛とは是れなり。且つ兄が身の任とする所、乃馬なるか、刀槍なるか、舟船なるか、銃砲なるか。抑々將たらんか、使たらんか。神后の時に遇はば、能く其内たらんか。豊公の時に遇はば、能く孝直たらんか、清正たらんか。家族別支郷黨の兄に従つて節に死さんと欲する者、計幾人ありや。兄の爲めに力を出さんと欲する者、計幾人ありや。兄を助けて財を輸さんと欲する者、計幾人ありや。聖賢の貴が所は、議論に在らずして、事業に在り。多言を費すことなく、積誠之れを蓄へよ。

同因富永有隣の手簡に跋す

是れ余が同獄の知己富永徳有隣の手簡なり。有隣の精誠かくの如し、而も猶ほ識者に諒せられず。天地の間、未白地を蝕し、白虹日を貫けども、復た秦昭燕丹の疑を釋く

(一) 燕の太
子、八歳に
満ちんことを
白く馬角生ず
るを以て、

なきなり。謂ち是れ馬角生ずとも而も太子尙ほ拘せられ、^(二)胝羊乳すとも而も子駒還らざるなり。況や^(一)他人肌^(二)らるゝと雖も、田光死すと雖も、亦何ぞ荆璦と刺客とに益あらんや。侍妾排^(一)なして^(二)讒者^(三)に聞ふ。丙辰六月十三日歿す。時に余感ずる所あり、自ら一室に囚ひ、針黹もて風を寒ぎ、^(四)憂^(五)を祖せず。二十一回猛士。

筆記一則

(一) 唐の
太宗の
貞元五年、
陸贄上奏す。
其の略に曰く、
「人を待する
には必ず朝に
於てし、
人を罰する
には必ず市に
於てす。惟ふに
衆の親ず、
事の彰はれざるを
恐るればたり。
貴上に之れを行ひて
愧づる心なく、
庶民之れを聽きて
疑議なし。賞を受けては、
之れに
寛んじて情づる色なく、
罰に當りては、
之れに居りて怨言なし。
此れ聖王の典章を
宣明し、天下と公共する
所以のものなり。凡そ是れ
譴訴の事は多くは信實の言に非ず、
中傷に利あり、公辯に懼る。
或は云ふ、『歲月已に久しく、
究尋すべからず』と。或は云ふ、『
事體妨げあり、須らく隱忍を爲すべし』と。或は云ふ、『
惡迹未だ露はれず、

唐の太宗の貞元五年、^(五)陸贄上奏す。其の略に曰く、「人を待するには必ず朝に於てし、人を罰するには必ず市に於てす。惟ふに衆の親ず、事の彰はれざるを恐るればたり。貴上に之れを行ひて愧づる心なく、庶民之れを聽きて疑議なし。賞を受けては、之れに寛んじて情づる色なく、罰に當りては、之れに居りて怨言なし。此れ聖王の典章を宣明し、天下と公共する所以のものなり。凡そ是れ譴訴の事は多くは信實の言に非ず、中傷に利あり、公辯に懼る。或は云ふ、『歲月已に久しく、究尋すべからず』と。或は云ふ、『事體妨げあり、須らく隱忍を爲すべし』と。或は云ふ、『惡迹未だ露はれず、

右乙卯六月二十日、余野山の獄に在り、有隣（たより）と偶爾談及す。頃（ころ）ろ感ずる所あり、遂に之れを文に著はす。丙辰六月。

又記す

(一) 漢の落陽の人、女帝

なし大中大夫

漢の落陽の人、女帝

余有隣と、前に論ずる所あり、已にこれを文に著はす。頃（ころ）ろ又賈誼（かぎ）の策を読む。言あり、曰く、「古は大臣不廢に坐して廢せらるる者あるときは、不廢と謂はずして、簞食（さんじき）簞水（さんすい）はすと曰ふ。汚穢（けつ）淫亂（いんらん）にして、男女別なきに坐する者は、汚穢と曰ずして、帷（い）帳（てい）影（えい）すすと曰ふ。罷軟（ひなん）にして任に勝へざるに坐する者は、罷軟と曰ずして、下官（げくわん）下職（げしやく）と曰ふ。故に大臣を貴びて、定（さだ）す其の辜（が）あるも、猶ほ未だ斥然として正して以て之れを呼ばざるなり。尚ほ遷就して之れを爲すは諱むなり」と。是れ蓋し古今奸吏の言りて、以て口に藉（し）く所のみ。然れども、誼固より曰く、「定ず其の辜あるも、誼味矯諱するの謂に非ざるなり。特（た）だ遷就して正呼せずと曰ふのみ。全く其の罪狀を没して擧げざるに非ざるなり。何ぞ後世謂ふべからざるの隱罪の如きものあらんや」と。賦文仲曰く、「刑は五のみ、隱なる者あるなし、乃ち諱むなり。」

(一) 漢の落陽の人、女帝

巖山嶺々たり、先考の宅。鹽水漆々たり、先考の迹。六十八稔、言行擢ぶなし。祿を増し、進められ、世々其の澤を蒙る。維の子維の孫、これを刻石に視よ。

孤子博、泣血して立つ。

中谷正亮に與へて喪を弔する書

（一）中谷忠
君は、先考の
子孫に、
中谷正亮に與へて喪を弔する書

君に年若く久しく病んで牀に在り、僕之れを聞き、憂念して措かず、書を呈して起居を諷はんと欲す。而るに身幽囚に在り、事、意の如くなるを得ず。然れども猶ほ誨へらく、維君平素憂鬱たり。今病めりと雖も、萬深慮するに足るものあるなし。數年の後、僕幸に少しく歳讀を紆べらるを得ば、或は左右に私すべけん。嗚らざりき、泣き巴んで世を契て、幽明頗に隔たらんとは。驚き定まつて方に泣く、泣き巴んで更に恨む。僕、尊君に於て愛を蒙ること特に深く、足下に於て交を締ぶこと最も密なり。今遽かに大故を聞く、安んぞ幽囚の故を以て、一言の弔なかるべけんや。ここに於て斷然弔書を草し、寧ろ喪に居るの節に及ぶ。願はくは幸に察を加へられよ。

夫れ三年の喪は、漢土古聖の所謂通喪なり。然れども我が大寶令に自へば、父母の喪は三月のみ。近時に至りては、乃ち五旬を以て期と爲す。彼の日を以て月に易ふと云ふものと、復た大異なし。是れ孝子の痛恨至極と爲す所以なり。然れども國制時俗は難、改易すべからず。則ち孝子の已むを得ざるの情は、特だ心割を持して以て哀慕を發することあるのみ。記に曰く、「喪に居て、未だ葬らざるときは、葬禮を讀み、既に葬らば、祭禮を讀む」と。夫れ要に居て親を思ふは、固より人子の本心なり。然れども國教の之れが防を爲すなくんば、則ち期の已に久しき、物欲萌生し、其の本心を蔽ふもの、亦其の常情なり。ここを以て喪に居るときは、必ず禮を讀む。苟も禮を讀まば、以て本心を存して物欲を減すべきなり。尊君尚德並に隆く、言行卓々として、後に傳へ人に效すべきもの多し。足下喪に居て哭踊之餘、家庭の遺訓を追憶し、定省の往事を回顧し、其の本末を尋究し、其の源委を思索して、輯錄して編を成し、日に以て自ら觀るときは、則ち亦禮を讀むの意のみ。而して餘幅流れて僕輩に至らば、僕輩は少しく前恨を慰むるものあらん。由鹿素行の枕地記二冊附往す、時を以て一讀

し、其の用意を觀られよ。書に臨みて涙を揮ひ、萬々盡さず。

(二)
治心氣齋先生に與ふる書

向に家兄伯氏に囑し、賤著講孟割記を見んことを求めらる、奮激何ぞ勝へん。僕小少にして門下に親炙し、片言隻語、未だ嘗て正を先生に取らざるはあらず、先生も亦傾倒して送すなし。五六年來、事に因りて素居し、朝夕繼ぎて見るを得ず、嘲望當に饒渴の如きあり。今乃ち高幅を蒙る、奮激何ぞ已むを得んや。賤著、僕これを心に取りて、これを話に出し、因つて従つて之れを録す。初めより未だ嘗て深く思慮を経ず、固より以て真正を請ふに足るものなし。然れども私かに心自ら謂へらく、是れ皆理の當然、勢の必至にして、未だ敢へて高奇に趨らず、未だ敢へて卑猥に陥らず、ここを以て敢へて誇りて以て美と爲さず、敢へて謙して以て醜と爲さずと。僕の自ら處ることかくの如し。亦曾て是れを以て人に示せしに、人或は以て是と爲し、或は以て非と爲す。一非一是、未だ僕の心に當るものあらざるなり。伏して願はくは先生之れを視

治心氣齋先生に與ふる書
第二卷片貼

のれま、暴して道を益するか、暴して道を害するか。道を益せば、是れ傳ふべきなり。道を害せば、是れ絶つべきなり。(四) 詞に曰く、「他人人心あり、予れ之れを付度す」と。噫、僕が五六十年の心、幸に付度を蒙れ、従つて是非を加へられれば、僕誠に盛衰美談を得るに踰ゆるあり。而して賤者の傳絶も亦ここに決せん。不宣。

久坂玄瑞に復する書

尙に無書を辱うす、宜しく疾速に答を致すべくして、之れを緩うせるは、敢へて慢りおこたしに非ざるなり。是下轉訛にして、未だ嘗て深思せず、僕の謂ふ所の違かに憤激平屈の言を爲す、是れ自舌の濁く喙す所に非ざるなり。然れども今已に月餘日、足下の思慮は熟しならん、因つて嘗試に一言せん。

四清の學はこれを其實に蘊すべくして、これを今日に熟すべからず。是下の以て執すべしと爲せるは、論勢を察せず、事機を審かにせざればなり。今の天下は即ち古の天下たり。神功・聖國、古に能く之れを爲したり、今にして爲すべきなからんや。是下

(一)
二 米・第

の以て爲すべからずと爲すは、大志を棄てて雄略を忘るればなり。凡そ英雄豪傑の、
事を天下に立て、謀を萬世に貽すや、必ず先づ其の志を大にし、其の略を雄にし、時
勢を察し、事機を察かにして、先後緩急、先づ之れを内に定め、操縮張弛、徐ろに之
れを外に圖す。今や徳川氏、已に二粵(一)と和親したれば我れより經つべきに非ず。我れ
より之れを絶たば、是れ自ら其の信義を失ふなり。今の計たる、疆域を護み條約を嚴
にして、以て二粵を親睦し、間に乗じて蝦夷を撃き琉球を收め、朝鮮を取り滿洲を拉
き、支那を併し印度に臨みて、以て進取の勢を張り、以て退守の基を固めて、神功の
力を集めたまはざりし所を遂げ、戦國の未だ果さざりし所を果すに若かざるなり。誠
に驚くかゝの如くならば、二粵は唯だ我が驅使する所のままにして、則ち前日の無禮
の罪は、之れを責むるも可なり、之れを宥すも可なり。何ぞ必ずしも置きたる時宗に
倣ひて以て虜使を斬り、而る後に快と爲さんや。

然りと雖も、是れ幕府の任なり、諸侯の事なり。吾が徒の能く辨ずる所に非ざるなり。
吾が徒にして之れを言はば、宗廟虛譚、慷慨を發よほひ、氣節を拊たはふの爲のみ。聖賢の、

辭を終めて誠を立つる者とは聞あり。^{へだて}足下は一醫生にして、而も天下の大計を言ふ、
以て其の富倫に非ざるを觀るに足る。而して僕引いて之れを道に進めんと欲す、故に
前未復すること彼れの如し。足下察せずして、遽かに以て其の樽俎を越ゆるを咎む
と爲す。殊に僕が望みを足下に有するは、正に其の能く越ゆることに在るを知らずし
て、是下乃ち敢へて越えず、徒らに坐して之れを言ふのみ。是れ僕の大いに惜しむ所
なり。足下の書、滔々千言、亦博なり。一事として躬行に出づるものなく、一語とし
て空言に非ざるはなし。而も其の自ら謂ひて曰く、「憤激の餘、之れを心に發して之
れを紙に書す」と。是れ則ち快々鬱々として、胸迫り心結ばれ、已むことを得ずして
疾り書ぐるなり。誠に哀れむべきのみ。今一たび足下の爲めに其の胸を瀉き、其の心
を廣くし、盡く其の空言の病を去り、これを躬行の域に歸せしめんと欲す。足下幸に
敬しみて之れを聴け。

夫れ道に汚穢あり、^(三)時に否塞あり、位に尊卑あり、德に大小あり。大德尊位に居り、
小德卑位に居るときは、則ち時泰にして道隆なり。否すんば則ち否す。是れ天地の常

(二) 天地の

形、古今の通勢にして、何ぞ深く怪しむに足らん。然れども人兩間に生れて、資性稟賦、萬物と異れば、則ち常に綱常名分を以て己が責と爲し、天下後世を以て己が任と爲すべし。身より家に達し、國より天下に達す。身より子に傳へ孫に傳へ、曾玄に傳へ、聖^{（一）}仍に傳ふ。達せざる所なく、傳はらざる所なし。達の廣狹は、行の厚薄を視し、傳の久近は、志の渾深を視す。心を天地に立て、命を生民に立て、往聖を聽いて萬世を聞く。是下誠に能く力をここに用ひ、食息生臥、語默動靜、造次もここに於てし、^{（二）}關^{（三）}濬もここに於てせば、其れ亦躬行の輕んずべからず、空言の易くすべからざるを知るあらみのみ。孟子言へるあり、「人の其の言を易くするは、責なきのみ」と。人苟も自ら責め自ら任せば、則ち其の言豈に易くするを得んや。然りと雖も、言、行を顧みざる者は、孔孟の得て之れを脱せんと欲する所なり。足下能く之れを言ふ、天下其れ必ず之れを聽する者あらん。^{（四）}蕭^{（五）}復す。

（一） 古今は
（二） 關濬は
（三） 孟子は
（四） 蕭復は
（五） 蕭復は

良三に與ふ

ず、凡そ其のかくの如き者、奴隷婦女に至るまで、靡然として風を成せりと。事國應に違す。願、講して師をして遍く法を封内に説かしむ。封内漸く化せり。今茲丙辰八月、本山特に命じて師を徵す。蓋し其の宗門に功あるを以て、遍くこれを天下に施さんと欲するなり。

(一) 大寶令
の中の僧尼令

世に拘備あり、之れを拘して曰く、「凡そ僧尼の兵書を習讀し、語國家に及ぶを得ざるは、令に明文あり。今清狂の行事は、酷だ此の禁を犯すものあり。是れ王法の必ず罰する所なり」と。余請へらく、然らず、令の禁する所は、禪・律の諸宗なり。今師は淨土眞宗なり。淨土眞宗には君父あり妻孥あり。所謂世を捨てし人と同じからず。況や近世武家を以て僧尼を管し、宗門を以て妖教を距くるをや。則ち師の爲す所は、國より其の職なり。且つ士農工商と僧尼とは、均しく王臣なり。王臣王事に勤むるには、各々其の力の能く任ふる所を視、力能く之れに任へば、爲して不可なし。今邊陲難多く、帷帳稀少なし。凡そ王臣たる者、將に焚を救ひ、溺を援くるに暇あらざらんし。火を失するの家、何ぞ常職に拘はるを得んや。嫂溺れて將に沒せんとするに

(二) 曲禮に
「男女は親族
手づから手をとるを非禮とす、緩弱するは非常危殆の場合宜しく權宜の處置あるべきなり」とある。この例話左子
の例話左子

(二)

何ぞ之れを操くるに手を以てするを咎めんや。而も拘儒は喪心して、痛痒を知らず、
覆つて師を以て罪と爲す、誠に憫むべきのみと。然れども拘儒の論も、亦由來する所
あり、寧せざるべからざるなり。然しく惟んみるに、天祖統を垂れ、天孫繼統し
たまひて、神武に至り、神州の基成れり。至治千七八百年にして、事勢始めて變じ、
天下大いに亂る。四百餘年にして、干戈始めて息み、天下事なきこと二百餘年なり。
前千七八百年は、小亂なきに非ざれども、而も概して之れを至治と謂ふは、權、朝
廷に在ればなり。後の六百餘年は、大治なきに非ざれども、而も之れを至治と謂ふを
得ざるは、權、朝廷を去ればなり。有志の士、ここに感ずるあり、朝權を牧復し、至
治を圖致せんと欲す。而れども謀慮長からず、積累漸むことなく、事機を察かにせず、
時勢を察せず、萬たしきは朝廷をして罪を巨竈に獲しむるに至る。ここに於てか、世
に阿るの論、眞を識ふるの説、仁義を立案し、確乎として其れ抜くべからざるなり。
是れ亦拘儒の口に藉く所以なり。

吾れ退いて治亂の由を權ふるに、始め天下の事、一言にして以て斷すべしと信じたり。

管子言へるあり、一人々其の親を親とし、其の長を長とせば、天下平かなり」と。是の故に朝廷權を失するは、罪攝關將軍に在り。攝關權を専らにするは、罪其の官屬に在り。將軍權を執むは、罪其の臣僕に在り。何ぞや、臣屬固より規諫の道を失して、道を失むるの罪あればなり。是れに由りて之れを言はば、今の天下の貴賤尊卑、智愚賢不肖、一として道を失して罪ある人に非ざるはたきなり。誠に人々をして各々其の道を守り、而して其の罪に過ぎからしめば、則ち善たる者は以て其の臣を誡め、臣たる者は以て其の君を諫め、長たる者は以て其の屬を飭め、屬たる者は以て其の長を規し、父たる者は以て其の子を訓へ、子たる者は以て其の父を勸め、智は以て愚を諭し、賢は以て不肖を導き、謀慮之れ長く、積累之れ漸みて、上は攝關將軍より下は農工商賈に至るまで、終に當にこれに歸すべし。興隆の機、恢復の勢、沛然として孰れか能く之れを禦がん。則ち將門・義仲も敢へて逆謀を萌さず、而して清盛・頼朝も亦將に忠勲を盡せんとす。是れを之れ天下定まると謂ふなり。是れを之れ務めずして、輕舉妄動し以て國祚を喪ず者、吾れの寒心する所以なり。吾れの此の見を持するや久し、

而して出たこれを行事に施す能はず。其の人を得て之れを謀らんと欲すれども、兩國の身、復た和を所たし。獨り清狂師、鎌宗の功、先づ已に村里を化し、延いて封内に及び、將に往いて天下に施さんとす。余其の功を嘉ぶ。其の將に行かんとするに及んで、序を敘せらる。書して以て贈と爲す。

再び玄端に復する書

またひ書を辱うす。捧讀一番し、僊從前の疑は渙然として冰釋せり。足下謂ふ所の虜使に轉ることも、馬書を以て案と爲すは、眞に誠に名あり。是れ泛言に非ざらんなり。僕自に思ふにここに至らず、足下を以て空虛裝分の徒と爲せしは、僕の過なり。願はくは足下決然として自ら斷じ、今より手を下して、虜使を斬るを以て務と爲せ。僕將に足下の才略を傍觀せんとす。方今天下、器械未だ嘗て缺けざるなり、財用未だ嘗て窮まらざるなり、人材未だ嘗て乏しからざるなり。足下誠に能く斬使の功を成さば、則ち國威顯赫すとも、僕國より其の國勢することなきを保するなり。

癸丑・甲寅の交、僕精力を以て膺繼を謀る、而してすなく略なく、百事瓦礫す。ここに於てか入海の専決あり。已にして風浪舟を誤り、るみせつ繼繼身に逮ぶ。乃ち盡く舊見を洗ひて更に新望を立し、心を聖賢の道に潛めて、思を治亂の源に致せること、大略前二書に陳べし所の如し。而るに足下敢て以て然りと爲さざるは、是れ自ら其の才略の以て其の事を成すに足るを恃むのみ、誠に僕輩の及ぶ所に非ざるなり。因つて慝ふに、癸丑の年、僕東に在りしも、(一)畢使を斬らんことを思はざりしが、其の冬、(二)西のかた肥後に至りしに、官部助に僕の怯情を責む。僕反つて詰るに其の魯使を斬らざるを以てす。官部其の言に斬るべきなきを陳べ、反覆して屈せず。甲寅の年に及んで、僕官部と同じく東す。一日憤然として畢使を斬らんと欲す。已にして其の益なくして害あるを思ひ、遂に其の謀を止めたり。凡そ僕輩の無能なることかくの如し。足下誠に能く其の言に酬いば、實に天下萬世宗社蒼赤の福なり。豈に特に名を竹帛に垂れ、功を金石に勒せらるのみならんや。然りと雖も、其の言をして酬いざらしめば、僕輩と何ぞ辨はん。僕將に益々足下の空虛裝扮を責めんとす。足下尙ほ僕に向ひて之れを反詰

するや否や。寅復す。七月廿五日。

坪井氏に與ふる書

寅聞く、(四)匠石(五)配せずして、(六)朽樗(七)遂に棄てられ、(八)伯樂一顧して、驥驥乃ち著はると。是れ各々、(九)若の人(一〇)に遇へるなり。又聞く、(一一)李陵匈奴に降りて、(一二)臨西の士、皆用つて恥と爲す、(一三)獨り太史公爲めに之れを武に説き、又之れを其の史に載す。(一四)佛宗元憲(一五)堅に驚して、一時の朝臣、争つて之れを讒惡す、獨り韓昌黎相與(一六)すこと益々深く、死して遂に其の臺に誌すと。夫れ二公は、議論文章、千古に傑出す。故に二公の言一たび出でて、李柳の罪、固より贖るる所なきも、而も其の情も亦後代に諒せられたり。僕の性癖執にして、(一七)與に交はるる時、(一八)節目の木、(一九)嘯蹄の馬多し。往々にして李柳の爲さざる所を爲し、世の恥ぢ惡む所を爲し、常に竊かに憤懣す。然れども謂へらく、吾が身すら容れられず、安んぞ其の後を恤むに迫あらんや。況や世に固より史公・昌黎の如き者あるなく、又匠石・伯樂の如き者あるなしと。今忽ち座下を得たり。僕試みに悲く之れを

陳べん

金子聖輔は僕と同じく幕禁を犯し、而して先きに已に病亡せり。僕爲めに哭詩を園方に慕り、以て其の冥魂を慰めんと欲す。而れども世人方且に是れ恥ぢ、是れ惡む。萩中更する者、家兄伯秋及び在獄生當水有論の二人を除く外、絶えて一字すら及ばるる者なし。是れ所謂李樹の罪、世の恥ぢ惡む所となりし者なり。今座下は文章を以て後世に傳ふること、史公・昌黎其の人の如くならんと欲せらるるに非ずと雖も、然れども身許才の玄に居り一時の正論を持せらる。願はくは金子生の爲めに、一詩を賦して之れを哭し、以て世の恥惡を解かれんことを。是れ固より史公・昌黎の志なり。

右論は野山獄に繋がるること四年、其の人、性剛強なりと雖も才氣用ふべし。學粗淺と雖も頗る自ら勉勵す。書んで歌詩を作り瑕瑜掩はざること、猶ほ其の人となりの如し。保同獄にして甚だ親しみ、深く之れを愛惜して、蹤技せしめんことを同志に謀る。同志之れを憐みて、援引頗る力めしも、已にして稍復た讒奸の乗ずる所となり、事遂に止む。僕其の遂に繋死せんことを哀しむ。然れども今敢て遠かにここを以て

(一) 座下
問をさす

座下を煩はらず。座下（おとしみ）縦使（たてつか）援引するに意なくとも、何ぞ一たび其の作る所を取りて、略正品詞を加へられざる。則ち其の果して楞櫻たるか、果して驥驥たるか、固に匠石、竹葉の龍圖より魚かれざらん。僕嘗て謂（いわ）へらく、古の仁人君子、其の才を憐み毫を雪ぐや、識者として常に及ばざるが如くす。而して窮死固厄（き）は其の最も先きとする所に在り。是れ今の俗吏の能く知る所に非ざるなり。僕獨り座下の爲めに之れを陳ぶるも、亦知友の爲めに屈するなり。幸に其の愚を察せられよ。有隣の批稿一卷、諸人參子生を要するの詩一卷、附往す、炳亮是れ幸ふ。

赤川淡水に與ふる書 此の書寄せず

(四) 合源安、

僕正志先生の新函に、「天祖の神器を傳へたまふや、特に寶鏡を執り、視（み）ぎて、日く、此れを視まされんこと猶ほ吾れを視るがごとくせよ」に至り、以て「聖子神孫、寶鏡を仰いで、影を其の中に見たまふとき、見たまふ所は、即ち天祖の遺體にして、視たまふこと猶ほ天祖を視たまふがごとし」と爲せるを讀み、肅然悚然として、夙に其の義

[illegible]

の謂たるに照す。而して間先輩の所論を參するに、能く是れに及ぶ者少なし。觀淵三宅氏・山崎闇比の如き、特祝の勅を以て、通じてこれを三器に被らしめ、神代卷と合せず。是れ其の粗たること、固より辯を待たざるなり。獨り澁澤栗山氏の保題大記に引く所の神勅に、「爾の祖を思ふなかれ、吾れは鏡中に在り」といへる者、粗ぼ其の意を得たるに似たり、而れども其の詳説を著はさず。且つ谷氏の打聞には此の勅の出づる所を註せず。山鹿素行は以て天祖神體を神鏡に留めたまふと爲す。而も亦未だ遺言を神中に見るの義に及ばず。僕竊かにこれを疑ふ、此の義、古書已に明文あるか、或は先輩の論説に出づるか、抑、先生の發明に出づるか。僕又疑ふ、新論特祝の勅は、以て皇孫に命じたまふと爲す、三宅・栗山・輅諸子、亦並異詞なし、是れ必ず確證あらんと。而して僕神代卷を觀るに、此の勅は則ち一書に天祖寶鏡を皇子天忍穗耳尊に授けたまふ時の祝々所にして、三器を皇孫に賜ひ、寶祚無窮を勅したまふと、出づる所を同じうせず。是れ亦僕の疑ふ所なり。是れ皆義理事體、係る所細からず。僕素より寡陋、特に古典に暗く、徒らにこれを疑團に附す。足下近ごろ先生に従ひ、

皇國を尊皇す、其れ必ず海嶽する所あらん。幸に之れを教へよ。

再び按ず

神代聖に又云はく、「因つて此の皇孫^{すめみま}神武天皇^{かみヤマト}を以て^{もつ}神武天皇^{かみヤマト}に代へて降しまつらん」と
す。按に天皇屋根命・太玉命及び諸神等^{しよじんらう}を以て悉く皆相授く。且た^{また}照御^{あきみ}の物、
一に前に依つて經く。然る後又忍穗耳尊^{にほひみみのみこと}天に復^{かへ}還りたまふ」と。已に一に前に依つて
經くと云へば、則ち祝語も亦同じく知るべきなり。然れども此の文猶ほ忍穗耳の瓊瓊
杵に授けたるかに嫌^{きら}あり。而るに古語拾遺には、直ちに皇孫に勅すと爲す。古事記は、
主を推して之れを考ふるに、亦拾遺と同じ。是れ以て證と爲すべし。古事記に詔を載
せて曰く、「此の鏡は、専ら我が御魂^{みたま}と爲て、吾が前^{みまへ}を拜^{いつ}くが如、いつき事れ」と。
由開武の謂ふ所の神體を神鏡に留むと、栗山氏の謂ふ所の廟の祖を思ふなかれ、神、
鏡中に在りとは、並^{なら}ずかに原^{もと}づくに似たり。但だ遺體を鏡中に見るの義、未だ其の出
づる所を尋ず。當に之れを遺考すべくして可なり。九月十八日識す。

淨垢默靈に復する書

偉室に歸りて幸、（二）應酬に應酬を禁じ、父兄朋友、又切に要發を誡む。ここを以て默

相續し、以て二光を賓饒するのみ。去冬、上人の遺跡（一）よりの書を得。意甚だ復書を

致さんと欲して、而も機嫌に拘束せられ、未だ之れを果す能はず。昨忽ち萩に入られ、

重ねて書を以て及ぼる、感喜何ぞ已まん。上人云はく、「僕と生、其の時を同じうし、

其の甲を同じうし、又其の志を同じうす、而も終身一晤せず、以て遺憾と爲す」と。

嗚、僕に言けんを欲する所、上人乃ち先づ之れを言はる。僕の債末石に非ず、之れを

讀みて靜く怡然として泣下らざらんや。然れども會晤の事は、誠に當に爲すべからざ

るものあり、而して又必ずしも爲さざるなり。因つて禁に違ひ例を破つて、試みに一

書を以て上人に觸い、且つ併せて向の復せんと欲せし所のものを復せん。幸に願はく

は、尊察せられんことを。

夫れ上人の僕を見んと欲し、一死と雖も避けずとは、其の意誠に篤し。僕と雖も豈に
敢て其の死を避けんや。但だ僕の避くる所のものは、事一たび發覺せば、或は文法

に歸りて、嗣、父兄に蒙らし、果、親友に達はんことなり。其の至恩厚誼に於て、並
重^{おも}きする所あらば、固ち僕の一死、誠に惜ふに足らざるなり。夜間一睡して、人をし
て知らざらしめんとするが如きに至りては、最も不可に屬す。僕世に在りて、頗る多
日を増せり。上人一たび僕の臆に狂げられば、父兄僕婢、驕^{おご}り威^い、知らざるを得ず。
甲より此に傳へ、一より二に傳へて、朝を終へずして城中に遍ねからん。驕傲の顯著
なるに、誠に市廛に説く所の如し。秘^ひ寢^いの四知を畏るるも、理勢誠に然るものあれば
なり。且つ上人の一語を謀るは、僕の面貌を識らんと欲するに過ぎず。僕の面貌は識
るに足るものなし。願^{ねが}ひ辱^{はづ}れ、語勢卑^ひ下^げ、筆頭^{ひつとう}權^{けん}、文を以て其の身を飾るのみ。其
が心腸のごときは事端に吐露して、以て正を上人に説く、固より上人の來問を待たず。
是れ必ずしも會晤せざる所以たり。

去冬の書に云西く、「竊ひ世の人をして感悟せしむとも、風俗^{ふうふく}變^かひの世に生れて、之
れを宗^{そう}初^しとすべからず。余一筆して森槐の士を誅し、忠孝の宛を傳ぐあらんのみ」
と。上人の志す所は、能^よく其意^{こころ}を達^{たつ}と其の趣を同じうす。而して僕の志す所と大いに

戰なり。佛敎するると雖も、未だ西山に讎えず、未だ東海を踏まず。安んぞ遽かに念
 を興へ世に覇つを得んや。夫れ當今國の大義は、佛徒と武士とに若くはなし。而して
 佛と士人と亦其の一に居る。八洲を回視するに、僧徒武士及び其の管する所に非ざる
 者幾ばある。是れ安んぞ遽く誅すべけんや。然も是れ誓王民なり、王臣なり、亦
 必ずしも誅せざるなり。夫れ其臣の大義は、藩々明々として天地に昭かに、古今に通
 ず。世に義ありと雖も、帝に渾濁ありと雖も、大義は一日にして滅すべけんや。故
 に臣等へらく、露殿一日感悟せば、則ち朝を終へずして天下平かならん。諸將一日感
 悟せば、則ち朝を終へずして一國治まらん。下は一介の士、一旅の兵に至るまで、一
 應一節せば、皇朝ひ身修まらんこと、疑ふべきなきなりと。凡そ其の皇國に生れ、皇
 恩に浴する者は、身の爲す所、家の誓む所、國の謀る所、天下の奉ぐる所、一として
 皇國の爲めにするに非ざる者なし。かくの如くにして、身修まり家齊ひ、國治まりて
 天下平かならん。故に幕府眞に能く一日感悟して、皇勅を奉じ、諸侯を率ゐ、兆民を
 導んじ、群衆を聚し、細大の事、王事に非ざる者なくんば、則ち今の征夷は古の征夷

なり。今の國司は古の國司なり。今の臣民は古の臣民なり。制度に隆殺あり、委任に輕重ありとも、固より皇國を侮ることなきなり。僕は退けられて家に囚せられ、能く尋ずたし。然れども一日として斯れを忘れんや。上人は天下を踐渉して志士仁人を求め、常に此の義を論じ、人々をして各自感悟せしめ、又從つて其の君長を感悟せしめば、則ち治國平天下の事、豈に其の時なからんや。然らずして、盡く今の武士を誅し、盡く今の僧徒を誅して、而る後王室を再建すること、萬々能はざるなり。之れを終ふるに、西山に歸來、東海を踏むとも、今日の天下に補するなし、而して僕實に上人に望み負きたり。僕前日復せんと欲せし所、大略かくの如し。上人幸に僕の説に従はば、僕一語せずと雖も、猶ほ胃を交ふるがごときなり。切に回答を待つ。藤實再拜。

默震に與ふ

貴編校正すること其の半ばに至り、而も未だ一詞を贊して以て上人を益する能はざるに、上人賜を賜つ、劇ち疾速に上人に奉返す。固より憾みなからんや。但だ三瑣事の

相正さんと號するものあり。貴文中伯陰・華陽及び因州等の字面あり。山南水北を陽と爲し、山北水南を陰と爲す。衡陽・河陽・華陰・潯陰など、漢土の地名、濫々としてあるべし。華は山陽に在るを以て、之を華陽と謂ひ、伯は山陰に在るを以て、之を伯陰と謂ふに、則ち訛なり、宜しく改むべし。州の字に至りては、最も改めざるべからざるなり。本郡洲あり國あるも、未だ嘗て州あらざるなり。今貴上下、擧げて國と號りて州と爲す。僕其の由を原ぬるに、鎌倉・室町の地多く異俗を稱致す。異俗は國の州名の情見して、これを我が邦に洩らしむ。而して僞士武人、沿習して改めず、以て今に至る、雖も甚だし。且つ異國の州名は、唐虞に十二と爲し、九と爲し、周も亦九と爲し、兩漢は兼に十三と爲す。晋大別の名にして、猶ほ唐の遺あり、宋元の路あり、明清の省あるがごとし。我が邦に在りては聊も道のみ、國に非ざるなり。三國・南北朝のとき、天下分裂して各國州を治し、前後改めず。乃ち始めて郡と等し。異俗の相見する所、故に在りて已に謬れり。何ぞ更に之れを我れに擬さんや。故に改めざるべからざるなり。佛家轉迴を圖して國を繼とするは、梅溪と雖も望かれざるなり。

心上篇に出づ。
小功は五ヶ月
の喪、服する
こと輕きとい
ひ、舊決は疑
ふ事多し。
こと不敬の小
なるをいふ

家範をよつて辭姓に従ふは、僕の痛心する所なり。然れども是れ韓氏の常例にして、
外人の讀すべき時に非ざるなり。改むると改めざるとは、唯だ上人に在るのみ。上人
の文、其の大なるもの、僕未だ論すべきを見ず。茲に三瑣事を擧ぐるのみ。然れども
亦名を正すの一端、小功(三)と舊決しけつと、固より未だ苟もし易からざるなり。不一。

中村道太に贈る

萬人皆同云はく、「士苟も仕籍に登らば、常に一二節の卓々として傳誦すべき事を爲
すべし。若し終身靡然として、諸書更の後に従はしめば、榮達すと雖も、何ぞ言ふに
足らん」と。余頃うき此の語を得、偶々雨漢書を譯し、因つて其の人物を觀るに、英賢
豪傑は論するまでもなく、後世に傳誦する者は、乃ち甚だしくは顯はれざる人と雖も、
亦必ず一二卓々たるものあり。此の間の靡然として後に従ふの比たとひの如きに非ざるなり。
宜あたたり、良史の筆に載り、千萬年に傳はりて朽ちざるや。夫れ同の言は、固より至論
に非ず。若しこれを已れを盡し力を盡すの訓に準ずれば、蓋し間へだたりあらん。然りと雖も、

今日の事、生見其れ之れを思ひて之れを斷ぜよ。總々に勝へず。

江風山月書樓記

江風の陽、縣山の陰、別館あり、君公の滯息所たり。館舊と書樓を置き、江風山月を以て名と爲す。今公、職に就き、文を修め武を振ふこと、已に十九年、政績昭著し、風俗全變す。是れより先き、墨吏再び政相に入り、吾が公壽命を奉じて、師を出して屯戍す。已にして魯狄攝に入り、吾が公特に一隊を著して、京城を衛る。其の後墨魯と師備と、東に乘り西に侵し事ね虚月なし。吾が公幕府に款納し、臣民を獎勵し、臂肱の志甚だ勤む。ここに至り慨然として曰く、「君臣の分、重んずる所は禮に在り。然れども禮雖ては別ち離れ、離るれば則ち和せず樂しまず。和せず樂しまざれば、以て人心を得て國難を濟ふことなし。吾れ將に力を宣べて（一）庸を畜ひ、壽命を奉承し、君恩に報復せんことを欲す。苟も繁縟の文を省き、易簡の道に従ひ、上下感孚し、君臣輯睦すること、家人父子の如く然るに非ずんば、將た何を以てか吾が志を成すを得

- (三) 伊弉諾、
伊弉冉、
(四) 天照大
神、
(五) 月讀命、
素戔嗚尊、
天孫降臨

んや。但産神坐の儀は沿習已に久しければ、吾れ敢へて轉く事めじ」と。乃ち始めて書體を修め、聖經を飾り、鼓を聴くの暇、時に宗臣を宴し、時に青儒を召し、濯々とて樂を賜ひ、詩酒笑語、人々をして各々其の心を盡すを得しむ。禮の用、ここに於てか如たり。罪臣某、盛事を傳聞し、私に之れが記を爲りて曰く、

赫しく懷みゐるに神州の基を建つるや、深く且つ遠し。太古二尊、已に八洲を生み、

又山川草木を生み、因つて日神を生み、天下の主と爲したまふ。月尊・風神、又從つて生れたまふ。ここに於て、神州の業始めて建ちたり。日神已に天下の主となり、因

つて萬世日嗣の祖となりたまふ。今に至るまで凡そ生を八洲に棄くる者、由を仰ぎ川

に清し、風氣を煖き、月光を見、二尊の澤を蒙り、以て日神の嗣を數くこと、神世と

何ぞ以て異らんや。而して吾が公の江陽山陰の樓、風と月とを以て之れが名と爲す。

其の旨推して知るべきなり。蓋し吾が公の宗臣を宴し青儒を召すや、必ず觴を舉げ、

之れに命じて曰く、「斯の山斯の江、風と興にし、月と興にす。卿等其れ其の由る所

を細れるか」と。宗臣青儒、食進み對へて曰く、「二國の封は吾が公の有たれば、則

ち江山風月、一も公の病に非ざるものなし、亦何ぞ其の出る所を知らんや」と。公嗟然として曰く、「否、然らず」と。宗臣善備、又進み對へて曰く、「二國の封は祖先の命あり、江山風月、於以て自ら有せず。豈に之れを祖先に原づくに非ざるを得んや」と。公悚然として曰く、「然り、未だしなり」と。終りに至りて、宗臣善備、逡巡し處を辭けて曰く、「臣等誠に言を失せり。夫れ天下は日神の天下なり。寶祚の隆なること、天壤と極りなく、萬世と雖も猶ほ一日のごときなり。然らば則ち天下の江山風月、日神のまゐりて以てこれを日嗣に授けたまふ所にして、日嗣これを功德あるの臣に頼ちたまひ、因つてこれを孫子に傳ふ。孫子は之れを祖先に原づけ、祖先は之れを日嗣に推し、日嗣は之れを日神に歸す。父子の親、由つて以て致く、君臣の義、由つて以て明かたり。是れ義し普が公の志なり、臣等誠に言を失せり」と。普が公嗟然として良久しうして曰く、「卿等の言ここに至る、我れ復た何をか憂へん」と。ここに於て、君臣賓主、歡酬交錯す。鹿鳴の歌、簞食の詩も、未だ以て其の和に比するに足らざるなり。

罪戾害て西土の史籍を讀み、其の國を亡ぼし家を敗るを觀るに、大抵諸君暗主、江山
風月を觀て、傳つて以て私有と爲す。善だしき者は、割いて饗幸を饗ひ、割いて夷狄
に與へ、淪胥して以て饗ふ者、比々皆是れたり。而して神州寧んぞ此の事あらんや。
然れども前の墨魯の變、幕府固陋と、諸侯僞造して、道邊、舍を作れども、其の咎を
執ることなく、而して大事去れり。天子奮然として、再び明詔を下し、紀元を改め、
餘燼を請しめたまふ。而るに幕府文法を具し、故事に仍りて以て諸侯に令す。諸侯に
も、だつた粉の藏あるを聞かず、未だ唱議の事あるを見ず。天下滔々として、傲慢暇逸
と、江山風月を以て私有と爲し、復た日神の廟の何物たるかを知らず。庶人は其の一
身を私として、敢へて以て公役に奉ぜず。士夫は其の一家を私して、敢へて以て國難に
殉ぜず。而して諸侯は其の、國を私して、敢へて以て王事に勤めず。苟も王事に勤め
ずんば、則ち内饗幸を饗ひ、外夷狄に與へ、敗亡之れに従はん。乃ち江山と風月と、
其の自ら私するを終うと能はざるや亦事かなり。吾が公蓋し深くここに懼るるあり、
先づ此の機を修し、以て宗臣舊宮を和樂し、趙して士民に及ぼされ、將に往々幕府を

に輔し、朝廷を亂とし、外は以て國威を張り、内は以て暴虐に報せんとせらる。乃ち
顧みて江山風月を翫りて以て自ら樂まざる。其の旨亦深からずや。凡そ國人盛衰を傳
聞する者、孰れか感激して泣下らざらん。而して罪戾祇に自ら擲らず、樂しく之れが
能く爲り、泣きに重ぬるに辭を以てす。曰く、

一江や山々、二都之れを動し、風や月や、日神之れを主る。吾が於總々、太古を景仰し、聖賢善勳、思歸ここに香ねし。嗣武を操きて、自朝となり、地綱を握して、天柱

松下村談記

其門を關する、嶺として山麓の西麓に在り。而して茨城は連山の險を蔽ひ、渤海の衝に當る。其の地勢を考へて山に面し、卑遠闊朗、吉見氏の政壇にして、古は甚だしく壯麗なれず。二百年來、乃ち本藩の治所となる。ここに於てか、山産海物、四方より輸濟し、賑繁として一都會となれり。或は東都は固ち吾が松下邑たり。松下の邑たる、

(四) 地名。
今、津市に在
り、津原とい
ふ。

(五) 地名。
今、津市に在
り、津原とい
ふ。

南に土川を帯ぶ。川の源は溪澗數十里、人能く窮むるなし。蓋し平氏の遺民等て隱匿せし所なり。其の東北の二山、大なる者は唐人山(たんにやま)と爲し、朝鮮俘虜の釣鉤(つりかぎ)する所なり。小なる者は長湍山(ながたぬやま)と爲し、松倉伊賀の戰地なり。伊賀等て大内氏の將岩成豐後と、(四)陳原(ちんげん)に戦ひ、連りに敗るる所となり、遂に大將淵に投じて死す。原と淵と、今皆存すと云ふ。山川の間、人戸一千、士農在り、工商在り。昔時の忿惋不平(ふんわん)の氣、今は明ち豁然爲然として、發して人物となり、嬉乎として一勝源を爲せり。然れども吾れ常に怪む、昔時の忿惋不平の氣、流れて川となり、轉(まが)ちて山となり、發しては則ち人物となり、以て所謂一勝源を成す者は、固より其の常のみ。苟も奇傑非常の人を起し、諸將震動して、乾を轉じ坤を據(とら)かし、以て邦家の休美を成すに非ざるよりは、將た何を以てか山川の氣を一變して、其の忿惋を平かにするに足らんや。況や萩城の隱匿にして鄰はれざること、亦にに久しきをや。今は則ち嚴然として一部會たれども、是れ猶ほ遠に顯はるる當に非ず、特だ其の機の先兆のみ。今松下は城の東方にあり。東方を震(ふる)と爲す。震は萬物の出づる所、又奮發震動の象あり。故に吾れ謂(い)へらく、萩

類を將に大いに願はれんとするや、其れ必ず松下の邑より始まらんかと。

(一) 久松氏
前左衛門(親)

去年余を遣され、松下に家居し、外人に接せず。^(一)獨り外叔久保先生及び諸従兄弟、

附々訪し、因つて共に道藝を講究す。家訓・家教と家兄と、又従つて之れを獎勵せ

るは、誰か世の盛大なる、蓋し將に往く一邑を奮發奮動せんとするたり、初め家叔先

生の説を以て教授せらるるや、其の家塾に屬して、松下村塾と曰ふ。家叔已に官と

なり、其の故久しく曠せり。外叔已にして邑の子弟を會して之れを教へ、其の號を浩

用す。嗚る余に命じて之れを記せしむ。

余曰く、「學は、人たる所以を學ぶなり。體徳くるに村名を以てす。誠に一邑の人を

して、入りては則ち榮暢、出でては則ち忠信ならしめば、則ち村名これに係くるも辱

せず。若し或は然る能はずんば、亦一邑の辱たらざらんや。抑、人の衆も庶しとする

時のもとは、君臣の義なり。國の衆も大なりとする所のもとは、華夷の辨なり。今天

下は何如なる時ぞや。君臣の義、講ぜざること六百餘年、近時に至りて、華夷の辨を

合せて又之れを失ふ。然り而して天下の人、方且に安然として計を得たりと爲す。

神州の地に生れ、皇室の恩を蒙り、内は君臣の義を失ひ、外は華夷の辨を遺れば、則ち學の學たる所以、人の人たる所以、其れ安くに在りや。是れ二先生の痛心せらるる所以にして、而して余の之れが記を爲らざるを得ざるも、亦ここにあり。噫、外叔先生、誠に能く一邑の子弟を教誨して、上は君臣の義、華夷の辨を明かにし、下は又孝悌忠信を失はず。然る後奇傑非常の人、起つて之れに従ひ、以て山川忿惋の氣を一變し、邦家休美の處を馴致せば、則ち荻城の眞に顯はるること、將にここに於てか在らんや。豈に特に、勝區一都會のみならんや。果して然らば、則ち長門は僻して西轍に在りと雖も、其の天下を奮發して、四夷を震動するも、亦未だ量るべからざるのみ。余は罪人の餘、言ふに足る者なし。然れども幸に族人の末に居れり。其の、子弟を糾轉して、以て二先生の後を繼ぐがごとくんば、則ち敢へて勉めずんばあらざるたり」と。外叔先生曰く、「予の言は則ち大なり、吾れ敢へてせざるなり。請ふ邑人に切なるものを聞かん」と。余曰く、「古人月旦の評あり。今且く子弟の爲めに三等を設立し、分つて六科と爲し、各其の居る所を標し、月朔に升降して以て其の勸懲を定む

ん。曰く節義、曰く専心、是れを上等と爲す。曰く勵精、曰く修業、是れを中等と爲す。曰く怠惰、曰く放縱、是れを下等と爲す。三等六科、志の麤く所、心の安んずる所、就して可ならざるなし。誠に邑人をして皆進みて上等の選たらしめば、則ち吾れの利言をた必すしも其の大を愛へざるなり」と。先生曰く、「善し」と。因つて併せ記す。寛政三年丙辰九月、吉田鉅方撰す。

松田丹下に贈る

學業を盡きて實功を遺るることなかれ。近利を求めて遠謀を興することなかれ。千秋の盛衰は、一朝一夕の故に非ず、四海の安否は、豈に一身一家の事たらんや。之れを思ふ之れを思へ、時として止息することなかれ。之れを勉め之れを勉めよ、事として苟且こうしよにすることなかれ。母下規言を求む、余の幽囚何をか知らん。然れども益家(一)は實れ善の大臣なり。而して母下は又其の家宰かさいたり。國政の美は大臣の賢に關かはる。大臣の賢は家宰の忠に倚る。今益大夫政を執り、賢を繕つくろひたり。是れ母下の忠、亦知る

べきのみ。船りと雖も朝夕を以て謀を爲し、身家を以て功と爲きは、善れ爲むことな
またり。此れを謂して計と稱す。

中村道太に與ふ

去る十四日、家前富嶺所の嶺に接す。僕傷ちより之れを窺ひ、乃ち野山の密園、流に
處に彼に反し、一旦釋放して、四圍處となれるを知れり。僕驚き踊躍すること、身の
圓を蹴りし時より甚だし。嗚呼、野山の囚奴、牢間に措かるること、其の幾年なるを
知れず。僕に見聞する所を以てするも、大澤氏の獄に在ること五十一年なり。而して
五十年來、未だ曾て此の處のありたり。家前故記を参し、嘆じて曰く、「唯だ、
くの如きのみに非ず、乃ち野山獄ありてより、蓋し未だ曾て此の事あらざるたり」と。
立寺廟を顧に在り、相府人あり、是下の懸橋の談、周密の處、以て此の無情の事を贊
成し、十百年の積滯を決瀆するを得たり。乃ち時に投じ勢に乗ずと雖も、其の左支
右吾とて苦心を思せる者、僕の自替も猶ほ能く之れを察す。噫、是下今日の功、何ぞ

事の大小を論ずるに顧あらんや。且つ書生の論、大言奮るなく、事實に基なし。僕の如き者は其のむたり。ここを以て録を編はれ獄に繋かれ、高麗自ら處り、一も濟す所なし。嘗て足下の功の、徳惠人に被らするものに若かんや。足下自ら訪へら、一時の勢を要かにし、才力を暴りて之れを盡す、皆へて無智妄動を爲さざるなり」と。初め僕以て然りと爲さず、今は則ち之れに服せり。僕回到獄に在り、親しく囚奴の濫濫を凡聞し、惡に自ら思ふ能はず、私かに囚者録を授け、因つて之れに裁論す。料らずも人ありて取り去れり。僕日に其の傳播して以て國書を贈さんことを恐る。今忽ち此の書あり、以て刑書を讀みて新事を釋かすを得たり。僕の心ここに於て始めて浚んぜり。筆も乃ち僕を獄中の得た、編定の編たる所以は、足下固より已に熟讀して之れを周慮す。幸に其の事を察へば、僕の獄中の満足なり。昨秋ふる所、件に随つて装りに復す。請ふ更に之れを數へよ。不宣。十月十六日。

公家の利、知りて爲さざるなきを、忠となす。支那人猶ほ能く之れを言ふ、況や皇國
のみ士をぞ。良三其の旃^{しほ}を勉めよ。

人に與ふ二篇

一日に一事を記せば、一年中に三百六十事を得ん。一夜に一時を怠らば、百歳の間三
萬六千時を失はん。

天地の大道、君父の至恩、能に報ゆるに誠を以てし、恩に復するに身を以てす。此の
日世びし難く、此の生復びし難し。此の事終へずんば、此の身息^{やす}まず。

赤川淡水の箱中同學に與ふる書を読む

今見諸太・家兄伯賢、余をして復書を擬せしむ、余固辭して敢てせず。是下の言大
にして志壮なり、復た又何をかこれに尙^{なほ}へん。但だ縣州六七百年の變、經海千萬國の
典は、一瞬一夕の能く磨礱する所に非ず、一言一行の能く匡正する所に非ず。且つ人

の志を立つる、必ず二三十年を積みて、然る後灼然として信すべく、昭然として見るべし。余も亦偉志を抱く者、罪戾の身、鋭を畜へ氣を屏め、道を求め古を稽へて、而もまた自ら其の責に何如を相らざるなり。何ぞ人の復書を擬するに暇あらんや。山霽石を穿ち、龍潭海に達す。是下幸に之れを思へ。青年の俊才恃むに足らず、精誠至誠、是れ恃むべしと爲すのみ。

又讀む七則

文を作るは、人々家數あり、概説すべからず。況や余が素朴の習を以て、公が清洋の文を得するをや、世の所譽すること固よりなり。然れども朋友の義、切磋を妨げず、故に試みに一たび之れを言はん。貴文滔々五千言、亦富めり。余をして之れを倣さしめば、天祖業を創めて、明聖繼嗣したまひ、朝綱弛みて武臣驕るを、起手の一段と爲し、大江の源流、今公の美志を、次の二段と爲し、宇内の形勢、今日の禍患を、次の三段と爲し、而して自家の敘述之れに次ぎ、並びに簡淨に之れを括らん。江家の文を

(一) 藤文公
下篇第九卷の
節ち孟子の
存に於てその
云はんとする
を主旨と提議
を本文に先だ
つて擧げにあ
る。

修め、轉製の處を闡ひ、固立大動して、掩まず挫けざる所以に至りては、此の書の本
質にして、極力簡明し以て人の真樸を求めて而る後已まん。かくの如くせば、則ち長
きも千言に及ばず、短かきも勢ち五六百言にして、明白簡切、或は原作に過ぎん。貴
文の字句を較し、自家を就するは、佳好し。天朝・江氏を就するは、詳致已に終る。
略致一書、孟子の二治一亂の意法を學ばば、乃ち可なり。今は則ち延曳して絶えず、
人をして其の冗雜を疑はしむ。固立大動の一段に至りては、最も博にして要少なく、
儼く處にして贅ならず、余の喜ばざる所なり。然れども是下恐らくは以て然りと爲さ
ずらん。

貴文固立大動はなれども、要言簡略少なく、人をして把握する所に迷はしむ。今文中に
説きて、其の要切を摘みて把握するに、云はく、「我が萬世の定を明かにし、彼の萬
世の變を敗らん。」云はく、「其の遺訓を明け、其の微意を覆し、時に固り勢を察か
にし、變り之れを修明せん」と。かくの如きのみ。而るに之れを明かにし之れを敗り、
之れを明け之れを覆し、之れを固りて察かにし、之れを修明するも、其の下す要旨は、

甚だしくは説破せず。噫、皇朝の衰ふること已に六百年、外夷の寇も亦四五國、而して其の今に繼ぐ者、幾千年、幾百國なるも、未だ料り易からざるなり。而して吾が徒單才の識、以て天地を格し、君民に孚にせられんと欲す。反りて之れを省みるに、背汗中熱、面大の文、雄偉の辭、自ら其の煩を覺ゆるものあり。願はくは更に一たび之れを思へ。

天朝を憂へ、因つて遂に夷狄を憤る者あり、夷狄を憤り因つて遂に天朝を憂ふる者あり。余幼にして家學を奉じ、兵法を講じ、夷狄は國患にして憤らざるべからざるを知れり。爾後偏く夷狄の讎なる所以を考へ、國家の衰へし所以を知り、遂に天朝の深憂、一朝一夕の故に非ざるを知れり。然れども其の孰れか本、孰れか末なるは、未だ自ら信ずる能はざりき。向に八月の間、一友に啓發せられて、矍然として始めて悟れり。

從前天朝を憂へしは、並夷狄に憤をなして見を起せり。本末既に錯れり、眞に天朝を憂ふるに非ざりしたり。今貴文先づ字内の形状を掲ぐ、其の意吾が八月の前と大異なきたり。足下心を澄まして東拜し、伏して一聖明今日の微慮何如を思ひ、然る後天祖

(一) 高世の定、分ちて之れをことすれども、而も其の本は一なり。夫れ定は
 心に在り。見錦・若慶・寇準・于謙の倫、其の心先づ定まり、人主據つて以て策を
 決し、臣民倚つて以て疑を斷つ。ここを以て事變愈々出でて、措置愈々定まる。斯の
 心定まらずんば、一時と雖も、何の定か之れあらん。斯の心已に定まらば、萬世と雖
 も、何を定まらざるることか之れあらん。上の心已に定まらば、下の心も亦定まる。父
 (三) 木卷一
 喜の人、字は
 進士、憲宗の
 王儲利あらざ
 臥を主張し自

の遺訓を誦し、延^(二)の往事を念はば、明ち必ず翌然として始めて悟ること余と同じき
 ものあらん。諸に令兄^(一)東に入りて詩あり、曰はく、「君王今夜何の觀をか作したまふ」と。
 乃ち余に先んじて此の悟あるに似たり。然れども安んぞ一時の感慨にして、未だ
 これを内に恆とすること能はざるに非ざるを知らんや。

一時の定、萬世の定、分ちて之れをことすれども、而も其の本は一なり。夫れ定は
 心に在り。^{(一) 見錦・若慶・寇準・于謙の倫、其の心先づ定まり、人主據つて以て策を}
 決し、臣民倚つて以て疑を斷つ。ここを以て事變愈々出でて、措置愈々定まる。斯の
 心定まらずんば、一時と雖も、何の定か之れあらん。斯の心已に定まらば、萬世と雖
 も、何を定まらざることか之れあらん。上の心已に定まらば、下の心も亦定まる。父
 の心已に定まらば、子の心も亦定まる。一脈一横、達せざる所なし。見・裴・寇・于
 謙、一時の定なるも、萬世に亘りて變ぜざるべし。彼れは革命の國、未だ盡くは其の
 能を明かにする能はず。今吾れは天祖の勅を奉じ、明聖の德を戴き、これを一心に斷
 じ、これを萬世に傳、乃ち之れを證し之れを證し之れを強す、豈に特に一時の定のみ

ならんや。若し尚ほ未だならば、則ち之れを諫さんにも諫す能はず、之れを諫せんにも諫する能はず、之れを諫さんにも諫す能はず。豈に亦一時の定と謂ふはんや。

朝廷上に尊く、幕府下に恭しといふ。果して言ふ所の如くんば、則ち今又何をが變へん。唯だ其れ然らず、志士の悲憤する所以なり。是下も亦嘗て禁闕を拜し、而して江都を觀しや。其の尊は則ち然れども、其の恭安くに在りや。夫れ六百年來の變、皆臣子の功ふに思ひざる所なり。武臣府を聞くは頼朝に勝まり、陪臣命を執るは義時に始まり、逆臣國を奪ふは尊氏に起る。三臣の功、其の罪を償ふに足らず。平右府・豐臣・關白・德大相國に至りて、其の志固より尊王（ついでに）政權に在り。然れども其の臣下の禍虐深かみず、竟く其の志を成すなくして因循今日に至り、依然として頼朝・義時・尊氏の舊たり。況や上洛の幾久しく開け、本朝の教漸く疎く、其の他千萬、目ある者は皆觀、耳ある者は皆聞けるまや。是下も蓋し嘗て聞き而して之れを觀たるたらん。其の尊は固ち然れども、其の恭安くに在りや。然りと雖も、幕府は我が君の敬事する所なり。君を陳べ罪を閉ぐ、之れを敬と謂ふ。吾が君能はずとする、之れを賊と謂ふ。我れ足

三十一

三十二

下と、こゝを以て吾が君に事へ、吾が君こゝを以て、幕府を頼む。我れこゝを以て吾が君に事へ、吾が君尤きずんば、則ち死して後已まん。吾が君之れを尤きば、こゝを以て幕府を頼めん。幕府従はずとも、吾が君必ずしも死せざるなり。何ぞや、幕府の恩遇厚しと雖も、吾が君の君に非ざればなり。況や上に天朝の在りあり、何ぞ死するを得んや。魯公の任、こゝに於てが實に吾が君に在り。是れ輕しく議すべきに非ざるなり。

（五）毛利元就
（六）毛利秀元
（七）毛利隆元
（八）毛利輝元
（九）毛利秀就
（十）毛利秀元
（十一）毛利秀就
（十二）毛利秀元
（十三）毛利秀就
（十四）毛利秀元
（十五）毛利秀就
（十六）毛利秀元
（十七）毛利秀就
（十八）毛利秀元
（十九）毛利秀就
（二十）毛利秀元
（二十一）毛利秀就
（二十二）毛利秀元
（二十三）毛利秀就
（二十四）毛利秀元
（二十五）毛利秀就
（二十六）毛利秀元
（二十七）毛利秀就
（二十八）毛利秀元
（二十九）毛利秀就
（三十）毛利秀元
（三十一）毛利秀就
（三十二）毛利秀元
（三十三）毛利秀就
（三十四）毛利秀元
（三十五）毛利秀就
（三十六）毛利秀元
（三十七）毛利秀就
（三十八）毛利秀元
（三十九）毛利秀就
（四十）毛利秀元
（四十一）毛利秀就
（四十二）毛利秀元
（四十三）毛利秀就
（四十四）毛利秀元
（四十五）毛利秀就
（四十六）毛利秀元
（四十七）毛利秀就
（四十八）毛利秀元
（四十九）毛利秀就
（五十）毛利秀元
（五十一）毛利秀就
（五十二）毛利秀元
（五十三）毛利秀就
（五十四）毛利秀元
（五十五）毛利秀就
（五十六）毛利秀元
（五十七）毛利秀就
（五十八）毛利秀元
（五十九）毛利秀就
（六十）毛利秀元
（六十一）毛利秀就
（六十二）毛利秀元
（六十三）毛利秀就
（六十四）毛利秀元
（六十五）毛利秀就
（六十六）毛利秀元
（六十七）毛利秀就
（六十八）毛利秀元
（六十九）毛利秀就
（七十）毛利秀元
（七十一）毛利秀就
（七十二）毛利秀元
（七十三）毛利秀就
（七十四）毛利秀元
（七十五）毛利秀就
（七十六）毛利秀元
（七十七）毛利秀就
（七十八）毛利秀元
（七十九）毛利秀就
（八十）毛利秀元
（八十一）毛利秀就
（八十二）毛利秀元
（八十三）毛利秀就
（八十四）毛利秀元
（八十五）毛利秀就
（八十六）毛利秀元
（八十七）毛利秀就
（八十八）毛利秀元
（八十九）毛利秀就
（九十）毛利秀元
（九十一）毛利秀就
（九十二）毛利秀元
（九十三）毛利秀就
（九十四）毛利秀元
（九十五）毛利秀就
（九十六）毛利秀元
（九十七）毛利秀就
（九十八）毛利秀元
（九十九）毛利秀就
（一百）毛利秀元

我が大江氏は尊を潰に外かつ、其の姓は神世より起るに非ざるなり。而して土師氏の如きは、則ち吾れ一たび其の姓を假ると雖も、吾が祖とする所に非ざるなり。世の諸公家、雖も異代あるん。然れども我が藩の歴世傳ふる所、誦ふべからず。又漢の本と二にするは、最も宜しき所に非ず。況や今公の素志、女に報い、職を盡し、兼ねて忠孝を立つるに在るをや。寧ろ有る所の親戚は、亦以て其の一斑を道ふべし。是れ臣子の宜しく承順すべき所なり。故に魯公・仰徳公、國に宜しく稱述すべし。而して家徳自傳・野見留傳は、斯くこれを置く。是れ之れを傳たりと爲す。

毛利秀就

吾が父^{（一）}、村言半翁、常に余に誨^{（二）}て曰く、「我が江家は遠く皇統に源し、世々文學を以て天朝を輔けたてまつる。餘父に至りて、兵法を以て源鎮守^{（三）}に傳へ、後三年の役は、實に之れを用ひて以て皇統を振へり。然らば則ち文武以て天朝を輔けたてまつるは、實に我が公卿使の任なり、則ち亦臣子の責なり」と。因つて大いに論究する所あり。余は是て其の言を聽し、未だ半ばならずして、同族の災に罹り、萬然として造すなし。其の後事故相仍り、余の志駕からず、能く其の業を遂ぐるなし。而して弱も亦世に即く、弱壯年に勇退し、實業と謝絶す。壯徒らに童面酒客を以て之れを目し、黨の摺負を觸るなし。嗚、今は則ち亡し。恨むらくは一たび此の文を見るに及ばざりしことなり。

三四樓記

小林三國の家は、素封を以て世々、蘇城に顯はる。三國に至りて奇を好み、喜んで文士に就ひて遊ぶ。嘗て其の名を以て書樓に命じ、松如^{（四）}を介して余に記を求む。余一たび

(五) 書經
 一、三才
 二、三才
 三、三才
 四、三才
 五、三才
 六、三才
 七、三才
 八、三才
 九、三才
 十、三才
 十一、三才
 十二、三才
 十三、三才
 十四、三才
 十五、三才
 十六、三才
 十七、三才
 十八、三才
 十九、三才
 二十、三才
 二十一、三才
 二十二、三才
 二十三、三才
 二十四、三才
 二十五、三才
 二十六、三才
 二十七、三才
 二十八、三才
 二十九、三才
 三十、三才
 三十一、三才
 三十二、三才
 三十三、三才
 三十四、三才
 三十五、三才
 三十六、三才
 三十七、三才
 三十八、三才
 三十九、三才
 四十、三才
 四十一、三才
 四十二、三才
 四十三、三才
 四十四、三才
 四十五、三才
 四十六、三才
 四十七、三才
 四十八、三才
 四十九、三才
 五十、三才
 五十一、三才
 五十二、三才
 五十三、三才
 五十四、三才
 五十五、三才
 五十六、三才
 五十七、三才
 五十八、三才
 五十九、三才
 六十、三才
 六十一、三才
 六十二、三才
 六十三、三才
 六十四、三才
 六十五、三才
 六十六、三才
 六十七、三才
 六十八、三才
 六十九、三才
 七十、三才
 七十一、三才
 七十二、三才
 七十三、三才
 七十四、三才
 七十五、三才
 七十六、三才
 七十七、三才
 七十八、三才
 七十九、三才
 八十、三才
 八十一、三才
 八十二、三才
 八十三、三才
 八十四、三才
 八十五、三才
 八十六、三才
 八十七、三才
 八十八、三才
 八十九、三才
 九十、三才
 九十一、三才
 九十二、三才
 九十三、三才
 九十四、三才
 九十五、三才
 九十六、三才
 九十七、三才
 九十八、三才
 九十九、三才
 一百、三才

語して興ひ思ふ。翻へらく、樓は一にして名は三四、吾れ其の語れを知らざるなり。
 樓を以てせんか、唯一を貫しと爲す、二三は則ち詩書にも之れを非とす。思を以てせ
 んか、再ひするは新れ可なり、三は則ち過ぎたり。策を以てせんか、初は則ち古なり、
 再三は則ち過す。而るを況や三四と言ふをや。三才あり、三光あり。四時あり、四渎
 あり。書に三德あり、易に四象あり、尊に三達あり、敵に四科あり。震に四知あり、
 而して事は三惑を去る。凡そ數の三四たるもの、一にして足らず。而も是れ獨り未だ
 的指する所を知らざるなり。若し乃ち朝四暮三は、狙詐の術にして、固より亦此の樓
 に取る所なきのみ、將た何の記する所ぞと。然れども聞く、三四は風流洒落にして、
 其の胸滑し、慷慨義を好みて、其の行卓し。才人俠客、世の猜忌怪怒して肯へて蘭列
 せざる所の者も、三四は愛敬具さに至る、其の量宏し、斯の三の者は、其の素より負
 ふ所、而れども吾れ更に一の望むものあり。世衰へ道微にして風尚日に降り、士にし
 て南行する者數も多く、南にして北行する者絶えて少なし。三四は素封にして、乃ち
 斯の行あり、是れ已に奇なり。天下の利權は素封に操られ、素封の家は公侯を籠絡し、

(一) 漢の河南の人、羊を牧して富をなす、新野縣防の領とす。武帝に召されて中書郎に任ぜられ、後、御史大夫に任ぜられ、封爵を蒙る。其の族姓、漢の舊姓なり。其の姓名、羊舌氏なり。其の姓名、漢の舊姓なり。其の姓名、漢の舊姓なり。

士夫を愚弄し、其の奢侈を煽りて、其の困蹶を利とす、惡むべきも亦甚だし。三四句も能く其の惡むべきを知り、以て其の習俗を勵ますこと、漢の卜式の如きあらば、士行、公孫弘に類する者と雖も、亦將に従つて變ぜんとす、況や其の徒をや、是れ吾れの望む所なり。若し乃ち三四の機たる、黃埃紅塵の間に構へ、白石綠樹、別に天趣を爲し、其の樓粗料なること三四に過ぎず、獨り書と琴酒とあるのみにして、主人其の中に坐臥するときは、則ち三四の名益々當れり。花朝月夕、或は時に宴を開き、好朋良友、三四盡暢し、靜も寂に至らず、喧も諱に至らざれば、亦以て利害を忘れて得喪を齊しうするに足る。是れ則ち記すべきなり。吾れ生平艱澁粗拙の文、未だ嘗て人の爲めに之れを作らず。況や幽園罪戾の身、嚴に世と謝す、何ぞ無用の言を爲して人の笑罵に供するに暇あらんや。獨り三四の奇を好める、工文麗詞を通邑大都の老匠に求めず、而も獨つて艱澁粗拙の文を幽園罪戾の餘に求む。是れ以て記すべく、記して望む所を望むべきのみ。且つ松如の託なり、辭すべからず。因つて三四樓記を爲る。

綠野堂記

吾松松下他の蘇村美貞の家に、湯人辭する所の綠野堂の三字を藏し、因つて以て自ら號す。頃^{ころ}余に記を讀む。蓋し美貞嘗て家叔に従ひて學を受け、余を童年に知れるを以てなり。憶ふに十餘年前、余市めて成童、未だ美貞の人となり悉^つく罷^はらず、獨り其の語意察言にして、退いて素中に居るを見しのみ。其の後美貞は青徒に従順し、簿書精明にして、會計書かに當り、敢へて其の職を曠^ひしうせず。而るに余は則ち東西に周流し、寧^な虚^こするを得ず。ここを以て進趨方を異にし、交往益々疎なり。今乃ち往昔を回顧するに、茫として隔世の如し、況や幽囚世と謂し、萬事渾^すべて遺^いるるをや。其の雪に應せんと欲すと雖も、將た何の記する所あらん。然れども吾が松下の邑は城東の野に在り、方數里に過ぎずして、絶えて紫塵黃埃の氣なし。時雖れ春夏、草木暢茂し、滿野蒼綠なり。若し乃ち秋冬の霜雪には、草實に木落ち、東山の萬松鬱蒼として獨り其の緑を希^うつ。而して堂の精、正に案の間に在れば、則ち是の堂の是の野に在りて、是の表を隔るは風に當れり。抑々美貞の是の名に取りし所は、吾れ未だ其の果し

二何の事たるかを知らざれども、吾れ試みに爲めに之れを論ぜん。

夫れ春夏の緑は遍野蒼綠にして、未だ以て名と爲すに足らず。秋冬の緑は獨り其の綠を誇つ。是れ眞に貴ぶべき者のみ。余嘗て古今を通觀するに、清平無事には忠を説き忠を稱し、其の言、義に據り、其の行、仁に類すること、堂々乎として君子人なり。一旦變起らば、謠言橫行、君を後にし親を連れ、自ら以て計を得たりと爲す者、史冊に相逐む。隆冬の茂、歲寒の操、松下の人、當に勉勵して以て邑里の顯を爲すべし。然らずんば、綠野の堂たる、特に謂れなしと爲すなり。昔唐の裴晉公東都留守たりし時、嘗て綠野堂を治め、野服蕭散、從容として自ら親む。然れども其の起つて丞相となるや、淮右の功、碑に勳して誅頌し、萬古不朽なり。予に大小あり、位に崇卑あり、晉公まだ最ひ易からざるなり。然りと雖も、已れを修めて時を待ち、節を勵まして國に報ゆ、其の意何を以て異らんや。安政丙辰、隆冬の日、二十一回猛士撰す。

浮屠清狂に興ふる書

之、（一） 通稱
 之、（二） 通稱
 之、（三） 通稱
 之、（四） 通稱
 之、（五） 通稱
 之、（六） 通稱
 之、（七） 通稱
 之、（八） 通稱
 之、（九） 通稱
 之、（一〇） 通稱
 之、（一一） 通稱
 之、（一二） 通稱
 之、（一三） 通稱
 之、（一四） 通稱
 之、（一五） 通稱
 之、（一六） 通稱
 之、（一七） 通稱
 之、（一八） 通稱
 之、（一九） 通稱
 之、（二〇） 通稱
 之、（二一） 通稱
 之、（二二） 通稱
 之、（二三） 通稱
 之、（二四） 通稱
 之、（二五） 通稱
 之、（二六） 通稱
 之、（二七） 通稱
 之、（二八） 通稱
 之、（二九） 通稱
 之、（三〇） 通稱
 之、（三一） 通稱
 之、（三二） 通稱
 之、（三三） 通稱
 之、（三四） 通稱
 之、（三五） 通稱
 之、（三六） 通稱
 之、（三七） 通稱
 之、（三八） 通稱
 之、（三九） 通稱
 之、（四〇） 通稱
 之、（四一） 通稱
 之、（四二） 通稱
 之、（四三） 通稱
 之、（四四） 通稱
 之、（四五） 通稱
 之、（四六） 通稱
 之、（四七） 通稱
 之、（四八） 通稱
 之、（四九） 通稱
 之、（五〇） 通稱
 之、（五一） 通稱
 之、（五二） 通稱
 之、（五三） 通稱
 之、（五四） 通稱
 之、（五五） 通稱
 之、（五六） 通稱
 之、（五七） 通稱
 之、（五八） 通稱
 之、（五九） 通稱
 之、（六〇） 通稱
 之、（六一） 通稱
 之、（六二） 通稱
 之、（六三） 通稱
 之、（六四） 通稱
 之、（六五） 通稱
 之、（六六） 通稱
 之、（六七） 通稱
 之、（六八） 通稱
 之、（六九） 通稱
 之、（七〇） 通稱
 之、（七一） 通稱
 之、（七二） 通稱
 之、（七三） 通稱
 之、（七四） 通稱
 之、（七五） 通稱
 之、（七六） 通稱
 之、（七七） 通稱
 之、（七八） 通稱
 之、（七九） 通稱
 之、（八〇） 通稱
 之、（八一） 通稱
 之、（八二） 通稱
 之、（八三） 通稱
 之、（八四） 通稱
 之、（八五） 通稱
 之、（八六） 通稱
 之、（八七） 通稱
 之、（八八） 通稱
 之、（八九） 通稱
 之、（九〇） 通稱
 之、（九一） 通稱
 之、（九二） 通稱
 之、（九三） 通稱
 之、（九四） 通稱
 之、（九五） 通稱
 之、（九六） 通稱
 之、（九七） 通稱
 之、（九八） 通稱
 之、（九九） 通稱
 之、（一〇〇） 通稱

秋良敦助國に歸り、上人の書を獲。上人道候安寧にして、歌舞懽懽し、京洛爲めに噪
 しきを寧かにす。就中、月波樓の紅燈を斫り、順正書院の俗儒を走らせしは、奇壯兼
 を壓せり。當今歐歌して墨舞する者、何ぞ獨り一水竹のみならんや。上人固より將に
 往（一）、祈願して遺すなからんとす。是れ之れが兆たるなり。然れども僕謂へらく、墨舞
 する者は水竹なり、紅燈何ぞ知らん。上人怒を遷して之れを斫りしは、失刑を免かれ
 ざるなり。但だ俗儒操校し、同流合汙して、天下の大計を害する者、是れより甚だし
 と爲すなし。上人一喝して其の膽を奪ふ、僕安んぞ敬服せざるを得んやと。上人僕を
 愛すること過甚。拙文を以て、諸家に示して批評を求めらる。梅東君の評先づ成り、
 我らるるを辱うす。君は僕に於て半面の知なし、而も誘誨婉切、人を棄てずと謂ふべ
 し。其の期せらるる所の功を立て言を垂るることは、虎猪の性、能く企つる所に非ず。
 況や其の幽囚世と謝し、師なく友なく、以て磨勵するに由なきをや、悲しむべきのみ。
 然れども幸に誨誘を辱うす。退いて自ら朴を削り璞を攻き、冀くは以て少しく梅東
 の言ふ所に當るあらんのみ。上人前日託する所の松崎生、一たび去つて乃ち秋良の救

むる所となる。秋良は若男子なり、生靈し安んじて樂しまん。人情勝を厭ひ諱に曉ることを、大抵かくし如し。唯天上人察せられよ。平宣。十一月念四日、裴白す。

萱生玄韻を送る鼓

吾等の音生詩は、情韻の衡に精し。今有事ありて吾が藩に來り、留連すること數月、まづに臨みて聞く諸家の贈言を需む。秋良救助余も亦一言せんことを惜し、且つ爲めに吾の詩を示す。余は復敗の餘、將に何の言ふ所あらん。然れども其の詩を讀み、其の人を想ふに、盛感を振ひ、而して離處を減さんとする、志氣甚だ壯なり。吾れ安んぜ一言を爲さざるを得んや。

表れ文船巨艦は一擧にして千里、長風に駕し滄溟を走る、快と詔ふべし。而るに人は彼らに其の快を見て、而して其の然る所以を察せず。吾れ曾て船工の爲す所を觀るに、柁を握り器を利くし、分寸を執し、錨、碇を張し、外周にして内密に、傾側あるなく、相乾帆樞、缺損あるなし、其れ然る後に快なり。願ふに君は素より其の衡に精し、何

を獨り以て其の大を喻らざらんや。船艦は小物なり、而も尙ほかくの如し。況や宇内の大なるをや。若し或は精をここに致さずんば、則ち臯威未だ振ふべからず、龍虜未だ滅すべからず、而して覆敗之れに徒ふこと、余の如き者はこれのみ。是れ何を以てか、船艦を以て、以て千里の快を貢るに異らんや。抑々余は之れを吾が師に聞けり、
「宇内の形勢、軍艦に一變し、火輪船に再變す」と。噫、船艦の小物も、關係するこ
とかくの如し。然らば則ち神州の興隆するも、亦安んぞ蒼生若の遺骸の精より始まら
ざるを知らんや。余は君に於て會て半面なし、獨り其の救助を喜めるを聞くのみ。始
く海言を談して以て贈と爲す。

外征論（第三回）

夫れ坤輿の形勢は、合せざる能はざる者あり、合はせざるべからざる者あり。我が奥
越の如きは、地脈接續し、合せざる能はざる者なり。三韓・任那の諸蕃は、地脈接續
せずと雖も、而も形勢對峙し、吾れ往かずんば則ち彼れ必ず來り、吾れ攻めずんば則

ち、假れ必す腹ひ、常に不測の憂を醸さんとす。是れ合はせざるべからざる者なり。然れども合はせざる能はざる者も、合はせざるべからざる者も、之れ合はせざる必す合す。後の人、徒らに其の今を見て、而して其の昔の得失を思はず。合せざる能はざる者の已に合せるを見て、曰く、「合はせすと雖も亦合するなり」と。合はせざるべからざる者の未だ合せざるを見て、曰く、「合はせすと雖も合せざるなり」と。非なり。吾れ謂へらく、三韓・任那は、合はせざるべからずして、而も之れを合はせば必ず合する者なりと。

羅國の東議を穿むる、善れ間然するを得るなし。獨り三韓を治むるに至りては、未だ嘗て得失なくんばあらざるなり。神功西朝の威力を藉り、一舉にして新羅を服したまふ。新羅既に服したれば、則ち兵を收めて復た窮追せず、賁子（キム）を納め、貢額を定めて、百濟をして、風を望んで降らしめたまひしは、得なり。已にして勳舊の武内を遣して四海を按察し、以て遙かに三韓を制せしめたまひしも、得なり。然るに畿内之れに入り、其の任久しからずして則ち之れを失ふ。後府を任那に置き、以て三韓を驅

彼等しは、最も得なり。雄略の八年、高麗を破りし事、以て觀るべし。又其の後太宰府を置き、其の任を重うして其の權を假し、九國二嶋の力を以て諸蕃を屈服せしは、其の得、此内の事の如く、而して歷世沿うて改めざりしは、則ち最も其の得を觀るに足なり。但だ後世衰弊日に甚だしきに至り、吏を選ぶこと精ならず、而して諸蕃稍偏りて、則ち之れを失へり。

凡そ諸蕃の狀、高麗・新羅は往々偏強にして、隣國を寇攘す。百濟・任那は則ち柔懦にして立たず、常に吾れを恃みて以て難を解く。而して吾れ海を絶り軍を差して、罪を討ち能を敷ふには、軍衆からざるを得ず、將軍からざるを得ず。意ふに當時の議或は其の星大倭はざるを恐るるものありたらん。故に諸將も亦朝廷の旨を倣ひ、專擅の權を慮り、勿々に局を了し、率ね周旋ならずして還り、徒らに一時の勝を事とし、復た久遠の計なし。故に彼の我が兵を觀ること猶ほ暴雨のごとく、暫く其の銳を過ぐるのみ。撤古の、臍手を遠されしは、ここに見たまふことありしか。^(三)來日の未だ至らずして薙じたまひ、^(三)當麻の行くを果されざりしは、誠に惜しむべきなり。然れども

其の國を治めんとたまひ、權奸道に當り、而も既尸の心測るべからず。則ち二皇子を
遣さるるの事も、亦安んを其の權る所の言を云るに非ざるを無らんや。嗚呼、天地位
を失ひ、國治序を失すれば、則ち動いて國ならざるなし。重なり、其の事の遂げられ
ざるす。

夫れ能はて之れを懼け、威以て之れを畏れしむるは、夷を服するの常法なり。任那府
をして、倭武の如き此國の如きの將を置き、其の任を重うし、其の權を假し、兵以て
臨るに足り、餉以て食するに足り、專ら其の民人を愛養し、任那・百濟を懷柔して、
敢て離離して之れに臨まざらしめば、則ち新羅・高麗も、亦將に吾が德に懷かんと
す。若し尙ほ迷順にして命に抗せば、則ち任那・百濟を率ゐて往いて其の罪を問ふ、
誰れか吾が威を畏れざる者あらんや。唯だ其れ然る能はず、故に吾れ罪を討つ、彼れ
已に威を畏さず。而して急を救ふも、彼れ亦德と爲さず。日羅の敏達に答へしも、亦
當時の失を見るあり。平筆にして害に遭ひ、其の筆用ひられず、深く惜しまざるべ
けん。百世の後、豐太閤の韓を征せしは、平世出の才を以て、未曾有の事を爲せる者

と謂ふべし。細れども確だ能く之れを捉らしむるありて、徳以て之れを懐くゝたゞ、
余は世ざるべからずして、之れを合はせば必ず合する者も、遂に合せず。悲しい哉。

武教全書講錄

武教全書講錄目次

小序	二〇七
開講大意	二〇七
武教小學序	二〇九
以起夜寐	二一四
處居	二二一
言語應對	二二四
行住坐臥	二二七
衣食居	二三二
財寶器物	二三七
飲食色欲	二三九
放曠誇顯	二四一
與受	二四四

武教全書講錄

二〇六

子集

二五四

目錄

二六三

武教全書講録

(一) 武教全書
 卷一 論武教
 卷二 論武教
 卷三 論武教

余文學を襲し、幼より山鹿先師の書を読み、今日に至る。然れども材力薄劣、思慮膚淺、能く其の精義を發明すること能はず。頃ろ親戚子弟の請に應じ、武教全書を把りて、略講一過す。其の間自ら戒め、又子弟に絶々する所以の者と、兵勢事務、的切緊要の論とは、他日放失あらんことを慮り、皆存録して考索に備へ、且つ後來發明の基となさんと欲するなり。其の一を擧げて百を廢する如きは、是れ固より全きを要するの書に非ざれば、敢へて他人の笑罵を辭せざる所なり。

聞講主意

寛政三年丙辰八月二十二日と云ふ日を卜定し、諸君を會し山鹿先師の武教全書を聞講すること何たる主意なるぞ、各々能く考へ給へ。吾れも人も貴き皇國に生れ、特に吾

吾は武門武士たる上は、其の職分なる武道を勤め、皇國の大恩に報すべきは論にも及ばぬことなり。然れども、（二）人にも職分と國恩を知らぬ者はなければども、勤むる者と報ゆる者とは、古今に立りて善だ精なり。善の故由を考ふるに、勤むるも報ゆるも左近六ヶ實事には非ず。唯だ道を勤ると知らぬとなり。果して能く道を知らば、誰れか勤めざらんや、誰れか報いざらんや。されば道を知らんとあらば、能く先師の教誡を服膺し給へ。昔物も古今に多き者たるに、何故余が殊更に先師の書を信仰するかなれば、

吾が先師の教は此の書を見れば具さに知あることなれども、其の一編を云はば、先師曾て北庭（一）雲南等の宅へ召し出され、赤穂藩の命を承けられたる時の事を見ても、如何に日の覺悟新を知るべし。又赤穂の遺臣亡君の仇を復したる始末の處置を見ても、大石良雄が先師に學び得たる所知るべし。國恩の事に至りては、先師、滿世の書儒外國に貴み我が邦を踐むる中に生れ、獨り卓然として異説を排し、上古神聖の道を窮め、中朝事實を擧げられたる深慮を考へて知るべし。此の二事は、先日諸君と先師の配所（三）を會讀したるとき、口舌の焦爛するも繰り返し巻き返し説き續けたることなれ

（一） 是れ皇國の北庭、雲南等の宅へ召し出され、赤穂藩の命を承けられたる時の事を見ても、如何に日の覺悟新を知るべし。又赤穂の遺臣亡君の仇を復したる始末の處置を見ても、大石良雄が先師に學び得たる所知るべし。國恩の事に至りては、先師、滿世の書儒外國に貴み我が邦を踐むる中に生れ、獨り卓然として異説を排し、上古神聖の道を窮め、中朝事實を擧げられたる深慮を考へて知るべし。此の二事は、先日諸君と先師の配所を會讀したるとき、口舌の焦爛するも繰り返し巻き返し説き續けたることなれ

は、諸君固より已に胸中に存し居るべし。余は罪囚の餘にて他人に接すべき身に非ざれども、其の獨り自ら志す所は皇國の大恩に報い、武門武士の職分を勤むるにあり。此の志は死すと雖も濡れ敢へて變ぜず。今諸君、親戚の縁故を以て慈然として來り會す。吾國はくは國族相謀り、志を勵まし、先師の行實に負くことなからんことを欲す。昔、先師斯道を以て己の任とす、世の是非毀譽を顧みず、其の極亦穗に謫居するに至りてはむ。然れば吾が輩寧ろ志を斯道を衛るに屈まざるべけんや。是れ今日開議第一の主意なり、諸君能々思慮し給へ。

武教小學序

此の序の大意を能々呑み込み給へ。是れにて士道も國體も其の梗概を得べし。先づ士道と云ふは、無禮無法、粗暴狂悖の偏武にても濟まず、記誦詞章、浮華文采の偏文にても濟まず、眞武眞文を學び、身を修め心を正しうして、國を治め天下を平かにすること、是れ士道なり。國體と云ふは、神州は神州の體あり、異國は異國の體あり、

(一) 朱熹、

南唐の學者、

書の一にして

一般人の日常

心得べき修養

法徳書

異國の書を読めば是れ異國の事のみを善しと思ひ、我が國をば却つて賤しみて、異國を美む様に成り行くこと學者の通患にて、是れ神州の體は異國の體と異る譯を知らぬ故なり。故に晦菴の小學にて、前に云ふ士道は大抵始れたれども、是れは唐人の作りたる書ゆゑ、國體を解せずして遽かに讀むときは、同じく異國を羨み、我が國體を失ふ様に成り行くことを免かれざるを、先づ深く慮り給ふ。是れ武教小學を作る所以なり。これを以て國體を考ふべし。抑て菴の士道國體は菴だ切要の事なれば、幼年の時より心掛けさせ工夫すべきこと、是れ小學の本意にて、詰り志士仁人と成る様にとの教誡なり。是れ此の序の大意、即ち此の書の大意なり。

一士は、農工商の業なくして三民の長たり」と云ふ所へ、深く工夫を凝し給へ。此の意味或子にも圖りてあり、誠心上篇に云はく、公孫莊曰く、「詩に曰く、素餐せずし。君子の居さずして食ふは何ぞや」と。或子曰く、「君子の是の國に居るや、其の君之れを用ふれば安富尊榮、其の子弟之れに従へば則ち孝弟忠信、素餐せざることを孰れか是れより大なる」と。又云はく、王子學問うて曰く、「士は何をか事とする」と。孟子

(三) 第三卷
所載。この中
書心上篇第三
十三章の處參
(四) 爲政篇

(五) 伊尹語
伊尹の二篇

曰く、「志を尙^たうす」。曰く、「何をか志を尙^たうすと謂ふ」。曰く、「仁義のみ」と。余曾
て論孟餘話中に於て略ぼ是れを辨ず。又士は主・將・士へ係ることなるが、平士を以
て治國平天下を任ずること、過信の様に聞ゆれども、論語にも「兄弟に友に、政ある
に歸す。是れ亦政を爲すたり」と云ふことあれば、一家と國天下と原^{もと}と是れ一串の事
なり。且つ大學の書は、古の大學にて、大夫元士の適子、凡民の俊秀迄を教ふる所な
れども、其の終亦治國平天下に及べり。これを以て知る、僅かに士となりて農工商の
間を離るれば、直ちに治國平天下迄へ心を配り、世の治安、政の和平を輔佐し奉るの
誠心たくては時はぬことなり。抑^(五)二尊の萬物を生み出し給ひし時、天下の主たる天
照皇太神を生み給ふ。夫れより數千萬年を経て、皇太神の子々孫々總々^{じようく}繩々として
天地と窮りなく、天下の主として萬物を統べ治め給ふ。而して萬物中にて最も靈なる
は、人民に如くはなし。人民は靈物なれば衣食を生ずるあり、宮室器用^{きよう}を造作するあ
り、此の二物を有無交易して融通せしむるあり。是れ皆各、其の職ありて互に利し互
に益して世を涉る者なり。士たる者は三民の業なくして三民の上に立ち、人君の下に

(一) 武庫の
全書選錄

(二) 武庫の
全書選錄

國り、野原を蔽ひて民の爲めに災害轉輸を防ぎ、財成轉輸をなすを以て職とせり。而
るに事の上たる者、民の膏血を斂り、財の依縁を握み、此の理を思はずは、實に天
の賊長と謂ふべし。此の處人々自ら考へ、三民の長たるに負かぬ如く覺悟し給へ。^(一)
齊宣王問孟子、^(二)齊宣王の秦威儀の後に朝し給ふ中に云へり、「君は國の幹、民は國の本、
民は野民の間に在りて、君をして仁に、民をして義に勤めしむ。而して美は則ち之れ
を君と民とに屬して、柄は己れに收む。朝儀此れに因りて亂れず、治新此れに因りて
是に明かなり。是れ人臣の上に奉ずる所以たり」と。實や平放たりと雖も、遠くは先
師の意を思ひ、近くは先考の訓を仰ぐ。而して賊民となるに安んぜんや。

「是は物に執り細を執さんが爲めにして、異國の俗を效はんが爲めに非ざるなり」と
云ふ處亦尤も思ふべし。格物致知は大學に見ゆ。其の詳説の如きは山鹿語類卷三十三、
聖學一に具す、讀いて見るべし。又上文に究理と云ふも此の事なり。漢主にて外國を
探へて其の國を奪みて自ら中國と稱むを見ては、内を奪みて外を賤しむの理を悟り、
我々邦の中朝と尊むべきを知り、漢主にて天子を尊み宗廟社稷を重んずるを見ては、

本に難い理を破するの理を悟り、我が天^(四)七地五より代々の聖帝を尊むべきを知る類、
 是れ究理の學なり。若し乃ち漢籍を讀みて、漢土を羨みて我が國を遣れ、漢土の帝王
 を尊んで我が國の神祖を疎かに心得る類、是れ哲理を究めざるの弊なり。何事に使ら
 ず形跡に拘泥せずして、神理を會得すること要にて、禮義作法に於て尤も其の理を思
 ふべし。禮義作法は總べて君臣の義、父子の親、夫婦の別、長幼の序、朋友の信に落
 着することなるに、其の所へは長^ナづて心付かずして、威儀容止の節、宮室衣服の制等
 の類事に拘ること、是れ大いに誤なり。且つ西蕃騎使の儀の如き、原^ハと指是れを以て
 國體を固き國體を防ぐの器械なれば、其の理蔽にあり。其の理を知らずして是れを學
 ぶ者は、萬民の輿論^{イロ}を羨みて、吾が國體を忘るるに至る。其の理を知らずして是れを
 誦む者は、是れを以て妖妖邪邪に比するに至る。是れ吾一編の見にして並びに非なり。
 神州の大體を尊し、萬國の器用を採用すること、漢土聖賢の書を講究して、我が國忠
 節の行を尊くると、事の大小は異れども、畢竟同様究理の學なり。又一「祭禮を爲すに
 禮儀を用ふ」の一事の如き、^(五)宣文丙午、先師父の靈に居り、子弟を遺育する中に云ふ、

一、（さうめん）浮屠を信すべからず。浮屠輕易にして（しやうこん）輕微を奉るにし、悉く聖人の
勸に（しん）應ず。然れども世尊之れに従ふ。然らざれば乃ち公門に嫌あり。故に大抵
多く浮屠の説に従ひて可なり」とあり。是れ等を以て先師の斟酌精密なるを知るべし。
是れ電燈の一端と修すべし。

風起夜寐

風起夜寐を以て一篇の標題とす。知るべし、此の篇武士一日中の教戒洩らす所なく、
且つ下諸篇の綱領たることを。而して其の著實切要復た辯を費さず。只だ句々是れを
身に行ひて已が徳を成すべし。一、平旦の氣を養ふは委しく孟子告子上篇に見えたる
語りにて、即ち所謂清静の氣を養ふの（云々）工夫なり。凡そ人は清静の氣なければ、才
も智も用に立つ者に非ず。此の氣は血氣客氣に非ず、人の本心より（おひざん）電然として湧出し、
何如なる大激猛勢にも懼れず、小敵弱勢をも侮らず、何如なる至艱大難をも恐怖せず、
寔安勇健にも（おひざん）懈せず、確乎として守る所あり、奮然として勵む所あるの氣是れなり。

清静の氣を養ふは平旦の氣を養ふより始まる。「夙に起き（いふく）盥（あら）ひ、嗽（くさく）ぎ、櫛（くし）り、衣服を正し、用具を佩ふ」。皆平旦の氣を養ふの方法なり。「君父の恩情を體認し、今日の家業を思量し、孝の終始を觀る」に至りては最も養氣の根本なり。其の下云ふ所、「家事、賓客、對に事へ、父に事へ、長に侍し、友を會し、行を顧み、書を披き、夜の戒を遠す」に至る迄、終日の事一として養氣に非ざるはなし。「寢所に入り氣を休め體を寛やかにす」に至りては、又明日の氣を預め今夜より養ふ所以なり。此の工夫を積みて、終始少しも懈怠（けんたい）なくんば、清静の氣果して及び難からず。

「君父の恩情を體認する」は是れ忠孝の本なり。「今日の家業を思量する」は是れ武道の本なり。先師人を教ふる、忠孝武の三道鼎立を以て示せり。然れども忠孝は即ち武なり、武は即ち忠孝なり。忠孝を心に存して體とし、武を以て行に發し用とすと云ふて可なり。武は所謂武止の武にして文武の統名なり、彼の偏武の謂に非ず、又腐儒の知る所に非ず。武の眞理は武教全書の前（まえ）に於て委しく考ふべし。

此の篇「士の正義」と云ひ、「義不義の行」と云ふ。其の他諸篇毎々義を擧げて教と

す。愛師見主へ廻さるる目的全く義の一字にあることなり。武士は武勇を以て主とすることなれども、勇の弊は或は暴戾に陥ることあり。是れを濟ふは義に如くことなし。此れは然るに義を結む。柔は暴戾と云ふには非ずれども、柔の弊は毎に濫殺事に及ばず、豪情に陷溺する者なり。是れを振ふは義に如くことなし。此の義は事の宜しきに就きて、所も暴戾濫殺を以て用となすことなれば、暴戾豪情の致すべきに非ざるなり。而も一應く信あつて偽らず、常に主の正義を思ひて解るべからず、是れ交を全くするの道なり」と云ふ言、深く此の意を尋ねべし。戦國の習として、武勇の解動もすれば粗雑兇虐に陥り、横綱の無恥、諷咎などより喧嘩鬪争を生じ、人を打ち殺し、夜行すること多し。其の風を師の跡迄は専ら世に流行せり。是れ暴戾濫殺情、無義無恥の風よりは遙かに勝りたれども、大丈夫國に許す所の堂々たる六尺の身を以て、區々私忿の爲めに碎折するは、誠に不忠なることなり。忠義の士是れ等の弊に處するは、信と正義を以てするの外はなし。己れの情を以て人の偽を正し、己れの正義を以て人の不義を正し、夜白片時も懈怠なくんば、粗雑兇虐の夫と云へども心折意振するの暇

あれぞんとす。夜を全くするの道、何ぞ是れに加ふる者あらんや。然れども今余が
目中復た數回根株宛展の夫を見ることなし。世反つて信と正義を持する者を畏れ忌み
て、目して根株宛展とするに至らんとす。世道の變實に嘆息に譬へざることなり。

此の篇の主意は、士たる者、風起より夜寐に至る迄、片時も空閒無事にして居らぬ様に
との教たり。諸君年少、吾れ此の篇に就いて一細書を下して、相共に茲に従事せん。

「閑なるときは則ち今日の行事を顧み」の一語を見よ。顧みると云ふは過ぎたる事を
回顧することなり。過ぎたる事を回顧するは冊記に如くはなし。顧はくは今日より更
始し、各人一語を作り、日々の行事を詳録し、會期に當りて必ず携へて席に上り、
各々相叩對するの一端とたさんと欲す。體成らば表紙に「身懷髮膚受之父母、不敢
毀傷、孝之始也。立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」の二語を題し、
此二語を以て、其の下已れの姓名を書し、筆押に沾するに鮮血を以てし、以て信記
とし、日々是れに對せば、是れ亦「觀るべし」の教にも叶ふべし。「總に善俗なく、
世に國政之とき」は先師の要とする所なり。今、余が不徳不才、何ぞ遽かに教の誠否

を云ふに足らんや。然れども先師の諷刺具さに存して此の善にあり。諸君と磨勵して是れに従事せば、明察より及ぼして一郷の善を善くするに足らざらんや。若し果して天下の善を成すこと能はずんば、先師の英靈寧ろ吾が輩を咎め怒らざらんや。諸君以て何如とする。

「凡そ仕官の道は、朝に出つるときは人に先ち、夕に退くときは人に後る」。此の一語甚だ酒此に似たれども、極めて意義あり。仕官の人能く是れを服膺せば、亦守職の吏と云ふべし。出入先後の事は端く一隅を擧げたるのみなり。凡そ人の情、大抵因循苟且、難を厭ひ煩を嫌ふ者なり。今一難事あり、必ず人に先ちて是れを任じ、一煩事あり、必ず人に後れて是れを了す。此の心を持ちて諸事に當らば、職を奉じ君に事ふる、敢て人に後れんや。職に臨みては必ず人に先ちて難となり、戦敗れては必ず人に後れて恥となる。又何ぞ古武士に愧づることあらんや。家兄云ふ、「己酉の歳、明倫所再興、余初めて微官を得て館中の吏たり。因つて故の中谷翁を見る。翁時に益田玄藩に屬し再興の事務を理す。翁云はく、『俗吏多く言ふ、當番缺くとも非番詰める

(一) 杉梅大

翁云はく、『俗吏多く言ふ、當番缺くとも非番詰める

翁云はく、『俗吏多く言ふ、當番缺くとも非番詰める

翁云はく、『俗吏多く言ふ、當番缺くとも非番詰める

なと。此の語の心は、重負事を處すれば過誤も出来る者なれば、大抵は人に譲りて已
れは事重きざる如くし、功名を求めず、過誤を免かるべしとの意なり。然れども吾
が意獨り以て然らずとす。當番の缺くべからざる固よりなり。乃ち非番と云へども亦
敢て自ら暇逸せざるこそ精勤とも奉公とも云ふべし。事を爲さずして過誤を免かる
るは、何を事に鍊れて過誤なきに若かん」と。家兄深く以て然りとす。是れより官事
を處する、務めて人後に落ちざらんことを志す」と云へり。余も亦明倫館轉興の事に
關りて初めて箭を知る。書生多く箭の大體に通ぜずして、俗習多きを譏る。然れども
余箭の言面を見るに、動もすれば即ち古義に合ふ。且つ其の事を處して精厲たる如き、
今世の吏、余未だ其の比を見ず。自ら云ふ、「人と期して未だ嘗て人に後れず、大抵
人に先つこと半時許りなり。官船に登る、亦未だ嘗て人に後れず。壯歲以來、夜臥未
だ嘗て二時に過ぎず、即ち起きて事を處す。事なければ必ず一事を假設して是れを思
ふ」と。余辛亥の歲東遷、公船に従ひ箭と同行す。箭毎夜宿に著き多くは官事を理す。
事畢り一睡し即ち起きて装束を束ね坐睡するのみ。箭常に云ふ、「武士たる者は人の爲

めに窮乏を擇かれては淹まぬことたり」と。ここを以て熱蘇の時と云へども、一呼必ず興む。蓋し窮心社常々惶々、故に能く斯くの如し。他なし、是れを以て官事に當る時、然れども是れ獨り官政のみに非ず、武士道の兼磨、亦實に茲にあり。

「士卒の體を安んぜしむ」の事、語類卷十二、世道十二、治談下、主僕の居相遠ざくる語下に論ず。云はく、「或人、師の居所、下人の居所を準、作れることを尋ぬ。師曰く、人必ず屈伸あり。屈伸するに節を失ふときは、草臥まじき時に勞るる者なり。

且つ下を見ること賢人聖人を以てすべからず。故に主として、臣の晝夜となく勤めんことを求め、作相の正しきを守り慣まんことを求むるは、君臣の情相背くの所以なり。徒に下として上に拜ることあれば、其の法令を輕んじ、眞の時禁嚴の心薄し。ここを以て予が草屋の間、膝を穿るるにたれる所にも、下人の居所を造くして、其の志を寛かにす。而して教ふべき或むべきことをば、怠らずして糾明す。但だ彼が閑居して軍議をなさんには遠きに利あるべければ、節を計りて度々改め糾明するたり」と。先師の事々心をを用ゆるの親切、斯くの如し。後學宜しく此の意を奉承すべし。

燕居

(一) 卷八
劉勰

小學の書、首篇を綱とす。以下八篇、大抵其の目なり。而して此の篇、特に首篇中より典義の士を抜き出して、詳かに是れを論ず。八篇中に在りては又其の要たり。凡そ武士一日の事、諸士に謁し賓客に對するの外、武藝を習ひ、武義を論じ、武器を關するの三事に過ぎず。武士誠に此の三事を以て日々の常職とせば、武士たらざらんと欲すと雖も得べからず。其の才不才、智不智に至りては強ひて論ずるに足らず。抑、余仰きて^(二) 今公の政教を察するに、一號一令悉く此の三事に非ざるはなし。就中學政更張、武備修理の舉に至りては、其の旨最も昭々にして、閭閻の士孰れか是れを知らざらん。然るに尙ほ^(三) 是は閑居の士ありて、往々不善を爲し、政教を害し、罪戾に陷る者あり、實に無懼に堪へざる事どもなり。是れ人々自ら省察^{省察}悛改^{悛改}せずんば明君に負くも亦甚だしからずや。三事中、武藝を習ふは技藝を巧にして名譽を求むるに非ず。手足を自由にし、骨節を便利にし、身軽く體馴れて、只今にても戦場に臨み、刺撃の技藝に兼支

(一) 進修行
の次第

ふることなき如く、夜白に修練することなり。今世の武藝は一種器械の技法となる者多し。身を戰場に饒きて願日工夫するに非ずんば、何ぞ其の進級たるを知らんや。武藝を論するは固より書を抜いて精讀することなり。然れども讀書の弊最も多し。或は風情を慕ひ、或は時勢に阿り、或は浮華に趨り、或は文采に流るるの類枚舉に難はず。只此武藝の二字を眞切に心に留めば、萬弊自ら除き大裨益を得るに至らん。武器を閲するは武士の一要務なり。甲冑ありても**絨絨**は切れ、鐵砲ありても**玉藥**は虚しく、槍刀は多く其ふれども**訓練**して用をなさず、**容狀**は多く積みたれども軍用の正金は貯へぬ類、皆是れ平日武器を閲せざるの過なり。此の三事皆積累の空談に非ず、宜しく逐一に點檢工夫を加ふべし。武士たる者、明君に報ずる所以斯くの如くにして足れりと云ふには非ず。然れども燕居の士是れを捨てば、明君に報ずる所以別に一事あることなし。

「四十に至るを強仕の年と爲す」と云ふこと、**禮記**内則の制に據れば、二十にして冠す。是れより前、六年、九年、十二年と各々教學するの品節あり。已に冠するに至り

一、（一） 學問の
 進歩に出づ
 一、（二） 學問の
 進歩に出づ
 一、（三） 學問の
 進歩に出づ
 一、（四） 學問の
 進歩に出づ
 一、（五） 學問の
 進歩に出づ
 一、（六） 學問の
 進歩に出づ
 一、（七） 學問の
 進歩に出づ
 一、（八） 學問の
 進歩に出づ
 一、（九） 學問の
 進歩に出づ
 一、（十） 學問の
 進歩に出づ

では専ら博學を勤め、未だ成へて人に教へず。三十に至り始めて業ありて家事を治む。
 四十に至り則ち又博學を勤め、朋友互に切磋し、志を擧げて相示す。然る後四十に至り
 始めて仕ふ。然れば大凡十歳前後より四十歳比迄、三十餘年中學問を勤む。而して其
 間最も自ら勤むことは中十年にあるなり。（一）而して又「仕へて優なれば學が二
 の調あり。」「（二）」（三）の友人の曰く、學三十年なれば則ち以て達すべし」と。
 然し内則の意なり。又和蘭が志に、「古は八歳小學に入り、十五大學に入る」又、
 「三年にして一藝に通じ、三十にして五經立つ」と云ふも相照らして考ふべし。（四）
 其の博學の日斯だ所し、且つ其の學たる、古人大體を存し經文を玩ぶの如きに非ず、
 然る後遂にして大義大節に暗し。宜なるかな、巨擘類學其の人に乏しくして、事々苟
 且以て一日を過ることも、然れども是れ人々の志にあることなれば、今に當り内則を擧
 げて空等とすと云ふとも疑なきことなり。或ひと云はく、「（五）」に男子は三十にして
 業あり、女子は二十にして嫁すと云へども、歷代の律、乃ち男子十五、女子十三、嫁

變を許す者は何をや」と云はく、是れ庶人の制のみ、庶人の範圍より斯くの如くにして是れり。今有志の上有用の學を勤め、有爲の材を成さんと欲せば、自ら内則の制に提げざることを得ず。且つ仕宦の如き、尋常一様、術術の事を成すは何ぞ必ずしも箇中を待たん。是れ子孫の業を考へて、弱冠たりと云へども、官途を経せしむべしと云ふ所以なり。凡そ教訓の言、人を待つに尋常を以てするあり、人に望むに絶學を以てする者あり、聽き語き、心を付けて見るべし。余が講ずる所と云へども、自ら二つの者の間なきことを得ず。讀者自ら待つに尋常を以てせんか、絶學を以てせんか。是れ其の擇ふこと何如にあるのみ。是れ尋常と絶學、其の間に在りては待つに兩方の間なきなり。此れ其の擇むこと何如にあるのみ。

言語應對

此の篇は切實なり。熟讀して心に載し、一言一語、一應一動、替りくも是れを忘るることなくんば志士と云ふべし。大要三件なり。古風軍賓等の禮に通じ、各々其の詞の品則を考ふる事第一件なり。常に語るべきの事第二件なり。斷て語るまじきの事

(一) 武教全

(二) 有地御

(三) 有地御

(四) 有地御

(五) 有地御

(六) 有地御

(七) 有地御

(八) 有地御

(九) 有地御

(十) 有地御

(十一) 有地御

(十二) 有地御

(十三) 有地御

(十四) 有地御

(十五) 有地御

(十六) 有地御

(十七) 有地御

(十八) 有地御

(十九) 有地御

(二十) 有地御

第三件なり。首に「言語正しからず」と云ひ、「柔弱」と云ひ、「鄙劣」と云ふをも、

有此の三言へ係けて見るべし。第一件の事は全書中に在りて、軍禮・斥候・侍用武功

等に載する所の軍訓をも考ふべし。又本書の事は布施氏の訓子帖の如き、淺近と云へ

ども、初學の觀るに簡便なり。此の外類を推して、禮法古實等をも究むべし。畢竟多

聞多識に若くはなし。然れども、是れ皆大關係あることに非ず。若し乃ち他邦の使者

に應對し、又は他邦に使し、或は海外夷狄に使する如きは、亦皆謂賓客中の一事にし

て、是れ獨り甚重の事なり。何となれば、一言の下に國の榮辱輕重に關り、或は兩國

の和誼好戚をも起す者なれば、深く思慮せざるべからず。余曾て漢士の事蹟を據りて

事使抄を作る。亦是れ應對の一變に備へんと欲するなり。この類圖より竊機應變ある

ことにて、膠柱鼓瑟の及ぶ所に非ずと云へども、余頗る論述する所あらんと欲す。今

茲に贅せず。又第三件の事は、圖えて語るまじき事なれば論ずるに及ばず。第二件の

事は、書を讀み武義を論ずる内の事なり、其の事件千百限りなし。今漫りに一二事を行

引きて是れを云はんに、雖小義の論は、上世至治の時は天下皆王命を奉じて王事を行

二王と行打は、諸の國の地をたふことたり。其の中にも、（イ）武臣の傳説を擧し、（ロ）武臣の
 大業を述し、（ハ）武臣の神託を承る如きの類、義名の跡々たるは當一時的變たり。而して
 是れ等の事、武臣の世に於多くあることなり。其だ後鳥羽・後醍醐二天皇の北條を討
 じ、つひ、つひに後醍醐の末年に至りては、高氏別に天子を擁立し兩統相争ふの難をなし、
 是の故に武臣の跡を挽ひ、天下の人心を離れせしに至れり。是れ義不義の論ある所なり。
 官軍の進にして武臣の不義なる事、朝上の論にては明白たることなれども、當時に在
 りては利害成敗に關せず、多くは義不義の論に及ばざる有様なり。時代武義の盛衰
 は、悉くも武臣の目より重を決して、觀る水師を率ゐる更征し、遂に朝を大和の橿原
 に定め給ひしより以來、崇神天皇は四國將軍を置き給ひ、景行・仲哀二天皇は親も親
 親を征伐し給ひ、神功皇后に至りては海外迄も親征し給ふ。爾後事起れば皇子或は重
 臣に命じて討せしめ給ひ、其時常に朝廷に在り、武威常に海外に振ふ。是れ武義の盛
 なり。崇神・神功・神武三朝は武臣の權を横擧して、今日に降りては海外の型夷を討つて來使す
 るに至る。是れ武義の衰なり。此の事變は其の最も大にして、其だ武臣の盛なり。其の

(一) 論語集注
 (二) 吳子
 下論第四に

問曰、小義小義、小義小義は限られたることにて、「古戰場の事、勇義の行」、各々是れに屬すること又限りなし。然れども此の類の事を懸案に論ずるは、古今史論家の常事にして、武士道に於て毫も裨益なきことなり。故に先師の教は、「議論して今日の非を戒むべし」とあり。嗚呼、高氏の通説たることは三歳の小兒も知りたれども、今日の非を戒むの言則して少なし。武義の衰へたることは五尺の童子も知りたれども、今日の非を戒むる者幾も少なし。凡そ事類くの如くなれば、其の他の小義不義、小盛衰及古戰場の事、勇義の行に至りても、徒らに暇を費すするまでにて、毫も其の非を戒むることなく、神州今日の事に裨益あることなし。吾が輩猛省せざるべけんや。

行住坐臥

此の篇一の教の字を寫したる書なり。教の字は主一無通(一)しちちむさうなどと註して、道程先生は高上なる事に論ずるも、聖は乃ち他たり。武士道にては是れを覺悟と云ふ。論語に「門(二)を出ては文質を見ざる如し」と云ふ。其れ教を説くたり。吳子に「門(三)を出づるより

敵を見せしむと云ふ。是れ備を説くなり。並びに背覺悟の道なり。敵・備は忘
 れ反側にて、意は即ち油斷なり。武士たる者は行住坐臥常に覺悟ありて油斷なき如く
 すべしとなり。又一件に出づるときは則ち内を察るべし」と云ふも切要の語なり。前
 の國主君にも略ぼ云ひたるが、先師北條氏の宅にて、赤穂浪士の命を蒙られし時、
 三條氏より何事にて云ひ置かれ嘆き事あらは書き付けられよとて、硯箱を出させけ
 れば、先師笑ひて、「歳てより外に出づては内を忘るるべし覺悟はせし事なれば、今
 更云ひ置くべき事連は是れなし」と對へられしは、實に武士道の鰐鱗に非ずや。凡そ
 武士には是れ程の覺悟はなくては澄まぬことなり。語類、治談下に、人將（た）願命（の）の條あ
 り。大意に讀ふ、人將願命（の）の事、周書（しうしよ）に是れを出せり。然れども人の今日の言行悉く
 願命なれば、始終の時と云へども別に何事をか云ひ置かん。明君賢將と暗君愚將とは
 學生に定まることなれば、學生の言行各、其の遺命なり。幼主の輔佐、又は草葉の功
 業（の）金からずして身置り給はんには、願命の説なきにしもあらず。然れども是れ亦人
 を過ひて政を委任し、副君を輔佐せしめば、遺命なくとも可なり。太閤秀吉の重々遺

命せしも、無礙なく五奉行始め各々其の命を用ひざるに至れり。是れ平日の教誡録かにして、死後に執成せんとするとも稱かも立つべき様なし。平日の綱紀亂れて死後に綱紀を正さんとすると、絶えて行はるべき様なし。但し死は一生の終にして、人の死せんとする其の言ふや善きの例にて、子孫も遺誡と號して是れを守り事なれば、其の結要とすべき所を遺命するも一の教道たるべきのみと。是れ等の論實に前人未發の處にして、平生は覺悟ある人に非ずんば、安んぞ善くここに及ばんや。又行の一事に就いて説あり。「傳人に礙らず、非禮を爲さず、過言を出さず」の三語、血氣の勇者は血氣に懸いては服せざる事なり。血氣の勇者は兎角道中にて行人に礙り、非禮過言をなし、終には士平光を取り、面目を失ふ事多き者なり。此の風幕士の下卒などに多し。然れども是れ固より半平正の風幕原がゆすりの爲めにする事となれば、論するに足らず。但し雪々たる幕士として、却つて彼の輩と面直を争ふの癖ある者あり。是れ前之三語を深味せざるなり。凡そ幕士は隨分謹厚にして、非禮過言を慎み戒むるこそ、誠に長者の風にして、却つて大國の武威も顯はるるなれば、是れ即ち大勇の所なり。

忠臣蔵の梅元は村に出づより内を忘れ、門を出づるより敵を見る如きにあり。夫れは目内を忘れ、敵を見るの心對變むる時は、傍人皆我が腹内にあることなれば、前の河を渡りて復た小節小事を懐ふるに足らず。若し事に臨み萬々理勢の止むべからざる當る時は、直ちに我が大勇を奮發して、萬人立所に難易せざることたり、豈に是に半掌擊を難とせんや。必ず藩士の武風を天下に振耀して已まんのみ。是れ程の事なれば、當基に小節小事の爲めに振ふべきに非ず、此の事本論するに足ることなしと雖も、少壯無頼の士、動もすれば事を誤ることある者なれば、茲に論す。『用具を佩び、利圖を識らず、夜戒を暇にし、平康の度を忘れず』等の事に至りては、覺悟の細目にして戒と心が付くべきことなり。前に云ふ申谷翁の如きは、實に善く此の覺悟を得りたる人にて、感ずるに餘りあり。總べて古武士は是れ等の隙々を善く磨きたることなり。士風の衰微は是れを知つて是れ等の小事に著はるる者なれば、人々能く心を付くべきことなり。『行住坐臥、暫くも放心せば則ち必ず變に臨みて當を失ひ、一生の清勤、一面に於て閑濶す。變の至るを知るべからず』と云ふは、細行を怠まざれば、

説に實情を察せずと誤みと同一體の誤にして、最も誤謬たる語なり。余竊竊に於て兼
も大なる事を論じ、此の篇にては又小事を論ず、余考へて各々當る所あるを知るべ
し。抑、漢・魏・晉の事は、後漢に一武士の其の身を守る、宜しく然るべきのみに非
ず、古の明將將は是れを以て其の身を守り、又其の親類大臣を救め、又其の諸士を
威め、又其の庶民を救む。一人の心は千萬人の心にて、將將の心跡に在る時は、臣民
は是れごとく固より命令を待たずすることなし、慍慍して傳ふるよりも速かならん。是れ
武將の眞意なり。或して何らは東西南北を遊交し、觀すとも、其の相援ふや左衛の手の
如し。器械軍卒を控はらずとも、是れに半ばに過ぎん。若し然らずんば、器械軍
卒何程保はりても、譬へば物の大木の節に蟹を攻められて救はず、節に蟹を攻められて
蟹も固より節にて、何れ其の節を守ることを得んや。故に身を守るには、人に腹背
を露みれば亦如く心懸くべし。國を守るには、敵に要害を抜かれざる如く心懸くべし。
今武將の方法に安んずるに、人の平議を聽ふに暇みらず。無れども變は固より常に非
ざることをなれば、一變に至ること知るべからず。この謂、豈に苟且として可ならんや。

衣食居

此の爲に、川、海、陸を恥ぢ、居の安きを失ふるは則ち志士に非ず」と云ふ。是れ

清南の意を併めて一句となす。志士と云ふは即ち道に志すの士なり、即ち

君子なり。武門武士として武道を磨き、國家の洪恩に報じ、父母の美名を顯はさんと

心くる、是れ志士なり。士の志、苟も茲に専らなる時は、悪衣惡食何の恥づること

また、此の恥をさるに二様あり。一は身に道徳の重きを任じ、心に仁義の樂しみを

昔人云、衣食住、他の外物、善は心を動かすに足らず、又動かすに暇あらざる者あり

子路曰、(一)「(二)貧乏を去る者と並び居て恥ぢず、(三)顔淵の一簞の食、一瓢の

然して、陋習に就いて樂しみを改めざるが如きは是れなり。二は内面、恃む所あり、自

に代る所ありて、人の狐貉と膏粱を混まざるのみならず、反つて狐貉膏粱の人を混雑

しく思ふなり。曾子の「吾輩は富貴を以てし、我れば仁義を以てす」と云ひ、孟子の

「今聞廣君、仁義に飽きて人の文藝骨髄を願はざる」と云ふ如きは是れなり。武士たる

(一) 越前・
金沢、能登・
加賀、石川・
福井、滋賀・
京都、近畿・
書ける小説

(七) 瀬田・
仲山(字は子
路)、信樂・彦
根

書かれ極の志はなくては、武士と云ふに足らず。戯作本の誠意いろは文庫に載する所
い、大高瀬吾が四季の爆竹を賣りて、其角に一轡侍たる其の資財」と答へたる心事
と思ひ通して見よ。此の時に當りて豈に人の膏粱を顧はんや、豈に人の文繡を羨まん
や、又豈に懸衣惡食を恥ぢんや。乃ち顔・仲・曾・孟に謁するとも、露軀程も恥ぢ恨
めることなし、豈に愉快ならずや。「居の安きを求むる」の害に至りては、下文にも
云ふ如く「居安く樂美なるときは、則ち志、家を思ふに在り」の譯にて、最も武士の
思むべき所なり。又下の財寶器用(七)の篇に、「財寶を吝しみ、器用(七)を惜ばば則ち武
闘自(七)國如し、大節に臨みて殆ど家を忘るる能はず」と云ひ、及び「土器書軸銅鐵の
器を藏して之れを寶とし、千金を以て之れに易ふ、其の惑甚だしいかた」と云ふも、
ここに併せ論ずべし。夫れ屋宅に美觀を盡くし、居間、勝手、便所を構へ、床の置物
簾物、屏風障子等、名畫古器を集むる如き、武士の一隻眼に白まれば、其の人の心底
が洞悉して顯るるなり。商賈町人は是れにても苦しからず。苟も武士の籍に居る者
として覺る所行あらば、誠に恥ヶ敷事に非ずや。總べて衣食住共に武士たる者は、早

(二) 其て九
十、百、千、萬、

一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、
一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、百、千、萬、

(四) 松家の

五郎左衛門久

(五) 名は定

す(驚愕)

賢平、鶴岡學

者、鶴岡學主

池田光政に仕

ふ

(七) 源成經

ある。香山の義賊が起馬利薩漢の跡の事を以て心に存せば、天晴武士と云ふべし。因つて
て驛へ、介持山越にある時、余某より次子香山甲寅の報告とて駒と贈る。其
然るに、介持は、「吾を得る程に義賊の祖々を思ひ、衣を得る程に甲冑の窮乏を思ひ、
居宅を移ふ程に山中の不自由を思ひ、祖屋の安きに山野の苦を思ひ、父母妻子の居し
る必國賊と成はるに、其同輩居の時の悲歎を思ひきりて、今日の無事安穩を大事と爲
は、何ぞ者の念す生せん」と。因つて是れを同囚に示して、獄書の艱苦を懐ふるの一
紙に寫す。然、是れ亦此の篇の訓と併せ考ふべし。(四)
然に吾輩物、其書畫等一も儲ふることなく、蓋し其の志將さにすることあらんとす。
是等二三四の梅田順次郎に聞くことあり、能澤了介先生の家、懸物僅かに二軸あり。
一は加達馬場説しの圖なり、一は「筑波山香山麓山静けれと思ひ入るにはさばらざり
けり」の歌なり、(五) 並びに深く自ら警戒せらるる處あり。其の他絶えて
一紙なしとぞ。實に後學の景仰すべきことなり。余亦異物書畫に於て素より能好ある
ことなし。然れども秋東城の賀壽生記に、「吾れを僅に其の眼を過ぎ、百鳥の耳に感す

るに對ふ。豈に慨然として之れに接せざるんや、去りては復た念にざるたり」の語に
至るとは眞だ吾が心に合す。白樂天の詩に、「亦此の身を戀ふるなかれ、瀟湘嶺の
側、亦此の身を戀ふなかれ、一葉虛家の壁」と云ふも同一の見解なり。武士たる吾此
の覺悟なくしては討死は出来ぬなり。而して將士うち歸物書盡さへ公廩に積たはる位に
て、寧んそ憤懣虛家の壁壁を了悟することを得んや。

一葉家の廣瀬川所尤も此式を守るべし」と云ふこと、余年來此の事に心を盡りと雖も、
事は一葉宅を經ずことを得ず。今兩國の身なれば詮方なし。唯だ思ふ所を紙に筆して伺
志に示すを得るのみ。式式を守ると云ふは治亂を細じての工夫なり。武士の家宅、大
抵陣制城制を倣制すべし。江戸諸藩略略諸藩の意はあれども、駐安樂者率ね其の分に
適く、復た一葉宅は必ず細海を以て用と爲す一の意あることなし。然れども侯伯爵第
の趣け若し職にて私に讀せず。吾れ且つ自ら思ふ所を云はん。又つ郊外數里の地に當
てて園政の宅地一畝を以て、而左右其地を作り之れを細らし、江戸諸藩の趣く小屋
を築き置り、屏風を以て張り、一畝りの廣さ十數坪に過ぎず。公自ら其の宅を造り、

同志の士をば待望の士等へ各々一限りを貸し與へ住居せしむ。其の中央に一大堂を起し、會議會議又は賓客宴享等の事ある時は、皆大堂に於てす。又其の内に空地を廣くし園池堀とし、諸匠樂作の法、銃刀槍の技をも茲にて習はし、後は田畠山林に達り、文政の識眼を以て各々耕種牧養をもなすべし。是れ其の大略なり。其の委曲は意匠おれども必ずしも論はず。此の宅一處成らば、下篇の「乏者」に給し、貧者を救ひ、給せざるを省み、賢者を招き、士を聚むの事も心の儘に行はるるなり。文武技藝の士もここに寓せしむべし、流民野夫もここに役すべし。因つて門限を嚴にし出入を檢せば、其の典屋の職の如くに、少壯の士を責むることもたるべし。此の事一二有力有志の人を得て是れを謀らば、高た爲し易き事なり。是れを擴ぶせば士希の制も行はるるなり。凡そ士希を行ふに、士人を民間に散在せしむる時は、百弊叢生すること必せり。但だ此の制以て其の弊を救ふに足れり。然れども此の制も官命にて俄かに行はんとせば、亦弊を生ずるを免かれざるべし。只だ有力有志の士相遇うて自ら成るべし。官若し深く此の意を得ば、今せずして自ら行はるるの妙機あるべし。然れども是れ他日を待ち

て評議すべきのみ。

財寶器物

財寶器物は、衣食居と事相渉るを以て、上篇に於て已に略ぼ其の要義を述ぶ。今又兩篇及び下の興受の篇に通じて一論あり。三篇に於て宜しく儉吝の辨を知るべし。俗人は儉約の一段強きを吝嗇と心得る者多し。殊て知らず、儉約と吝嗇とは判然として兩事なり。儉は義を主とす、公なり。身に奉ずるの衣食財器を儉約し、儲蓄となし、君上の用に供し、刑章の難を救ひ、下賤の貧を恤むことなり。吝は利を主とす、私なり。人に與ふる衣食財器を吝嗇し、人より取るには邪欲深く、邪智を用ひ、終に己が吝侈欲度の責とするか、守錢虜となりて死するかなり。二つの者の辨は古人已に論じ盡したれども、余尚ほ餘暇あらば、儉吝辨と云ふ一書を作り、古今の事實を列舉し、兩聲の似て非なる者を辨ぜんと欲す。前漢の文帝、後漢の光武(孝)は儉と云ふべし。後漢の劉翽、唐の德宗は吝と云ふべし。又織田信長角力を賞するには熨斗三つを以てし、將

土の切に報ゆるには國辱の討を惜しまず。黒田孝高は魚肉をば味増漬にして貯へたれども、日相野郎中が返事をば辭して受けず。其の他青砥藤綱が松明を買ひて錢を尋ね、岡五内が富に金銀を送ひ親しみとし、事に臨みては君に獻納し、朝輩に獻辱せし類、物雖く儉吝の體を示したると云ふべし。是に等の佳話古今に夥しき事なれば、右の書中へ採録せんと欲す。亦少しく先師の遺意を奉ずるに足らんか。

「死を全道に守る」の語、上篇にも是れあり。是れ論語秦伯篇に「死を守りて道を善くす」と云ふ語より出でたる者なり。死を守るとは死を徒らにせず、持ち詰めて居ることなり。全道は即ち善道と同意にして、武士の一死は、或は秦山より重く、或は鴻毛より輕きを以て、其の道を善くして、全道に於て一死を致し、平生の小忿を忍びて、忠孝の大節を立つることなり。大節に於て苟も缺くることあれば、假令一死を潔うすと云へども、全道と云ふべからず。武士たる者は元日より大晦日迄、日夜朝暮、動靜靜養、常に一死を以て心上に措きて、扱て其の一死を又徒らに成らぬ如く持ち詰める、譬へば悍馬を引留めて立つるが如し。而して眞に心一死を守する人に非ざれば、守る

二二
人、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

の一字は食慾行かぬことなり。南義の村等曰く、「行年七十、惟だ耽^{テン}を遊ぶのみ」と。亦の一字、又等の字と相類して其の味を悟るべし。

飲食色欲

此の篇は要略として武士道を悟るべし。蓋し一飲一食より男女衽席じんせきの間に至る迄、片時も武士の家業を忘れぬことなり。武士たる者は只今にても君命あらんには、槍を提げ男に打乗り、水火に驅込むべき身分なれば、飲食男女の欲を絶にし、疾病を生じ、懶惰に陥り、氣候に弱くしては、武士道が闕くるなり。一友あり、其の飲酒を好む、其の言を聽るに及んで、知る事修飾して飲を謹む。一才人是れを謂ひ、「一飲一食を絶て。余乃ち一友の爲めに閑論として云はく、「飲を絶む甚だ好し。吏たる者何事何事の生ぜんとするべからず。酒を飲る時、事或は熱心に失し、或は情氣を生じ、何如たる事能く宣さんと思ふべからず。平素にても戒むべき事なり。況や吏となりて職を任するを乎。但し才氣の酒を食ひて數行に至り亂れず、冬月清酒を治し、飲酒益々精進と云

に於てらる

ふ向くたれば、酒を飲むこと甚だ善し。若しそれ然らずんば、謹慎飲まざるに如かず。一とて、酒つて傷ふ、外^二に載す、北條泰時已に和田義盛を敗り、酒を置いて將士を勞して、之れに謂ひて云はく、「吾れ復た酒を飲まじ、曠^一昔^一要^一を誤にし、其の朝敵作る、吾れ甲を擡て馬に上る、而るに宿酔未だ醒めず。吾れ意へらく、今より敵を祭せんと。已にして識ふこと數十合、渴して水を求む。葛西六郎楯^一を執りて酒を飲む。我々輒ち之を飲む、甚だしいかな、吾れの常操なきや。吾れ復た飲まじ」と。泰時も亦武士道に心ありと云ふべし。或人疑ふ、然らば武士たる者枯禪とならば可ならんか。余が曰く、是れ大に然らず。武士にして枯禪となり、委靡頹廢して殆どすべからずんば、何ぞ武士とするに足らん。唯だ其の心性活潑、身體強壯、飲食男女ありと云ふと、其の體を弱まし、其の心を弛ぶるに足らざるを以て、眞の武士と云ふべし。若し乃ち身術まり家齊ひ、三民の儀表となるに至りては、最も武士の心操べきことにして、又此の篇にも意を兼す所なり。

放寬狩獵

狩獵は國に六益二害あり。一益は、田園を荒らすの禍免れを生じ、災害を避くたり。
 二益は、土地の遠近處處山川の形勢を知つて、平時は國政の利害を考へ、事ある時は
 國守の策略を籌す。三益は、身をやつし民材を律例し、風俗何歎甚況に心を留め、談
 論の過態を反省す。遠くは周代康誥の意、躬親に論るの言も然にあり。近くは兼明寺
 師範の行傳して、諸國の冤枉を察せしも茲にあり。政に類かる人尤も心得べし。四益
 は、山情を識達して四支を輕健にし、骨節を便習し、日比藝場にて學ぶ所の弓鈔劍槍
 の術を活動へ對して試むるなり。五益は、從者陪卒の強弱勇怯、又武藝の巧拙、機轉
 の敏捷を試むるなり。六益は、軍鞋股引の製より、風雨霜露の凌方、弓銃の携帶、船
 馬の便平便難を實地にて試むるなり。此の六益は士の最も勤むべきことなり。二害は
 荒と暴となり、荒とは獵を倣ひて厭くことなき之れを荒と謂ふとて、狩獵に耽り獵物
 を食り、武士の家業を忘却することなり。暴とは民力を費し、田園を荒して顧みざる
 ことなり。要する者は必ず荒す、荒する者は必ず暴す。二害異なりと云へども其の歸

は則ち同じ、以上の義、本文已に明徹なれども、又茲に鋪衍す。頃^(一)乃^(二)聞^(三)く、君公の美

言を奉じ、行相は變更を奉^(二)む、三見^(三)に重疊し、國相も亦屬吏を奉^(四)む、大砲を西濱に演

ぜられしと、蓋し亦六變二害に見るありての事ならん、最も嘉尚すべきことなり。先

日直中の一老輩來りて、余に謂ふ、「近時海岸防禦の令違々下り、臺場の鑿造あり、

鐵砲の鑿造あり、隊伍の操習もあり、然れども皆陸戰の事なり。今の士を以て海上に

擲し出し、餘く異域と狂瀾怒濤の上に頓^(一)顛せんか、知るべからず。小煙浦にては君^(二)國

形の軍艦も打込せらるる由なれども、海に習はざる士は用には立つまじ。聞く、雨大

津の船組は異常に風浪に慣習する由。若し此の輩へ小々の扶持を與ひ、軍器を教へ饗

かば、究竟の海備ならん。子に於ては何如思へるや」と。余云はく、「君の論至極せ

り。但し鯨組を扶持人とするよりは、扶持人を鯨組とするの政、更に妙ならん。今の

士人の漁獵を好む者ば、政へて是れを禁することなく、大臣重職の人々も時々漁舟

を海濱に泛べて諸士の先とならば、不日にして其の功を奏するに至らん。余壬子^(一)の歲、

會津に遊ぶ。會津の士余に語つて云はく、華島は斯くの如きの山國にて、國傳共は

[illegible]

船とて言はば、萬里許り、彌苗代の湖氷にて見るの外、見たる事さへなき確なり。因つて
 其の船の海客を命ぜられ大いに富強せしが、命を承けて以來、有戌の十日夜海事に
 心を傾き身を勞せしに因つて、今は最思弱然して、操舟游泳等彼の土の漁父にも敢へ
 て譲らざるに至れり」と。又肥前平戸に遊び、彼の藩風を觀るに、流石に海中の孤島
 なるを以て、士人大抵漁舟一隻を持たざる者なし。又沖漁をせざる者なし。葉山佐内
 し云ふ人々とは彼の藩にても様も重く職も崇く、且つ年齢も六十有餘の人なれども、
 官給に分る時、必ず騎馬なり。又毎々沖漁をなせり。常に余に謂ふ、「馬と舟とは久
 しく頼ずると物事の用を闕くことある者なり」と。是れを以て其の藩風を知るべし。
 因つて扶持人を船組とするの意も、亦難きに非ざるを知るべし」と答ふ。老輩々し
 て去る。又余が従弟、駿南漁獵を好み、命となし、風雨寒暑憚る所なし。或は獲物なく
 して徒らに歸るとも敢へて悔いず。余曾て戲れて云はく、「清人の詩に『貢りて水に
 臨み去くことを悔し、魚を得て歸るを羨まず』とは是下の謂なり」と。駿甫悦ばず。
 因つて又六能二害の説を挙げて、雑物の論するに足らざるを説す。駿甫乃ち大いに

悦ぶ。

與受

此の篇、既に餘蓄の弊あり、爰に貧賤の別あることを云ふ。而して餘蓄の弊は、余已に前の録書國幣の篇に於て略述せしを論ず。貧賤の別に至りては、義の當否を考へて財受を決す、敢て物の輕重を計らず、本文已に明釋せり。唯だ其れ「仕官の上、俸祿の外、國幣を受けんと欲する者」は、當今の士猶然らざることなし。其の狀をとなし、其の狀をとなす、實に懸殊すべきのみ。然れども貧賤と云ふ者は、馬探の所謂守轉廬の類なり。彼等と云ふ者は、孟子の所謂、識る所の窮乏の者若れに得るの類なり。一は善、一は惡、此の懸と異にすと雖も、其の富饒の理を失ふは共に均しきのみ。然れども余竊かに謂ふ。善なる者其の其の貨財を堂に盈て子孫に遺し、子孫に至り貧者あらば、或は義學の資となるも、未だ知るべからず。惡なる者其の貨財を揮霍して、始末を顧にすれば、窮乏の者困て以て生活することを得、並びに未だ深く知とす

(一) 此の篇は、
貧賤の別に
至りては、
義の當否を
考へて財受
を決す、敢て
物の輕重を
計らず、本文
已に明釋せり。

(二) 後漢の
書に、
「貧賤の
別に至りては、
義の當否を考へて
財受を決す、敢て
物の輕重を計らず、
本文已に明釋せり。」

(三) 馬探の
所謂守轉廬の
類なり。

(四) 孟子の
所謂、
識る所の
窮乏の者若れに
得るの類なり。

(五) 然れども
余竊かに謂ふ。
善なる者其の
其の貨財を堂に
盈て子孫に遺し、
子孫に至り貧者
あらば、或は義學
の資となるも、
未だ知るべからず。
惡なる者其の貨財
を揮霍して、始末
を顧にすれば、
窮乏の者困て以て
生活することを得、
並びに未だ深く知
とす。

からず。但だ今世仕官の士の施興を貪るは殆んど然らず。美酒佳肴、奢かに狎友を會し、耽樂を盡せども、餘瀝曾て隣里に及ばず、珍玩奇貨、獨り其の心目を悅ばすれども、靡布曾て奴隸に及ばず。進んで窮乏の者の吾れに得るなし、退いて子孫の業を貽すこと能はず、又驕吝の次なり。余退いて近來權勢の家を歴觀するに、凶荒飢饉に當りて、未だ曾て一二の貧村寒邑を賑恤するを聞かず、艱難危急、未だ曾て家を毀り、藏を發し、公室に奉給するを聞かず。其の平素に在りて、亦未だ曾て賢者を招き、名士を聚め、敬禮を盡すを聞かず。高堂華屋、侍妾數百、既馬數十は、國正法あれば官を罷められんことと畏れて、收へてなきす。而して其の官を去るに及んで、或は貧困窘迫爲る所を知らざるあり。是れ其の最も怪むべき者なり。然らば則ち其の平日財を費すの由、推して知るべきのみ。

「出制を計り、度量を考ふ」の六字、武士家を治め、財を理むるの要道なり。凡そ一士の家、歲納る所の邑入塵納、穀物何種、錢幣何種、其の出づる所食米何百、布帛何端、其の他の雜費幾許と會計して、ここに於て度量始めて定まる。一家父母妻子、衣食居

時の貧乏を以て士卒何れを夢ひ、武具馬具の修理費等を富つと定むべし。若し度量を
失ひて、徒らに財貨を富饒することを得め、士卒を畜養せずんば、大敵の士と云
へども、騎馬に騎むに至りては、一士一卒の隨從するなし、所謂匹夫獨身なり。是の
時に臨みて精銳を何處にぞ召集するとも、枕生の地に至りて何ぞ應むに足らんや。
斯れは小隊の士の父子多き者にあらんこと必せり。又度量を考へずして、突りに士卒
を畜養する時は、人徒ありと雖も、平日衣食せしむることさへ出来ず。況や能く其の
業をして武藝を習はしめ、此器を強へしめ、武能の覺悟せしむることを得んや。然れ
ば且何宗門家衆の類にて、戦急何の用に當てんや。是れを以て度量を考ふることに其た
難かり。諸侯諸士の朝、茲に歸するに及ばず。必且く小隊の士を論ぜん。武士は屯角
城郭に住居しては、何事も心の儘ならね故、田舎に遷徙するに若かず。四つて田畑數
畝を買得し、力を此の間に盡し、上父母に事へ、下妻子を養ひ、僅かに衣食醫藥する
ことを得ば已に足れり。ここに於て、其の家弟若しくは二三男あるを、決して他家
へ妻子とせず、古代の所謂家子郎黨の如く、又周代の所謂武宗、隸子弟、分親の如く

富を愛ふる者あり、貴し士の貴富、徒らに祿の大小、人の多寡のみに由るに非ず。其の由る無類なる多類なり。要するに福を立つるの得失に由るのみ。大抵男子二十以外六十以内にして自ら其の身を貪ふこと成らぬ程の虚氣者、他人の家を嗣ぎて爵禄を食しなりとて、何を以て三畏の長となり、國家を裨益することを得んや。若し中人たらしめば、他家へ分出せざるは却つて其の家を富強するの一計とも云ふべし。世衰より二十以外にして未だ他家に分出せざる者多し、而して悠々泛々として徒らに父兄を喰ひ、以て歲月を耽閑する者あり。是れ早く之が計をなさざるに由るなり。父子を處するの計、文武は士の家業なれば、是れを習練するは論を俟たず。又其の餘暇を以て勉強する可なり、工作するも可なり。梁鴻が如く負荷するも可なり、蹇超が如く操用するも可なり、國子が如く職を繼するも可なり、雷康が如く職を繼するも可なり。長極職其の創作精修、書畫金石の臨寫彫刻等を始め、興工凡百の事爲して可ならざることなし。出でては士となり、文武の業を習ひ、貴家の用に供し、入りては則ち農工の事を治め、私家の計を營す。是れ最も古武士の風と云ふべし。是れを本として、郎

(一) 文武は士の家業なれば、是れを習練するは論を俟たず。又其の餘暇を以て勉強する可なり、工作するも可なり。梁鴻が如く負荷するも可なり、蹇超が如く操用するも可なり、國子が如く職を繼するも可なり、雷康が如く職を繼するも可なり。

黨無き子能の漢主を擁護し、文武の學生として吾れ家に寄寓せしめ、是れを策子に均しめば、小縣の士と雖も何ぞ策子耶黨なきを憂へん。是れを閩國に行ふ時は、食を是れに兵を是れすの大計なり。然れども是れ紙上口頭の號令にて行はるることに非ず。君臣上下直に朝堂に聚め、相共に憂國の赤心を吐露して、是れを謀るに非ずんば、亦何ぞ成功を見るに至らん。ここを以て救へて安議せず、而して是れを有志の士に費めざることを得ざるなり。

休養與興の間に就いて、余年來思ふことあり。事の序に茲に附録して有識の嚮導を乞ふ。(一)しうそ漢の昆陽、段熲を費みて金玉を賤しむの方法を論じて、「天下の人をして衆を差

に入れ、以て將を受け罪を免かれしむ」と云ひ、又「衆を郡縣に入れしむ」と云ふの

意に徴ひ、諸士在官の俸錢其の他施與賞賜等、金銀錢幣を賜ふことを一切に停め、後

漢書米穀布帛等を以てすべし。又漸を以て悉く、銅幣を停むべし。又四方の百貫

紙を停め、古の調の意に徴ひて絹布・絹繩・茶・紙・鹽・蠟・土物・器

物、例にても更に任せて出さしめ、又粟・黍・豆・麥等の穀類は宜しきを度り、田方

2

ち織造を以て税を認め、織に臨みて雜物を折徴し、絲織色目類を裁たり。惟れ水界の
利害を計りて、估價の無益を論するなきなり。獲する所、棄とする所を非ず、棄とす
る所、獲する所に非ず、適に或は價を増して以て其の無き所を買ふ、價を減して以て
其の有る所を賣る。一増一減、耗損已に多し。譬わらくは諸州初捐兩稅の年絹布の定
估を驗賣し、當年の時價に比類し、賤を加へ貴を減じ、其の中を附取し、倉稅の錢錢
を、驗、計、し、折、し、て、布、帛、の、數、と、奪、さ、ん、こ、と、を、一、と、余皆て粗、皮、過、鑑、を、一、讀、し、て、細、小、に、記
録、す、又陳宣公衆議の如きも未だ嘗て目と執す。初め唯だ隱を以て云々せしなり。
後、其母夫人廢錐を護みて、千古汚情たるを無り吹簾に達へず、益々私室の理あるを
疑ふ。淳夫の論も亦得し、就いて見るべし。探王宣公の奏の大意を約して云へば、倉
穀の缺を驗計し、折して布帛の數と奪さんと云ふ、是れ其の誤なり。衆帛は人の爲る
所なり、織貨は官の爲る所なりと云ふ、是れ其の論なり。獲する所、棄とする所に非
ず、棄とする所、獲する所に非ずと云ひ、一増一減、耗損已に多しと云ふは、從前の
論より、細かに是れを味へば、余が云ふ論、宣公已に覺つ是れを云へり、又從前衆議

(一) 穀の相場
 穀の相場は、往時より高きことなり。其の故は、往時より穀の生産が減少したるに在り。其の減少したるは、往時より穀の生産が減少したるに在り。其の減少したるは、往時より穀の生産が減少したるに在り。

へらく、穀賤しければ農を傷ると云ふこと空論なり。何となれば穀賤しければ飢渴の患なり。且つ棉の値も穀に準ずる者なれば、寒凍の恐れもなし。其の餘の物は皆榮耀の玩物にて、民生に關係することなければ、穀賤しくて民間錢貨乏しくと云ふとも、飢寒させざれば、外に憂ふべきことなしと。因つて此の説を以て老農森田忠助に質す。忠助大いに然らずと云ふ。其の説に云く、^(二)「當今民間御馳走の重きこと甚だし、往時六七にも及べり、然れども民間は勝々に太平を樂しむことを得る者は、幸に米穀の値甚だ賤しからざるを以てのみ。若し不幸にして穀値大いに下落せば、何を以て金方の上納を濟すべきや。往時乙酉・丙申の饑饉、民變等も御馳走の重きは今と大庭俵あるに非ず。但だ穀價是れより前に甚だ下落せしを以てのみ。嗚呼、危いかた」と。余ここに於て驚然として穀値下落の害を悟れり。然れども上に云々する如く、金方の上納を禁絶する時は、最早穀値の下落を憂ひざるなり。若し乃ち金錢を出さしめて、百姓の首尾指刀等を迫すに至りては、其の弊弊更に大なり。此の事休まされば貴穀賤金の風は決して興らざるなり。

子孫教成

此の書はに風起夜寐を以て大綱とし、下八篇を以て其の細目とす。武士の道ことに至りて終は備はれり。納末一篇乃ち子孫教成を論ず。而して其の義は大抵前九篇に云へり。但し前九篇の已れに行ふ者を以て、是れを子々孫々永々世に傳ふべしと云ふ、是れ此の篇の主旨なり。其の言に云はく、「我が身既に没して、嗣子放僻なるときは則ち憂國又身滅ぶ」とは、何等の憂思深遠ぞや。余曾て七生説を作りて云はく、「余軍將、國難の心を育り忠孝の志を立て、國威を張り海賊を滅すを以て、己が任と爲す。必ずや後の人をして亦余を繼て興起せしめ、七生に至りて而る後可と爲さんのみ」とは、實に先師の遺教を奉ずるなり。凡そ大丈夫と生れては、是れ程の志建てなくては、人と生れたる詮はなきことたり。今や東道衰微し、國威喪失して、鬪焉陸梁すと雖も、安んを坐々たる神國の斯くの如くにて修る者あらんや。然れば吾が^{（一）}備蟲蛇（一）の微と雖も、武備を講究して其の時を待たんには、天地神明、たゞか其の心を照覽し給はざら

（一）
備蟲蛇
（二）
武備

めや。予孫の教戒は云ふ迄もなきことたり、推して宗族郷里の子弟に至るまで、吾が
丹心轉曲をこきて、其の肺腑に徹し、其の天性の良智を感發せしめ、彌次みよに繼ぎ繼ぎ
て千萬世繼ゆることなくせざるべけんや。扱て其の教戒の大本、武道の眼目は大丈夫
となることたり。大丈夫の事は孟子にて善く知れてあり。何分富貴にて淫し、貧賤に
て移り、威武にて屈する人にては、事に臨みて何の恃みともたぬなり。何ぞ國威を
張り海賊を滅するの任に堪へんや。而して此の事易きに似て甚だ難し。余が安藝の浮
屠うと鄭某史孤子に心服するは實に此の事のみ。凡そ淫と移と屈とは、人々に因つて
理深重なり。其の淺き者輕き者に至りては、已に共に語るべく、共に道に進むべき
の人たり。又自然に出づるあり、勉強に出づるあり。自然に出づる者は轉く得べから
ず。其の次は勉強に出づる者、前跡頼母しき人なり。余和漢古今を歴觀するに、忠臣
軍子何ぞ前た多きや。然れども大丈夫の三字を以て、是れを括するに足れり。然れば
「士曰大丈夫を以て勇と慕す」と云ふこと、日夜朝暮に姑くも忘るべきことに非ず。
豈に教戒の大本、武道の眼目に非ずや。

女子の教育の事、先儒の深意を味ふべし。夫婦は人倫の大綱にて、父子兄弟の由つて生ずる所なれば、一家世襲治亂の界全く茲にあり。故に先づ女子を教養せしむばあるべからず。男子何れ開明にして武士道を守るとも、婦人道を失ふ時は、一家治まらず、子孫の教養亦困難するに至る。豈に愼まざるべけんや。而して淺近女子の教養を以て大事とする者あることを聞かず。蓋し女教大略三様あり。先づ渾氏物語・伊勢物語等の情書淫淡の事を以て教とする、是れ先儒の深く嘆する所にて、教とするに足らず。然れども此の類只今にて貴人大家には或はあらん、平士以下にては甚だ少なし。但し和歌・律書・萬葉集の詩教を以て教とみとする者は聞々是れあり。是れ亦其の類なり。又且源氏の書、或は心學者流の書等を以て教とするあり。是れ尤も正しくども薄し。然れども孝順、幽閑、澁書、儉嗇の教はあれども、節烈果斷の訓に乏し。太平興寧の詔は是れに三餘りあれども、變故の際に貞操峻節を屬ますに至りては、未だ足れりせず。獨り老師の教、一柔順を以て用と爲し、果斷を以て罰と爲す」と云ふ者、確かならぬと云ふべし。又「上の妻室たる者は、士當に朝に在りて内を知らず、故

二五七

（一） 前記の傳を讀み、觀る是にに論議を加へ以て女子の龜鑑とせば、甚だ美事と云ふべし。前に引く所の列女傳、小學等、漢文にて女子の講讀に便ならず。皇國婦女の事、責問者（一）に列女の傳あるを見る、甚だ善し。但だ救むる所の人數甚だ寡きを恨む。近日人あり、本朝女鑑の闕本を示す。其の體裁先づ善が心を得たり。未だ全豹を窺はずと云へとも、亦其の一斑を得たり。但だ其の中光明皇后等の事を載す、余甚だ喜ばす。然れども其の外救むる所は皆女子の鑑とすべき者なり。余從來此の事に心ありと云へども、未だ多く此の種の書を搜索するに暇あらず。思ふに、其の體、其の文、並びに吾が心と通たる者ありて、未だ見るに及ばざることあるべし。抑々古語に「忠臣は二君に事はず」を以て、「列女は二夫を更はず」と對して云ふ。其の意極めて深し。上に云ふ後漢書列女傳中、曹世叔の妻の傳に女誡七篇を載す、極めて善し。其の中に烈女の誡を讀むて曰く、「一體に夫は臣娶の義あり、婦は二適の文なし」と又曰く、「意を一人に専る、是れを永畢と謂ひ、意を一人に失ふ、是れを永訖と謂ふ」と。蓋し婦人、夫を以て天とし、一體して改めず、猶ほ人臣の君に事ふると異ることなし。今の書、猶

（一） 前記の傳を讀み、觀る是にに論議を加へ以て女子の龜鑑とせば、甚だ美事と云ふべし。前に引く所の列女傳、小學等、漢文にて女子の講讀に便ならず。皇國婦女の事、責問者（一）に列女の傳あるを見る、甚だ善し。但だ救むる所の人數甚だ寡きを恨む。近日人あり、本朝女鑑の闕本を示す。其の體裁先づ善が心を得たり。未だ全豹を窺はずと云へとも、亦其の一斑を得たり。但だ其の中光明皇后等の事を載す、余甚だ喜ばす。然れども其の外救むる所は皆女子の鑑とすべき者なり。余從來此の事に心ありと云へども、未だ多く此の種の書を搜索するに暇あらず。思ふに、其の體、其の文、並びに吾が心と通たる者ありて、未だ見るに及ばざることあるべし。抑々古語に「忠臣は二君に事はず」を以て、「列女は二夫を更はず」と對して云ふ。其の意極めて深し。上に云ふ後漢書列女傳中、曹世叔の妻の傳に女誡七篇を載す、極めて善し。其の中に烈女の誡を讀むて曰く、「一體に夫は臣娶の義あり、婦は二適の文なし」と又曰く、「意を一人に専る、是れを永畢と謂ひ、意を一人に失ふ、是れを永訖と謂ふ」と。蓋し婦人、夫を以て天とし、一體して改めず、猶ほ人臣の君に事ふると異ることなし。今の書、猶

女、世叔の死後、後宮嬪女子の節となり朝大安と號す。女詠七篇を著し、
を添いで完成

けり。暗闇には楓樹の上張、かちんとの上下を着く。婦人已に嫁すれば、猶に塗るに。其の意、深黒平澁の色に象り、一遵不改の義を取るとなり。然れども今世淫洪の婦は往々聞くことあれども、貞烈の婦に至りては寥寥乎として響を絶す。然れば禮儀が其の節を存すと雖も、其の義は已に泯没せり。余常に竊かに是れを痛愛して亂亡の先兆とす。何となれば禍各々類あり、故に忠臣を求むるは孝子の門に於てすと云へり。節も亦忠孝の類に非ずや。然れば今世貞烈の婦に乏しき所以は、父兄の勸戒至らざるなり。父兄の勸戒至らざる所以は、其の自ら君父に事ふる、忠孝の心なればなり。今、時平かに國家ければ、宴安に其の目を送り、縁を辭し官を罷めて、去つて他邦に往く者あることなし。然れども是れを以て遽かに其の二君に事へざるの忠心を信するに足らんや。滔々たる父兄、要は皆其の忠心なし、故に兒女其の勸戒を聞かず。兒女其の勸戒を聞かず、故に人の妻となりて貞烈の節類はれず、人の母となりて其の子を勸戒することを知らず。是れ父兄女孫ちひな縁縁にして無教養の世界に生れず。ここに於てか烈女なく忠臣なし。今日二三夫四五夫を更へて恥ぢざるの子孫

(一) 歐陽公、王凝が妻
室の事を、秋

は、最目必す二二君國五將に事へて計を得たりとするの臣僕なり。歐陽公、王凝が妻
の事を以て海運を説す、其の深意が推して知るべし。有志の士念を起して燕に至ら
ば、安んを偶然楊妃女子の被戚に眷々せざることを得んや。有志の士眞に今の弊を救
はんとならば、先づ其の妻其の女を被戚するに、前に云ふ古烈女の事蹟を以てし、陳
郡明婦に二夫を更へするの大義を教示し、其の子弟に臨みては、又此の義を揭示
して、且つ大義高き處るに堪へきることあらば、自盡するの外天地間別道あること
なきを被戚すべし。若し敢へて親家に夫婦する者あらば、忍びざることなれども、父
兄過りて自盡さすべし。是れ理の事なれば、最初壻を擇ぶの時も勿論苟且なることた
かるべし。又其の女子にさへかく大義を責むる母の父兄、其の君に事ふるの忠、最も
明瞭甲斐勤事たり。唯だ有志の士深察遠思せよ。

女子の被戚に付き別に一策あり。是れは國政上の事なれば容易に論すべきに非ざれど
も、事の因みに燕に附録す。國中に於て一箇の尼房の如き者を起し、(一)
（一） 尼房に如き者を起し、女學校と號し、（二）
（二） 女學校と號し、其の子弟に臨みては、又此の義を揭示
して、且つ大義高き處るに堪へきることあらば、自盡するの外天地間別道あること
なきを被戚すべし。若し敢へて親家に夫婦する者あらば、忍びざることなれども、父
兄過りて自盡さすべし。是れ理の事なれば、最初壻を擇ぶの時も勿論苟且なることた
かるべし。又其の女子にさへかく大義を責むる母の父兄、其の君に事ふるの忠、最も
明瞭甲斐勤事たり。唯だ有志の士深察遠思せよ。

1. 凡在本行开立存款账户的客户，均可向本行申请开立支票。

10

眼を起りて、自ら二編の巻を看く。然るに、其の故事を考究し、儉勤貞靜を以て一國の
を勸む事にして、凡そ生を天地間に繋ぐる者、貴となく賤となく、男となく女となく、
一人の處居すべきなく、一人の歟力かるべきなし。然る後初めて古遺に合ふと云ふべ
し。今の有司何ぞ此の議を建白して施行せざる。有志の上、幸に其の當否を正せ。

金上に論ずる所を以て叔父玉和生に質す。先生慨然して云はく、「女歌の説極めて足

なり。全圖より最に志あり。因つて往年伊勢人津坂孝紳の武家女鑑三巻を買得て家に

執事。紅い雪山た伴たり。美女の爲めにはれを讀むに感激せざるはなし」と。因つて

其の文、其の體全く余の意を變たり。孝神の序に因りて知る、

中村楊樹先生の著す所にて、異邦古代の人を擧げ、本邦の事に至りて

は確々洞見するのみと見えたり。然れば婦人女子を教諭するには稍迂濶なるべし。然

れども楊柳は一時の輕佻なれば、定めて裨益多きの書なるべし。未だ見ざるを惜しむ。

又澤庵氏（澤庵）は、（澤庵）所藏の本朝列女傳十卷を借讀す。寛文明曆の際、黒澤弘忠と云ふ人

一書 后妃夫人に始まり奇女神女に終る、通計二百一十七人を載す、亦備はれりと云

ふべし。但し其の文法極に横して甚だ工ならず。載する所正道に謬まちがふ者多し。又異端に附る者あり、怪妄に屬する者あり。然れども採擇は其の人に存す、又何ぞ其の文の拙を嫌ふんや。且つ其の間の評論に至つて裨益ある者多し、何ぞ遽かに輕視することを得んや。此の種の書尙ほ廣く需むべし。

總目錄

此の一篇は小學の終篇とすべし、別に一卷と思ふことなかれ。其の證は自序に「門人等編輯する所の武教小學は始めに其の教藏を著はし、終りに其の序品を次ぶ」と云ふに於て知るべし。教藏は即ち上の十篇なり。（六）序品は即ち此の篇なり。素水の別本に、子孫新教の末に「武教小學終」とあるは非なり。吾が家の藏本に此の五字なきを證とす。若し強ひて此の五字を置かんと欲せば、總目錄の末に移すべし。抑、總目錄を以て、武教の大綱及び先師の學則を窺ふべし。竊かに按するに、先師の學は博より約に入る者にして、其の學則に至りては約より博に達する如くしたる者なり。

つて、
（一） 底久五
つ所に編むて
其のつて地
い、お様に
さる

學者傳の傳に於て得ることあれば、左右原に逢ふ、何の疑かあらん。先づ先師の傳を相らんとならば、一部の語類を讀みて知るべし。而して其の約は乃ち要訣要錄にあり。是れ經術の傳約を云ふ。其の兵法に於けるを見んとならば、宋書結要本・陳・雄鑑・用法より漢土諸家の説を約し、雄備集となし、武教要略となし、更に約して武要全書となす。然れども學者尙ほ其の約を知らざらんことを恐れて、門下の諸子

其の傳目錄を編するなり。若し夫れ全書由篇々自ら傳あり約あり、而して其の末を約するは、全部の歸宿は序段の謀略・智略・計策、戰法の三戰にある是れなり。ここを以て先師の學則を知るべし。學者苟も全書を精究し、然る後孫吳尉李の書に及び、又

和漢古今の書籍を博覽し、本文を尋ね源流を窮むる時、經史子集幾萬卷の書、皆余

書八卷の註釋にして、望も謀・智・計、三戰の計略となり、更に約して吾が方寸の外に出づることなきを知らん。是れを學の樞功とす。余素より此の見を持す。嘉永戊申

の歲、明倫館刊刻の時、精學經術餘餘の次爲を定め、試筆に便すべきの旨あり。就中

正學一編、略略を以て是れを分つべしとのことなり。余乃ち四等を定む。初等

（二） 經史子集
（三） 宋書結要本
（四） 雄鑑
（五） 武教要略
（六） 孫吳尉李の書
（七） 嘉永戊申

（一）

（二）

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

（十八）

（十九）

（二十）

（二十一）

（二十二）

（二十三）

（二十四）

（二十五）

（二十六）

（二十七）

（二十八）

（二十九）

（三十）

は初軍制圖の詳なり。中等は先師の書を講究するの神なり。此の等更に二科を分ち、

（六）

初は長短正傳受の意に倣ひ、（金匱要略）小學及び傳用武功・擧功・法令・斥禁

を以て一騎前（一）の學とし、全書一部を通じて研究するを主道將略の學とす。初中二條は

兵と所謂約なり。上等は諸家涉獵の科にして、乃ち所謂博なり。最上等は諸家の博を

略め全書の約に究る科にして、所謂左官原に造ふの地位に在り、兵學の大成する所な

り。（二）博約の説は孔宣以素已に擧げて學問とす。孔子曰く、

「博子に博く文を學び、之れを約するに博を以てす、亦以て斷（三）かざるべし」（四）

（五）曰く、「夫子博を然として博く人を誦（六）び、我れを博むるに文を以てし、我れを約

するに博を以てす」（七）孟子曰く、「博く學びて詳かに之れを説くは、將に以て成つ

て約を説かんとするなり」（八）孔宣の説斷くの如くにして、孟子反説の意尤も味ふ

べし。是れ余が先師の學問を窺ふ所なり。又武教の大綱、目錄にて略ぼ見るべしと云

ふ事は、凡そ先師の用意は專ら篇次にあり。故に目錄を以て篇次を玩びて其の大綱を

窺ふべし。李綱公武堂を論じて云ふ、「士にして之れを言へば若の道たり、小にして之

（二）

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（十）

（十一）

（十二）

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

12

れを言へば精の語たり。又云はく、「其の心を攻むる者は所謂彼れを知る者なり。吾が氣を守る者は所謂己れを知る者なり。」（明君下にも、彼れを知る者なり。）故に武教は修身・齊家・治國・平天下より初め、戰勝、攻守の術に至るまで包ねざることなし。天子諸侯より一士一卒に至る迄、學ぶて不可たるあるなし。是れ其の大意なり。近世談兵家はれを知らずして、異端曲説に陷るの弊は、自序是れを詳論す。其の所にて尙ほ講ずべし。又武教の外に更に霸道も經術もあることなし。儒道經術は皆武教中の事なり。此の論は序説の首、題義の武教を講する所にて云ふべし。上に云ふ如く、修・齊・治・平・戰勝・攻守・君道・將法・士卒の事、皆此の八冊に括りて、一篇の目錄又八冊を括するなり。篇次の大體を云はば、序説は謀略・智略・計策の三つにて、全部ある大文字の歸納する所を約説して、篇首に置く者なり。孫子始計篇と全く相表裡して、古今數たり。余を以て是れを宛へば、一篇の大體に比するに、更に着實該備を覺ゆ。主平、是れ全書の直篇なり、専ら治平の道を論ず。全書を読まん者此の篇を讀みて、兵は人生の大道にして、一士一卒の私言に非ざることを悟り、慨然として國天下を以て自ら

任すべし。是れ根本なり。其の次は撫將なり。天下の大、人主一人の能く自ら治むる
 術に非ず。故に必ず賢材を選びて諸事を分治す、是れ撫將なり。已に將あり、其の次
 は平士を選用すべし、是れ用士なり。同上の義、金匱に云ふ、大將あり士あり、ここに平士と云ふは、金匱に云ふ、大將あり士あり、ここに平士と云ふは、將あり士あり、ここに平
 士の職制を詳論す、是れ武者分なり。制法は是れ金鼓旌旗の制法を論ず。操功は是
 れ戰士の功過を論ず。並びに折軍案に説くべきことなれば、内習の前に置く。而して
 更に内習あり、其の次は軍禮・法令、亦是れ平案に説くべきことなれば、内習の後に
 置くなり。以上九篇、智人事の最も急なる者、而して主本は金匱の骨子、最も九篇の
 骨子なり。撫將・用士・武者分、是れに據す。後五篇中内習を主とす。而して内習又
 明かに主本に原づく。九篇已に人事を言ふ。其の次乃ち天官・地形を論じ、兵の助け
 を知らしむ、斥候・侍用武功・用間、其の事は乃ち一十一篇の任にして、其の用は乃
 ち主の方寸に存す。且つ主の上卒を教育する、其の術多端と云へども、小學の外此の
 三篇及び上の操功・法令等を以てする固よりなり。故に余尚に等級を作り、一騎前の
 衆を掲示するに此の數篇を以てす。是れ亦由らむるの法にして、知らしむるの道に

[illegible]

用器以上は多くは量れ難き事なり、靜たり、體なり。客戰以下は多くは是れ隨處の事なり、動なり、用たり。此の四篇正に其の中間に置く、其の意知るべし。然れども篇中點あり、動の體あり、體中用あり、用中體あり。事盡氣變互に其の功用を見る。

政に己に其の分別あるを知らば、又其の合一なるを悟るべし。客主以下十六戰、其の
先後の次序頗るに妙思を藏す。今悉く述ぶるに暇あるす。姑く其の最重の者を云はば、
客主二篇にあり。而して主を後にして客を先にする者、舊來其の説を傳ふ、極めて道
理あり。凡そ遊軍の法は、進取の略なくしては、萬々出来ぬことなり。當今の時に當り、
御書を業き御門を讀み、海岸防禦戰手當など爲る位の快觸にては、迎も神州の保全
は出来ぬなり。且、總軍の計を定め、四惠出征の策を定めすんばあるべからず。是れ
客主出陣の義にして、攻守の分決、其の他餘篇中往々其の意を見る。是れ固より人主

の任なり。然らば上一步と云へども、此の書を読み、此の旨を悟らば、人主に漏見して漏見を鑑照し、其の萬一を轉軸することと思ふべし。戦法は是れ十六戦の精義、乃ち全書の精義、序段と對照して體用對應並びに其の深意を悟らば、人主の道ここに於て大いに備はれりと云ふべし。兵具の一篇、器械醫藥の雜事、全部の漏闕を備うて附録とす、亦一勝算の流裔なり。全書中凡て是れ等の枝葉の事に及ぶ者は、皆専門の材を盡ひて、其の用に供するの端を發するなり、自序に論ずる所を考へよ。抑、序段の議論は已れを知るなり、智略は彼れを知るなり、計策は變に應ずるなり。是れを全部にて論ずば、城寨以上は謀略たり、客戰以下は計策なり。其の間斥候・用間等は専ら智略を盡くたり。是れ其の大概にて、其の實は篇々此の二つの旨あり、心を尽くべし。

内兵雜考卷二目録

丁巳幽室文稿

丁巳幽室文稿目次（安政四年）

上 卷

吉園氏略敘	正月元日	（安政四年）	二七九
唐鑑を讀む	一則	正月元日	（安政四年）
經濟要錄を讀む	正月二十三日	（以下同）	二八五
四神全書備明目錄を讀む	二月二十二日		二八六
外蕃通略敘	三月八日	（別出）	二八八
奏書の後に書して妻木士保に贈る	三月八日		二八九
松浦生に贈る序	三月十二日		二九〇
朱竹垞文粹を讀む	三月十三日		二九三
周布君の太孺人某氏八十壽の序	家兄に代りて	四月五日	二九五
壽贊、字は無逸の説	五月二十日		二九七
外蕃通略跋	五月二十八日	（別出）	

諸生に示す	閏五月三日	二九八
兩考錄に就す	閏五月	三〇〇
周布生の文を評す	閏五月六日	三〇一
鹽谷の文を読む	閏五月十八日	三〇二
兩森芳洲先生の國王稱號論跋	閏五月十九日	三〇三
富永輔兵衛の免職を乞ふ狀	代作 閏五月	三〇五
左殿議述談	閏五月二十九日	三〇七
戯れに對面に擬す	清太に贈與す 六月六日	三〇八
國相益田君に上る書	代作 六月七日	三〇九
寛枉由來記の後に書す	六月	三一〇
討賊始末敘	六月二十五日 (別出)	三一〇
頼原清介に復す	六月二十七日	三一四
諸生に示す	六月	三一六
富永有隣に與ふ	七月四日	三一八
蕨明允の高帝を読む		三二〇

松浦松樹大津に之き烈婦を貌するを送る綴……………三二三

烈婦登波の碑 佚作（附出）

魏氏女子牽牛圖を讀む 七月十八日……………三二四

導、字は有隣の説の後に記す 八月三日……………三二六

是代權大夫の書に跋す 八月……………三二七

木原信慶に興ふる書 八月十七日……………三二八

音三郎に贈る 八月十八日……………三三〇

市之進に贈る 八月十九日……………三三二

溝三郎の説 八月……………三三四

乾、字は無咎の説 八月……………三三五

煙管を折るの記 九月三日……………三三八

吉田無邊を送る序 九月五日……………三四〇

下 卷

秩祭論に跋す 九月九日……………三四三

二生に示す 九月十三日……………三四四

孫子評註に跋す	九月十五日 (題出)	三四五
富永有隣の歸省を送る敘	九月十五日	三四五
照村登波の書に跋す	九月十六日	三四七
御園に復す	九月二十六日	三四七
實之、字は賓卿の說	十月三日	三四九
小田村士續に與ふ	三五一
來原良藏に與ふ	三五三
尾寺新之允に與ふ	三五五
中村半莊先生に與ふ	十月十八日	三五六
御園に與ふ	十月二十四日	三五七
萩の地たる 人の爲めに作る	三五九
丸數乘除圖跋	十月二十七日 (題出)	三六〇
日羽徳祐に復する書	十月二十八日	三六一
桂小五郎に與ふる書	十月二十九日	三六四
照村登波の書に跋す三首	十一月七日	三六八

獨室筆記漫評九則	十一月八日	三六九
小國國藏に與ふ	十一月九日	三七二
口羽徳祐に與ふる書	十一月十二日	三七五
馬島甫仙に贈る	十一月十三日	三七七
蘭夷密報を読む	安政四年二月三日、崎東より綴せしもの	三七八
口羽徳祐に與ふ	十二月	三七九
有隣に與ふ	十一月十八日	三八〇
賓聊の佐世八十を送る跋に跋す	十一月二十日	三八一
冷泉生に與ふ		三八一
久坂玄瑞の詩稿に書して江幡吾樓に與ふ		三八二
伊婆菩薩言に跋す	十一月二十日	三八二
無逸の間に答ふ	十一月二十一日	三八三
駒井生に贈る	十一月二十一日	三八四
治心氣齋先生の詩に跋す	十一月	三八五
松浦無窮に與ふ	十一月二十四日	三八五

讀書の友に示す	十二月三日	三八七
文妹久坂氏に適くしに贈る言	十二月五日	三八九
小國剛藏に復す	十二月十七日	三九〇
馬島生に與ふ	十二月二十日	三九二
三子に贈る	十二月	三九三
清太に與ふ	十二月二十四日	三九四
筆記一則	十二月二十六日	三九八
友善塾記 代作	十二月	三九九
常榮公傳		四〇一
穂貝子文鈔を讀む	十二月二十八日	四〇七
九數乘除圖		四一〇

上 卷

吉田氏略敘

吉田氏は松野平介より出づ。平介の遠祖は蓋し一條朝の納言藤原行成にして、社次敘ふべからず。平介、右大臣平信長に仕へ、美濃の船木・呂久を領す。信長既に越前朝臣光孝の族する所となり、平介陰に討賊の志を抱きしも、事の遂げられざるを料り、京師の惣見院大徳寺に據すに自盡す。

(一) 按ずるに、頼實の外史に云ふ、安藤純俊

(二)

(三)

八幡の村現市八幡宮、山城に宿し、難に及ばず。以上信長記 齋藤利三内記之が、善を

事記は、
を記すも
のといふ

以て之を撰く。平介伴り應じ、是れ其の意を以て、何に據るか、言ひにせず。隙を窺ひて光
孝を刺さんと欲す。光孝其の意を覺り親近せず。平介乃ち自殺す。是れ其の意を以て、何に據るか、言ひにせず。

平介の子太藤重基、始めて氏を吉田に改む、慶長中、大坂城に在りて戦歿す。重基
子十郎左衛門重賢と爲す、重賢亦足野氏と稱す。和漢文書に手澤あり、微すべし。又、河軍が古傳に記す、重賢は、

(一) 重基

其の子友之元諱は重矩、初名は重基、後、重基の子と稱す。實は出雲藩士三島通種(一)の第三子
なり。父に従ひて書が藩に來り、和漢の兵法を以て教授す。其の藩ふる所、和漢軍に在り。

重公召して之れを諒し、重公は、重基の子と稱す。兵法師員と爲す、後
大番組に就す。重公は、重基の子と稱す。是れ始祖たり。始祖

(二) 重基は
行の後嗣。こ
とは松原の館
なり。

江村に在り、山鹿藤介高基に従ひて其の家學を受け、重基は、重基の子と稱す。遂に其の
族を以て人々を教ふ。重基は、重基の子と稱す。長は十郎左衛門矩行、重基は、重基の子と稱す。

次、齋藤鯨良の養子となる。矩行性忠直なり。曾て大番店に直す、公特言もて家書と
講せしめんことす。矩行辭して曰く、「人臣の進講は、宜しく宿齋戒して一言はんとする
所を擇びて、然る後可なり。臨時の命は敢へて受けず」と。侍臣公命を以て之を強
ひしも、矩行遂に聽かず。

雄行に二男あり。長は木工兵衛矩清にして早く歿し、次、莊介は、狂疾ありて湊に處せられ、終る所を知らず。（寛政八年六月、明島を脱去すと云ふ。其は確ふ、後二男に在り、其二使に依りて其を逃ぐるを見しと）孫二十郎矩之を以て、直ちに其の後を承く。

矩之は矩行の姪子半平の生む所なり。牛平は長太郎、七郎などあり。後、半平家學に精ならず。故に之れを去り、矩之獨り留まりて嗣となる。矩之病革るや、河野主信の第四子市佑諱は矩直を養ひて子と爲す。未だ幾ならざるに矩之歿し、繼嗣定律を以て縁を滅せらる。一云、長太郎、七郎などあり。家々いふを傳へ、是れを高祖と爲す。高祖狂疾あり、廢して流に處せられ、青屋某の第二子又五郎諱は矩定を養ひて嗣と爲す。是れを曾祖と爲す。

二子又五郎諱は矩定を稱して嗣と爲す。是れを曾祖と爲す。
宣政の初め、唐船漂ひて雲・石・長・眞の海濱に至る。幕府、要術の諸藩に令して武

(一) 綱家
(二) 綱家
(三) 綱家

備を精めしめ、將に目附をして巡視せしめんとす。三年、容徳公逝かれ、靖康公新たに立ちたまひ、曾祖を起たして軍政の議に預らしむ。曾祖、機に乗じて士氣を振ひ國體を揚げんと欲す。上二條院然れども無事日久しく、俗吏因循にして、其の説行はるるを果さず。著に神陣制度あり。杉徳卿の女を娶る、女は即ち政之の孫なり、殺す。繼いで高橋氏高橋氏を娶り、二子を生む。長は他三郎諱は矩建、剛々。是れを祖と爲す。次は春平、名は虎、出でて香取氏を繼ぐ。

祖は幼よりおろたふ不羈にして、小やうで純曲之れを畏憚す、而も強記精敏人に過ぐ。甫めて五歳

にして父を喪ひ、楢崎某に傷りて長す。某は美政の養子にして、家學に精通せり。時

に藩の文學小田村某、(三)たを坤天神祠の碑銘を作り石に勒して建つ。矩建一見してすたに輒ち之れ

を誦じ、歸りて酒酌の爲めに之れを誦す、一も蹟く所なし。楢崎大いに之れを畏とせ

り、虎は文字專造、議論英爽にして敢へて人に屈せず。其の養父の喪を執るや、偶

齒を露はすことあり、齒、色を正して曰く、「喪を執るに何ぞ成まざる」と。虎、慙

懼叩頭す。虎、常に人に語つて曰く、「吾れ生卒未だ嘗て畏るる所あらざるも、獨り

(三) 今の藤
市本屋町に在
る多越屋に

(一) 公文書
によれば九日
である。松陰
の記憶違ひな
し。

きしも、嘉永四年十二月八日、罪ありて籍を削らる。

嗚呼、吉田氏は世々不幸にして、或は國亡びて節に殉じ、或は短命にして子なり。獨り矩方身づから邦典を犯して、以て覆敗を致す、不幸には非ざれども、不孝の罪、これより大たるはなし。然れども始祖の胤、杉氏に因りて存せり。杉氏は世々福多し。常盤の三子、伯は名は常道、實に矩方本生の父たり、仲は即ち矩方の先人なり、季は名は觀、（二）玉木氏を嗣ぐ。矩方の兄、名は修道、杉氏の嫡嗣たり、弟敏は尙ほ幼なり、從弟弘は玉木氏の嫡嗣たり。本生の父と季父・阿兄と、今皆寔然として官に當り、力を國事に宜ぶ。是れに由りて之れを觀れば、始祖の福未だ艾きざるなり。

右一篇は矩方削籍の後、深く後來家系の散逸せんことを慮り、百方搜索して、謹んで遺文を詮め、戊午正月元日を以て草を起し、月中にして乃ち能く此れを成す。明年四月三日、先人の二十五回忌辰に遇ひしも、矩方繫がれて野山の獄に在り、墳墓を掃ひ、家寢を祭る能はず。恰然として此れを錄し、これを杉氏に寄せ、大人膝下に呈して、永くこれを神室に藏せんことを請ふ、實に久遠を謀ればなり。

（二） 實に、
（三） 實に、
（四） 實に、
（五） 實に、
（六） 實に、
（七） 實に、
（八） 實に、
（九） 實に、
（十） 實に、
（十一） 實に、
（十二） 實に、
（十三） 實に、
（十四） 實に、
（十五） 實に、
（十六） 實に、
（十七） 實に、
（十八） 實に、
（十九） 實に、
（二十） 實に、
（二十一） 實に、
（二十二） 實に、
（二十三） 實に、
（二十四） 實に、
（二十五） 實に、
（二十六） 實に、
（二十七） 實に、
（二十八） 實に、
（二十九） 實に、
（三十） 實に、
（三十一） 實に、
（三十二） 實に、
（三十三） 實に、
（三十四） 實に、
（三十五） 實に、
（三十六） 實に、
（三十七） 實に、
（三十八） 實に、
（三十九） 實に、
（四十） 實に、
（四十一） 實に、
（四十二） 實に、
（四十三） 實に、
（四十四） 實に、
（四十五） 實に、
（四十六） 實に、
（四十七） 實に、
（四十八） 實に、
（四十九） 實に、
（五十） 實に、
（五十一） 實に、
（五十二） 實に、
（五十三） 實に、
（五十四） 實に、
（五十五） 實に、
（五十六） 實に、
（五十七） 實に、
（五十八） 實に、
（五十九） 實に、
（六十） 實に、
（六十一） 實に、
（六十二） 實に、
（六十三） 實に、
（六十四） 實に、
（六十五） 實に、
（六十六） 實に、
（六十七） 實に、
（六十八） 實に、
（六十九） 實に、
（七十） 實に、
（七十一） 實に、
（七十二） 實に、
（七十三） 實に、
（七十四） 實に、
（七十五） 實に、
（七十六） 實に、
（七十七） 實に、
（七十八） 實に、
（七十九） 實に、
（八十） 實に、
（八十一） 實に、
（八十二） 實に、
（八十三） 實に、
（八十四） 實に、
（八十五） 實に、
（八十六） 實に、
（八十七） 實に、
（八十八） 實に、
（八十九） 實に、
（九十） 實に、
（九十一） 實に、
（九十二） 實に、
（九十三） 實に、
（九十四） 實に、
（九十五） 實に、
（九十六） 實に、
（九十七） 實に、
（九十八） 實に、
（九十九） 實に、
（一百） 實に、

(三) 宋の范
二卷。宋の呂
二十卷

(三) 唐鑑を讀む一則

唐の太宗既に弓矢を以て四方を定めしも、戰を忘るるの危きを致さんことを惧れ、諸衛の將軍を引きて、射を殿庭に習はしむ。因つて諭して曰く、「今朕汝が曹をして專ら弓矢を習はしむ、居閑ならば則ち汝が師となり、突厥入寇せば則ち汝が將とならん。庶幾くは中國の民、以て少しく安んずべきか」と。是れに由りて人自ら勵まんことを思ひ、數年の間にして、悉く精銳となる。噫、是れ唐三百年の基なり。而して後嗣の諸帝、克く之れを繼ぐものなし。ここを以て衛兵弱くして京師虚しく、中葉以還、節鎮偏強にして、尾大掉はず。玄宗開元の治をして、思或はここに及ばしめば、則ち唐の盛なること、其れ極りあらんや。而るに范氏論じて陋と爲し、責ぶに足らずと爲す。彼れは北宋既に衰へ、金虜方に張るの時に生れ、君が爲めに進説することかくの如し。其の唐を論するは尙ほ可なれども、將に其の國を如何せんとする。終に二帝北狩し、(五) 師南渡して、而も之れを克く救ふものなし、蓋し其れ自ら取れるなり。近世清國、

たき能はず。然らば則ち、一を親て百を疑ひしは、吾れの過なり、一を執りて百を論ぜしは、亦百帖の過なり。

四庫全書前明目錄を讀む

余向に清室餘話を著はし、孰を一先生に請ふ。一先生余に誨ふること極めて詳かなり。然れども余の執る所と、一も合ふ所なく、恒々として樂します、復た一書を作りて之れを増せんと欲す。偶、此の書を得たり。之れを讀むこと數日にして益々喜ぶ。史記の書の旨、古今の人物圖書に於て、短を捨て長を取り、功を録し過を略し、門戸を設けず、明比を立てず、排難を尙へず、嫌忌を憚らず、其れ殆ど事理の平を得たるものに似たり。其の、徒を聚めて講習し、聲氣相通するを以て、朋黨の漸、禍亂の源と爲すに至りては、余惴然として内に懼るるあり。謂へらく、吾が徒の事、其の是れに類せざるもの、其れ幾何ぞやと。然れども自ら疑ふことあり、正道尙らざるべからず、則ち邪説黜けざるを得ず。孟子、辯を好まざれども、善く言ひて楊墨を距ぐも

(四) 書目
卷二十一
書目

のは勢なり、實証を傷まんやと。已にして之れを得たり。天下の事、雲霧翻巧の能く
其の時に非ず、正道を衛るの功、誠に若くはなし。これを心に誠にして、而る後邪説
思に順さず、これを身に誠にして、而る後邪説行に就はらず、これを口に誠にして、
而る後邪説計に就せずば、先正を亂述して可なり、後進を訓誨して可なり。此れを外
にするは、譽を好むなり、名を求むるなり、誠に非ざるなり。吾れ斯の書を読み、斯
の説を得たり、復た書を作りて説を寫さざるのみ。四庫の書目、部を寫すこと三千三
百二十一、卷を寫すこと七萬七千二百七十。靈具の書、讀むべきものかくの如く其れ
夥し。而して神州には自ら神州の書あり。己れの田を合せて人の田を裁るは不可なり。
肉を食めて外に及ぼし、血を流して流を違するは、亦唯だ誠なるのみ、以て吾れ辭巧
に對るに非ざるなり。

(五) 書目
卷二十二
書目

本書の後に書して表本土保に贈る

書目書四通、合して之れを觀れば、平平君の來去略ぼ見ゆ。貴家の譜錄に載する所の

孫七の弟判平なる者は、即ち是の人たるや疑なし。但だ其の半を以て判と爲すもの、
引^ひん^びべ^べあるざるのみ、致あるに、半半君去らるゝと雖も、其の子二十郎、留まりて吾が
領を輔き、盟を荷ふこと三年なれば、則ち兩室の交通、百世と雖も絶つべからざるな
り。而して寛明・明和より今に至るまで僅かに九十年、兩家久しく相識らず。予、土
保と交はること十餘年なるも、未だ嘗て其に故事を推究せず、其の慢や甚だし。然れ
は今に及んで慙^はんとして實を得、重ねて兩家の盟を尋^{もと}めしも、猶ほ以て祖先に地下に謝
すべし。因つて其の祖譜圖通を手録して土保に寄せ、以て其の家譜録を補ひ、これを
後の子弟に傳さしむ。祖譜に稱する所の十郎左衛門なる者は、名は矩行、吾が家の始
祖重康の嗣なり。半半君の子仁十郎、孫を以て直ちに矩行の後を繼ぎ、明和六年八月
四日に薨す、子なし、妻子市佑嗣ぐ。市佑は余に於て高祖なり。併す書して致權に資
すと云ふ。安政四年丁巳三月八日、吉田矩方謹んで書す。

たれ詩は美人の泣く所、故に特必ず之を美士に贈る。之を

(一)
 上掲あるには唐詩を以てし、聲制調法、韻味篇篇、必ず古人の傳ふる所の如くす、又
 (二) (三) (四)
 楚辭・文選を以て之れに次ぐ。三書既に熟して、沈氏の別裁を通讀せば、初ち彼の上
 二十餘代、神風の正體、人情の剛柔、已に胸臆に具はる。其の中必ず吾が情に通し
 て、而して今風を激ふるものと^しざるものとあらん。或は尋る一家を重とし、或は體
 を折衷し、或は古にして簡^{かん}なる、或は近にして流暢なる、其の擇びて之れを^しめるは
 生に習し、吾れは^しめず。凡そ此の三四の書は、吾れ風に考證調習するに志ありしも、
 未だ^し業に暇あらず。空論に之れを^しせば、吾れ^し焉なりと雖も、幸に興を^したりて之れ
 を^しめざる。是れ生、吾れを^しめて以て風志を^しはしむるなり。吾れ^しる又生に叩
 くに書畫を以てす。十餘年の外、吾れ生の導に因らば、或は少しく書畫に通ずるを得
 る。生も亦吾れの言に^しりて、遂に大いに詩法を究むるを得ば、則ち所謂詩中の畫、
 畫中の詩なるもの、兩人兼ねて之れを有せん。果して能くかくの如くならば、則ち其
 の^しる所、獨り詩畫に止まらざるものあらん。序を^しりて生に^しり、併せて以て自ら
 歸す。

朱竹垞文粹を讀む

論言（一）へらく、昔初の諸儒にして、學問文藝の造詣（二）、並びに深き者は、朱彝尊（三）に若くはなし。同時の王・汪・閻・毛の諸家、各一體要ありと雖も、其の體を具ふるは、蓋に難くこれに及ぶなしと。余頃乃村瀬氏の朱竹垞文粹を讀むに、（四）文粹かに若干節にして、未だ竹垞を盡すに足らずと雖も、亦以て其の概要を觀るべし。蓋し其の家居すること二十年、書を撰すること八萬卷。且つ鈔し且つ著はし、老に至ると雖も、能く諸家を襲する所以なり。人は是れより大なる者あるも、國に背き虜に隸したる、他の美ありと雖も、尚ほ何ぞ遺ふに足らんや。

按ずるに、明の崇禎甲申、北京城陷る。竹垞時に年十六、乃ち能く田野に昇居し、自ら當世に見はるるを求めず、亦初めありと謂ふべし。何如ぞ年已に五十にして、顧つて一檢討を博し、自ら其の異數を詔るや。吾れを以て之れを觀れば、錢謙益の輩と一閥のみ。吾れ其の「譚先生・張處士・殷先生の墓表誌」を讀むに、渠れ蓋し懣懣とし

（二）
（一）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

て、自ら其の詞を擬す能はず。李陵を弔み文は、自ら其の平過にして絳を失へるを悲しめり。其の「通鑑」以後の集に名づけて、「陽春」と曰ふ、これを「北山移文」に載れるなり、人をして惻然勝へざらしむ。蓋し其の初め名心甚だ謙なりしなり。謂へらく、東南の隱居幽憂志を失へるの士、時を憤り俗を嫉むと。其の辭工なりと雖も、意は偏ふることなけん。ここを以て終に其の大節を失ひて、以てここに至る。

然、夫の所謂隱居なる言は、哲明季の完人、俯仰愧づるなき者にして、亦古の漢吳の輩なり。人孰れが天良なからんに、顧つて是れを合せて彼れを欺らば、其の内寧んぞ能く自ら笑んせんや。先達既足前、高僧の文を喜まず、卓なるかな此の見や。余向に居士生類なるものを讀む。林氏既を生節義の堅き、昇居して出でざること四十年、其の學才だ必ずしも竹垞に及ばざれども、而も其の文は字淚句血、人をして卷に對して歎息し、巻を掩うて長嘆せしむ。而して滿清方に盛にして世に蓋だりくは補遺せられず、余爲めに深く之れを惜しむ。然れども竹垞をして一たび侯爵に泉路に見えしめば、則ち拙行退縮して、前日八高第の富も昂然として自ら其の小なるを知らんこと必せり。

且つ諸君をして千萬年當日の如くたらしめば則ち已まんも、一旦命^{あらた}畢まらば、異代の人必ず竹地を合てて、俟^{まち}齋を取らん。此れを書して以て世に阿^{おも}り名に急なる者の炯^{けい}戒^{かい}と爲す。

(四) 周布政

之助(劉傳)

周布政

之助

劉傳

周布政

之助

劉傳

周布政

之助

劉傳

周布政

之助

劉傳

周布政

之助

劉傳

周布君の太孺人某氏八十壽の序 家兄に代りて

(五)

強^{きやう}國太孺^{たう}君の歳、中^{ちゆう}昌^{ちやう}の初六、大津郡代官周布君、酒を饌^{した}み肉を炙^{あぶ}り、一時の名流を

會して、壽を太孺人膝下に獻ず。余も亦預かる。余未だ孺人を知らざれども、獨り君

を知ること最も深し、因つて余に序言を命ぜり。昔君年少にして學に在り、俊秀を以

て稱する、特に經義に精し。在學の諸士、曾て學問詞藻を以て前後褒貶を蒙る、而

るに君は厭つて孝行を以て賞せらる。凡そ貧民賤徒は衣食足らず、奉養多く闕く、乃

ち能く拮据經營して略ぼ餽養を得ば、則ち以て孝と爲すべし。士は祿食あり、固より

以て親を養ふに足れば、則ち其の所謂孝なるもの、唯に衣食の親^{もてなし}のみに非ず、則ち

君の孝推して知るべきなり。君年二十四にして乃ち官途に就くや、累^{しほ}りに當路の識^しる

唐となり、南船方に扶擢せられ、す當方に轉じ、數年ならずして政務廉に入る。政務廉は政務の廉まる所、當夜の書る所、職次甚だしくは貴からざれども、而も純正極要第一と稱し、人皆以て愛と稱す。而して君隱然として國家を以て己が憂と爲し、昔へて聖賢の言を以て悦びと爲さざるなり。

宣和六年、宋夷の使劉浦翼に來り、其の明年正月、再び來つて金川に入る。劉翼は驍にして器落文、驍々。君時に公駕に従ひて江郷に留まり、一身事を荷ふ、鎮將老吏も率ね將に就いて事を決すと。又命を衛みて國に歸るや、大臣の議を請うて即ち往けり。君國より辱を荷むこと特に篤く、起居太だ難めり、而も紛を理め結を解き、未だ曾ておしと操れず。是の時に當り、太孺人白を垂れて堂に在り、晨夕門に倚る。君寧んぞ聖室にも之れを忘るるを得んや。而して幾微も言面に著はすなし。其の忠孝の際に於ける、蓋し之れを講ずること固より寡かなり。其の明年、君、事に坐して官を擬はる。君慨然として曰く、「君恩身に賜ふ、吾れ以て吾が奉養の志を遂ぐべし」と。將に郷に歸つて飯を樂かんとせしも、未だ幾ばくならずして今の官を得たり。郡職は事簡な

を減ました。世ぼすして曰く、「謙めず死せず、何を以て智賢と爲さん」と。余頗る之を奇とし、語るに學の方を以てす。榮太室し内に親るあり、悉く武技を廢して、余に携ひて日々書を讀む。一日名字を以て余に問ふ。余、秀實字は無逸を以て之れに應へ、且つ曰へらく、「汝の苗たる、狼に匪ず、莠に匪ず、吾れ已に之れを試みたり。草らずんば、剛も秀で剛も實らんこと許すべし。然れども秀や實や、誠に見からず。誠も剛も最も難る、維れ難り維れ讀む、其れ無逸に在るかな。抑、吾れ聞けり、李唐二枚十朋秀實と名ある者あり、近隣又蒲生蒼藏先生あり、亦秀實と名のる。二子は皆一便なり。汝温いて二子の傳を讀まば、其れ必ず無逸の然る所以を知らん」と。

諸生に示す

士別れて三日なれば、刮目して相待つ、一日見ずんば、三歳の如し。朋友相與の情、學問日新の機、誠にかくの如きものあり、況や一月に於てをや。余頃ろ心に一文を構ふれども、事、考據に待つあり、遽事に能く辨ずる所に非ず。因つて嚴に一月を課し、

二子傳を讀むべし、
李唐二枚十朋秀實と名ある者あり、
近隣又蒲生蒼藏先生あり、亦秀實と名のる。
二子は皆一便なり。
汝温いて二子の傳を讀まば、其れ必ず無逸の然る所以を知らん」と。

1. 凡在本行开立存款账户的客户，均可向本行申请开立支票。
 2. 支票的有效期为自签发之日起10日内。
 3. 支票的金额不得超过账户余额。
 4. 支票的签发人必须为账户持有人。
 5. 支票的收款人必须为本行客户。
 6. 支票的用途必须合法。
 7. 支票的签发人必须对支票的真实性负责。
 8. 支票的收款人必须对支票的真实性负责。
 9. 支票的签发人必须对支票的金额负责。
 10. 支票的收款人必须对支票的金额负责。

諸君を誨導し、仙童を娛樂し、以て之れを破綻せんと欲す。休に對し煙を分つ、平日の情、翻寫すること易きに附す。ここを以て文を作つて諸君に贈す。諸君願ふに亦詩に乘じて精書し、以て書が目を書して、三歳の情を慰むるあれ。昔、宋の太宗、一年を以て御覽千卷を讀了す。これを一月に率せば殆ど九十卷なり。御覽は毎卷十數張に過ぎず、多きも僅かに二十許張のみ、然れども政を聽くの暇、之れを爲せるは則ち勤なり。諸生に存りては言ふに足らず。告弟雨澤芳洲先生、門人と漢書を讀み一月にして終る。語へらく、「晝夜停々讀まば、十五日にして乃ち可なり」と。是れ以て書生の能と稱すべし。諸君は精銳なり、意ふに必ず古人に輸はざらんも、獨り余の忤情なる、志の如くなる能はざるを悉る。然れども一月にして能くせずんば、則ち兩月にして之れを爲さん。兩月にして能くせずんば、則ち百日にして之れを爲さん。之れを爲して實らずんば、願のざるなり。諸君願はくは併せて此れを爲れ。閏月初三、二十一回生書す。

兩秀錄に就す

(一) 秀錄
卷之七、四十

(二) 矢頭石
卷之七、四十

(三) 秀錄
卷之七、四十

余前に榮太の爲めに秀實無邊の説を作る、事、成公・君平二公に及ぶものあり。榮太
乃ち二公の志を興^{おこ}して來り復す。余之れを嘉^{よし}し、名づくるに兩秀錄を以てす。時
に余猶、事體の事を檢す、因つて諒^{わづら}けて曰く、「義人矢頭^{やうとう}兼兼、年甫めて十七、父と
同じく忠に興す、大有^{おほ}良^{よし}棟、其の幼にして父子命を并^{なら}うするを憐^{あは}み、之れを揮^{ふる}して去
らむ。兼兼憤然として自殺せんとす、兼兼かに之れを止め、遂に之れと聞^{きこ}ふ。^(一)毒坂
仙行、並^{なら}ずを以て崎崎相^{あひ}諍^{しやう}ふ、然れども後獨り死に興^{おこ}せず、世或は以て疑^{うたが}を爲^なす。今
榮太の志と諸公二人と正に同じ、明鑑の存する所、伐柯^{はくか}遠からず。夫れ成公は大節の
人なり、君平は忠の人なり。今天下無事にして、成公の大節、未だ必ずしも用あら
ず、而して仙行の終らざりしも、亦榮太に慮る所に非ず。然れども矢頭の憤を蓄^{たくわ}へ、
而して君平の忠を嘉^{よし}はば、寧^{いづ}んぞ成す所なくして死せんや。若し乃^{なんぢ}年少にして身輕く、
以て自ら菲薄にせば、則ち兩秀の錄、將^{まさ}た何の用ふる所あらんや。是れを跋と爲す。
丁巳閏月、二十一回猛士書す。

周布生の文を評す

某大夫に奉る書

周布生

(五) 毛利の
川氏と木部と
の書
かいふ

余、前中諸君の此の題をやるものを聞すること凡そ三篇、兄の作を併せて四と爲す。余を以て之れを觀れば、其の立言措辭、並びに未だ其の青瑩を得ず。兄の作は苦心其まに見はる。然れども前の三篇と、遂に其の甚だしき軒輊を見ず。是れ諸君の罪に非ざるなり。願ふに題原と假説なれば、文何ぞ獨り眞なるを得んや。岩國の事、誠に言ひ難きものあり。事體あり、流弊あり、古格あり、近例あり、公議あり、私論あり。凡そ此の數者は、必ず洞察通視して、之れを斷ずるに大義を以てし、之れを通ずるに至議を以てして、方に始めて言ふべきのみ。然れども未だしたり。其の徳あり、其の才あるとも、而も其の位なくんば、則ち君子は敢へて言はざるなり。但だ前の數者は深思研究して、用を他日に待つ、是れ固より志士の爲なり。而して其の確然として定見ありて、これを同志に謀り、これを行事に納るるは、亦或は忠臣の事ならん。是れ

を朴にしては、吾れ其の謂ふ所を知らざるなり。今先生已に題に名づけて人に曝す、是れ必ず卓見あらん、宜しく叩きて之れを質すべし。然りと雖も、丈夫の稱、已に其の謂ふ富めるを覺えざれば、則ち所謂卓見なるものも、吾れ知る能はざるなり。閏月初六、松陰妄りに評す。

鹽谷の文を読む

鹽谷富隆は、當今の文宗にして、學者の矜式する所なり。而して吾れ其の大統政を讀みしに、言へるあり、「謂ふなかれ勳興つて、靈圖靈を生ずし。幕府間かれてより、勳興固し、中材傑も易く、昏暴助くべし。睿聖の作る、時あり數あり」と。又高由・蒲生の傳に、言へるあり、「幕府の立ちてより、天子威幅を關東に譲り、南面して已れを慕ひみたまふ。而して幕府も亦能く臣節を竭し、帝澤愈々光やく」と。果して此の説の如くならば、則ち在昔皇室の全盛は反つて今日の衰頽に如かず、今日衰頽の皇室は、乃ち創應久遠の盛事なり。而るに志士仁人書を讀み時を憂ふるは、果して

(一) 富隆の
傳に、
吾れ其の
謂ふ所を
知らざる
なり。今
先生已に
題に名づ
けて人に
曝す、是
れ必ず卓
見あらん
、宜しく
叩きて之
れを質す
べし。然
りと雖も
、丈夫の
稱、已に
其の謂ふ
富めるを
覺えざれ
ば、則ち
所謂卓見
なるもの
も、吾れ
知る能は
ざるなり
。

の清なる者と
いふ。この二
者ともに孟子

雨森芳洲先生の國王稱號論跋

國王の稱、固より大いに不可なり。大君の名、亦穩かならざるに似たれば、則ち其の一量一非は何を濫く論するに足らん。而も芳洲先生諄々侃々として、疏論して已まざるものけ、何をや。先生皇を尊び勸を拂ふるの志、其の由來する所蓋し久し、固より一朝鼎沸の故に井ざるなり。而して豈に特だ國王の一事、朝鮮一國の爲めに然らんや。是の論に當り、新井鶴傳由羅淵を受けて私見を逞しうし、方且に惡を逢へ過を長じて、其の論未だ底止する所を知らず。故に先生、國王の一事に因りて朝鮮一國を論じ、上は既往の失を矯め、下は將來の鑑を垂る、其の旨深し。余向に未だ此の書を讀まずして、通略を作る。通略偏く諸書を論ず、然れども特だ此の書の義疏のみ。況や先生の高死事を論する、余の隠居して放言するの比すべきに非ざるをや。然れども通略は此の書を得て、以て吾れ一人の言に非ざるを知らるべし。故に吾れ妄りに取りて後に附す。明時、芳洲先生にして知るあらば、其れ或は余を以て身後の一門生と爲さんか。皇朝には、皇子皇孫のみ異り親王・諸王の名ありて、人臣には王號あることなし。然らば明も假令武藏王・關東王と稱すとも、人臣の義に非ず、亦平親王の續のみ。本書

富永彌兵衛の免獄を乞ふ狀
代作

夫然ここに書かず、吾れ故に言ふなり。此の書實永八年辛卯三月に係り、其の四月二十日に書す。故に通稱は之を正徳元年に係く。此の書、原藏者は幸徳殿、今寫す者は富永有隣、誓有志の士なり。開元十九日、藤原矩方書す。

富永彌兵衛の免獄を乞ふ狀 代作

(七)

石某に人は仁孝より半面の識なし。僕の外兄に吉田生なる者あり、曾て野山の獄に繋かれ、時に相得て交はり轉し。生、常に僕の爲めに其の人となり説き、又其の詩を誦す。其の詩聲牙にして口に上らずと雖も、氣炎熾々として前に古人なし。其の人蓋し亦かくの如きのみ。生云へらく、「彌兵衛、生某家にして、惡を惡むこと仇の如く、氣を懷ひて人を罵る、蓋し窮蹙なき能はず。然り、是れ皆鄉曲の惡む所、凡俗の猜む所にして、此の梨園を致さし所以なれとも、而も決して不忠不孝と不義との人に非ざるなり。國家以來、稍訪ふに經學を以てす。ここに於てか、眞家なるもの化して直方となり、氣を激むるの變じて善を善みするものとなる、前と蓋し二人の始し。其の書

(一) 論語述
而論之者に
て

(二) とるに
古の事人、周
の如く、其
伊尹は商の賢
相

を讀むや敏達、文を作るや勁拔、筆札又筆より佳なり。賢々として進修し、日夜處
らず、久しからずして將に氣を成さんとす」と。無謂んで分條を推するに「賢を識し
知を識するの目あり。孔聖も「^(一)進むを興し退を興す」の語あり。其の人罪惡ありと罵
れ、猶ほ或は識を要ることを得んか。況や其の少小の宿過、安んぞ其れをして幽林鬱
積して、終に野山の鬼たらしむべけんや。匹夫も之れ澤を被らずんば、禹・^(二)益・伊尹
之れを恥づ。況や其の人瞭然として氣を成せるをや、寧んぞ匹夫を以て之れを待つを
拘ん。盛世に何を造るの哉、切に執事の爲めに之れを憂ふ。漢の顯宗、重園を獄より
抜いて、而して史書朽ちず。宋の^(三)宗澤、巨冢を刑より脱して、而して將略^(四)匹なし。文
武の才學、^(五)趙・岳の人のごときは、今世^(六)轉くある所に非ず、拔擢の事も、又古と變
かに異たり。然れども執事の國を治むる、賢を擧げ才を用ひ、至らざる所なし、民を
仁し物を愛し、具さに其の心を盡す、而して其の餘澤又曾て囚徒に流及す。僕固より
聞いて之れを勉とす。今執事事に情みて其の人を救はば、其の人必ず能く奮發振勵し
て、自らを無匹と不朽とに致さん。是れ國家の福なり。僕固に執事の爲めに之れを望

わ。僕の責任にして許難なるも、亦母が親事の愛を知るを憐むのみ、伏して惟んみるに御慰められば、幸甚なり。其譯んて是す。

女戒譯述終

女實て山鹿先師の遺教を讀みしに、言、女教に及ぶものあり。謂へらく、一女は柔順を以て用ゝ物と、果斷を以て制と爲す」と。又深く海語・勢語の、風を收り俗を壞るを嫌す。故に、疑かに其の言を録し、其の成書なきを惜しみ、妄りに之れに擬せんと敢せしも、而も文拙く學薄く、他業又繁くして未だ爲すことある能はず。謂へらく、是の事、必ず學和南古々に通じ、文辭淹暢健敏なる者を得て、而る後、屬すべきなりと。余已に憂に囚せらるるや、これを外叔久保翁に語る。翁勵せられて後、詩書筆札を以て、其中の子弟を教習し、最も慈に女教に留む。女大小學・女式目の諸書より、女を以て女法に授けて之れを讀ましめ、尚ほ未だ是らずと爲し、余を促して之れを讀ましむ。余已に平政、乃ち在獄生當て有罪を擧げて之れに代らしめんとす。因つて翁

(八) 久保五

(九) 貝原益

(一) 有縁の
才女成第 三
は、一、二、三、
四、五、六、七、
八、九、十、

(二) 藤氏成
第 三
は、一、二、三、
四、五、六、七、
八、九、十、

(三) この年
陽五月があり
しを以ていふ
は、一、二、三、
四、五、六、七、
八、九、十、

と説り、有縁に請うて先づ有大家の女成七篇を譯述せしむ。有縁幸に外にせられず、
我連に功を成て一軒ある。謂ふ所の有縁果斯、其きに大家の言に見ゆ。而して有縁の
無と文とに、向の大小學・式目の比のごときに非ず。是れ以て源・勢二語の習を流ふ
に疑ふ事なか。大家言へるあり、「男は能く自ら謀る、女は常に人に遇すべし、而
も海んで訓導せられす」と。是れ女成の作られし所以なり。余は則ち言はん、一節毎
然結ありて、然る幾事子忠臣あり、楠・菊池・結城・瓜生の諸氏に於て、吾れ之れを
見る」と。是れ女成の述べられし所以なり。併せ讀して以て讀者に諭ぐ。丁巳漢の五
月、二十一回猛士藤寅書す。

戯れに對策に擬す (内)
諸女に附與す

總上は愉快なり、嗣とは制度なり。二者皆主將の方寸に出で、他事に關することある
に非ざるなり。軍の制なく制なきこと、矣壯・甲寅に至りて極まれり。是の時に當り、
總制の如き者が東大將軍とならば、必ず能く勅諭を發して大勅を絶り、晴鏡數百、儀

制數十もて、彼理・傳緒の首、麾下に致すべし。若し然る能はずして頼朝猶ほ大將軍となるときも、二百六十大小名に、佐々木四郎・梶原源太、其の人乏しからざらん。長崎の港、横瀬の灣、布崎・多岐の嶺、波底に歿すべし。其れ然る後天下の旗幟、一獨にして觀を改めん、節や剛や、ここに於てか在り。然りと雖も本あり。頼朝・義經は道ふに足らざるなり。忠孝を知らず、仁義を知らず、上天子を畏れず、下萬民を愛せず、前を亂に誤らず、後大名を率ゐずんば、一時の節のみ、一時の制のみ。況や一時の節制すら、且つ無せざるをや。唯だ然り、今日滿天下の人、皆婦人好女のみ、殊に未だ一丈夫を見ざるなり。或は十人中、猶ほ二三の勇者ありと謂はんも、吾れこれを信ぜず。天下苟も一の勇者あらば、節制已に定まらんも、唯だ其れ之れなし。ここを以て節なく制なし、矣哉・甲寅の如くして南る後已まんのみ。七夫節制の義を説きて、雄壯婦女の聽を驚てしむとも、未だ其の、事に益あるを見ざるなり。然りと雖も、明間には對へざるべからず。謹んで對ふ。

違制命をられし所の擬對、草率に結案すること右の如し。僕僞仰して自ら誓ひ、國

二二四
卷之三
三

二二五
卷之三
三

の爲めに血闘す、を變爲化すとも、此れより外たる能はず。古人言へるあり、「其
の非心を悔す」と、悔ひあるかな、悔ひあるかな。勇者たきなりの説に至りては、
儼然て其の猛吉聞答の中に論ぜり。或は以て然らずと爲さん、其の人必ず勇者
なり。然れど、一、百戰を厭ふと雖も、誠は甘心する所なり。抑、節制あらば、兵、先登
することなしと云ふ者は、無稽の轉談にして、何ぞ深く尤むるに足らん。宇治河の
二戰は、眞實にして天下を覆らすの妙用なり。豊臣一たび倣ひてこれを朝鮮に用ひ、
因つて以て賊を誅せしは孰も快ふべきのみ。一の谷の事に至りては、義經先登して、
二つ之れに従ひしのみ。是れ義を以てすふなり、若し二子に坐するに、抑、拔劍の律を以てせ
ば、抑、爾を以てか義經を誅せんや。然れども陳跡虚談するは、徒然籌ふる能はず、
神機活潑は唯だ眞實に在す。事之れを諸君に報じて、其の開示を求めよ。六馬六
日、編實内す。

關田益田君に上る書 凡作

大御、名は久
二一
二二
二三
二四
二五
二六
二七
二八
二九
三〇
三一
三二
三三
三四
三五
三六
三七
三八
三九
四〇
四一
四二
四三
四四
四五
四六
四七
四八
四九
五〇
五一
五二
五三
五四
五五
五六
五七
五八
五九
六〇
六一
六二
六三
六四
六五
六六
六七
六八
六九
七〇
七一
七二
七三
七四
七五
七六
七七
七八
七九
八〇
八一
八二
八三
八四
八五
八六
八七
八八
八九
九〇
九一
九二
九三
九四
九五
九六
九七
九八
九九
一〇〇

六月七日、久保久清諱（三）を再拜し、益相磨の執事に白す。前に要りに耻を上り、富永

備兵衛の免職を乞ふ。言極めて辛曲にして、深く自ら恐慚す（四）。退いて之れを或る人に

語りしに、或る人其を云へらく、「備兵衛已に親戚の棄つる所となる、復た親戚の拯

み所とならば明か可なりとも、今外人代つて拯みは、乃ち總歸の被疑に類するなから

んか。且つ備勢の餘光を假りて親戚の私事を發くは、道に於て甚だしくは順と爲さず、

これ宜しく已むべきなり」と。世人の議論を好み、人事を阻撓すること、往々かくの

如し。雖ふに執事の仁明なる、其れ斯の言を爲さざること、亦審かなり。僕因つて執

事に進言せんと欲するものあり、伏して願はくは垂察せられんことを。

夫れ備兵衛の獄よりしては實めて其の罪あらん。但し拘留五年、學に勤め行に勵む、

本以て少しく勵ふべし、況や親戚指しめを問むをや。而るに羽仁彦兵衛何者ぞ、乃

ち獨り仇視して、其の必ず内死せんことを欲す。其の倫に違ひ情に反る、好人に非ざ

るを如何すべきなり。且つ僕、執事の偏へは僕の言をのみ聞かんことを要むるに非ず。

誠にこれを由る所に下して、博識等搜し以て其の情偽を明し、然る後執事等乃に之れ

と謝せんことを願ふのみ。俳前の狀に已に彌兵衛の學を好むを道ひ、又其の詩を併せてこれを執事に贈る。執事直ちに之れを見られしならん。而して僕の言未だ盡さざるものあり。彌兵衛、平生義を好みて慷慨し、其の學を傳すや専ら後進名教を以て要と爲す。其の志往々其の著作に見ゆ。近ごろ又曾大家の女誡を譯述す、僅々たる小著爾ふに足らずと雖も、女意亦見るべし。今譯んで其の手書稿本を以て、復たこれを執事に贈る。執事忌食の間、幸に板關を賜ひ、遂に僕の言の當否を教へられば、何の幸かこれに當一ん。僕、進言す、誠に、違へば則ち疏んぜらるの戚あり。然れども知りて言はず、言ひて盡さざるは、哲賢者に仕ふるの道に非ざるなり。ここを以て冒瀆してここに來る。願はくは罪と爲すことなくして採納せられば、幸甚なり。

竜柱山來記の後を書す

當水彌兵衛、贈助果敢にして、言著深からず、遂に親戚の誹謗する所となり、流に處せられ獄に繋がる。而も罪誣の罪に非ざるなり。寅、彌兵衛と始めて野山の獄に相聞

(一) 國相府
と行相府、茲
に、

り、一瞬にして知己となる。因つて國家の大計を以て、慨然として相與す。而るに彌兵衛は其の冤枉を陳べ、憤懣して涕を流すに至る。余恆ち耳を掩うて聽かず、唯に國家煩雜にして身家に暇あらざることを以て、之れに應ふ。其の後、彌兵衛遂に復か言はず、今己に四年なり。頃乃彌かに聞くに、兩政府彌兵衛の才を憐み、其れをして獄を脱して家に遣らしめんと欲す。而るに奸慥羽仁彦兵衛、誣陷の覺らるるあらんことを懼れ、稍復た彌縫し、其の冤をして益々冤に、枉をして益々枉ならしめんと欲すと。實、其のかくの如きを坐視するに忍びず、乃ち彌兵衛をして其の冤枉を陳べしむ。彌兵衛曰く、「吾れの冤枉は、衆知り神知る、且つ子己に知れり。吾れ之れを言ふを恥づ」と。之れを強ふること再三にして、方に始めて其の略を言ふ。此の記是れなり。

彌、彌兵衛、身己に國家を愛ふ、何ぞ身家を圖らんや。然れども冤枉自さすんば、家還るべからず、獄殺すべからず、國家の事復た策すべからず。是れ實の彌兵衛の爲めに悲しみ、亦國家の爲めに情しむ所以なり。且つ衆人の治、下に冤枉なし。今冤枉か

ノ外三十一回
前巻一申の昔
城諸子等に枚
む

る。日本に關
は此の人名を
信りて和蘭中
の意に用
ひしか
年ロシヤの使
レザノフ長崎
に若し交易を
去らむ
(七) 新華報
の記載にある
(八) 安ら太

今讀むに其の説を變ぜるに非ず、但だ僕が言ふること彼の如きものは、釋・南あるな
り。一應天下の事、一も僕の意に當るものなし。其の服戎の策に於て、偏へに徐・夫
の許謀を信じて以て戰案と爲し、復た字内の公論を容れず。文化に魯狄を論せしが如
きは、是れ其の明證なり。其の後一張一弛、言ふに足るものなし。乃ち癸丑・甲寅の
際に至りては、已むを得ざるに逼られて之れを爲す、固より變通の略あるに非ざるな
り。一弛を設け弛を畏るるの心を以て、通商通市の計に出で、繼つて之れを神聖域を
守る計に弛を敷く道を怖くるの大誤に附す。是れ僕の抱腕切齒する所以なり。善
く處ひて知して後相すべく、善く計めて而して後守るべし。今戰ふ能はずして和を言
ひ、其の能はずして守を言ふ。章程破なりと雖も、約束謹なりと雖も、吾れ其の越
案・漏洩と一轍に歸して、而る後已まんを見るのみ。何ぞ和蘭の恭順を望まんぞ。
嗚呼、神功聖旨は昔に聞かざるなし。豐臣太閤も猶ほ言はざるべし。是利・德川は藏
に言ふに思ひず、況や其の末道をや。ここを以て當世の事、僕目を鍼すること既に久
し、其の遺囑より腹納するに及んで、聊か復た戰言闘々するのみ。然れども南國の

清の大義は満
洲より起るを
知ていふ

人は則ち可なり、刺客として職に任ずる人、寧んそかくの如くなるべけんや。鞠躬力
を盡し、死して後已むのみ、是れ其の意なり。老兄の爲す所學ぶ所、事々皆實なり、
但だ利用安んずして以て小成に安んずることなかれ。天下の事、勇者出づるに非ずんば、
誠こそた安んずるなり。言はんと欲すること猶ほ多きも、統べて不言に在り。其々
勉められんことを。六月廿七日、寅復す。

趙撫生に示す

貴族天子を尊び、宗廟を安んずること、自ら以て任と爲す。其の危きに至りては、趙
氏劍も同様く、一固よりなり」と。是れ其の人、國に忠にして、身家を顧みざるなり。
爾るに子瞻は、其の身居等して人主をして自ら將あしめ、名を求めて患を逃れんと欲
す、趙の禍は其れ自ら取れるなりと論ず。是下子瞻の説を取らず。是れ自ら義人烈士
の室を誣ふ、其の志は則ち美なり。況や子瞻の論ずる所は、漢書其の事を載すれども、
史記は則ち載せざるをや。歸安用因つて或は是れ傳教の詞なるかと疑ふ。是れ亦以て

（一〇） 宋 室
（一一） 宋 室

是下の説を證すべきなり。然れども子贖は簡錯を知らざるに非ず。史公の錯の傳を作
る事、^(一) 疑ふと爲す。夫れ史は太公にして以て常を安んじて錯を折き、遂に能く太常を以
て異に覺す。而して錯は則ち兵を調へ食を^(二) へ、其の策、臺の上に出づる能はず。改
に曰く、「諸侯難を發すれども、急に國救せず」と。子贖の論、實にここに原づくなり
而して子贖の意は則ち在るあり。蓋し^(三) 家父の審察及び彙書の六國と、並に同じく皆策
師の爲めにして之を證す。審察策は、言ふを待たず、六國及び此の篇も、末編に於
て正意を發露す、顯然として見るべし。而して此の篇は則ち趙氏をして更に一^(四) 史公
を生ぜしめんと欲するのみ、是下の使らに往古を論すると大いに異なり。王蘇・陳^(五)
市の史論を讀むには、此の意を知らざるべからざるなり。明季の魏良子に至りては、
別に自ら一説あり。其の錯を論する如き、臺々たる大策にして、後世必ず其の用に資
するものあらん。僕乃ち其の遺法を師とせんと欲す。史公の一權を擯^(六) にして變更す
る處多し。一の一語に原つき、以て世の簡を替ひ快に乘じ、暴を先にし臺を後にするの
一説の人を讀むるも、亦以て一説を成すべきか。凡そ史論は或は以て時勢を審み、或

は以て陳勝を以て陳勝を以て、而も公理虚構なるものあり、實事虚構なるものあり、而して有用無用、造に其の間に出づ、其の人の高下深淺に随つて、其の教何ぞ當に價值のみならんや。是れ學識文章の何如に在るの歟。唯是是下これを細察せよ。

四

魏子の論に云ふ、「七國起つ、而して錯は徐誼の旁を以て吳にあた予へんと欲す」と。

史記の景紀・燕吳南傳を閱するに、此の事載せず。豈に僕の檢を精を缺くか、或は他傳に見ゆるあるか、抑、亦漢書・他書に載する所に係るか。足下幸に檢出して示

よめよ。

是氏の終身の一草は、是下の論する所甚だ當れり。是れ好文科なり、急に一書を作して是氏に贈られよ。有用の文字、須らく此の種より手を下すべし。

富永有隣に與ふ

昨の午夜、樺介・晏太・徳民・徳太の四人至り、具さに若兄純獄の狀を説く。四人愈

其兄の言談事、激せず掩まず、閑雅盛健にして、曲さし其の宜しきに當りしことを
 言ふ。至則至則、榮太謂はく、「富先生は彫眼瘤面、狀貌魁梧、音吐濁重にして、之
 らを求めば偉丈夫なれども、既に之れに接するに及んでは、氣象溫厚にして、則ち婦
 人好女なり。史遷の子房を讀へる、蓋し亦かくの如きのみ」と。因つて輿に一笑せり。
 四人衆曰く、「一賊の謀は則ち密なり、有隣將に何を以てか自ら解かんとする」と。僕
 曰く、「然り、天地苟も日月あらば、有隣の道未だ否せざるなり。有隣の道否すれば、
 天地に日月なきなり」と。道太昨(六)家兄の爲めに道ふ、「大野・羽仁の借島の上書、議
 して羽仁の名を削らしめ、代ふるに他人を以てす。命を矯むるの事も、亦由る所に下
 げて、其の本末を詰る。二事既に已に行下す、此の外更に寸籌なし。有隣若し吾が苦
 心を察せば、絶海窮山なりとも、志を堅くし精を勵まし、道太をして奸人俗吏の重ね
 て非笑する所と爲さしむることなくんば、何の幸かこれに尙へん。書を寄せて意を言
 はんと欲すれども、事體妨げあり。願はくは舍弟に託し、具さに此の意を致されんこ
 とを」と。僕俄かに聞く、道太の二事を主張するや、唐船方之れを沮み、遠近方之れ

を、左右立着して、身すら且つ保ち難し。獨り同僚中村文吉衛門、奮然身を挺し

二以之礼を授く、加之、益當哉老兄の才を憐み、前手元老兄の窮を憐む、事ここ

上へ始めて滑なべり」と。嗚呼、奸人は則ち密なり、俗吏は則ち苟こなり。則ち苟なるの

將吏を以て、明も密なるの奸人を誅す、將來の患、實に潤るべからず。然りと雖も、

天地間に日月ありてはんや。昨夜僕四人の老兄の狀を説くを聞き、詩を作りて云はく

平林五年初刊說。戰來壓重苦尤般。平生學問至斯見。

彈笑生富貴虎

是等の事大いに驚嘆は、則ち長吟短吟、譚笑歌呼、常に目あるべし。事或は諸はず。

に、扇舟休息、此れより去れ。僕遂に是れを以て贈と爲す。讀み畢らば之れを火に

廿五、御世を以て臨すことなかり。七月四日、藤寅。

蘇明允の高帝を讀む

五十一
一、明允の權書十篇、余未だ盡くは讀まざれども、且つ六國・高帝二篇の如きは、世を

[illegible]

要ふるの言と謂ふべし。而して六國篇に審敵策ありて、之れを述言せるは、人皆其の意を知れり。高帝篇の如きは、謂へらく、惠帝弱なり、故に呂氏を以て之れを輔く。呂氏強なり、故に樊噲を除きて之れを殺し、平・勃を貶して之れを制すと。是れ其の當世の感何如ぞや。後儒其の意を察せず、或は異議するものあり。因つて權書の出を考ふるに、宋の仁宗の末年に在り。是の時人材勃興し、上三國の時に比するに至る。而して君子小人、混淆して別なく、之れに加ふるに、仁宗方且に優柔包容にして、君權暗に移る。世を變ふる者、安んぞ漢高を思はざるを得んや。漢高は無能自ら處り、以て英雄樊噲を顛倒駕馭す、古今一人のみ。韓信、將に將たるを以て之れを稱せるは、誠に千秋の鐵案なり。明尤特に其の意を敷衍し、一篇の文字を成す、別に異説あるに非ざるなり。蘇家の父子、動もすれば輒ち高帝を稱むる、皆是れが爲めなり。而して此の篇、最も明白なること見るべし。

憾、此の篇をして前に用ひしめば、呂夷簡未だ必ずしも韓・范を逐はざりしならん。
 (一〇) (一一)
 此の篇をして後に行はしめば、王安石未だ必ずしも制度を擾さざりしならん。且つ今
 (一二)

(一) 某の時を以て之れを言はば、主を尊び國を強うすること、最大の急務なり。假使若し某才能まだ相揀を離れざるに、某忠直已に侍憲に進み、某大臣庸懦なれば、代ふるに某を以てし、若し某々大臣、年少氣鋭ならば、數召對して、其の言はんと欲する所を盡さしむ。かくの如くにして主尊からず、國強からざるものは、未だ之れあらざるなり。夫れ才能の士は専ら任じ難ければ、忠直を以て之れを制す、是れ漢高の陳・王を用ひし故事なり。相揀侍憲は皆中士の職なり。權、中士に歸せば、則ち大臣職を失ひて、主尊からず、國強からず。庸懦を罷め、銳氣を獎む、是れ漢高の呂氏を存する遺意なり。故に高帝の一篇、其の意を推して其の實を用ひば、亦百世の龜鑑なるかな。

(二) 明・清の諸儒、異論を蒙るを憤り、矢を明允に集むれども、明允の本意は殊て茲には在らず。魏輔、辯姦を以て、明允の智に服す、而れども此の篇に至りて、反つて其の愚智を説くは、個たり。此の篇の切實なる、決して辯姦の億中の比に非ざるなり。沈德潛曰く、「此れ獄吏鉅諫の法を得たり、論を作る者、知らざるべからず」と。又曰く、「學書に列するは、作者も亦以て持平を爲さず」と。殆ど其の意を得て、而も

を捨てて人物を貌せば、畫始めて用あり、他人を捨てて邦人を貌せば、其の用益、近し」と。ここに於て通々國史を讀み、忠孝義烈の事に遇はば、輒ち一圖を作りて之れを表はさんと欲し、又天下を跋渉して古祠名刹の祕密を搜り、英雄の遺像を索め、寫してこれを後世に傳へんと欲す。事皆未だ緒に就かず。

（一） 自編畫
門、本を別載
題は左に

（二） 傳記・
傳記

今茲七月、余、大津の烈婦の事を紀して成る。松洞蹶起して曰く、「古人を捨てて今人を貌す、是れ有用の尤なるものなり」と。因つて筆を提げ紙を持ちて、將に直ちに大津に走らんとす、曰く、「當今二國、貌すべきの人亦尠からず、況や天下の大をや。吾れ乃ち陳より始めん」と。偶々清狂和尚、破衲弊笠、禿髮數寸にして、新たに京師より還る。余松洞の袂を引いて之れを留め、狂僧西錫の圖を爲らしむ。圖成る。酒を酬して序を作り、饒して其の行を送る。且つ曰く、「他日有用の圖卷成らば、其れ清狂を以て首と爲せ」と。因つて此の序を以て遂に之れに冠す。

（三） 清狂

（一） 魏批孟子牽牛章を讀む

齊宣王問曰
（孟子）の語

（一） 齊宣王
（二） 孟子
（三） 齊宣王
（四） 孟子
（五） 齊宣王
（六） 孟子
（七） 齊宣王
（八） 孟子
（九） 齊宣王
（一〇） 孟子
（一一） 齊宣王
（一二） 孟子
（一三） 齊宣王
（一四） 孟子
（一五） 齊宣王
（一六） 孟子
（一七） 齊宣王
（一八） 孟子
（一九） 齊宣王
（二〇） 孟子
（二一） 齊宣王
（二二） 孟子
（二三） 齊宣王
（二四） 孟子
（二五） 齊宣王
（二六） 孟子
（二七） 齊宣王
（二八） 孟子
（二九） 齊宣王
（三〇） 孟子
（三一） 齊宣王
（三二） 孟子
（三三） 齊宣王
（三四） 孟子
（三五） 齊宣王
（三六） 孟子
（三七） 齊宣王
（三八） 孟子
（三九） 齊宣王
（四〇） 孟子
（四一） 齊宣王
（四二） 孟子
（四三） 齊宣王
（四四） 孟子
（四五） 齊宣王
（四六） 孟子
（四七） 齊宣王
（四八） 孟子
（四九） 齊宣王
（五〇） 孟子
（五一） 齊宣王
（五二） 孟子
（五三） 齊宣王
（五四） 孟子
（五五） 齊宣王
（五六） 孟子
（五七） 齊宣王
（五八） 孟子
（五九） 齊宣王
（六〇） 孟子
（六一） 齊宣王
（六二） 孟子
（六三） 齊宣王
（六四） 孟子
（六五） 齊宣王
（六六） 孟子
（六七） 齊宣王
（六八） 孟子
（六九） 齊宣王
（七〇） 孟子
（七一） 齊宣王
（七二） 孟子
（七三） 齊宣王
（七四） 孟子
（七五） 齊宣王
（七六） 孟子
（七七） 齊宣王
（七八） 孟子
（七九） 齊宣王
（八〇） 孟子
（八一） 齊宣王
（八二） 孟子
（八三） 齊宣王
（八四） 孟子
（八五） 齊宣王
（八六） 孟子
（八七） 齊宣王
（八八） 孟子
（八九） 齊宣王
（九〇） 孟子
（九一） 齊宣王
（九二） 孟子
（九三） 齊宣王
（九四） 孟子
（九五） 齊宣王
（九六） 孟子
（九七） 齊宣王
（九八） 孟子
（九九） 齊宣王
（一〇〇） 孟子

君子の言を立つる、明白を主とし、簡明を尙ぶ、強辭もて理を奪ふことなかれ、巧言もて仁に違ふことなかれ、最も冗蔓にして辭を費すことなかれ。是れ吾が家の大戚なり。苟も此の戒に違はば、將に禍を國家に貽さんとす、愼まざるべけんや。蓋し正理は強辭を假らず、至仁は巧言を待たず、況や大人已れを正しうして而して物正しきは、言辭の間に在らざるをや。齊宣は缺党の子弟にして、氣輕く力薄し、梁惠の、外強敵に逼られ、内國都を懼し、國脈奮激するの比すべきに非ず。牽牛の辯は孟子已むを得ざるの言のみ。慮心の對に比すれば、置震自ら見はる。冰叔、齊宣を以て資高しと爲すは、劍も亦甚だし。冰叔の論、文は尙ほ可なれども、技のみ、道に非ざるなり。況や文も亦未だ必ずしもかくのごとく爲るべからざるをや。

漢土の文、前に縦横に敗れ、後に舉業に敗る。吾れ未だ人の爲めに被讒するに迫あらず、而も反つて更に喬木を下らんと欲す。是れ爲すべからざるなり。夫れ牽牛の辯はこれを暴君昏主の前、婦人小子の間に矢口す、世の所謂道話先生、法議和尚の流には、或は少しく裨益なしとせざるも、有爲の君、有志の士、一たび其の言を聴かば、必ず

潤にして切ならず、暗にして憂少なしと爲さん。況や果々^{じこうく}竹々として、これを文に著し、これを書に筆する、孰れか敢へて省みんや。

嗚呼、我が師翁の遺教、實事窮理として、言偏に在らず。故に古不^{ひふく}言の國と稱す。言はず論せず、是れ言の無義なるかな。偶々魏世王子牽牛章を讀む、故にこれを同志の士に告ぐと云ふ。

徳、字は有隣の説の後に記す

甲寅十月、余野山の獄に囚はれ、始めて富永有隣を知る。有隣書を讀み義を好む、有志の士なり。余時に已に慨然として相與^{あひあは}すの意あり。明年七月、遂に此の説^(二二)を作りて以て之れを對る。余は丁巳七月三日、有隣獄を脱し、其の二十五日、これを我が松下^{こもと}島に歸き、立てて塾の師と爲す。吾が説に謂ふ所の、獄に死する者に非ざること、ここに於てか始めて驗あり。有隣の獄に下るや、謗言四起し蒙口雷同して、獄吏囚徒相率ゐて侮しめ終るに至る。其の獄を出づるに及んでは、同囚蓋し其の去るを惜しむ者あ

(二二) 野山
文房にある、
本巻五三頁參
照

(一) 名は、
大、伊勢外宮
の御官にして

(四) 矣哉即

の記述違ひで
ある。長崎に
致し歸途後
は、
三郎の母との

り。而して司馬福川氏、獄寄藤介、其の親戚櫻井生、及び吾が邑二三の紳生、並各、
身を奮つて之れを助く。事政府に達し、政府の諸位、或は憐みて之れを救ふ。謂ふ所
の、徳を修め隣を得るもの、ここに於てか亦驗あり。有隣徳を修め隣を得て、幸に獄
に死せざりしも、志士の事、寧んぞ茲に止まらんや。松下千戸の邑、小なりと雖も、
亦由つて以て興るべし。而して吾れの慨然として相與すは、苟めに然するに非ざるな
り。有隣紙筆を出して、余に前説を改め書せんことを請ふ。余因つて既往を道ひ、以
て將筆を勉めしむ。是れを記と爲す。八月三日。

足代權太夫の書に跋す

右自書五條は足代翁の書して以て長井治經に贈りし所のものなり。記す甲寅の冬、余、
肥後藩士と同じく伊勢に過り、翁を山田に訪ふ。蘇、肥藩井口氏の母其の子の東役を
還る歌に及ぶ。翁激賞すること之れを久しうし、筆を把りて自ら二通を録し、其の一
を同志に寄贈して曰く、「是の歌、古意躍然として眞に古歌なり。吾が黨善く古言を修

（三）
友人松浦松洞、尊大人に見えて一たび高客を貌せんと欲し、僕の書を請うて先客と爲さんとす。松洞幼より翰事を好む、然れども山水花鳥は風流の畫と爲し、固より其の志に非ず。其の志蓋し忠孝奇偉の人を求めて之れを貌し、因つて以て自ら託するところあらんと欲す。僕の尊大人至孝の事跡を説くを稔聞し、謂へらく、「斯の人にしてみせずんば、天下孰れか宜しく貌すべき者あらん」と。然れども突爾として謁を納れ、従つて高客を貌するは、其の禮に非ざるを疑ふ。是れ僕の書を請ふ所以なり。願はくは足下幸に僕の爲めに事由を膝下に白し、松洞をして望む所を遂げしめられんことを、亦僕の願なり。僕小少より漫遊を好み、甚だしくは思を讀書に致さず。幽囚以來、始めて讀書に従事せしも、而も識見未だ定まらず、議論時に移る。加之、天下の事未だ轉く言ふべからず、區々の身、用あると否と、亦未だ遂かに料るべからざるなり。

（四）
私かに謂へらく、數十年の後、讀書漸く足り、識見議論確然として一定し、此の身の果して世に用なきことを待ちて、然る後これを著述に託せんと欲するも、亦晩からざるなり。三宅尚書・林子平の徒は皆一時の烈士にして、淺人の窺ひ易き所に非ず、況

(一) 史記の
列傳、卷四
男盛

(二) 本書一
二七頁參照

丁に謝書を贈る

(三) や史記の業をす、然れども土此の地に生れては、才の高下と學の深淺とに隨ひて、各、志す所なくんばあらず、但だ事變に遭遇して、自ら事業に安んずるは、是れ悲しむべきのみ。僕、豫に在りては則ち國政を論じ、邑に在りては則ち邑學を議す、特だ自ら事業に終るを欲せざるのみ、本志の在る所に非ざるなり。僕尚に「七生説」^(一)を作り、胸かに志す所を言ふ、而も未だ諸友の吾だしくは取る所とならざるに、足下幸に許す所あり。僕の足下に傾倒する、實に茲に在り。ここを以て敢へて妄りに志す所を以て、書いて左右に陳ぶ。唯だ足下棄てず、更に之れを教へられよ。松湖の發軔、晦日に在り、書を讀むること實だ迫り、^(二)續する能はず、萬有容を垂れられたし。許されし所の高談は、無刻に託して贈られんことを。僕の願これより大なるはなし。寅拜拜。

音三郎に贈る

(三) 無邊書が始めに^(一)庵の向學の狀を説く。吾れ之れを聞へば、則ち故^(四)伯介の遺孤なりとか。伯介は吾れ半面なし、然れども吾れ幼にして其の書を好むを聞き、人に從ひて其の藏

二二 音三郎
七四 松湖
八四 伯介

(一) 玉語、常山紀談、玉石雜誌等の數部を借讀し、今猶ほ懷に忘れず。昨無逸
 (二) 爾を拉して至る、容止溫詳、一見して心興せり。爾年已に十七なれども、未だ成立す
 (三) 所あらず、以て南すべく、以て北すべく、以て黃にすべく、以て黒にすべく、正に
 (四) 今日に在り、他人をして悲泣を絲岐に發せしむることなかれ。爾夙に父を喪へども、
 (五) 孝に遺書^(六)の在るあり。退いて家藏を襲いて之れを讀まば、乃父の聲容宛儼然として
 (六) 尙ほ存せん。「維れ桑と梓と、必ず恭敬す」、「爾の祖を念ふことなからんや、厥の德
 (七) を奉べ修めよ」。八月十八日。
 (八) 文成り、これを晉三に附す。晉三云はく、「家考の六周忌日、正に明日に在り。今
 (九) 乃ち此の辭を讀り、心私かに惕然たるあり」と。余曰く、「天數なり、然りと雖も、
 (一〇) 至誠の感、或は偶然に非ざるものあるか。昔吾れ長沼の兵法を父執山田氏に學びし
 (一一) が、業記りしは、正に先考の忌日に屬せり。而して有隣も亦曰く、「念丸の日、曾
 (一二) て世子詰文譯本を野山に得たり」と。三事期せずして相肖たり、亦奇奇たるかな。
 (一三) 誠に此の奇をして偶然たらざらしむるものは、是れ其の人に在り」と。併せ書して
 (一四) 示せる書二篇、
 (一五) 員及び吏人に
 (一六) 示せる書二篇、

普三に贈る。

この年百姓一
 萬餘人、
 士を養めたも
 一、
 廣く、
 十二月十九
 日卒、年二十
 三

市之進に贈る

一日市之進余の側に在り、凡に凭りて書を學ぶ。余命ずるに帚掃しうさうの事を以てす。市已に請すれども、書を學びて止めず。余再び之れを言ふ、市云はく、「心に十葉を寫し宛らんと期すれども、二葉未だ宛らず。完り盡して然る後事に従はん」と。余之れを言ふこと三・四たび、市猶ほ止めず。余、默然として蹶起し、其の紙筆を奪ひて之れを地に投ず。市收め取り、復た二字を寫して、然る後起ちて余が命に趨く。事卒る、余市を進めて謂ひて曰く、「爾余と抗せんと欲せしか」。市曰く、「敢へてせず」。「敢へてせざれば何ぞ吾が命に趨くことの緩かりしや」。市曰く、「死罪、市實に先生と抗せんと欲せり」。余曰く、「爾能く我れと抗せば、天下抗すべからざるの人なけん、能く天下の人と抗せば、吾れ爾に興せん。然らずんば吾れ爾を假かりさざるなり」と。市首を低おゆるること之れを久しうす。吾れ徐ろに曰く、「爾妙年にして穎脫す、興おもに道に入

るべきなり。屈せず退かざるは、爾の真心是れのみ」。市曰く、「然り」。余曰く、「聞く、汝父を愛ひ、母に事へて恭ならず、居處敬ならず、親戚隣里親責すれども従はずと。爾、子弟の事すら且つ爲す能はず、安んぞ能く天下の人と抗せんや。苟も天下の人と抗せんと欲せば、吾れに一説あり。今より志を立て、天に升り地に入り、水を踏み火に投じ、人言の使むる所、死なりと雖も屈せず、艱なりと雖も退かざれ。是れ不屈不撓にして、爾の真心を行ふに足る、而して何ぞ天下の人、抗するに足らんや」と。市奮然として曰く、「爾はくは先生の命、是れ聽かん」と。

(二)
吉田塾

市年十四、頑兒無賴にして、頗る親戚の患ふる所たり。無逸諄々として誘導し、書を授けて之れを讀ましめ、遂に以て余に託す。余一見して之れを異とす、今果して凡兒に非ざるなり。ここに於て、余市と約して曰く、「今後三十日、前言を以て踐と爲せ。三十日の後、吾れ將に更に語る所あらんとす」と。因つて書して贈と爲す。八月十九日。

溝三郎の説

無邊三生を抜し、余に應りて託を爲す。曰く昔、曰く市。昔は溫詳にして、市は顚腕、其の人知愛すべし。而して末座の一生は商家の遊伴にして、年甫めて十四、頼る市井の氣あり。余心に之れを厭ひしも、特に無邊の託を重ねじて、敢て拒絕せざりき。

而るに無邊は歳に生を稱揚して措かず、余益々悦ばず。一夜讀^{とくを}訖るや、末座生進みて曰く、「僕商を爲めて醫とならんと欲す、何如」。余曰く、「醫となつて何をか爲す」。

曰く、「商たるを學ばず」。「商たる、何すれぞ樂ばざる」。曰く、富貴の人に^{てんく}諮問する所はさればなり」。余曰く、「詔せず居せずんば、商も不可なり、醫も不可なり。今の醫の諮問すること更に商よりも甚だし。然れども君子は渴すとも^(二)盜泉を飲まず、志士は窮すとも^(一)溝壑を忘れずと。飲まず忘れずんば醫も爲すべく、商も爲すべし。人各、位あり、位を去りて外を願ふは、^(三)素行の道に非ざるなり。且つ當今天下の商、詔

屈日に^{なを}甚だし、商詔せず居せずんば、以て天下を更ふと雖も可なり、何ぞ必ずしも醫とならん」と。ここに於てか大いに悟り、乃ち請うて曰く、「僕願はくは學ばん、敢

(一) 陸機の
文選に「
志士は窮
すとも溝
壑を忘れ
ず」とい
ふ。
(二) 中唐に
出づ。本
卷六
四頁頭註
參照

(四) 寛政三年十二月十五日
目野山嶽を出でて松木の嶽
(五) 周防國
吾れ松平三浦屋より明年、山代の醫生増野徳民來りて吾が居に寓す。已にして一生を
介す、至れば則ち榮太なり。榮太に續ぎて至りし者を、松洞と爲す。ここに於て、余
松洞に號するに無窮を以てし、榮太に字するに無逸を以てす。二無交々謂ひて曰く、
「徳民も一名字の相傳ふものなかるべからず」と。余曰く、「其の名は乾、字は無咎
か。乾の九三に曰く、『君子終日乾々として、夕に悒若たり、厲ふけれども咎なし』」

へて其の方を請ふ。余曰く、「熊の家は所謂骨董舖なるものとか、爾其れ多く古書を
蓄聚し、其の間に坐臥して、且つ商ひ且つ學ばば、渴と窮と一も患ふる所なく、富以
て人を惠むべく、學以て人を教ふべし。若し乃ち折困困迫すとも、盜泉を飲ますして、
以て渴を充たさば、亦以て商たるに背かざるべし。果して能くかくの如くんば、爾
の立つ所、或け以て二生を贖するに足り、吾れの託を受くる、以て無逸に答ふるに足
らん。生其れ辨れを勉めよ」と。遂に生に名づけて溝三郎と曰ふ。

乾、字は無咎の説

吾れ松平三浦屋より明年、山代の醫生増野徳民來りて吾が居に寓す。已にして一生を
介す、至れば則ち榮太なり。榮太に續ぎて至りし者を、松洞と爲す。ここに於て、余
松洞に號するに無窮を以てし、榮太に字するに無逸を以てす。二無交々謂ひて曰く、
「徳民も一名字の相傳ふものなかるべからず」と。余曰く、「其の名は乾、字は無咎
か。乾の九三に曰く、『君子終日乾々として、夕に悒若たり、厲ふけれども咎なし』」

(一) 易の
 (二) 易の
 (三) 易の
 (四) 易の
 (五) 易の
 (六) 易の
 (七) 易の
 (八) 易の
 (九) 易の
 (十) 易の

と。是れ其の取れる所以なり。周易に無咎と曰へるもの且ど百あり、然れども義を括
 (二) 易の
 (三) 易の
 (四) 易の
 (五) 易の
 (六) 易の
 (七) 易の
 (八) 易の
 (九) 易の
 (十) 易の

其の長々として夕惕^{きふ}し、無咎に進み業に居る、是れ誠に徳民に望むあるなり」と。
 初め一生の余に従ひて書を讀むや、各々長とする所あり。榮太は才氣鋭敏にして善く、
 大事を讀すれども、而も學を修むることは則ち懶^{なま}る。吾れ故に之れを責むるに無義を
 以てす。松岡は書を讀し詩に工^{たくみ}にして、別に才操を誇すれども、而も書を讀むこと薄
 からず。吾れ故に無窮を以て之れを勉めしむ。獨り徳民は縝密^{しんみつ}にして書を讀み、群書
 人に絶ず、一歳の間、其の鈔し且つ錄する所、良然として數大冊を成す。而も其の費
 むる所、家業を擲れず、家法に繼せず。蒙方に暗^{くろ}く叫^い罵^めして、天下の大計を論すれども、
 徳民は則ち退坐して煙を翳り屹々として讀抄し、蒙倦み且つ臥すと雖も、而も廢せざ
 るなり。而して其の事に臨むに當りては則ち劇論抗議し、未だ嘗て少しも屈せず。其
 の書を政用の上り富永有徳の脱獄を論ずる事の如き、以て見るべきたり。吾れ故に乾
 乾無咎を以て之れを勵ます。然れども乾は天たり、以て神聖に象どる。其の九三は獨

(六) 此の
時、山代
の醫
生といふ
人あり、よく人

愛にして陽位、以て下體の上に居る、君徳已に著はれ、天下將に歸せんとす、乃ち危
地なり。是れ其の乾々々惕する所以なり。今徳民は山代の一醫生なり、何ぞここに取
るあらん。吾れ之れを遂論せん。今世醫師の弊は、僕を更ふとも竭くるなし、是れ必
ずしも論ぜず。山代の地たる、窮山の間に在り、風教未だ甚だしくは治ねからず、學
術未だ甚だしくは隆ならず。徳民學を成して歸り、將に其の間に首唱せんとす。其の
意實に醫藥の間に止まらず。而して其の事をして盡く謀る所の如くならしめば、則ち
之れが阻碍を爲す者、群然として起らんこと知るべきなり。是の時に當り、力を致し
て而も效を求めず、己れを責めて而も人を咎めず、以て大成を期せんには、其の乾々
々惕を去りて、安くに適かんや。而して易の象を取るや、各々其の物と事とに従ふ。
乾の天たる、往くとして然らざるなし」と。二無、聲を同じうして善しと稱す。會
無咎歸省し、無逸東行し、而して無窮は二無に先つて策を決して南遊せんとす。吾れ
三無を會し置酒して饒と爲し、因つて無逸と謀り、無窮をして廬山杏園の圖を製して
以て無咎に贈らむ。無咎頤頭之れを久しうす。吾れ乃ち此れを書し、乾無咎名字の

説と爲す。

の病を治し、
癒えたる者を
して余と結本
しむ。余は
十萬餘里に達
して大森林と
なるといふ。

煙管を折るの記

(一) 富永有
煙管は、
余の煙管
(二) 煙管は
門を、
余の煙管

一日有隣と市・溝を論ず、無咎・無違・市・溝・皆これに在り。夜深うして燈
燃る。談片田生の事に及ぶや、余の憂ひ色に見はれ、一坐默然たること之れを久し
うす。無地慨然として煙管を把つて之れを折る、曰く、「吾れ其れ此れより始めん」
と。無咎と市・溝と聲無じて、管已に分かる。有隣曰く、「爾が輩輩して能くかく
の如し、吾れ安んぞ折らざるを得んや」と。因つて余をして之れを折らしむ。余曰く、
「然は収束の餘事と雖も、慣れては性となる。吾が性煙を管むこと盡だし、然れども
諸君一時の恍惚、終身の無聊を致さんことを憂ふるなり」と。有隣・二無憤然として、
悦ばずして曰く、「子書が言を疑ひたまふか。今岸田生と市・溝と、年皆十四にして
公無端を唱むこと、長老先生に異るなし、而して當今學世皆然り。吾が輩輩んぞ一岸
田生の爲めにして然らんや。子尚ほ吾が言を疑ひたまふか」と。余再拜して罪を謝し

(三) 無咎・
有隣・市・溝
無咎・市・溝
無咎・市・溝

て行く、一聞君として然らば、松下の邊、其れ此れより起らん。吾れの變ひ以て解くべきなり。吾れ其れ筆を擧げて之れを記せん」と。丁巳九月三日夜、二十一同猛士謹んで記す。

明早此の文を把り、岸田生の爲めに講解一番す。言未だ終らざるに、生俯伏して涕泣し、時を過ぎて乃ち止む。生遂に一語なし、而して余も亦收へて之れを責めず。

(四) 高杉晋
作(關係)

後數日、生並く煙具を以て其の親家に送致し、敢へて復た嘆はす。其の書を讀み事を轉るを觀るに、精苦すること往日に過ぐ。蓋し諸君の意に感ぜしならん。(高杉春

風余の爲めに道か、一書れ年十六にして、便ち煙煙を好む、長者之れを競むる者ありしも、而も是はざることに已に三年なり。誤つて再び煙具を跡に遺つ。吾れここに於て感ずる所あり、斷然割去せり。是れ小事なりと雖も、顧へば亦難かりき。諸君の苦心は吾れ則ち之れを付る」と。春風行年十九、銳意激昂、學問亦も勤む、其の前述、余固より料り易からざるなり。因つて併せて其の事を書し、以て諸君に示す。諸君其れ進系の咲ひとなるなかれ。

の間に遊びて
歸る

無窮の西より歸るや、勢風雨の如く、吾が黨を壓して之れを上しがんと欲す。直ちに吾が戸を排して入り、余に向ひて曰く、「大丈夫當に大事を立つべし、書を読みて何をか爲す」。余曰く、「幽囚事なし、書を読まずんば以て消遣しょうせんするなし」と。無窮言屈す。乃ち縛じて有隣を攻めて曰く、「聞く、公煙管かんを折ると、煙管何ぞ公の事に害ありて乃ち然るや」。有隣曰く、「亦一時の客氣のみ」と。無窮以て難ずるなし、則ち亦管を折りて曰く、「吾れも且またに書を読まん」と。已に數日、無咎至る。因つて共に語りて大笑し、吾れ之れを書して無邊に贈る。(三)臘月念夜。

青田無逆を送る序(四)

(三) 九月、
上野、五月五
日、
當時、江、
在、
(四) 十二月、
二十日、
是、
國、
國、
(五) 第八、
生、
二十、
年、
年、
年、

吾が邑は荻原の近郊に在り、人最も學を好むと稱せらる。何如せん、近來乃ち古に如^しかざるを。吾れ歸國三年、嚴に世と謝す、ここを以て邑中の風教、一切これを度外に措けり。獨り三無生なる者あり、竊かに來り吾れに従ひて遊ぶ。無逸は其の一なり。

三無余のかくの如きを惜しみ、余の在獄の知己富永有隣を囚中より脱し、以て邑事を

(五) 今の古
無逸蓋し言簡の外に得ることありしならん、歸るや先づ母中の行
なき言を稱び、三生を得たり。曰く昔、曰く市、曰く講。無逸示すに書父の大意を以
てし、以て之れを感動せしむ。三生深く自ら克責し、遂に以て學に向ふ。無逸乃ち孝
順の言行要終の二句を錄して、以て之れを示す。三生皆泣き、指に針して血を取り、
留めて以て信と爲す。無逸も亦慨然として、血を留めて以て之れを證し、因つて介し
て余に見せしめて託を爲す。余、文三篇を作りて以て三生に贈る。

(七) 本書二
九七頁參照。
はあきらかに
な出資す

(八) 唐伯、
先生といふ

商議す。ここに於てか、有論は三無の興に爲すあるべきを知り、其の母を南都に省す
るや、無逸を携ふ。無逸蓋し言簡の外に得ることありしならん、歸るや先づ母中の行
なき言を稱び、三生を得たり。曰く昔、曰く市、曰く講。無逸示すに書父の大意を以
てし、以て之れを感動せしむ。三生深く自ら克責し、遂に以て學に向ふ。無逸乃ち孝
順の言行要終の二句を錄して、以て之れを示す。三生皆泣き、指に針して血を取り、
留めて以て信と爲す。無逸も亦慨然として、血を留めて以て之れを證し、因つて介し
て余に見せしめて託を爲す。余、文三篇を作りて以て三生に贈る。

已にして唐實、明澤川の胥徒を以て、將に謁に従ひて東行せんとし、贈言を請ふ。顧
ふに余無逸と居りしこと一日に非ず、無逸に語る所以のもの、寧んぞ盡さざるあらん
や。乃ち姓く唐の三文を錄し、其の由を言ひて贈と爲す。然れども吾れ是れに因つて
感ずることあり。無逸道行く、「一命の士、苟も心を死物に存せば、人に於て必ず濟
す所あり」と。誠の言なり。此の説や、吾れ能く之れを言へども、今は則ち無逸に愧
づるあり。無逸亦以て往くべし。胥徒の事たる、繁雜瑣屑、日に以て俛焉たるも、而

も爲すに足るものなし。間にして出でば、俗更儼然として以て之れに面臨す。才氣ある者、一たび陷らんか、破れずんば則ち斬けん、唯だ無邊は則ち誠を以て之れを達ちんのみ。吾徒の類なる、群衆を處し、其の需爲する所、酒色に非ずんば則ち射利にして、其の言未だ嘗て義に及ばず。才氣ある者、一たび授ぜんか、終らずんば則ち沮まん、唯だ無邊は則ち誠を以て之れを動かさんのみ。聖人の道、蓋し云へらく、「君子、道を學ばば則ち人を愛し、小人、道を學ばば則ち使ひ易し」と。^(三)三生は吾れ已に之れに任す。有國あり、二無あり、吾が邑以て憂なかるべし。此の行更に三生に勝る者を得て學べ。然りと雖も、吾れ嘗て無邊と語りしこと、徒にかくの如きのみには非ず。江戸も亦一大都會なり、無邊更に其の大なるものを觀よ。遂に以て贈と爲す。

(一) 論語
(二) 貨篇、第四章
(三) 君三節、

下卷

秩祭論に跋す

吾が友、（一） 川津、（二） 常陸に遊び、正志先生に従ひて學ぶこと、已に三年、益々師説を信奉し、
 鑽仰して罷めず。（三） 頃、秩祭論を著し、郵筒にて寄來せり。其の書、大嘗・新年・顯魂・
 大歳凡そ四篇、皆熟考たる正論にして、師説を述べて之れを成す、祭禮の義明かなり
 と謂ふべし。然れども其の所謂これを實務に施し、これを天下に敷明するには、其の
 方法宜しく如何すべき。吾れ其の書を讀めども、少しも概見せず。昔孔子嘗て周の道
 に志ありしも、（四） 幽・厲は敗れ、杞・宋は微するに足らず、而も魯の郊禘は禮に非ず。
 ここに於てか、（五） 狂簡を思ひ、（六） 歸興と嘆じ、春秋を作りて後世に傳ふ、周公の夢、蓋し
 復た見ずと。

(二) 各藩國
各藩國

(二) 藩國の
の註、ここは
 藩の古語實へ、
 一藩國を
 に由なく、わ
 が藩と比すべ
 からざるをい
 上

(三) 野山原
交稿に依む。
 照

今夫の四條は朝廷の事、大臣の宜しく私すべき所に非ず。幕府すらこれを私するは不可なり、況や邦國をや。然らば則ち四條の義、之れを言ふは易きも、之れを施し之れを敷くは、是れ難しと爲すのみ。之れを施し之れを敷く、實に難しと爲すなり。然れども、藩が藩主として藩國たらむれば、則ち論ずるなくして可なれども、今 寶祚無窮にして神軌國の如し、而も是の事これを難きに委す。是れ志士仁人の太息する所以なり、是れ淡水の趾の論を作りし所以なり。而るに淡水獨だ其の易きを言ひて、未だ其の難きに及ばず。蓋し聞くことあらん。吾れ將に他日を待ちて之れを叩かんとす。抑、吾れ淡水の書を讀むに、立言措辭、何ぞ其の師に似たることの甚だしき。昔淡水の國を出づるや、吾れ嘗て其を贈りて曰く、「師道を慢るなかれ、私見を立つるなかれ」と。今乃ち之れを見、吾れ古道の往々興あんとするを喜ぶなり。此れを書して跋と爲す。丁巳重陽の日、二十一回猛士寅書す。

(四) 第三節

(四) 三生に示す

秀實の爾ら三生を託すること甚だ厚し。吾れ三生の氣を挫き、兼て秀實の志を傷らんことを恐る。ここを以て事々寛假し、未だ曾て呵責を加へざりき。何ぞ圖らん、寛反つて縦を致し、三生をして勤苦すること、初めと變らしめんとは。是れ吾が過なりき。吾れ今日より轍を改め、將に束濕もて相待たんとす。堪へられずば則ち去れ。吾れ秀實に報ゆること、かくの如くにして足らん。丁巳九月十三日、書して以て三生に與ふ。

富永有隣の歸省を送る敍

(五) 今の山
村
(六) 藤原朝
臣
(七) 高杉蒼
作

安政四年九月十六日、吾が客富永有隣將に母を青都に歸省せんとす。同社之士十有一人、吾が松下塾に宿會して送別す。在學生中谷正亮・高杉暢夫・方外の師許道、之れが補領たり。自餘の九人も下は秉燭の童子に至るまで、皆文武有志の士なり。是の日、塾徒東山に演鉢す。童子皆これに従ひ、進退坐作甚だ困しめども、燭下猶ほ首を聚めて讀誦し、聲戶外に徹る。倦みしものは則ち仆臥すれども、而も三人は方且に深談密

(一) 蕭正

(二) この前
目録子の詩集
を讀み、其の
筆調、筆はる、
亦一知る者は言はず

南郡固より多士ありと稱せらる。今有隣の母を省みるや、將に遂に其の人を見んとす。有隣其れ其の盛たるを觀て、其の能なるを羨は、庶幾はくは以て吾が社を振ふあらんか。然れども人或は謂ふ、「南郡の士、才富みて學貧しく、口辯にして識暗し、巷社^{やう}_社續りて文士沮み、酒徒群りて武夫陷る」と。此の說果して然らば、吾れ望むことなし。秋深く月白し、露降り雁鳴く。慈母堂に在り、其の有隣を待つや久し。有隣其れ此れより去れ。

語し、時に急にして身に切なるものを講究す。幅夫首を擣り聲を擧げて曰く、「天地と人と、皆氣のみ。人物も氣を養はば、以て爲すあるべし」と。正亮曰く、「君を輔^(一)に致し、身を素體に處す、是れ可なり」と。許道獨り默然として退坐し、一語をも出さず。之れを叩けり則ち曰く、「吾が師新に我れを戒むるに、詩を廢して書を讀まんことを以てせらる、吾れ方に其の言を思ふなり」と。余時に諸友と孫子を誨じ、筆調^(二)、筆はる、亦一知る者は言はず^(三)の言に感ずるあり。然りと雖も、默々たるを得ざるものは時なり。

南郡固より多士ありと稱せらる。今有隣の母を省みるや、將に遂に其の人を見んとす。有隣其れ其の盛たるを觀て、其の能なるを羨は、庶幾はくは以て吾が社を振ふあらんか。然れども人或は謂ふ、「南郡の士、才富みて學貧しく、口辯^(四)にして識暗し、巷社^{やう}續りて文士沮み、酒徒群りて武夫陷る」と。此の說果して然らば、吾れ望むことなし。秋深く月白し、露降り雁鳴く。慈母堂に在り、其の有隣を待つや久し。有隣其れ此れより去れ。

(四) 登波のこと本巻討賊始末に詳し

烈婦登波の書に跋す

是れ、烈婦登波(四)自ら其の名を書せるものなり。登波賤徒にして、何ぞ曾て書を識らん。顧ふに其の直烈奮激、これを心に發し、これを手に運ばせしのみ、乃ち兩觀るべきなり。登波復讐の事、固より已に烈なり。頃ろ又將に石見に往いて夫の墓を窆めんとす。夫死して三十年、未だ其の死せし所を知らず、而も登波年且に六十なり、斯の行亦難し。歲丁巳九月十六日、登波吾が松下を過ぐ、余止めて之れを宿せしむ。登波寡言沈毅、狀貌猶ほ丈夫のごとく、利りひ首しゅを懷にし、起臥嘗しも離さず。(五)道太來り見て、其の事に感じ、其れをして自ら其の名を書せしめ、余をして之れに跋せしむ。

(五) 中村道太「登波」

(六) 岸彌牛

人、御國と號す「彌傳」

(七) 土屋善

助「彌傳」

(八) 松木川

而する小丘

御國に復す

藤海曾て門下の一生にして文才ある者を稱(六)し、鶴江臺に遊ぶの記の、「此の間忠臣義士幾人あらんや」の一語を擧げて證と爲す。僕已にこれを心に藏すれども、其の名

(一) 有書信
之也

(二) 有書信
之也

(三) 有書信
之也

(四) 有書信
之也

(五) 有書信
之也

(六) 有書信
之也

(七) 有書信
之也

(八) 有書信
之也

(九) 有書信
之也

(十) 有書信
之也

(十一) 有書信
之也

(十二) 有書信
之也

(十三) 有書信
之也

(十四) 有書信
之也

(十五) 有書信
之也

(十六) 有書信
之也

(十七) 有書信
之也

(十八) 有書信
之也

(十九) 有書信
之也

(二十) 有書信
之也

(二十一) 有書信
之也

(二十二) 有書信
之也

(二十三) 有書信
之也

(二十四) 有書信
之也

(二十五) 有書信
之也

字を遺る。昨仙之尤の文を示され、一讀して目を刮せり。謂ふ所の鶴江臺に遊ぶの記

も、亦これに在り。而も其の名言警語、特に是の篇のみならざるなり。蕭海の文眼恒

の如く、大都の老宿と雖も、多くは畏る所あらず。江戸の藤森恭助は老にして文を

好くすと稱せらるれども、西方の青年にして文に深き者は、獨り蕭海及び薩摩の重野

幸之尤を取るのみ。幸之尤昌平に在りて、才を一時に稱せらるれども、蕭海之れと相

降らず、則ち當世の品題知るべきのみ。今仙之尤は蕭海を得て之れが歸と爲す、顧ふ

に何の足らざる所ありてか、來りて僕に需めし。僕の文は文に非ざるなり、特だ自ら

胸臆を行ふのみ。夫れ文は道に非ざるなり。然れども道を載するは、文に非ずんば不

可なり。文の經國に於けるや、則ち末なり、而も不朽は則ち然り。然らば則ち道を不

朽に載せんと欲するもの、文を合せて其れ安くに求めんや。然りと雖も、當今天下の

事未だ知るべからず、道に任じ國を經するもの、吾れ未だ其の人を得ざるなり。

御國足下。老成にして才を愛するもの、足下に若くはなし。足下、仙の爲めに道へ、

「往々、惣めて文を學ばば、文必ず道に進まん」と。文中人江子遠・山縣有朋の二子あ

傳
(六) 江戸の
毛利藩邸

(七) 羽會庵
堂・草場佩川。

二鼓は未詳
(八) 清の左

體積算す

(九) 嘉永四年、この時の

り。予達は吾が支中谷正亮（七）數々其の志あるを言ふ。其の江郷（六）に役せるを以て、無邊を
して往きて交を結せしむ。而して未だ有朝（八）の何如なる人たるかを知らず。幸はくは遠
に之れを致へよ。那倉・草場の二妓は收手せり。三餘偶筆は全套併せ往れり、留覽す
るを可と爲す。寅白す。

實之、字は實卿の説

(九) 辛亥の歳、余公鵠に従ひて始めて江戸に如く。時に中谷松三郎、亦其の父觀心翁に従ひて、儀衛の中に在り。翁風に余を眷顧す。余ここに於て松三郎を知るを得たり。一日手を拉し、款談して道に上り、岐を誤りしをも覺えず、以て人の笑を貽すに至る。儀衛の盛なる、其の人若しくは文若しくは武、あらざる所なし。而も余の松三郎に於ける、乃ち獨りかくの如くなるは、自ら其の從る所を知らず、其の或は枉徇苟固なるやを疑へり。而るに松三郎、世人に於て善だしくは其の客を爲らず、則ち枉徇苟固は決して其の性に非ざるなり。吾れに於て何ぞ獨り離せんや。吾れここに於て益々松三

(一) 加茂清正

(二) 加茂清正
加茂清正
加茂清正(三) 加茂清正
加茂清正
加茂清正

郎の義に我れを頼る者なるを信ず。後三年、故ありて、松三郎、正亮と改稱す。吾れ従つて其の歳を賜けり、則ち曰く、「楠公は忠臣なり、^(二)加藤は武士なり、而して畿邦の^(一)源氏も亦忠にして且つ武なり。吾れ豈に景仰せざるを得んや。是れ吾れの自ら稱する所以なり」と。時に吾れ其の言過大にして誇に近きを怪しみ、黙して答へず。爾、實に五年前に在り。其の後吾れ語を蒙りて幽園をられ、正亮も其の父を賣ふ。是れに因り、相見るを得ざること之れを久しうせしも、去年^(三)而來、^(二)稍々其の文辭を寄示し、又數々要領す。要領すれば談^(一)幅も曉に^(二)通ずとも倦まず、猶ほ岐を誤りし時の如くして^(三)得もこれに加ふるあり。蓋し其の學大いに堪みたればなり。初め吾れ正亮と歎するや、特だ其の議論を喜びしのみ。其の已に其の情^(一)を失ふに及び、凡事自ら謀り自ら處するを得ず、則ち其の行事歴々として指すべく、其の學の進みしこと、徒に空言を以てするに非ざるなり。但だ其の楠・藤・諸葛を以て自ら稱するは、則ち吾れ猶ほ怪しむざるを得ず。然りと雖も、大丈夫斯の世に生れては、志を立つること高大なるを賣ふ。而して卑道振はず、夷狄通ならざるは、正に今日の憂たり。士の楠・藤・諸

高を世傳する、實^{じつ}を過^{あや}ぎたりと爲さんや。然らば則ち其の實を修め其の名を光たすは、是れ高の人に爲するなり。

正亮の舊字は彌^や里^りする所あり、余則ち之れを改め、名は實之、字は實卿と曰ふ。遂に讀^よみて曰く、「名は是れ實の實なり、實在^{じつ}りて主なくんば、何を以て禮と爲さん、名在^なりて實なくんば、何を以て人と爲さん。其の名益々大ならば、其の實益々難し。正亮の稱は小と爲さず、吾れ正亮を賣むるに其の難きを以てす。願はくは視て以て輕言と爲して、之れを惣^{そう}せにすることなかれ、則ち吾れも亦以て尊考の容顏に慚^はい、吾子の我れを知るに報ゆべきなり」と。日月は流るるが如く、逝くものは水の如し。今日の言、これを文に著はさずんば、將に復た異日の陳迹とならんのみ。吾れ故に之れが説を爲る。安政丁巳の冬嗣後三日撰す。

小田村士敏に與ふ

前日、老兄と書^ふ簡を贈す。「予、是の日に哭すれば則ち歌はず」に至り、復^{また}は乃ち

(四) 通函篇
第十章 子け
孔子をさす
(五) 養生世
體、古文辭類
の六家

(一) 伊東按、
(二) 伊東按、
(三) 伊東按、
(四) 伊東按、
(五) 伊東按、
(六) 伊東按、
(七) 伊東按、
(八) 伊東按、
(九) 伊東按、
(十) 伊東按、

(一) 伊東按、
(二) 伊東按、
(三) 伊東按、
(四) 伊東按、
(五) 伊東按、
(六) 伊東按、
(七) 伊東按、
(八) 伊東按、
(九) 伊東按、
(十) 伊東按、

(一) 東坡に對して、伊川を排せり。夫れ伊川の意は則ち善し、而れども其の引く所、當を失す。是れ東坡の嘲を招きし所以なり。東坡は強辭もて理を奪ふ、或は以て勝を一場に割すべし、然れども復して之れを論ぜば、慶弔混淆し甚だしく人情に忤ふ。情の至る所、理も亦乖る、雖何ぞ此れに外なるを得んや。夫れ伊川は弊を當時に失ふ一局に當りて遂ふは固より咎むるに足らざれども、獨り徂徠百歲の後に在りて尙ほ東坡に騙かるる處、是れ怪しむべきのみ。此の説や、老尼に之れに告ふ。而して一經語の以て東坡を排するに足るものを求めしも、適々未だ得るあらざりき。昨鄉黨を讀みしに、乃ち曰く、「三書太烈、以て弔せす」と。(附)孔安國曰く、「吉凶服を異にす」と。服すら其つ之れを異にす、慶弔弔を行ふは、果して何如と爲す。則ち此の語固より伊川を助け、東坡を排し、以て徂徠を厭せしむるに足らん。陳同甫曰く、「天下の事、未だ善惡二道無なくんばあらず」と。僕經義に於ても亦云はん。知らず豈兒以て何如と爲すや。

讀み按するに、(一) 梁武、二廟に奉祠す。既に宮を出でし時、有司、馮道根の計を以て

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

聞す。梁主、中書舍人生森に訓ひて曰く、「吾國目を制じうるも可ならんか」と。
訓へて曰く、「昔衛の獻公、柳莊の死を聞き、祭服を擲かずして往いて之れを哭せり。趙盾は主室に勞あり、之れは誅するは禮なり」と。梁主即ち其の宅に幸し、之れを哭して弔せり。嗚呼、凡そ事に依禮あり。然れども禮は文なり、誠は實なり。實なくして徒らに文を是れ推するは、是れ叔孫生の爲のみ。「典は其の範めより、學乃其め文」と。聖人固より奇數を以て人を責めざるなり。儒、生森の論に通ひ、國に處ひて儀、方に過するを覺り。故にこれを餘情に録す。(一〇)

蔡原良獻に與ふ

新羅嘗て語はるく、「^(一一)下土夫と嘗へば、^(一二)侃々如たり、上土夫と嘗へば、^(一三)侃々如たり」と。牛註に説文を引いて曰く、「侃々は剛直なり、問々は和悅にして靜ふなり」と。果して此の説の如くならば、孔子上に於ては則ち^(一四)詔ひ、下に於ては則ち^(一五)聽し。今西洛直の禮と甚だしくは相違からず。是れ何ぞ以て聖人と爲すを得ん、聖人は

(一) 松平領
寛保、二十卷

十卷の著者名
生孤傳

必ず録めず」と。然るに之を屬ししも、猶ほ朱註に阿り、易ふることある能はざり
ま。昨(二)朝又張と云ふ撰集覽を讀みしに、孔安國曰く、「侃々は和樂の貌、聞々は中正
の貌」と。是れ上に於けると下に於けると、教和成實し。循練は孔に右ひて朱に右
はす、其の説又老兄の嘗て謂ひし所のものの如し。老兄は剛斷自ら信じ、肯へて人の
錯謬を疑せず、聖人の事業として朱註の如しと雖も、決して上に詔ひ下に屬しく、俗吏
の言を聽すには容らざらん。然れども古註固より已にかくの如きを知る、寧んぞ自ら
悦ばざるを得んや。ここを以て特に報す。蘭閣の身、世事渾べて忘れ、唯だ書を讀み
て以て自と勵す、積古註の往々中れることあるを覺れり。知らず高明以て如何と爲す。
辭はりてまだ對せず、偶々童子の爲めに家語を讀むに、六本篇に云へるあり、「子夏
琴を鼓し、侃々として樂しむ」と。(四)太宰氏の註に、「侃々は、(五)毛萇詩傳に衍々に作る、
說苑大同」と。然らば則ち侃と衍と、古字通用す、何ぞ其の解して和樂と爲すを怪
しまんや。

(一) 松平領
寛保、二十卷
(二) 朝又張と云ふ撰集覽
十卷の著者名
生孤傳
(三) 孔安國曰く
(四) 太宰氏の註に
(五) 毛萇詩傳に衍々に作る

尾寺新之允に與ふ

二二 新之允
尾寺新之允、
字子路、
一、
二、
三、

二二 新之允
尾寺新之允、
字子路、
一、
二、
三、

(一) 中谷

往夕論ぜし所の「何ぞ必ずしも書を読みて然る後學と爲さん」とは、子路の言にして、夫子已に惡みて之れを斥く、則ち其の非固より論を待たず。但だ足下稱する所は今世の評論にして、或は子路に類するものあり。而して僕亦謂へらく、養生を坑窟し、詩書を燒毀するは、古已に之れあり、「祖ば其の意を知る」、「何ぞ古を學ぶに至らん」、「義解を求めず」、「一心に存す」と云へるもの、古亦之れあり。筆を尋ね付を摘むときは、毎に英雄に喩はれ、性を見、理を窮むるときは、或は奇傑に喩けらる。而るに唐・虞の盛なる、既に書の讀むべきものあることなく、劉・項の興るや、書の宜しく讀むべきを知らず、則ち書を読みて學と爲すの説、賾く。然れども僕の如きは固より書を讀みて學と爲す者にして、其の説往に略陳する所の如し、而れども都意猶ほ未だ盡さざるものあり。差見果して能く異せられれば、則ち誠に善し。若し猶ほ未だしとならば、固ほくは姑く俗論を爲す者に代り、書を讀むの以て學と爲すに足らざる所のものを屢陳して、尋く授けせられよ。僕乃ち遂條奉答し以て其の餘を盡さん。谷・蘇・

漸・終の預言、意ふに哲僕に興せんか。是下同じくば間も已まん。若し或は興るあらば、哲に蘭室の由りて故ある所に非ずや。蘭はくは諸君と興に謀し、一何ぞ必ずしも蘭を蘭とて然る哲學と蘭さんの論」を作りて、含せ示されよ。僕等につけて世評し、是を野を興さんとす。是れ僕と諸君と、必ず一の得る所あるん。茲に回答を待つ。

(二) 中村牛莊先生に興ふ

蘭因以來、復た先生長言に従ひて其の餘論を興り聞くを得ず、鬱鬱日に生じ、麗向日に行ふ。蘭言の旨は實に意外に出で、精以て自ら強うするに足なり。僕等には當世の諸生を蘭興するに、其の蘭並びに蘭くして、而も按む所あらず、人を待つに城府を設けず、蘭蘭の少學を蘭るに蘭子弟の如き者、必ず先づ指を香が牛莊先生に屬す。屬りては蘭も是れを以て同文に蘭るに、同文蘭然として以て無りと爲し、異辭あるなし。蘭等先生と江戸に蘭別してより、蘭息の間、七年已に過ぐ。心に蘭へらく、吾れ方に蘭に苦しみ、而して先生亦悲いたり、復た相見るに由縁なげんと。豈に蘭らんや、

秋良生風に寵意を惜り、時に先生大醉するや強ひて之れを荆棘の下に要へんとは。僕

の喜び而る後知るべきなり。但だ恨むらくは平處に備へざれば、以て師とすべからず、
肝喉損傷、以て貴臨の辱きに酬ゆるなかりしことを。枉留一宿、徒らに忤悞を増せし
のみ。然れども先生意、老にして愈々壯、顔朱漸く復し黒髮蒼に倍す。爾時玉由未だ
弱れず、肩峯^{しやんしやう}
^{しやんしやう}、僕の手を握り、慇懃相慰勞せらるること平生の如く、之れに續ぐ
に嚙齧沈溺を以てしたまふ。僕方に嚙^{くは}して未だ對ふるあらず、秋良生慨然として衣
を解き、僕と先生とに衣す。先生時に誤つて其の裡^{うち}を表にし、蒙眛駭笑すれども顧み
ず、既に罷む。今に迄^{いた}るまで事猶ほ目中より離れず、幽囚の快、何を以てか之れに尚
へん、茲に腰を削りて謝を言す。伏して惟んみるに眠食自重、以て眉壽を保たれたは、
道の爲め幸甚、國の爲め幸甚、何ぞ獨り僕の快のみならんや。十月十八日、矩方再拜。

御園に與ふ

(四) 和氣清
原出

向に和氣公の墨本一紙を贈らる。足下尚京都に在るを以て、其の歸るを待ちて鳴謝せ

丁巳蘭室文稿

んを欲す、遲慢を致せし所以なり。

悲しく惟おもんみるに、神護景雲(一)の際、妖僧きゆう觀藏くわんざうし、神器將に墜ちんとす。華胄帝師、敢

ててまをするものなきに、而も公獨り五位の職を以て使を宇佐に奉じ、神勅を奉じ

て奸謀を破る。其の大節たせつ侃々として、天地に塞がり日月を貫くといふとも可なり。而

して其の自ら書するや乃ち曰く、「我れ獨り天地に慙はなづ」と云ふ、則ち公當日の風、

其れ何如ぞや。千歳の下、之れを讀めば感慨に勝かふるものなし。

抑、今世の士は、因循いんじゆん依違、自ら以て計を得たりと爲し、偶々一小事を爲すあらば、

誇こりして自ら以て世譽れに如くものなしと爲す、其れ公の風と何ぞ其の遠きや。但だ

此の書歲月の數題なければ、則ち公何れの時に書せしや、吾れ得て知らざるなり。然

れども吾れ私かに論じて謂いへらく、公は唯だ天地に曠かう日じつに慙づ、故に宇佐の役は能く

天地に慙はなぢず。能く天地に慙はなぢずして、而も猶ほ天地に慙づ、故に遠謫えんたくせらるること

三年、召還して登庸せらるること三十年所、出處本末、毫毛も憾みなく、能く千歳に

傳ふ。天子を軫念し、神號を寵崇す、其の因る所のは慙なりと。

子

3115

萩の地たる 人の爲めに作る

丁巳國樂文稿

距たること里許にして、然る後海に注ぐ。摺月山、其の間に蟠居、以て北海の衝に當
 る。是れ昔が新羅居らるる所の地なり。二川より瀾ること無許にして、乃ち合して一
 之川となる。火川より瀾らば、左右の國水注ぎて入るもの枚舉すべからず。而して其
 の水にして且つ鹽きもの國あり、曰く明水、曰く佐佐並、曰く生雲、曰く德佐。德佐
 國も瀾し、瀾し海を距ること十餘里にして、野坂州となる。是れ二川の源なり。其の
 山は則ち海岸に露出、川と相沿ふ。東北は唐人山、獨り著はれ、東南は則ち白水・靈
 帝・靈山、靈山は靈帝・靈火の謂山、靈瀾列立し、愈々上り愈々出で、勢愈々追狹にして、
 川を隔てて相控す。是れ其の壑なり。山川の内、廣き方一里なる能はず、五十八衛經
 緯に布列し、其の戸五千、其の口若干、是れ所謂蘇の地たるなり。蘇の地たるかくの
 細し、而して野瀾水邊の亭なるものは、玉江川の北岸に在り、川を隔てて白水・靈帝
 の諸山と對すと云ふ。

丁巳國室文稿
 卷之四
 國室文稿
 卷之四
 國室文稿
 卷之四

（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

聖人の六藝、禮・樂・數、其の二に屬する。二書は最も人用に切なり。而して書の六藝は通じて知り難しと雖も、周星の星すら猶ほ能く姓名を識る。何如せん況は讀書の士にして、尤も樂除も或は茫乎として知るなき者あるを。吾れ書と數と、皆精究する所なり、尙た見たりし時舒んて御用集を觀たりしのみ。今因つて此の圖を作り、人をして尤數の體は極方にして、而も用は極圓、以て經と爲すべく、以て緯と爲すべきを觀せしむ、亦人門の程なり。有識は書法を知れり、塾子皆就いて正を取れ。今此の圖に因りて樂除を說明す、亦六藝の始なるかな。丁巳十月念七踐す。

日羽徳祐に復する書

十月二十八日、因叔吉田矩方再拜して、日羽若足下に復す。向に書を辱うし、併せて函で數語を示さる。談論激昂、以て頓情を立たしむるに足る。理、宜しく疾速に奉答し、竟れて致命を請ふべきなり。而るに書旨高遠、待たるること重きに過ぐるは、敢へて言ふ所非ず。ここを以て僅かに高文中に就き、妄りに一二の鄙見を獻じ以て貴

（一）其時
（二）其時
（三）其時
（四）其時
（五）其時
（六）其時
（七）其時
（八）其時
（九）其時
（十）其時

意を解はんのみ、而して未だ貴書に復するに及ばざるなり。已にして足下采邑に徙處し、汝が音を金玉にす。僕乃ち謂へらく、禮は往來を貴ぶ、足下書ありて、而も僕答へざるは、是れ僕の罪なりと。恐悚すること之れを久しうせり。頃乃ち中谷寅軒・久保清太南張して、將に貴地を經んとす、因つて此の書を賤し以て足下に復す。實に前罪を謝し、且つ謝見を謝さんと欲するなり。

僕向に憂顔を以て教を足下に請ふ。鄙意謂へらく、當今天歩艱難にして國事國難し、有志の士、憂し憂へざるはなし。然れども悲愁嘆嘆、徒然以て憂へ、事に益なき者、滔々として暫是れなり。是れ眞に憂ふる者に非ず。眞に憂ふる者は必ず爲す所あり、爲す所あらば必ず樂しむ所あり。然らば則ち當今の世、悠然として以て樂しむ者は、眞に我れと憂を同じうする者なり。然らざるは、皆我が徒に非ざるなり。僕幽囚の狀、豫々として道ふに足るものなし。然れども富永有隣なる者を得て、一邑を鼓舞す。一邑の人、貴賤となく長少となく、駭々として學に向ふ、倦むなきこと之れを久しうせば、則ち邑中或は一二の解事の人を生ぜん、其の樂しみ如何と爲す。是の事、賓卿・

清太將に僕に代つて之れを陳べんとす、今多くは及ばざるなり。

舜、足下の才と學とは、當世希に觀る所、身を卑くして行を厲まし、扶む所あらず。

漢中而なしと雖も、心嚮往すること一日に非ざるなり。夫れ天下國家を憂ふるは特り

足下のみには非されども、足下の才學行義にして而も天下國家の爲めにする所なから

んには、天下國家將た復た誰れをか望まん。抑々天下の本は國と家とに在り。足下、

左右の臣僚と萬中の民庶と、教ふるは文武を以てし、示すに勇方を以てせば、皆以て

德を成し才を練し、以て天下の用に供すべけん。天の才を生するや貴賤を擇ぶなく、

上の志を發するや少長に拘はるなし。苟に才あり志あらば、其れ寂寞として已まんや。

古の道、蓋し云ふらく、「君子は思ふこと其の位を出でず」と。故に位卑くして而も

言高きは罪なり。當今常路の計、未だ其の甚だしく得たるを見ず。然れども足下をし

て采邑に微服して一世を可容せしめば、則ち君子の思ひ、其れ其の位を出でん。僕を

して因縁に俯仰し、咄々怪を續せしめば、則ち位卑くして而も言高し、是れ其の罪な

り。二者皆道に非ず。然らば則ち何如。其の子弟之れに従ひて孝悌忠信なるは、是れ

卷之十
大業

是下の時運運命せざるなり。總じて之れを通ずるは是下に在るのみ。僕の實業家特に
 志望し、然れども平日實業・政治を言へることかゝり細し。今にしてこれを是下に語
 るんば、是下其の僕を何と云はん。唯だ是下棄てられず、更に僕を救ふるあるん
 ことを。勿々不宜。

桂小五郎に與ふる書

(一)

無量の實業あり、是下實業法則にして、衆國の志望、興なるの狀を尋かにす、欣慰歎慰。
 御訓に應じて以明、書を編纂に宛め、以書へらく天下の至業、以てこれに向ふなむと。
 復た念を世事に挂けされども、廻り吾が師平泉山先生を顧みする毎に、心懐ち悶々とし
 して措く餘はざることを久しうす。向に坪水哉の難に在るや、僕曾て書と異へて
 曰く、「佐久間修樹は天下の士たり、一たび僕の事に坐して、永く世の棄物となる。
 僕天下の爲めに之れを脱却、又天下の爲めに之れを惜しむ。修樹今年如命に近し、學
 富み力足り、其の天下の用を爲すや、正に其の秋なり。今にして顧みずんば、老死將

桂小五郎に與ふる書
 丁巳稿(未完)
 三六四

に至らんとす、二十年の後は復た今日に非ざるなり」と。已にして水哉攢斥せられ、是の事案然たり。頃^(六)ろ聞く、上田侯母が入つて政を執り、佐倉侯と心を協^(七)せて事を謀る、二侯^(八)闕然として吾が師を憐むの色ありと。當今^(九)龜岡故多く幕政更張す。其の吾が師を憐むは、徒に其の窮を憐むのみに非ず、將た以^(一〇)あるならん。僕の如きは、草茅窮^(一一)愚、幽園多年、安んぞ仰いで幕中の大議を測るを得んや。然れども憂國の心は貴賤に分かたるることなければ、則ち二侯の之れを憐むと、僕の之れを惜しむと、初めより二致あることなし。ここを以て僕竊かに軒然として、二侯の爲めに告訴せんと欲するものあり。而れども之れが先容を爲すものなければ、則ち未だ敢へてせざるなり。上田藩臣に澤井純藏・恒川才八郎なる者あり、皆吾が師を知り、因つて遂に僕を知れる者なり。二子曾て其の精賢明の狀を以て、告げ語ること甚だ悉^(一二)せり。是れ或は僕の言を以て通すべし。而れども僕二子と通ぜざること已に久しく、其の今果して何如なるかを知らず。

吾が師の都に在りて徒に憂くるや、聲名隆々、肯へて自ら屈降せず、時輩^(一三)の嫉忌する

野となる。其の吏に對するに及んで、議論侃々、背へて自ら引懸せず。謂へらく、
 一同謀賊は國事の要務にして、蓋し尊議の欲して而も未だ及ばざりし所のものなり。
 命になんじ意を廻へて之れを聽せるは、是れ志士の苦心なり、何を以て罪と爲さんや」と。
 此を以て賊吏怒罵し、以て尊府を輕蔑すと爲すに至れり。其のこれを獄に投ず
 るや、一に狂を以て相持つ。是れ象山の象山たる所以なり。而して其の直議を蒙ると
 雖も、之れを憐む者幾とて少なく、而も其の之れを憐む者、特り憂國の人に止まるは、
 皆是れが爲めなり。而して僕の言が師を惜しみて、二侯に咎々たらざるを得ざるも、
 亦是れが爲めなり。

夫れ象山先生は天下の士にして、當に天下の用を爲すべし。今にして用ひずんば、
 天下直れ之れを何とか謂はん、後其其れ之れを何とか謂はん。但し其の人誠に罪あら
 ば、尊府の與、一人の爲めに枉ぐべからざること固よりなり。然れども禁錮すること
 四年、或は宥すべきものあらん。材を講し賢を講す、或は辭なきにあらざらん。況や
 僕の類と爲し、必ずしも盡く其の罪を除き其の身を顯庸せしめんと欲するには非ざるを

（二）
（一）

や。彼の世の言行はれば、則ち嗣後天下に施き、功を後世に流さんとは、是れ君子の
苦心なり。僕の吾が師に願ひ、吾が師の自ら漢の身に期す、何ぞ獨り然らざらんや。
中元四方有志の士の吾が師を欽慕する者をして、進んでは以て業を請ひ益を請ふを得、
是いては以て吾間を交通するを得しめんとなり。因はれて信野窮山の間に在りと雖も、
吾が師隠然として天下の重きを爲す、其れ必ず儲録しりゆに非ざるなり。僕竊かに當世を歴
観するに、此の説や、二侯に非ずんば其れ孰たが聽きて之れを納容せん。而して僕獨
り上田侯に眷々たるものは、櫻井・恒川二子の言猶ほ耳に在るを以てなり。足下固より
救國の志を抱く者にして、又吾が師の平生を知る。況や吾が師の爲めに其の罪を陳
聞するは、正に吾が藩の責なるをや。故に向に坪水侯を責めしものを以て、更に足下
を責む。是下何ぞ天下國家の爲めは一たが此の意を上田侯の下執事に呈鳴せざるや。
侯已に吾が師を憐む者、必ず足下の要義を以て罪と爲さずして、其の言を納容せん。
僕等々の窮顯並に生まる。僕の一身に至りては遷に安んじて命を待つ、特た實た何を
か能かん。知らざる者、僕を諒りりて以て自ら計ると爲すも、亦願ひざるなり。時方に

同輩を要と爲す。未だ既くす。十月念九日、吉田恒吉母葬して自す。

原籍登波の書に跋す三首

是の原籍登波の書なり。登波の事は余これを討裁始末に著せり。丁巳十一月五日、
登波に赴き、吾が松下村に集る。横介結を托して其の家に宿せしめ、因つて其れをして
之に對面せしめしむ。初め吾れの權限江戸より通るや、横介、街中の中に在り。有
國と吾れ一同して野山の麓に在るや、横介偶と乘つて獄行となれり。獄行能卒の習、
其れを待つことと云ふ獄行の如し。而して其の吾れを待つに士の職を以てせる者は、横介
のみ。其の獄行となるや、常に刑場に候ひて譴を受く。有國獄を斷するに及び、小人
此間して必ず此れを海外に投せんと欲す。松下の諸生政府に稟呈し、有國を村禁に廻
へ、登てて以て國と爲さんことを請ふに方り、横介慨然として曰く、「吾れ鈍なり」と。
雖も有國思を變る者なり、寧んぞ力を出さざるべけんや」と。一筆を描いて是て有國
を伴つに至る。有國既に村禁に来るや、横介乃ち獄行を罷め、當として隣保を糾め、

其の事經を講せんことを請ふ。賴介の孝義を重ねることかくの如し、善れと有隣と、固より吾等を以て權介を待たず。權介の烈婦を宿せしめ、又其の書を寶とす、皆徒然に非ざるなり。月の七日、二十一回猛士書す。

（一）
（二）
（三）
（四）
（五）
（六）
（七）
（八）
（九）
（十）
（十一）
（十二）
（十三）
（十四）
（十五）
（十六）
（十七）
（十八）
（十九）
（二十）
（二十一）
（二十二）
（二十三）
（二十四）
（二十五）
（二十六）
（二十七）
（二十八）
（二十九）
（三十）
（三十一）
（三十二）
（三十三）
（三十四）
（三十五）
（三十六）
（三十七）
（三十八）
（三十九）
（四十）
（四十一）
（四十二）
（四十三）
（四十四）
（四十五）
（四十六）
（四十七）
（四十八）
（四十九）
（五十）
（五十一）
（五十二）
（五十三）
（五十四）
（五十五）
（五十六）
（五十七）
（五十八）
（五十九）
（六十）
（六十一）
（六十二）
（六十三）
（六十四）
（六十五）
（六十六）
（六十七）
（六十八）
（六十九）
（七十）
（七十一）
（七十二）
（七十三）
（七十四）
（七十五）
（七十六）
（七十七）
（七十八）
（七十九）
（八十）
（八十一）
（八十二）
（八十三）
（八十四）
（八十五）
（八十六）
（八十七）
（八十八）
（八十九）
（九十）
（九十一）
（九十二）
（九十三）
（九十四）
（九十五）
（九十六）
（九十七）
（九十八）
（九十九）
（一百）

烈婦の上野に宿するや、上野の邑人皆終いてこれを観る。吾が玄治皇尚稚の母、烈婦の事に感じ傳草一圖を贈り、又其の名を書かしむ、此の二字是れなり。清雅は新左衛門の遺子にして、我が玄治皇尚稚の終子なり。我れに従ひて書を読むこと甚だ勤む。今其の母字かくの如し。是れ其の家訓知るべきなり。故に讀す。

是れ大津郡の烈婦登波の手書なり。余嘗て烈婦の行事を紀す。故に藏する者、余に跋を求め、これを久遠に傳ふ、權介の志なり。

（五）
著者米

（五）
鶴室筆記漫評九則

鶴七篇奇妙にして大いに隨意に合せり。但し二百年來の事、大いに吾が意に滿たず、而して近年尤も甚だし。諸徳造極は急務の如しと雖も、退いて威力を養ふは、最も是

丁巳鶴室文稿

其時勢を知らざる倭使たり。是の事千高、章の記する能はざるものあり。詩八篇は則ち
 其の論議なり。

蓋し私は論志ありて雄略なし、且つ其の事多く虚唱に出づ。是れ其の末路振はざりし
 所以なり。横田氏は初めて其の端に反し、多く實事を用ふるは、似たり。然れども徒
 に雄略なきのみならず、仍ち雄志を併せて之れなし。其の初め二十餘國と交通せる
 法、亦また海外を度量し海峽を預防し、及び奇貨を求めて太平を飾りしのみ、萬國を
 鎮伏するの志ありしに非ず。後來陵夷退縮の弊、已にここに見はる、何ぞ遽かに規模
 を恢復を以て之れを稱せんや。余向に外蕃通略を作る、繼いで當に正を讀みべきの
 み。

明の馬世奇、北虜を論じて曰く、「彼れの形狀、我れに在つては漢露の如し、而して我
 れの形狀、彼れに在つては烈炬の如し」と。(吾れの言はんと欲する所、大抵前人皆
 已に之れを言へり。

此條を註にして國威を張り、以て之れを待たざるべからずと。(此の句尙ほ少しく俗

（一）一書
 人々、予は其
 論議を論じ、
 其の事千高、
 章の記する能
 はざるものあり

（二）一書
 人々、予は其
 論議を論じ、
 其の事千高、
 章の記する能
 はざるものあり

見あり。

(三) 町奉行、
社奉行

御勘定をして其の事を幹せしめ、三奉行に就いて之れを議せしむ。又吏を緒州に遣し、
貨物の多寡を査し、郷下の富商に命じて其の事を司らしむと。(幕府大事は塗欄し、
小事は塗欄せず)

物産の調、余亦以て時務に適すと爲す、但だ其の措置、或は當否あるは固よりなり。

苟し公王の哲子を得て、心を協あはせ力を振おこせ斟酌損益し、以て其の局を成さば、亦以て
國を和すべし。奈何ぞ江南の諸賢、門戸甚だ嚴にして、而も事の是非を問はず、一概
に之れを持す、爾ら唐の譯者紛興、實に高論の如し。昔牛明は門戸に亡べり、吾れ常
に長大息す。

(四) 朝の國
主姓は朱氏な
るを以ていふ

幕府に隨善と交通す、皇道を明かにし國威を張る所以の大計、ここに於てか在りと。
に流出しゅしゅでて更に女めすのみ、何の明張か之れあらん。

雖然自守する者は、餘ありて而る後能く遠略を務むと。(此れ亦未だ必ずしも然らず。
苟も其の人あらば守者未だ餘あらずとも、而も能く其の遠きを攻む。乃ち遠者已に服

(一) 神功皇后

(二) 三十一

(三) 名は武

して、軍中を歩むに餘あり。善れ神后に於て寢かに之れを祖ふ。
議議所者、絶して思を海井の事に留めず。今此の一篇を讀むに、茫として夢中の夢の
如し。而して夢中の夢に醒人と語り難し、醒人にして意あらば幸に夢境を識せ。十一
月初八、回漫評す。

(三) 小園剛藏に與ふ

英函を讀むこと年あり、爾日方に宣略を獲、至慰無量なり。理宜しく一書して謝を
言ふべきも、念ふもするなし。爾頃兩國、亦經書あり、遂に爾く釋後して今に迄る。
時清國軍に降参たること之れを久しうせり。讀書餘二本、卿子新函一本、讀んぞ收
む。爾函は僕間に王長より假り、寫して之れを賣とす、因つて箋に壁上す。山縣の
事、僕此を王長に聞ましに、亦是下の説の如し。幕府の御業は太平年表を見しも、
他は未だ見る所あらず、是下別に見聞あらば、平はくは垂示せられよ。餘適は岸田園
なる所に附して寫氣す。爾函は通稱御平次、見に防府の胥徒たり。乃ち胥徒たりと雖

其の學に於て書を好み最も珍竊に就むるは、吾人の及ぶ所に非ざるなり。僕示すに天下の書を以てせしに、渠は欣然として藏書數部を出し、これを足下に惜さんと欲す。僕乃ち其の中に就き、(一七) 東坡偶集・(一八) 荅楚簡書・(一九) 欽定四庫全書・(二〇) 如平及諸叢書を取り、僕藏す。是れ其の藏書數部を併せて、共に六本、是れを足下に致す。是れ皆吾人の著書にして竊偶撰なりと雖も、或は取るべきものあらん、是下間に採じて瀏覽せられては何如。別に東北蘇日記一本を附往す。是れ僕が行旅に草せし所、草々特に甚だしく、また要領を加へず、これを餘讀に擬ふれば實に銅鈔のみならざるなり。但し要領の時は仙臺に止まり、餘は乃ち津輕・南部に及ぶ、或は以て餘讀を補ふべし。故に余りに之れを致すのみ。餘に地圖及び僕藏する所、一二別錄す、當めあらば報せられん、是を如何に附せん。凡そ東坡圖書は古今に通じ宇宙に達す、況や同時同調をや、況や有無相通するは、又文藝の當に然るべきなるをや。願はくは僕が煩を憚ることをして、(二一) 顧るなかれ。附書六月念三日の書至る、曰く、「愛見疾に罹り、臥病已むなし」と。(二二) 人生して係念せむ。是下靜養の爲めに謀ること甚だ忠なり。松島云へらく、「議已

に陶器に在り、今私料すべきこと難し、姑く安んじて其の成否を觀ん」と。鳥山義房(二)の神話、最も二封内(一)に在り。作者南部の人江暢通高は僕の猶更なり、見に轡を江戸に至す、然らしくは是下知らざらん、故に雪之志に及ぶ。昔國人多緒にして、猶ほ言の一二を記す、渾べて後刻に附す。時下寒甚だし、自愛せられんことを。宣白す。十一月五日。

原稿

甘南寺藏書初集四編、外蕃通書

御覽文庫御覽

清談録

鹿島海軍 小倉人、河田榮

右は御國の藏する所に係る。

居城圖書 鶴見、河津温山

右は同略に載する所に係る。

南山流 江戸、成島家

吉は尋常竹枝の藏する所に尋る。曠乃同社と之れを合寫せんと欲す。

諸君御覧、尚ほ二冊あり、美濃偶事・善庵隨筆、尚ほ各一冊あり、需めらば、

之れを致さんといふ。

千巻圖書五冊、原本は合藏藏す。借寫して之れを藏すれども、内帛四冊を割く、

足下藏せられば、願はくは借觀せしめよ。

此以書、萬葉草々にて失竊に御座候へども、萬御海際下さるべく候。

獨子新編は御國借用仕り度く申し候故、爾共日遲延に相成り候也。

日羽徳結に與ふ書

(九) 久保清

孝起〔訓化〕

尚に草太に託して萬葉一篇を指示され、又榮藏に託して讀史餘評を指示る。皆僕に責

むるに評書の任を以てす、何ぞ待かるるの厚きこと哉たしきや。僕至極なりと雖も亦

無量あり、何ぞ一言以て尊顯に酬いと欲せざらんや。願ふに公平淺識、詩に於て素

了は頗る天賜

(一) 久坂玄
環〔附録〕

（一）
 素情なく、皮に對て最も暗し。玄環或は詠詩を寄す、愛して之れを吟くるなきに至る、
 其が體面して知と稱するを得るのみ。玄環すら且つ然り、況や老妻をや。僕何ぞ以て
 お物と高詠を評せん。若し乃ち勉強して一二の詩語を戯じ、以て妻の意を察ぐとも、
 助も又難むむに非ず。是れ眞まが知らざる所に於て、蓋し調如するの意、老妻は
 又は厭はざる所を以て強ひらるることたかれ。但だ僕高詠を評する能はずと雖も、猶
 は讀みて之れを解しむを懶る。幸に數日を歸するを得ば、寫して之れを藏し、同友
 と其の樂しみを同じうせんと欲す。

(二) 謝安の集
 久坂玄環の集
 謝安の集

謝安中の、謝安二氣、氣憤如判とは、是れ皆宋儒の遺説なり。而して勉強を必ず君子
 と謂ひ、老妻を必ず小人と謂ふも、亦恐らくは未だ尤ならじ。然れども是れ有爲の文、
 讀するなくして可なり。況や寶・陳・彦章を論する、自ら是れ卓識にして、言を論す
 るの力を見るに足るのみ。但し其の一富商の事は、蓋し此の論の爲めにする所ならん
 も、未だ其の指す所を詳かにせず。然れども村うて之れを流るに、豈に其れ遠からん
 や。抑、他の村ふ所を以てするに、其の人此れを得るも、未だ必ずしも覺悟せざれば、

則ち其の言を失ふと爲す、言に言を失ふのみならず、或は書體を語言に象らん。卿、
君子の言は時に非ざるなり。然れども僕の付く所未だ必ずしも當らず、欲に略して之
に言ふのみ。大抵義理に力を果に得、之れを文辭に發す、極々として觀るべし、
惜しむらくは宋後學の偏、胸中に鬱結すること、或は未だ之れなしとせず。

傳頌の清本・支那書友と、物體の書を読む、往々にして心折れ意氣ふものあり、筆を
含んで笑し、欲に以て獻と爲す。然れども物體未だ之れを偏涉する能はず、況や周漢
の古書、また百の一をも通習する能はざるをや。今の識見、豈に其れ定まらりと云は
んや。聞く、楚雲の發程近きに在りと。書評かにする能はず、當に明泰を待ちて擇び
明證を請ふべきのみ。寅二拜拜。

馬島市仙に贈る

好學の一生に馬島市仙なる者あり。安世・醫師なり、年甫めて十回、書を読むこと極
めて欲く、余譯くしを贈す。但だ其の意心を以て、未だ其だしくは人の爲る所

と申す。元子曰はすや、一書からざれば誠あるず、學べば則ち同ならず」と。衆子
 之れを解けり。其の説市井に市仙の爲めに之れを誣(いつ)はんとすしも、主一無端は心學の
 當然にして、空言無稽の氣を攝(とら)せんことを恐れ、未だ以て斷らず。偶々外來を讀む
 所、其語を引く、「吾れ復た十國流らんや」と。余感起して曰く、「學人の志を爲す
 事あるの如し、童にして童に準ず、古英雄果るるに足らざるなり」と。乃ち市仙を召
 して之れを語り、因つて(二)劉氏(一)の好生錯言を説き、其の一語を摘み之れを示して曰く、
 「爾に於て道理を辨するもの、吾れ指多くは固せず、恭安は本書近世の名醫にして、
 其の賢識に非ず」と。歎し待つことありて之れを言へるなり。今市仙の才と齒(は)とし
 て、而も志あり、其の目ら待つ、寧んを今日の如きのみたるを得んや。之れを書して
 市仙に與ふ。時丁巳十一月十三日なり。

〔一〕
 龍虎密報を讀む

〔二〕
 安政四年二月三日、
 龍虎より報せしもの

市仙の密報は無端寫して江戸より贈りしものなり。丁巳十一月十三夜、有隣・賓卿・

(七) 霜水有
霜・中分直霜・
霜・中分直霜・
霜・中分直霜・
(八) 霜水有

八十と村越に對讀す。時に人去り舞臺^{もえのこ}を、寒風戸を撃ち、人をして憐を憐^うち慍然とし
て、復た功名の念あらしむ。筆を提げて之れを書す。

(附、松陰の抄録「二十一回義書拾遺」には紅毛密帳を寫して、右の戯語の他に次の詩を附す)

半窓明室紙婆娑

半窓の南氣紙婆娑^{まご}たり、

竹外寒聲吹月多

竹外の寒聲月を吹いて多し。

浮場日刊に讀去

浮場の日刊時に讀み去り、

四人微笑一燈華

四人微笑して一燈華^{あかり}く。

日竹徳祐に興ふ

室内す。向に人に因りて詩を呈す、而して未だ回報を竣ざれば、足下定めて色に歸り
しと書やを言かにせざれども、君子、想ふに應に樂具^{りくし}なるべし。至慰至慰。頃^さ佐世
八十郎あり、留連すること十日、興^{とも}に頼氏^(八)の政記の一部を讀む、樂が反覆して萬だ悦
二、江の子志あり氣あり、春秋又富む、其の才學の如きは今道へべきものあるを見ず

と雖も、其の前途必ず成すあらん。但た其の居、猶木の目出に在り、其の地偏陋にして、遂に乏しく、困乏なり、以て至忠と爲す。僕乃ち足下の意達して遂に在るを語りしに、遂に固より足下の才學行義を益聞したれば、則ち厭然として起ちて曰く、「一壺就し目出と五里のみ、何ぞ其の間無の遥かりしや」と。歸るの日、急に足下に見えて益々謂はんと欲す。是下草はく其其の爲ふる所を傳へ、其の藏する所を借し、八十をして其の才學を成すことを得しめよ。方今の世、人材を唯だ急と爲す、故に特に之れを言ふのみ。讀め論誄は壁に上す、別に一本を録してこれを篋笥に藏す、尺璧を享くるが如きあり。鄙況碌々、八十應に面陳すべし。不宜。

有隣に與ふ

佐々八郎に歸あんとす。十日筆を述ぬ、其れ情なきを得んや。僕因つて一言あらんと欲す、知らず是に於ては何如。亦思ふに聖童輩をして各々一篇の詠を成さしむるも、亦佐々此行を壯にし、停せて終下の處を鳴らすの一端なるか。兄幸に之れを謀れ。寅

自す。十八日。

賓卿の佐世八十を送る敍に跋す

八十將に歸のんとす。諸友會送し、連篇詠あり、而して賓卿之れが敍を作る。其の言
暫言私言はんと欲する所にして、吾れ復た言ふべきものなし。因つて賓卿に代つて之
れを尋す、實に吾れ意を致さんと欲すればなり。謹寅書す。

(五) 冷泉生に與ふ

臨時天皇御紀の遺詔に曰く、「國司郡司、臨時に朝集す」と。夫れ國郡に司あるは、
平家朝より廢まるに非ずや。維新朝、固より朝集あるを得ざるなり。又「^(七)天皇怒りて
其の人を^(八)、^(九)、^(一〇)と爲したまふ」と。豈は是れ漢主の刑に似たり、知らず此の詔
固より已に之れありしや、宜しく^(一一)。此の類、蓋しこれを書紀に求づく。先章
小治政書紀を善ばずして、獨り古事記を重んず、此の類、亦其の一なるか。偶、冷泉

(八) 本居宣
長

生の爲めに、日本史を讀み、譯りは一冊を舉げて、以て其の思を廣むと云ふ。

久坂玄瑞の詩稿に書して江幡吾樓に與ふ

是れ其兄の稿にある久坂玄瑞の遺弟玄瑞の詩なり。玄瑞年十八、才あり氣あり、
 鋭くして進取す、儒學の能く感服する所には非ず。顯はくは孝兄間に秉じて一讀し、
 痛く牽制を加へられんことを。渠は南山の竹たり、之れに刻し之れに歎せば、其れ
 處は石を貫く者、之の子なり。至福至福。

伊達吾樓言に歎す

世の書學を修むる者、意曰く、「西洋人は仁なり、未だ付て細心あらざるなり」と。
 然し其の書を觀せしめば、豈に茫然自失せざるや。吾れ曾て其の馬鹿同遊一冊を逸
 羅計略の中に獲て、「長崎近聞」の後に書せり。(三)世衡頃る其の全七十三期を示さる。
 概りて之れを聞するに、其の斧頭指を承むるは、寔だしく下田・箱館を假すの事に似

(一) 藩の儒
 生にして先
 賢の詩文を
 讀み、其學
 九年、年三
 十五

山縣
 藩士
 伊達
 吾樓

(四) 耶米利

(五) 耶米利

(六) 耶米利

(七) 耶米利

(八) 耶米利

(九) 耶米利

(一〇) 耶米利

(一一) 耶米利

(一二) 耶米利

(一三) 耶米利

(一四) 耶米利

(一五) 耶米利

(一六) 耶米利

(一七) 耶米利

(一八) 耶米利

(一九) 耶米利

(二〇) 耶米利

すや。鐵戸を逐ふは、甚だしく手を米利に借りて以て諸佛を拒々の衆に頼せずや。
鷄狼犬、自ら人を騙かんと謀るや、一にして足らず。因つて岡部生をして寫藏せしむ、西洋人は仁なりと謬云ふ者の口を問執せんと欲すればなり。安政四年十一月二十日、二十一回生歿す。

無逸の間に答ふ

孟子の「一天制を誅するを聞けども、未だ君を殺すを聞かず」の意言の可否を問ふを承く。放伐は自ら是れ聖人の大權にして、所謂伊尹の志あらば則ち可なれども、書生の職上に誅すべき所に非ざるなり。孟子則ち齊宣に對へ、輒く放伐を言へども、所宜其の人に非ざれば則ち人を知らずと爲す。然れども孔子嘗て四たが衛靈に見え、公山弗擾と東門を爲さんと欲す、聖賢の作用、又儒者庸常の論に非ざるなり。故に孔・孟・禹・武の旨をして後世に覺れしめ、仁を賊ひ義を賊ふの人をして民の上に安然たらしむるものは、吾議論の弊なり。近時大鹽子起るや、頗るここに見るあり、可れどもすた

く略なくして徒らに覆政を致し、人をして懷恨や已まざらしむ。特だ之れを後來仁義の人に望むのみ。吾れは則ち婦人めづなり、尙ほ易武を論するすら且つ爲さず、何ぞ況や孟子の立言をや。

論語の魯哀公十四年春西狩獲麟の事、孟子の自命將に笑を奉へんとす、其の意は、吾れは婦人なり、尙ほ易武を論するすら且つ爲さず、何ぞ況や孟子の立言をや、有國・賓客・顔る吾れと云ひ、無國・賓客・顔る吾れと云ひ、其の意は、吾れは婦人なり、尙ほ易武を論するすら且つ爲さず、何ぞ況や孟子の立言をや、

駒井生に贈る

(二) 外史義仲の戦死を赦すること、（三） 酈た項羽紀に似たり。因つて思へらく、義仲已に項羽

に似、巴亦虞婁（四）に似たり。巴の尼となりて身を終へしと、虞婁の從死とは、少しく優劣なしとせず。而して義仲既に京師を定めしも、旋つて頼朝の滅す所となる、是れ漢高の項羽を滅ぼせしなり。頼朝の尼將軍は、是れ漢高の呂后なり、而して其の毒更にこれより甚だしきは、平・勃・代王なきに坐すし。

和漢の事跡相似たるもの甚だ多し。由陽翁取も彼れを取りて此れに比するに巧なり、外史及び政記・新策・詩文集等に觀て見るべし。頼ふに亦事を識るの一捷徑にして、宜しく思を留むべき所なり。駒井生の爲めに外史を讀み、因つて之れに及ぶ。

(七) 山田宇
有(八)

(九) 徳地
生(一〇)

(一一) 徳地
外(一二)

(一三) 徳地
外(一四)

(一五) 徳地
外(一六)

(一七) 徳地
外(一八)

(一九) 徳地
外(二〇)

(二一) 徳地
外(二二)

(二三) 徳地
外(二四)

(二五) 徳地
外(二六)

(二七) 徳地
外(二八)

(二九) 徳地
外(三〇)

(三一) 徳地
外(三二)

(三三) 徳地
外(三四)

(三五) 徳地
外(三六)

(三七) 徳地
外(三八)

治心氣齋先生の詩に改す

是れ徳地の代官山田先生の詩なり。(九) 僅々七首なれども、櫨を植る櫨を殖やし、櫨を養ひ、及び櫨を巡りて民を傷れむの櫨、歴々として見るべし。徳地は僻陋なれども、吾が藩の蜀郡なり。吾れ竊かに文翁・張詠を以て先生に望む。先生は吾が父執たり、少小より吾れ従ひて學を受く、故に吾れ其の露績を道ふを樂しむと云ふ。丁巳仲冬の日、車方謹んで跋す。

松浦無窮に興ふ

小倉よりの貴書三冊。會、富永・中谷・久保・御國の諸友座に在り、且つ讀み且つ評し、萬々然として足下の壯遊を稱せざるはなし。讀みて「凡物を貌し光陰を費す」と目ふところに至る、杜叟の曹將軍を嘆ぜし所以も其れ然らずや。然れども西田あり、(一四) 伊藤あり、(一五) 著名人奇士たり、則ち足下其れ愈れるか。(一六) 久保氏の新報は果して本月五日

しるゝ

（一）

（二）

（三）

（四）

（五）

（六）

（七）

（八）

（九）

（一〇）

（一一）

（一二）

（一三）

（一四）

（一五）

（一六）

（一七）

（一八）

（一九）

（二〇）

を以て聞けり。當承儼然として之れに主たり、冷泉・岸田の二生寓す。澤太氏も鋭食

と床との外は亦在らざるなし。諸生駸々として進益し、大いに舊觀を變す。就中品川・

馬島・友本・國司・飯田の五生は皆成童而下の俊才なり。而して飯田生而めて十一、

書を讀むこと河の如し、國司生と同じく三國志を課すに、並讀へらく、未だ舞象なら

ざるに及んで、而も二十二史を卒へんと。三生の銳も率ね皆是れに類す、而して其の

他は概すべきなり。上野の一隊に至りては別に旗幟を抜き、横山生之れが師たり、將

を斬り敵を驅にし、舊つて松下の下風に立たす。夫れ松下・上野は小邑と雖も、三

生五生は少年と雖も、天下の善士を友とするは必ず一郷より始め、天下の英才を育す

るは必ず縣生より起る、則ち是れ亦未だ曾て樂しむべからずんばあらざるのみ。猶だ

三無生在らざるを以て、僕富永・久保の諸友と毎に言ひて之れを惜しむ。然れども此

の勢の興るや、實に富永に慕つき、而して富永の出づるや、實に三無其身の力に由る、

則ち其の國を助けずと雖も、有功寧んぞ三無を外にするを得んや。無逸は便書に至る

毎に、輒ち卿下惠を舉げて言と爲す。渠れは生徒を驅使して、百忙剽集すれども、猶

三六

漢書の劉三省
の書誌

計を頼み、風に其の精詰に服し、因つて三省の人となりを知ふ。而るに陶宗元、家
本傳に云く、明も何に因つてか考を取らん。

按するに陳仁規の評陶本には「宋の天台の劉三省著註」と爲せども、吳勉學の續校本
には宋の字なく、四庫全書續明目錄には元の劉三省と爲せり。實類の之れを怪しむ。

三省著として曰く、「或は飄むるに北のかた中國に學ぶを以てす。學、志あり、然れども

吾の衰へたり」と。其の言婉にして而も其の志確く、以て其の節義を見るべきなり。

況や敎宋に「拾遺作」^{（一）}と署す、即ち元の至元二十二年にして、實に宋の亡後六年な
り。而して「補遺の轉注」^{（二）}とは、明も蓋し其の隱居讀書の處。是れ其の年號を署せざ

るは正に陶徵士の遺意なり。而るに之れを元人と謂ふ、是れ怪しむ所以たり。然れど

三省の文章行事、他に吾れ未だ見る所あらず。之れを簡明目錄に求むれども、亦一

も得るなし。敎中謂ふ所の「德祐乙亥、江上言事」^{（三）}の如き、吾れの最も見んと欲する

所にして、而も未だ能くせざるものなり。津藩胡敎を校するに、邵遠平の續弘簡錄を

引く。續弘簡錄は蓋し元史類編なるもの、而して類編の序は朱竹垞の文に見ゆ。謂へ

宋代々言の原
なれば、然ら
ば、其の年號を用
ひず、ただ干
支のみを用ひ

らく、「龍先生名は連平、字は出蟬の通次する所なり。先生の高祖諱は經邦、弘簡錄を著はし、先生乃ち其の例に倣ひて之れを續ぐ」と。而して寅亦未だ其の書を見ざれば、則ち三省の事に於て益々怪しむ。離索の悲しむべきことかくの如し。頗ろ二三友と復た此の書を読む、因つて怪しむ所を書して以て之れを贈り、其の垂示を求む、願ふに亦尙友の一事なり。寅書す。

文妹久坂氏に適くに贈る書

久坂玄端は防長年少第一流の人物にして、固より亦天下の英才なり。今少妹の羈劣なる、其の属に非ざるや審かなり。然れども人は自ら腹まざるを憂ふ、自ら勵み自ら勤めば何すれぞ成らざらん。況や婦道難きに非ざるをや、唯だ其の賜さざるを憂ふるのみ。酒食是れ謀り、父母に懼を給すことなく、寢室繡繭、官事に違ふことなかれ。乃ち貞節専心のごときは嫁の初めに在り。今世綱教振はず、再臨改過の恥たるを知らず、緇衣涅繭の何の故かを知らず。吾れ曾て少妹の爲めに孟氏の専心篇を講ずること詳か

たり。是れ則ち藝文の第一義、小録（上）撰らるゝ意ることなかるべし。此外を譲ぎてより丹、吾れ書た愛へず、而して少録の興劣なる、以て天下の英士に購すべきもの、此の道は
 れたり。

(一) 小録
 (二) 小録
 (三) 小録
 (四) 小録
 (五) 小録
 (六) 小録
 (七) 小録
 (八) 小録
 (九) 小録
 (十) 小録

少録の初めて生るるや、王叔（一）定實に撰し、之れに興ふるに其の名を以てず。阿文（二）の興
 至し偶然に非ざるなり。汝の、婦子代は刻苦（三）克く家道を修む、吾れ則ち之れを慕す。
 阿文は所製、小田村氏に歸するを得たり、吾れ則ち之れを愛す。汝生るること難り絶
 く、其れ最と之れを轉む。行餘に書を讀みて祖は太非に誦じ、以て阿文の稱に則はば、
 此れ其の可なるに庶幾からんか。然れども婦人の書を讀むは男夫と同じか、是れ
 則ち女子在し、又兄をせばなり。安政丁巳臘月廿日、朝儀朝遊、轉書喜成す。父伯伯
 叔の對習具さに垂せり。次兄真三ここに於て、これを言ふ。

小國剛藏に復す

本月十一日の書至る、貴況の康寧を承はり、欣慰欣慰。前書・書書及び評文は逕件書

終なり。是れより幾き數日、門生松浦松洞なる者、馬關より歸りて曰く、「一書^{一冊}已に
雙劍^{二劍}を呈せられ、魁の病も且つ瘳^{しな}え、又一女を挙げたり」と。向の繫念^{けいねん}、今は則ち重
親となる。魁兄之れを聞かば、亦當に欣然たるべきのみ。茲に靜齋の書を轉致し、且
つ松洞をして一書を作らしめ、之れを足下に寓せしむ。足下就いて之れを詳かにして
可なり。江格の事蹟に乘驗の如し。然れども渠^あの其の短處は、乃ち其の長處なり。
之れを要するに、文筆才氣、亦獲難き人物なり、苛求するなくして、亦可ならずや。
英川^{えいせん}伯鶴^{はく}とは即ち學海落竹村海嶺の別號たりや。僕曾て無谷^{むこ}の文に於て、祖^そぼ其の人
を知れども、未だ其の病を言するに及ばず、借覽^{かかん}を允^{ゆる}されは幸甚なり。向予新編は續
後詩に基だし、今爰に返璧す。旅書中巻は附往す、末卷は偶、勉に往く、討遺^{たうい}繼いで
之れを致さんのみ。皇太后密敕の事は二月の間に在り、聖恩の規定は則ち六月の事なり。
老兄^{らうせい}督宣^{とくせん}に已に悉したるべし。但だ天下の事、變^{へん}遷^{せん}ここに至る、爲めに痛哭すべし。
而して有志の上、力を盡し心を竭し、當にここに處することあるべし、健^{けん}壯^{さう}の口の想
望^{そうぼう}してはむべからず。ここを以て附致して病意を快ふのみ。

昨、僧清狂海の死を計け来る、併せて報す。王良は狗耕の憑く馬となり、死を求むることも甚だ無なりと。其の何に由るかを詳かにせず、徒らに疑慮を増すのみ。時下冬暖、亦、馬の一息候たり、千萬自重せられんことを。十七日、宣慰拜して復す。

馬島生に與ふ

潤乃日あり、甫仙是下、何如なる光景ぞや。僕常に足下を待つに、執中第一流の才を以てされども、家系だ甚だしくは尤さず、而して僕も亦頗る疑ふ。足下誠に才あり、才あれども勤めずんば、何を以て才を成さんや。今、歳將に除せんとす、學勉むべからず、一日を強めば、將に遽に才機を失せんとす。品生・飯生、勉勵加ふるあり、必ず足下の憂とならん。果して然らば、僕將に自ら愧づるに之れ暇あらざらんとす、誠に足下の端めのみならざるなり。心緒萬端、甫に逼つて書を作り、多くする能はず、明早に及んで必ず來れ、僕將に之れを盡言せんとす。臘月廿日。

三子に贈る

吾れを爾等秘府に見え、作文の法を問ひしに、翁（一）公全集を讀まんことを勸めらる。肅に深く頷りと爲す、然れども懶りて果す能はず。（二）後（三）田節齋に貢すに翁の説を以てす。節齋は文章を以て自負す、頗ち翁の説を駁して曰く、「是れ長齋の文を爲る能はざる所以なり。古人の文、佳なるものあり、佳ならざるものあり。歐公は誠に大家なり、然れども安んぞ篇々皆佳なるを得んや。而して其の佳なると佳ならざるとは、初學の擧が易き所に非ず。姑く前輩の佳選せる、（四）謝氏・沈氏及び吾が賴先生の如きものに就いて之れを讀まば、亦可ならずや」と。二家の言は博約の説なり。學問より博より約に入るものあり、約より博に遷するものあり。博を業として而も之れを約するものあり、約を主として而も能く博なるものあり。高して心に未だ從違する所を細らざるあり。

余、業性（五）眞野にして、文章は其の能に非ず、又其の好みに非ず。況や東向に問遯し、未だ力を専らにして書を讀む能はず、博文約禮、兩つながら之れを失へり。後幸に獄

に授せらるるを得て、始めて頼る書を読み、或は時に詞家の集を閲す。然れども肯へて文章を攻めず、唯だ詞曲を論ず。ここに於て始めて専美の益あること、遷客の及ぶ所に非ざるを悟れり。

夫れ二家の説は文章を主として言ふ。文章を主として言ふは、吾れの知る所に非ず。吾れの知る所は詩を論するなり、世を論するなり。然れども此の間の消息、吾れ則ち論議の詞註及び本居先生の古事記傳に於て之れを得たり。頃ろ士彦と頼氏の古文典刑を讀み、賓卿と清人所見集を讀む、皆少益を覺ゆ、而して典刑尤も甚だし。唯だ輒夫をば詩内家集を讀む。貴客は金節の士に非ず、吾れ甚だしくは其の人となりに服せず。然れども意に頼る之れを棄こぶ。是れ固より專分の效にして、乃ち亦博約の説なり。未だ知らず三子に於ては何如。

清太に與ふ

貴客何如。昨日の會、會する者僅かに六名、例に沿りて各、一篇を講じ、^(六) 悲^(六) 泉より二

子集府に至りて止めり。但だ會する者に少なく、講章も亦短く、略に見る處を竭すことを得たり。慊むる所は平生無學にして讀書尚希、一たび古書に臨めば乃ち解く處たるのみ。慈泉篇、朱傳に批・補は已に術より來りし時經る所と爲す。平・言は又術に遠く離經る所と爲す。二章、語意本同じ、乃ち其の解を異にす。且つ平・言を以て術に遠く離經る所と爲さば、「車を旋す」は旋に切ならずと爲す。「諸姑は姪を誦ふ」姪弟の中に乃ち諸姑伯姊あり」とは、義に於て妥からず。但し轉制は僕の未だ覺めざる所、以て決するなし。誤は姑と同じ、車輪の頭の金なり。朱は直ちに車輪を、と自ら頗る之れを疑ふ。「轂も防す」に就いて之れを言へば、則ち車輪を近しと爲すか。但し車の制は僕の未だ考めざる所、亦以て決するなし。不觀を豈軍と爲すは隨意に偶なり。論語の注、三省吾身の誤の如し。

子集府に至りて止めり。但だ會する者に少なく、講章も亦短く、略に見る處を竭すことを得たり。慊むる所は平生無學にして讀書尚希、一たび古書に臨めば乃ち解く處たるのみ。慈泉篇、朱傳に批・補は已に術より來りし時經る所と爲す。平・言は又術に遠く離經る所と爲す。二章、語意本同じ、乃ち其の解を異にす。且つ平・言を以て術に遠く離經る所と爲さば、「車を旋す」は旋に切ならずと爲す。「諸姑は姪を誦ふ」姪弟の中に乃ち諸姑伯姊あり」とは、義に於て妥からず。但し轉制は僕の未だ覺めざる所、以て決するなし。誤は姑と同じ、車輪の頭の金なり。朱は直ちに車輪を、と自ら頗る之れを疑ふ。「轂も防す」に就いて之れを言へば、則ち車輪を近しと爲すか。但し車の制は僕の未だ考めざる所、亦以て決するなし。不觀を豈軍と爲すは隨意に偶なり。論語の注、三省吾身の誤の如し。

北門篇、「我が艱みを知るものなり」。艱みは即ち王事政事の艱難、下章に言ふ所の如し。楊氏の「其の艱みを知らず」の一、句之れを得たり。朱傳は則ち資養を以て便ち我が艱みと爲すに似たり。教は毛傳に厚の意と爲す。坤益と通す、必ずしも攪擾と爲さ

ず。末三句は三章並びに同じ、下篇も亦然り。蟠趾・鵠蹠と似たり。

蟠趾鵠蹠には奇字に許ふとし、二章には五絶

「必す」必す言言聲調の妙あらん。但だ僕輩だ深く通ずるのみ。北風篇、「既

に愛ふたり」とは風氣既に急なるなり。朱傳甚だしくは委曲に非ざるか。靜女篇、第

二章、「以て」以て「則ち」則ち之れを見る」といふは僕未だ曉る能はず。末章最も未だ「之れ

を見る」意を見す。影管は實に何物なるかを詳かにせず。或は此れを以て（一）蒙恬以前

已に筆あるの儀となすは則ち強ひたり。但し毛傳には明々に女史彤管の法を言へり。

則ち亦考據の一助なり。「女（女）の美なるが爲めにあらず」とは、上章の「女（女）の美を悦（悦）悵

ふ」を承けて言ふ。特（特）り女（女）の美なるのみならず、其の（其）貽（貽）も亦美にして且つ異（異）れたる

なり。朱傳には、女は美を指して言ふ。僕殊にこれを曉らず。新義篇、「酒は高峻な

り」と毛傳已に然り、豈に奇解に非ずや。「魚網に鴻鴈（鴻鴈）る」とは、「雉鳴きて牡を求む」

と同種の語なり、豈に奇語に非ずや。二子乗舟、偁と壽と同じく發したるに非ず、而

も併せて之れを言ふは疑なき能はず。岡自駒已に之れを辨ぜり。太史公の贊に、一父の

志を傷けんことを思ふ」とは、其の志を（其）充（充）たり。然れども「卒に死亡す」とは、其

の書を情しむたり。一擧一瘳、新詠共世子の義にして、一結は乃ち昌黎「伯夷の頌」
 一語本たり。精讀すれば自ら見はる。凡そ昨の會、論ずる所、大抵右の如く、皆字句
 の末事のみ。但し二北の篇に至りては、反覆すれども釋くこと能はず。五經は唯だ詩
 主理も治め易しと稱す。然れども地理・禮義・車服・動植・訓詁・韻音、一々精到な
 るに非ずんば、則ち亦讀む能はざるのみ。今僕と會する者と皆其の人に非ず、其の憤
 憤たる固よりなり。是下專精書を讀む、故に特に論ずる所を擧げて、更に垂示を請ふ。
 尾寺生米を看くこと方に難に、幸藤生は三見に歸省す、故を以て並びに會せず。二子
 すら然り。世間殘餘の費應想ふべし。高杉生は既に夜にして乃ち來る。家頗る其の宵
 行を疑ひ其の藏に出づるを禁すと云ふ。其の情笑ふべく慙むべし。而も其の氣益々
 奮ひ、議論大いに進めり。雪屋讀書、其の功虛しからざるなり。世衡は病と稱して家
 居せり。昨書を寓して詩序・辨説を假らんことを請ひしに、乃ち通釋を假されたり。
 通釋は序と詩と並びに各篇に附し、大いに觀覽に便なり。故に爰に轉示す。曉來僕も
 亦雲に聚みて頭を痛む、嬾に當り被を負ひて益々足下を思ふ。唯だ足下自愛を要と爲

す。臘月廿四夜。

昨夜佐世八十至る。其の措置を叩くに隠然として南郡の一敵國たり。養生の間布政に關ふる要路注す。天下の事がくの如し、有志の士寧んぞ重んぜざるを得んや。僕と足下と藥餌愛護するも、それ孰れか然らずと謂はんや。一笑。

筆記一則

嘗て潭淵の事を觀、南嶽公を以て北宋第一流の人物と爲す。已にして王文正の慶量を觀るに、又宣の及にさるものあり。然れども東封西祠の憂、李文正先づ之を細る、而も王は則ち因循苟且徒らに自ら嘆息するのみ。之れを要するに、趙宋の君子は仁厚餘あれども協理足らず、乃ち李文正と雖も征伐を以て潭淵と爲す。南渡の亂、已に此の時に兆せり。而して隠然雄志を其の間に抱く者、其れ唯だ韓魏公か。明季の魏叔子深く李忠定を推崇して、三代以下の一人と爲し、亦魏公に勝れるを以て言と爲す。則ち其の見識し亦吾れに類するものなるか。北宋の人物評、其の説頗る長し。今其の

(一) 佐世八

第一論

(二) 桂小五

三

四

五

六

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

凡を書すと云ふ。十二月廿六夜。

雪武重宝の議、何亮の安邊策極めて是なり。後韓琦深く以て然りと爲す。而して李
沆・韓億の見、當時に在りては非と爲して用ひられず、李・韓の優劣かくの如し。
己未二月十九日、重ねて書す。

友善樂記 代序

地害の側撃れてより、士夫皆郷野に背きて城市に居る。城市は浮靡の如しと雖も、士
夫の習する所、文あり武あり、以て學ぶあるに足れり。士夫或は退いて郷野に處る者、
是は未だ前に説じ、遊は處家に群す、心用ふる所なく、言、義に及ばず。ここを以て放
僻の習、邪侈の風、遠くとして然らざるなし。獨り我が言田は則ち此れに異なり。今
爲了已、余小郡より轉じ、乏しきを承けて此の邑に宰たり。邑宰の習、率ね重賦を督
し課役を食むるに止まり、休養生息すら且つ心を養はず。何ぞ文武を聞ふに暇あ
るや。余心に滿のかくの如きを懸つ、而れども民事方に急にして、未だ及ぶある能

五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

常榮公傳

常榮公、諱は隆元、少輔太郎と稱す、(四)洞春公の長子にして、母は吉川國經の女なり。

洞春公入嗣の歳、大永三年に生る。初め我が毛利氏は世々周防の大内氏と善し。(五)幸松

君の幼きとき、大臣権議して出雲の尼子氏に附きたれども、洞春公の廟立するに及んで、復た舊安を周防に歸び出雲と絶つ。ここに於て公年甫めて十二、出でて大内氏に賁たり、由目に在ること七年なり。尼子晴久之れを聞きて大いに怒り、大舉來りて吉田城を攻む。大内義隆、其の臣駒隆房等を遣して、我れを援く。明年五月、出雲の軍遁走し事平らぐ、然る後城に歸ることを得たり。公山口に在るや、義隆爲めに冠を加へ、其の偏名を與ふ。

天文十六年、公薨し洞春公に代りて國職に就く。八月、備中寺と改む。是の時二弟吉川元春・小早川隆景、皆心を協せて宗家に奉じ、宗家益々強し。十九年、大内義隆、陶隆房の弑する所となり、二公誓つて爲めに讐を報せんと欲す。而して隆房名を晴賢

（一）

（二）

と改め勝嫡基た^{ふん}機たり。翌後^{（一）}の大友氏、首として之れが援を爲し、比近の諸豪懾服せざるはなし。我が諸將も皆暫く和して以て事機を待たんことを請ふ。二公乃ち陶氏の爲めに、改めて備・藝の諸城を下せり。久しうして、我れ其の江田城を請ひしも、晴賢^{（二）}斬た^{（三）}と興ふるを肯んぜず。公密か二白して曰く、「義隆の義、晴賢の逆、皆坐視すべきに非ず。今機已に會す、寧んぞ緩うすべけんや」と。洞春公深く之れを然りとし、遂に其の謀に從ふ。ここに於て新たに嚴島に城き、以て晴賢を誘ふ。晴賢、防・長・豐・玖の兵を將めて、海を航して島に到る。弘治元年十月朔日、二公、兩川^{（四）}の諸將と軍を潛めて嚴島を襲ひ、海陸夾擊して遂に晴賢を斬る。賊五百人あり、直ちに公の軍を犯す。公親ら洞春公の親兵と撃ちて之れを殲せり。二公の將に島を襲はんとするや、風烈しく雨甚だし、船兵擣之れを難しとす。洞春公奮つて曰く、「吉日復が卜すべけんや、甚雨烈風は天の義兵を助くる所以なり」と。因つて公を召して語つて曰く、「今日の事、吾れ固より死を決す。汝留り^{（五）}生へて以て再事を謀れ、徒らに従死することなかれ」と。公悦ばずして曰く、「大人既に然り、兒何ぞ敢へて生へんや」と。因

つて帶を脱り甲を棄ね、其の餘を斷ちて以て死志を示し、先づ起ちて船に上る。親兵
傳うて之れに従ひ、竟に以て克つことを得たり。三年にして周防・長門悉く服す。

三年秋九月、後奈良天皇崩じたまひ、十月、正親町天皇踐祚したまふ。時に足利

氏衰へ天下大いに亂る。朝典は廢闕し、即位の大禮も久しうして未だ擧げられず。二
公深く之れを憂へ、圓清寺の僧惠心をして即位の料を奉獻せしむ。朝廷嘉納したま

ひ、詔して、公を大膳大夫に任じ、洞春公を陸奥守に任じたまふ。我が毛利氏の義名、

ここに於て天下に振へり。是の歲、大將軍義輝、公を安藝の守護職に補し、五年、備

中・備後・周防・長門四國を加ふ。而して朝廷、公を從四位下に敍したまふ。

初め古川氏は石見に出でて以て山陰を略し、小早川氏は備後に居りて以て山陽を鎮む、
各々祖功あり。公は常に洞春公の麾下に在りて密謀運策す、故に世、傳ふる者少なし。
防長に對するに及び、公岩國に駐して以て西海を經め、數々赤馬關に下り、速りに
大友の軍を卻く。義輝、聖護院大僧正道増を遣し、我れに勸めて大友義鎮と和せしめ、
防長を以て我れに歸し、豐武を大友に歸し、又約して世子(四)幸鶴君の爲めに義鎮の女を

聚るゝむ。ここに於て西海事なし。洞春公時に出雲に在り、兩川の諸將と尼子氏を攻む。公將に赴官してこれを佐けんとし、東上して道に吉田に過り、郡山城下に宿す。

一日、幸御郡城中を留守す。公宿所に召見し、饗酒して御を爲せしも、意甚だしくは厭はずして止む。因つて君の從臣を召し、從寮として語つて曰く、一過年四境目に闘は、西海の軍事、亦略は緒に就けり。是れ將老公心を苦しめ弱を勞するの致せし所なり」と。衆城に入りて休まんことを請ひしも聽かず、行違して佐佐部に馳し、士衆を懸懷す。衆、和智誠春迎へて之れを享せり。明日、公某かに遭く、實に永祿六年八月四日なり。職に在ること蓋し十七年、壽四十有一。將士愕眙し、措く所を知るなし。吉田の大涌雲に仰り、露を上りて華溪常盤と曰ふ。計出雲に聞ゆ。洞春公乃ち諸將に謂つて曰く、「汝等誠は豫光を悼む所のものを以て奮激して敵に當らば、何の城か攻けざらん、何の軍か敗れざらん、而して隆光の心も自然地下に慰まん」と。ここに於て士氣益々奮ひ、連戦して皆捷つ。已にして幸繼君亦來りて出雲に赴く。久しうして、尼子義久出でて降れり。

(一) 毛利氏
は文學の素大
に長じ、其の
(二) 和歌

公、素行端正、敵に臨みて勇決、特に仁孝に敦し。公の岩國に駐するや、大友氏（つとよ）陰かに周防・長門の將士を招きしも、將士皆叛くに忍びざりき。井上有景、奉侍純勤なり、又曾て洞春公の病に侍し、百日も衣、帶を釋かず。井上の黨を誅する時、公先づ有景を外に使せしめて以て之れを免かれしむ。波多野兵庫、力闘して門司に死し、其の子龜壽猶ほ幼なし。公之れを憐みて感狀を賜ひ、特に父の祿を嗣がしむ。

我れ毛利氏は江國文學の後を承け、亂離に在りと雖も、未だ曾て文雅を廢せず。洞春

公父子最も國風に長じ、宴會の贈酬、家庭の間、溫々として春の如し。公曾て洞春公

に従ひ備後の高山城に至る。城は小早川氏の居る所なり。小早川氏、供侍懇ろに至り、

人をして太平記を讀ましめ以て之れを聽かしむ。洞春公曾て書十四條を作り、公及び

兩川（りやうせん）と與へ國策輯註の道を言ふ。公、兩川と逐條奉答し、永く寶訓と爲す。

公の逝くや、人或は和智誠泰之れを毒せしかと疑ふ。久しうして、僧惠心「公、洞春

公の病を聞き、身を以て代らんことを請ふの狀」を上る。因つて嚴島の祠に就いて、

其の文を索め得たり。和智の寃、ここに於てか白（あきら）かなり。公已に逝き、而も幸鷗君猶

は初なり。ここに於て、洞春公を以て國祚に始たり。後八年、洞春公薨き、子鶴君嗣いで立つ。之れを天樹公と爲す。

は譲ふに於するに、我が洞春公は祖業を中興し、十國を拓開し、天朝を尊び逆賊を誅す、功徳威烈、空れりと謂ふべし。故に藩特に之れを崇奉す。天樹公は父祖を繼嗣し、時に艱難に遇ひ、大照公は新たに二國を聞き、これを百世に傳ふ、亦皆勤めなり。故に崇奉並びに洞春公に次ぐ。因つて之れを合稱して、三靈と曰ふ。三靈一統、軌範惟れ^{（一）}統む。而して常榮公は則ち與らず。今公職を^{（二）}繼ぎ、朝を敬ひ祭を^{（三）}重んじ、國祚を興し絶世を繼ぐ、至らざる所なし。越えて十七年、嘉永癸丑三月、常榮公の靈式禮數を定め、之れを天樹・大照二公に同じうし、又神主を靈社に奉じ、崇ふも典禮と曰ふ。昔周の文王、王季を以て父と爲し、武王を以て子と爲す。父之れを作し、子之れを述ぶ。故に孔子曰く、「其れ惟だ文王は變なし」と。臣、常榮公に於ても亦云はん。而して今公の遺孝、寧んぞ^{（四）}繼周の下に在らんや。

魏叔子文鈔を讀む

(四) 史稿長

(五) 愛觀堂

(六) 魏叔子

吾れ嘗て其書鈔本の魏叔子文三卷を購藏す、署して清寧郡の魏某と爲せり。然れども、^(五)其かに讀へらく、叔子隱居して書を著はし、後進を獎勵す、未だ嘗て節を愛觀氏に屈せず、^(六)後には朱明を稱して本朝と爲す、則ち某の志、明の遺民たること久しと。但し良

(七) 魏叔子

書、鈔本は家に藏する所なりと雖も、未だ嘗て細密に之れを讀まず。文はに多くなく、又書を藏せず。これを以て能く叔子の志を詳かにすることあるなし。頃る偶々、^(六)樞馬九方の鈔本六卷を得たり。首卷には乃ち「楊友石に答ふ」と「郭天門に上る」との二書を載す。ここに於て、始めて叔子は眞に有志の士にして、朱明の遺民たるに負かざるを期せり。因つて考ふるに、明の崇禎十七年甲申、北京陷る、叔子時に年二十一。明年、南京陷る、叔子乃ち翠微峰に入り、専ら史記を讀み、最も意を左氏に留め、兼て史記に因りて鑑戒を見る。二十許年を關して、然る後遂は吳越に如き、或は翠微に歸る。蓋し曰く、「一孤意の少年、卓犖の人なり」と。^(七)戊午に至り、伯兄善伯、諸子世

傑、書城の爲めに身を殉ず。明年、某の姉婿邱邦士死す。邦士も亦某の山中の同志な

(七) 魏叔子
其の族譜十七

り。又明年庚申、叔子隠し五十七歳なり。爾後九方復た其の一支をも載せず。然れども書部ここに在る、安んぞ一旦初志に負き、清塵に照するものあらんや。世或は清・侯・魏を以て清初の三家と爲すも、是れ清人より言へるのみ。朝宗の履歷は書れ未だ得くば清へされども、宛峯の如きは乃ち失節の人にして、叔子は決して其の儔には非ざるなり。

行昭法集に、「寧都の魏凝叔に答ふる書」あり。凝叔は又泳叔に作る、即ち叔子なり。叔子の「周青士に興ふる書」に、亦云はく、「往いて徐昭法に遇ふ」と。則ち二子相識れること知るべきなり。但し徐は沈毅にして、魏は則ち英發、互に利鈍あれども、而も其の趣は未だ嘗て同じからずんばあらざるなり。叔子言ひて曰く、「堅節の士は則ち方に自ら以爲へらく、兩間に塞がり六合に瀾ると、而れども事の當に爲すべきもの、是れに止まらざるを知らず」と。昭法言ひて曰く、「億兆の人、官なき者、十其の九に居る、豈に皆高士ならんや」と。是れに由りて之れを觀れば、二子の立つ所想ふべきのみ。而して居易堂集には明かに「明の秦餘山人、侯嶺徐某」と署せるも、獨

(三) 昭法集
卷一 書

(四) 昭法集
卷一 書

(五) 昭法集
卷一 書

り叔子二家の鈔本は並びに清人と爲す。吾れ頗る叔子の爲めに之れを憤る。然れども余幽囚せられて世と通ぜず、家又書に乏しく、叔子全集及び他の記載に就きて其の本末を精究するを得ず。故に姑く之れを書して後考に備ふ。寧都は明に在りては江西南たり。明の亡ぶるや、江蘇の間隠士多し。吾れ其の書を讀む毎に、輒ち爲めに泣を下す、叔子は其の一なり。

討賊始末

討賊始末

敘

寧政丙辰、幕命、孝義(きんぎ)を旌表す。ここに於て、都濃郡に正あり、吉敷郡に石あり、皆孝婦なり。而して大津郡に又登波あり。登波の事最も烈なり。夫れ正は一身にて老父母を養ふ、贅壻(けいし)一たび去つて永に誓つて嫁せず。石は空閨病める舅姑を奉じ、貞節夫を慕ひしめ、夫復た出でず。是れ皆今の世に少なる所なり。而して正は年九十四、石は年六十八、生存して今に迫る。今並びに旌表を蒙る、亦榮ならずや。而して兩婦の貴言(きごん)報(はう)は多く年所(としど)を経、誠に人の堪へざる所多し、然れども猶ほ平常の事のみ。登波に至つては則ち然らず。強敵(みじか)斃(め)して其の所在を知らず。搜りて獲ざれば死すと雖も返らんことを願はず、搜りて獲ては復た其の反讐(はんしやう)を懼る。豈に特に流離奔走、困辱(くじやく)のみならんや。其の初めや蓋し情夫の忌む所、俗人の怪しむ所、而して其の志

討賊功績るに及んでは、則ち訛謬せざるはなり、一旦にして進んで三孝綱の附に附りてあり。今茲丁巳、余大津源次郎を公輔の爲めに同知京波の碑稿を撰す。京波の志を遂げしは幾し命を距る僅かに十の年なり。今歳年五十九、今猶ほ生存す。而も世世傳説し、文書銷滅して微すべからざるに至る。郡代の青徒藤田新介なる者、古を紀を撰を重んず。紀代より勝より余の源次郎を惜しみ、故蹟を點檢し、又京波及び父源次郎の事を知れる者に濫問して、大抵記を遺る。余も又懇ろに知友に求めて當時の文書數通を得、審りて以て碑稿を撰す。碑稿已に成りしも、事實の論は挂漏して體心るに思ひざるものあり。ここは於て又討賊始末を作る。噫、京波の烈は三孝綱に列して尤あり。之を千載に傳へて蔑ろす難はず、取れて以て微となすべきものは、世に誤れこれにこゝに觀るか。安政四年丁巳六月念五、二十一回猛士藤田傳す。

茲に長門國大津郡向津具上村川尻浦、山王社宮番幸吉が妻に、登波と云へる烈婦あり。
其の實家の父は甚兵衛とて、豊浦郡瀧部村八幡宮宮番なり。瀧部も亦大津郡代の宰判
とぞ。宮番と云へば、乞食非人などに比べて××より又一段見下げらるる程の者なる
に、彼の幸吉夫妻の所爲は、天明大和魂の瀧園せる士大夫にも慄ぢざる節操なり。い
て其の緣由を説かん。

幸吉は原郡國內の田窮百姓にて、母親及び妹連にて赤馬關に客落し、物賣體に成り、
終に更小路水ヶ谷と云ふ處の宮番に養はれ、後に川尻浦へは來りしなり。登波が幸吉
に轉世しは、十五歳の時にて、下關滯留中の事なり。幸吉妻の時二十三歳とぞ。登波
が甚兵衛、原は播磨荒井の百姓なり。奇波七歳の時、母親に連れられ、姉伊勢・弟
勇助と以上四人連にて、荒井を出でて下關に來り滯留す。父甚兵衛も其の年中に跡より
追來るとあり。母は程なく物故し、姉は後に倭山の宮番に嫁す。幸吉の妹名は松と

云ふ者も、亦下關にて奉公（おつかひ）松鑑（まつかみ）し居たる内、石見人浪人松本龍之進（まつもと りゆうしん）と唱へ、賣卜（ばいふく）又は梅（うめ）御指南杯（ごしほんぱい）して諸國を徘徊する者に嫌す。是れは幸吉が登波を娶りしよりは四五
年と後の事なり。此の龍之進實は石見浪人にはあらで、安藝領備後三次（あき けい びご さんさい）の××なるこ
とに後にこそ知られたれ。

かくて松は龍之進に従ひ諸國を徘徊し、文政三年庚辰十二月、夫婦連にて幸吉方に來
り、翌辛巳の年正月約滞留す。初め登波は幸吉に従ひ川尻に住し、松は龍之進に従ひ
諸國に流浪す。ここを以て遂に未だ相對せしことなり。其の相對せしは此の時を初め
とこそ聞えしなり。

已にして龍之進九州邊へ罷り越し處として、妻松を預け置き出足す。同年四月に先妻
腹の女九歳になれる千代と云ふ者を連れ來り、五日許り滞留す。其の節龍之進申し分
には、身（み）相（あひ）上方（かたがは）處へ寄り度き所存にて、支度も之れあり、暫時女をも預け置き度く、
備後津着せば又々參るべくして、其の身一人立出づる。

其の年十月二十二日、松は登波身元の弟勇助へ相應の婦下關に之れある由にて、瀧部

村部兵衛方へ相談の爲め携り馳上たる留等へ、廿八日晝時、因幡浪人と唱ふる田中文
後と云ふ言、幸吉方へ来りて、今日椿木龍之進へ相談いたし候處、龍之進内方然、當
處に留留に付き河朝新別名村の内人丸對大願寺迄連れ越してよと、龍之進より頼まれ
候と申す故、松氣連日龍部村へ往きたる由を答ふ。被是應答の間に八ツ時過ぎ之迄も
来り、今晚大願寺へ一泊相頼み候處、彼の寺故障の由に付き、吾れ等も茲へ参り候。
損て幸吉殿告れ等け細、上方参りに相決し候。此の度は娘をも連れ越し申し候との事申
すに付き、幸吉答ふるは、娘子細達れにては定めて御歸國は未定に付き、妹松は置か
りの御心成にて之れあるべく、御身内内方然凌方難儀の時松井びに娘子迄御預け成され、
此の節少々御王面軍しく候へば、松を置去りにして遠路御旅行の御心成、言諸道断の
事人情と、幸吉高懸にせり詰めし處、龍之進辭をかはし、文後へ向ひ云ふは、途中に
ても御嗽申し候様、上方へ参り候に女房同道にては志願も相調はざるに付き、暇をも
出、彼へは義理ある妻の儀に付き、銀三百目位は付け遣し申すべく下意と相頼すを、
幸吉聞取り、娘子を付け離縁致すべしなどは、下賤の私共とても迷然千萬、御心成

境を曉悟、左鄰の儀からは縁切暇取らせ申すべく、兎も角も松参り居り候事に付き、瀧部村の方へ御兩人御同道申すべくに付き、今夜は私方へ御泊り成されよとて、翌朝龍之進がひに頼す代・文後・幸吉四人連にて瀧部村へと立出づ。文後・幸吉は五里の路をたゞ時分に莚兵衛方へ往き着き、前段の趣、松井びに莚兵衛へも囁し合ひ、暇をとり暇申すべくに荒天決着の所へ、龍之進は最前一同立出で、途中栗野川に渡堤にて、此の處に少々所用あるゆゑ文後・幸吉には先きへ参られよとて、娘を連れて渡寄の岡屋へ立寄り、折柄一二夜泊り居たる、肥前國河原村出生無宿非人小市と云ふ者へ娘を預け置き、夜五ツ時比参り、莚兵衛井びに松へも相對にて彼是囁し合ふ内、龍之進は海濱の所、幸吉・松共に追詰め應答事六かしけれども、縮る處離縁に雙方折合付き、手切の願として銀三百目龍之進より松へ相渡すべきに治定す。然れども、三日の内百七十目は差違て下關にて松へ相渡し置きたり。三十日又今夜端に相渡し、磯の目には文後仲人にて、来る正月を限り幸吉へ送り申すべしなど龍之進は云へども、幸吉・松共に最前より金銀に拘る譯は毛頭之れなく、却つて心恥づかしき儀などと罵

りたる程の事なれば、何も彼も龍之進が申す儘にて離別書申し受け、事相濟み、龍之進も酒一升買得し、皆々呑み合ひ熱和に折合ひたり。最早子邊ぎ頃にも相成り、龍之進は娘千代事も近所へ預け置きたるゆゑ、囃ぞ待兼ね居るべくに付き、是れより直様出立致すべしとて支度致し掛けたれども、闇夜の上雨頻りに降り、雨具の用意も之れなき由に付き、甚兵衛、今夜は御泊り候へと挨拶述べければ、暫時休息申すべくと、奥の三疊へ文後一同に入り臥せ付きたり。

此の夜甚兵衛方には伴勇助、滞留の松三人の外、五ツ時頃より美禰郡嘉萬村百姓碇右衛門と申す者止宿し居たり。尤も是れは蟻の脇に臥せ居り、龍之進・文後へは一向出合ひ申さざりし。かくて杜の刻過ぎに龍之進申すには、最早出足致すべく候間、茶をかしてよと申すに付き、甚兵衛・勇助起出で茶などわかし、飯喰はせし時、文後も同じく起出で暇乞ひ申しけれども、雨猶ほ以て降り止み申さず、龍之進は障子を明け度窓寮を見合はせける内、内輪の者も少しまどろみ、文後は最前の三疊へ入り臥せ居り、是れも少々寐むりたる處に、燈火消えたりとて松を呼び起し、付木を取りてよと云ふ。

松は、付本は傳坂の下にありと寝ながら答ふるに付き、甚兵衛、勝手不案内の人分るまじ、^{ツラ}起ききて火を付けよと云へども、松は、讒諂の人へ其の儀に及ぼすとて起きず、甚兵衛、^{ツラ}起ききて、我れ等付けて進ずべしとて起出で、火を付け置き、外へ薪取りに出る。其の時にて脱之進は松及び幸吉・勇助三人悉く切害す。甚兵衛外より歸り来る處を戸口に二切倒せしなり。甚兵衛時に大なる煙管を所持せしが、夫れへ餘程燒付け居たり。益々其の煙管にて火通火は留めたることと見えたり。文後は臥しながら右の様子を聞き、其の儘立出でんとすれど、帯も解き穿たれば、帯むすぶ／＼出かけ、戸口閉まるゝ一瞥を見れば、^{ツラ}前方にて戸口に甚兵衛を切伏せ、庭の垣際に龍之進救身を提げずみ居るゆゑ、是れは何事ぞと聲を掛けければ、龍之進大音にて答申すと共に討捨つるを申し申すに付き、最れ／＼にて座敷の隅に隠れ居り、夜明けて出で見れば幸吉・松・勇助三人も同じく座上に切伏され居たり。嘉萬の利右衛門も庭の隅に居み居りしを見付け、相謀り隣家迄き一軒家なれば、文後は外に出で、人殺人殺と聲を立て、利

兵衛は自ら絶えざるに付き、助け屢敷に引上げたれども間もなく絶命に及べり。勇助は即死なり。松は十一月三日の夜迄存命なり。時に甚兵衛五十四歳、勇助十九歳、松二十九歳なり。幸吉は正氣も體かなる様子に付き、頭を手拭にて巻き介抱致しなどする内、地下人過々集りしなり。

龍之進・文後知音に相成りたる様子は、當春前大津三隅村にて同道一宿せしより以來、浪人結合、入道に相成りしが、此の度も龍之進が手先に遣はれたることとみゆ。此の一ツの始末を観ても、文後が快隱園より、龍之進が懷鼻揮つべき者なること知れたる。

幸吉は急波は川尻にて獨り夫の留守を護り居たるが、朔日の日暮に走り告ぐる者あり、廿九日の夜、灘部にて大變あり、委しき事は小磯の所に飛脚來れり、直に對面して問ふべしと云ふ。時に急波を移さんと杓子を持ちて庭に立ち居けるが、是れを聞くより急走りにて走り問ふに、飛脚云ふ、四人明害に逢ひたるが、内年長の人と年少の人は即死なりとぞ。聞くより父甚兵衛・弟勇助の事たること間違ひもなければ、莊屋

土田市郎兵衛方へ馳せ往き、具今より瀧部へ馳け附くる段を白す。莊屋云ふ、申々獨り行くことは不安心なり、五七人も能なる者を伴ひ行かねば危しとて、速て其行を止る。又小堀の所へ往き、飛騨へ同道を頼む。飛騨は夜明けぬば行かねと云ふに付き、終飛騨をも待せず立ちながらにて待つ。心の餘りにせかれ飛騨を強ひて起し、颯七ツ陣出立、二日の朝五ツ時瀧部へ達す。案に違はず父甚兵衛・弟勇助並びに死失せ、幸吉忠實、夫事言は太唐にて臥し居たれば、是れ迄は變を聞きながらも實とも得思はざりしか、此の有様を見るより驚くとも終るとも無念と云はん方なし。十一月朔日、御徳目江前原忠吉衛門・村田清右衛門出張、同月十四日迄に御究一件相済みしなり。登渡は如何とも詰すべければ、出張の御役人へ、偏に御慈悲を以て敵を御討たせ遣され御様はと馳驅申上げたれば、只今左様の儀は相成らざるに付き、此の後継の住所相尋ね申出で候はば、其の節の御勘方あるべくとの事なり。かくて上にも檢勘目明等を以て種々説き進め方御尋ねさせられければ、遂に相知れざりしたり。

然るに御勘の儀雙方納得の上、酒をも結合ひたる程の儀、遺恨あるまじき様なるに、多

人敷醫害に及ぶこといかにやと、御實の節再纏糺されけれども、幸吉・登波並びに田中玄映などの申上げ暫同様にて、龍之進は元來易敷を考へ、棒甚の外指南し、威權がきとき男たるを、離縁一件に付き、悪様に申し成せしと、夜明け前付木を尋ねたる時、松事不精の返答せしとの外、殊て役害に及ぶべき心當り之れなくと一同云ひたるよしあり。然れども再び其の實を考察するに、龍之進別に密通の女ありて松を厭ふ心になり、自ら夫妻の仲和睦せず。従つて幸吉とも不快になり、加之、松事露兵衛方へ往き要なるに付き、妾りに嫉妬の念を生じたることかと思はる。要するに甚の忤亂狂妄復た人理を以て論ずるに足らず。

登波は心は矢竹に思へども、夫の病氣に頓着して目を送りける内、幸吉病所も親午年早春頃には除根快氣致し、二月十一日には召出され、右の始末御究をも仰付けられたる様事なれども、何分數ヶ所の瘡より大いに香拔致し、且つ身體も衰弱に及び、以前の如く働きも相成らず、一兩年は所詮病床籌ちにて田畠へも得出ず、後々には瀕瀕病に變じ、折々發病にて難儀致しければ、登波至極怒ろに看病を加へ、寢食の事何か

と朝露を付けけれども平癒せず。彼是の内三四年も相續き、登波心底には父弟の横死を憶ひ、晝夜を待たず、復讐の念勃々と起り、寢食をも忘れ憤發せしが、此の儘に月日経たりては、雪の蹤跡も絶え果て、年頃の志願を數く相成り申すべきやと、夫れのみ苦心眠り在り、或る日奉吉の病の間を伺ひ、密々心事語らひければ、奉吉申すに、其の方に父弟なれば、我れ數年夫婦と相契り居り候ことに付き、我れにも矢張父弟同様の事、且つ妹松を切殺し候仇なれば、我れも共々敵打の心を助け度く存すれども、病苦に頼着し是れ迄空しく打過ぎたるが、其の方所存承る上は月日を移さず速かに出て立つべし、我れも全快せば後より尋ね行き申すべしと云へば、登波世にも嬉しむに夫に厚く禮を述べ、志を勵まし、且つ夫をば氣を付け呉れよと懇意の間へ頼み置き、被れ等式、袂装と申す程の事も心計りにて、文政八年乙酉三月、懇ろに親として家を出て立ちたり。是れ瀧部の大變より五年目の事にて、此の時奉吉は三十九歳、登波は二十七歳、登波、奉吉に嫁してより九年目の事と聞ゆ。豈に圖らんや、是れこそ今生の別れとはなれり。

かくて登波は川尻を立出で、萩を通り、奥高武郡より石見へ移り、津和野城下へ越え、
鹿角人丸社へ参詣、濱田へ通り、銀山・大森を經、藝州筋の事も聞合はせけれども、
龍之進何れ廣嶋達には足附かず、兎角四人も切害に及びたる大惡ものなれば、近國に
留る間難くと思ひ、出雲へ越え、大社・日御崎等へ参詣し、松江邊彼是詮議致し、伯
耆の大山、因幡の鳥取の城下へ通り、但馬・丹後・若狹に出でて、此の邊にて酉年は
越年せしとぞ。

同九戌年に至り、近江・美濃・伊勢・紀伊へ廻り、高野山へも立寄り、女人禁制の場
所迄も参り、和泉・河内より大和に至り越年す。登波つら／＼相考ふるには、京都・
大坂は御國人毎々往來立寄りの地なれば、惡者共決して足を止む間敷くと思ひ、大和
より伊賀を經、又近江へ立戻り、大津驛より三井寺・比叡山其の外打廻り、京都中の
神社傳聞數々拜禮して、丹波の龜山・攝津勝尾寺・播磨書寫山より大坂へ出で、淀船
にて伏見に上る。

夫れより賤橋・最内近國には居らず、奥羽・關東へども立去りたるらんと思ひ定め、

筑波より水戸道を通り、信濃に入り飯田の城下に過り、上諏訪・下諏訪・和田峠を過り、南支那へ参詣、越後へ過り、今町を過り新潟に至り、陸奥に入り、会津の城下を過り、仙臺に出で、南支那へ下り南部の恐山にも参り、恐山は陸奥の東北の麓にて内地はここに盡き、海を隔てて北海道前に連れる所なり。

越て夫より津輕に向ひ出羽を過り、又陸奥にかかり、岩城を過り、常陸に出で、筑波山に登り、下野の日常山へも参詣し、遂に江戸に出づ。出入三年滯留して、其の内所方々をも相尋ねたり。

其れより水戸道中常陸茨波郡代官にも滯留し、又同郡若柴宿南雄市右衛門と云ふ者にも留せしが、是の時年三十三にて、平國病氣討き、百日餘り打臥し居たるに、亭主其の外景を以て怪致し哭ければ、快氣後、上臈・安房等打廻り、又若柴へ戻り、先其の病事として滯留、其家の手傳致し、一兩年も罷り居たり。

是に留居立出で、江戸より相模を通り、伊豆の最南の出崎、手石彌陀・イロウ權現迄も拜禮し、東海道筋へ出で、又遠江の秋葉・參河の鳳來寺等へ立寄り、宮の渡を打渡

りて奈良へ通り、紀伊國加田へ出で、十三里の渡りを互り、阿波の撫養へ上り、土佐に移り、伊豫を通り、讃岐より備前田ノ口へ上り、處々尋ねけれども、終に蹤跡も知れざれば、又常陸の若柴宿を指し歸りける。

向に市右衛門方にて病氣の時、最早快氣覺えなしと覺悟致せし故、亭主へ委細の次第物語し置きたるが平思議に快氣せしたり。茲に市右衛門が二男龜松と云ふ者は、登浪よりは十五歳許り年若にて、義氣過しく天晴頼母しき男子にて、折柄心願之れあり、讃岐の金異羅へ参詣仕り度しとの事に付き、渡りに舟を得たる心地致し、密々志を通じ、發て復讐の大望の事、尚ほ又打明け相談せし處に、龜松、夫れは助太刀致すべきよし承諾し、父市右衛門へ内々他人を以て此の趣申解き貰ひければ、市右衛門申す様は、素生も知れぬ女を運立ち出づること不納得にはあれど、親兄弟の勘當を受くるとも助太刀致し、大望を遂げさすべくとの心底ならば、其の方大志願成就の上は一人にて歸國し、許言申すべしとの事なれば、其の分に任すべしとの事に付き、龜松は面觀の許を受けたるも同様と喜び、登波運立ち密かに宿所を立出てたり。

夫れより日差山・中禪寺・善光寺等へ參詣、飛彈・加賀・能登・越前の國々探し索め、
京都へ参り、又紀伊より四國へ渡り、讃岐の金見羅へ參詣し、安藝の廣嶋へ沿岸して、
初めて龍龍之産が所森高田郡秋町村にあるよし聞出し、其の邊へ度々罷り越しければ、
も、何分有所相分らざる内、同郡吉田に、龍之進老母之れある由聞出し、尋ね行き申
すは、われら天結關東邊の者に候所、此の邊に劍術指南の浪人名をも失念仕り候、其
の老母とやらの所縁之れあり、折節此の邊へも参られ候由に承り申し候。御聞及びど
もは之れなきやと、彼方此方聞き錯ふ。吉田より半道程下にて畠を打つ男に、何如に
もよく龍之進に似たる者あり。登渡は是れならんと思ひ、龜松と内談し、若し敵龍
之進に似候はば、懐劍にて切殺し申すべき心底に候へども、流石の龍之進、若し返り
討に逢ふ候はば、助太刀御討取り下されかしと申しければ、心易く思ひ候様申すに付
き、立寄り、少々御問ひ申し度き事の御座候と申せば、頭の手拭をぬぎ何事に候やと
申すと聞か見れば、全く龍之進にては之れなきに付き、私共は關東の者にて物語に此
の邊通るばかり候處、私近所の男に此の邊にて劍術御指南の御方うらまさの御門人に先年相成

り歸り候て、御厚恩に預り候者、御目に掛かり御一顧申し呉れ候様にと申し候。數日の間に御姓名は忘れたり、御心當りどもは之れなきやと尋ねければ、彼の者心當りの人相變りけりども、年輪四十歳位と申し、合はざるに付き、私共頼まれ候御方は五十位の御年輪と承り申し候。私共は無筆にて存ぜず、噂に承り候へば、字學は違者にて候へども、御匠取り候て違者なる者とは相見え申さざる様風聞に御座候と云へば、夫れならば龍之進と申す者にては之れなきやと云ふにぞ、是れこそ敵龍之進の事と立立つ如く思へども、龍と御名は聞き候へども覺え申さずと云へば、各様方は龍之進仲間御方は候やと云ふに付き、否々、龍之進と申すは如何なる人か知り申さず候へども、私共は關東邊の者にて小百姓に御座候と云へば、此の邊は××村にて龍之進も仲間申に候、御百姓に美はば此の邊は御家は相成らず、是れより二里程御下り成され候へば、當の所に龍之進縁兄共居り候に付き、其の邊にて御尋ね談され候へば、私共相分り申すべしと云ふに付き、私共は傳言頼まれ候のみにて候へば、強ひて相對には及び申さず、御相別とされ候節、此の段御明下され候へかりと頼み立去れば、當の形色を怪

とみかりしにや、跡にて、龍之進が着したる男に頼之れある由、それにてはたきやと
 細言につぶやきたるよし、是れにて年々石見浪人とのみ思ひ居たる枯木蘭之進、實は
 安藝國領の××なる事は始めて知れたり。

菅波はさきかへり、二人河筋に添ひ下れば小村あり、是れ三次より一里許り上なり。
 此處も備後三次郡の内にて、安藝郡領とぞ聞ゆ。其の所の百姓屋に一宿し、龍之進事
 儀^{なり}に問ひ候へ、夫れは九州彦山^{ひこやま}に娘有り付き居り候に付き、其の邊へども参り居
 り候や、近年は此の邊へは歸り申さざる所、一昨年比より歸り居り、又々菅波の頃よ
 り興行衆と内忌申さず、重角彦山へども参りたるにて之があるべしと断りける。跡に
 三月上巳の事ありしが、處の習にて××ども物賣ひに來りつるに、隼男兩人あり。別
 ちあれが、龍之進と見にて彦山、甫の者物語りたれど、聽へかはして強ひての答も
 せず。

明朝市立出で近所に二宿敷し、夜中夜中龍之進が宅へ参り立聞きするに、内屋をざる
 に相違なければ、龍之進の妻、彦山に居るべしと決し、嬉しき云ふばかりなく、天地

朝明を拜し、龜嶽も年來の約束通り馬太刀當すべしとて、一先づ御國へ立歸り、朝明の上にて計らひすべしとて、石見に懸り大森・銀山を通り、御城下萩松本へ歸り、濱田・吉田・興八と云ふ者へ相對せし、有積年の志願、所々方々辛勞して遂に敵の在所探し付けたることを話し、何分敵討たせ成され候様に願出で呉れ度く頼みしが、一應所へ歸り、先大津目明に取次がせ願出で候様にと申すに付き、直標角山村へ歸着せしは、天保七年丙申四月の事なり。

卿、登波が吉田邊を舞臺せしは、由縁あることにて、初め龍之進が旗千代登波方に預り居る時、何心なく、汝が廻違は國元にては何をなさるぞと問へば、馬音を作らるると云ふに付き、馬音を作りて何にするぞと問ふに、吉田へ持ち出て賣るなりと答へしことの耳底に残り居たれば、敵味ねに出づるより、何んでも吉田と云ふ所の近傍が、敵の在所に相違はなしと、何國とも知らず、心には懸け居たるに、四國にて風と雲藝に吉田と云ふ所のありと承り、是れたらんと思ひ付きて、往き索めたるに、果して是なれりとぞ。

但て龍之瀧が焼産山に有り侍を居ると云ふは、即ち千代がことにて、十六ヶ年以前大變の時、龍之瀧が東野口の無道^{むどう}罪人小市に預け置きし故、其の地下^{かみ}よりも小市より其の次第届け出でしが、冤明の上、捨子の政計らひに仰付けらる。其の頃産山由伏梅本坊^{うしふし}法用にて龍の地へ参り、連れ歸り罪女とし、後名を重伊と改め、同山置藏坊が妻と成り居るとなん。

参詣の山に歸り、内の様子を探ね問ふに、十二年前家を出づる後も、夫幸吉病氣始終未だならざれども能し掛へ、其の内跡を追ひ臥立ちたるよしにて、行方不明れず。登流は計約十二年の道行、街道者陸人龜松へ助太刀相頼みたる後、夫幸吉へ一々話すべく頼みあはれたるに、案の外なることにて、感傷の餘り當然に及びけれども、無算^{むさん}致さば取遣^{とりづ}差支^{さし}又試ねへて云ふべきや心元なく、片時も親が世にすべからずとて、龜松に命められ、又伯父衛兵衛に密談しければ、茂兵衛も人命不定^{じんめいふじやう}に付き、最居所相分り候へば、片時も聞くべきに非ずと云ふに付き、願出るにも及ばず、龜松同道にて直様打立も龜松村に至り、甚兵衛其の外の家を致し、佐野等寫し貰ひ、産山へと急ぎ打立ち

下關に往きしに、(二)松五郎名代として茂兵衛事、後より違ひかけ、是非とも一應立歸り候へと、御代官所より御内移りありたる由にて、詮方なく兩人共に角山へ歸着す。是れ某日明興八より内々政府へ登波・龜松の事届け出でたるに依つて、政府より御代官所へ指揮ありたることと聞ゆ。

かくて政府には蒙議置きにて、或は賊を捕へ來り、萩扇の意と云ふ所に矢來を結び、明白に復讐さすべしと云へども、復讐は遂に善事に非ずとて、龜松・登波が事に付き、五月廿八日政府にて決議し、御代官所へ沙汰せらるる所左の如し。

先大津瀬部村に居り候官壽娘登波と申す者是れ父を殺害し、係して云ふ事、其の親なり。兄弟弟は、前山崎村に居り、同村に於て、浪人枯木龍之庵殺害に及び立退き候。登波親兄弟の親に付き、何卒難之遙在處尋ね出し處き存念之れあり候て、十六ヶ年以前より所々方々相尋ね候内、是れ十六ヶ年と云ふは、龍之庵殺害の事より數ふ。龍之庵殺害蘇州者と聞知し候に付き、御討たせ下され候様にと罷り歸り相願ひ候。然る處瀬部・川尻其の外にても親類知誼の者之れなく、當處引受け仕り候者之れなきに付き、先づ當分の備は御代

官所任せ仰付けらる。龜松儀は平義密通者に付き、入割申聞かて生國罷り歸り候様、是れ亦御代官所より附けさせ申すべし。且つ又龍之進事は九州に之れあり、過半其の方に滞留仕り、縣州に老母も之れあり候儀に付き、折々往來致し候様に登波申出で候。大目罪の番に付き、密々聞糺しの上、召捕り候様仰付けられ候。

古の總御代官所へ下りければ、六月廿日、大庄屋久保平右衛門、龜松・登波兩人を私宅へ呼出し、金細御授けの旨趣を以て段々申聞かせし所、龜松は數百里の遠路一方ならぬ艱苦を蒙り、事に寄つては一命をも打捨つべくと踏みはまりたる任候の氣節を毫末も減せられず、却つて平義密通の者などと罵辱せらるる、嗟かし無念にやありけん、此の沙汰を調問かせければ、慍ろ／＼と落涙致し、即坐に畏り奉り候段申陳べ、登波事は格別違背の中今はなけれども、有無の返答仕らざる故、兩人へ今一夜は熱慮せよとて河原へ留め置き、明朝又々呼寄せ、再應落着筋を尋ねければ、兩人とも全く納得せしに依つて、龜松へ賄用金として二兩相渡しければ、龜松より一札を差出すこと左の如し。

申上候事

私儀常州眞波郡若柴村百姓にて御座候處、御當國出生登波と申す女、去る卯春、風と常州邊通の掛かり病氣差發り、滞留仕り候内に、大望之れある身柄に候へども、女の一人儀にて覺束なく、何卒同道仕り罷り出で力を添ひ呉れ候様にと申す事に御座候故、餘儀なく召連れ順々罷り下り、先達て御當地迄參着仕り候處、登波儀は御當地の者故差置かるべく候へども、私身柄の儀は他國ものにて御國法も之れあり、長滞留仰付けられ難く候旨、段々御人割を以て仰聞かされ畏り奉り候。然る上は登波へも其の故申聞かして納付仕り候に付き、私は早速御當地罷り立ち歸國仕り候。

消息の通り仰聞かざる筋、急に御受け仕り候段申上げ候處、是れ迄女を召連れ候ての儀に付き、歸國の路用貯へ等も之れある間敷くとの御事にて、金子二兩頂戴仰付けられ甚だ恐れ入り難有き仕合せに存じ奉り候。尚ほ又登波存念筋に於ては、内々様子承り居り候儀も御座候へども、至極隱密事に御座候へば道中は申上ぐるに及ばず、歸國仕り候上にては他言仕る間敷く候。旁々以て念の爲め一札印形仕り差上げ

従事早に歸、以上。

申六日

かくて、龜谷は六月に方立歸り、分置に常分松五郎方へ指置を、物持樂のに取付付け
置し、先より關守の世話に相成り、其の要所山村に室を據へ居たるをか幸。

九州産山へは眞目明興八・生々津目明興五郎を、直轄目談助へ義添へられ、職密に探
親相成りけるに、最重伴、義の山内實藏坊へ歸せしより、其の南邊出来、龍之郷は佐
竹職親と改稱し、新々野山も改す廻嶺と相違なき故、捕方の儀に付き、松五郎重助同
今並置、青柳目明興則吉・久市、添田目明興則吉・産山目明興助内人へ相續み、下關
目明興太郎より、書狀を以て相續み請し罷きける。（此の頃、松五郎は、
（此の頃、松五郎は、）

要領は親松道成され、無の手を委ひかる心地にて、頗る遠方を欠ひければ、第一は
關上より關下に入れられ下さるること、次に松五郎へも精々相續み取立てること故、
關下の要所（しほ）に止りたれども、何處にも胸中懸ね無く、毎々松五郎へ、何如に／＼
とせりのめければ、松五郎は唯だ膝を待て膝を待てとのみ申すに付き、益々悲しみ憤

れば、松五郎も罷免よくたためしにぞ、時を待ち居りけるに、白駒の隙の留らずして、
四五年も打過ぎしが、天保十二年三月十日、敵枯木龍之進事當時佐竹織部儀、彦山
龍に於て搦方相成り居り候間、彦山の好助・添圓の利害より、下關の彌五郎迄申來る。
夫れより元大津もとおほいつの松五郎へ通達す。松五郎出裁致し、其の趣注進す。好助・利害より
彌五郎への書左の通り。

機嫌を以て御意を得候。暖和の禰に御座候所彌、御堅固に御座成さるべく珍重に存
に寄り候。去る冬竹部目明より御頼み（竹部は松五郎の舊姓にして其書は小所目明に在り候間なるべし、松五郎より頼み書きたるは天保七年の事なり、此にみよと
るは松五郎の御名を誤りし也、傳に云）、萩西領内科人佐竹織部と申す者、彦山へ昨九日一宿仕
り、今朝夜込に出立ち候趣承り候間、早速手附の番共召連れ同山麓村にて今八ツ時
召揃り候間、此の段飛脚を以て御意を得候。尤も同人荷物寅前小石原より宿繼やどつぎを以
て添圓等に頼込に相成り居り申し候間、早速同宿御役人衆中へ御届け申出で置き候。
此の旨貴所様より先方へ早々御通達下さるべく候。佐竹織部身柄拙者共頼り置き申
し候。大切なる身柄に付き、此の状届き次第に貴所様には當宿へ御出張下さるべく

之姓あり、翌十日又出立候儀知らず申來り、兎角織部娘千代當降申付儀、寶藏坊妻にて、七歳に相成る娘も之れあり候處、彼の兎伊より私共兼て心掛け候段を相移り候やにて、急に出立仕り、右故俄かに方々手配り仕り、彦山領一の宮谷にて私乎を新年道邊に相成り、無節に膝を以て足を横なぐり、頂をも撫ぎ臥せ、残る者ども贓物大小を故取り、十日の内、狐懸付候て、二十餘年以前枯木龍之進と名乗り、萩御領内にて宮谷の岩屋子國人討殺し候儀之れあるやと相尋ね候處、其の儀相違も之れなく、尤も三人は即死、一人は全快仕たるやに聞及び候由相答へ、且つ又藝州の××と申す様に相聞き候處いかやと申掛け候所、全く左様の者にては之れなく、石州郡賀郡御治村出生にて、素性正敷ものに相違之れなき段申す事に付き、遂て相糺すに及び申さず、人を殺し候儀相違之れなく候へば、兼て萩御領大津郡小田の松五郎より城方の儀相續まれ候に付き、引渡しに及び申すべくと申渡し、手堅く縛り仕り私宅へ連歸り候。然るに岡山正賢坊事、去年冬比にても之れあるべくや、貧後邊より渚と申すもの下人に雇ひ渡歸り、年附二十四五歳位にも相見え、其の後増光坊の弟子に相成居り候處、

鐵子に相寄り候やと覺て差込め之れあり候處、家の如く鐵部相捕へ候即時逐電仕り、
 今の行跡相細れ申すべし。其の由をも相成れ見候處、全く作にては之れなく、少上の
 由縁も之れなしと申す事に付き、右清は實と見遣しに仕り候處申間か々候處、御心入
 の計帳有りと檢察申し置る候。猶ほ鐵部申す事には、實部申由大納言殿内盡し見へ、
 佐竹清よりの書狀空通、金子圓兩在中と之れある分は、御慈悲を以て御取捨下され候
 様、且つ又武藏國龜芝去莊屋内田市太郎と申すもの、石見國神主村大寶坊へ借銀手遣
 ひに付いて、白妙贈六拾斤・菓子料金千疋・證文並びに書通等、小倉にて久留米御用
 込大里屋善右衛門へ御頼み、市太郎へ送り返し呉れ候様、尙ほ白木綿甚の外銀曳伊へ
 通はし置く、彼の着るいづれ御山内には居られざるやに相考へられ候に付き、此の以
 前御ね行き候掛方を便り罷り越し候はば、銀も預り之れあり候に付き、其の由御申含
 め下され候様、尤も木綿三反の内一反は私へ遣はし度く申し候へども相斷り候。且つ
 長門國へ引かれ候ては、とても助命は相成らず候に付き、何とぞ所持の觀音經をば御
 渡し下され候様相頼み候に付き請合ひ、經をば壹冊相渡し、其の餘の儀は萩方と申合

結すべしと申間かき置き候。翌十一日當添田番目明利吉方迄送り出し候處、當番に於て御藏所荷物取調國小石原宿より人馬數相添へ續込み候所、京都申由殿御内談石見より、要用に依りて既前長崎迄差越すと之れあり候處、最後の付出し候後國久留米より起りて、五、小事に相見え候に付き、細立如何仕るべきやの段小倉表へ、御出に相成り候り、且つ私より右荷物御留置候處に候様にと御役人衆申へ御届申出で置き候て、御、右織部儀は當宿相滞り、御鑑繰まり候様ぎにして多人數番人等付け置き候所、十四日夜八ツ降比番人の番計あす此を催し物普仕り候に驚き、磯瀬立出で候を見談し御事候り、孰れも預掛け罷り出て候處見失ひ、漸く升田村にて馳付け候處、同村宿を獄に渡込み候に付き、岡山縣寺上申元寺村へ相頼み前後より容察仕り候處、十五日朝申當寺村此處と申す所まで行き道程、織部も道場之れなしと存じ踏め候や、道中にて自害の體に相見え候に付き、早速馳付け御持へ候へども、最早抱了を以て腹壓に六寸計り切破り、左の手にて腸を掴み出し候へども、未だ毒切れ候様にも相見えざるに付き、早速其處村御留申訪玄龜・庄村外療醫宮城・藤崎、同入弟子兩人、以上四人にて見合は

門坊は先達て病死、是の時は二代目に相當るたり。兎伊當年二十八歳に相成り、娘も之れありしが、父織部召捕らるると承り、娘を差殺し自害したるやに風聞す、又は遁れ去りたるとも云ふ。是れ彼の地其の時の傳説たりと云ふ。

扱て又三郎付立を出す。即ち左の如し。織部所持の品々なり。

所持の品覺

一、藏包二ツ 但し符儘 ふりごころ

一、風呂敷包三ツ 但し符儘

一、薰二枚

一、中山殿御内森石見人馬帳一冊

一、京都中山大納言様御内森石見様行き書狀一通 但し金子国雨在中

一、符箱一ツ

一、證文一本 但し内田市太郎

一、菓子料一包 但し金子入

一、百州之野，行樂賦一通。

一、小財布一ツ 但し金子入

一、大小一腰 但し脇差鞘損じあり

一、筆竹袋入

右の通りに御座候。以上。

三月

添田町庄屋 又三郎

女は歸り、荷立を以て荷物を箱に詰まり、又三郎・好助一同立會の上、荷物符放ち取調
べたる所、左の如し。

41.

一、次小十部

— 10 —

一
人
一
一

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

一、文箱一ツ

一、策竹二通り袋入

一、黒木一包

一、白木綿三反

一、袴一具

一、財布一ツ

一、金子銀倉連、廿三歩二朱 但し御刃隠一封とある分とも

一、寶篋中山大箱官殿内裏石見一住竹清よりの書牋一通 但し金子四兩在中と之れ

あり候へども下客に付き、其旨致し候所、金具の様なる物三ツ入れ之れあり

一、證文一本 但し筑後國久留米領三潞郡福光大庄屋内田南太郎より石州那賀郡神

主村大寶坊へ當る借用銀證文なり

一、菓子封一封 但し金千疋同人より大寶坊へ當る

一、書牋一通 但し同人より大寶坊へ當る

一、白砂糖六十斤

一、大小一箱

一、銀兩箱大小八ツ

一、目録一ツ 袋入

一、茶六袋

一、書六枚

一、絲粉其の終一袋

一、古具足一風呂敷

一、腰巾土袋一ツ

一、寶船の神官古圖一摺り

以上

爲

天保十一庚子三月十五日立

上略 人馬發賣候

佐竹織部

右の書々般要用に依り肥前長崎迄罷り越し候間、宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

三月

申由殿御内

森石見

本國より宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

往來形之事

一、石州御代官岩田鉄三郎支配下

佐竹織部

右の書々般要用に依り肥前長崎迄罷り越し候間、宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

本國より宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

右の書々般要用に依り肥前長崎迄罷り越し候間、宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

右の書々般要用に依り肥前長崎迄罷り越し候間、宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

右の書々般要用に依り肥前長崎迄罷り越し候間、宿々川渡人馬止宿等差滞り之れなき様取計らひ給ふべく候なり

同國七

同國七

念の爲め依つて一札件の如し。

紀州高野山正智院末石州銀山御料那賀郡羽泊本郷

天保十一子二

眞言宗圓光寺

關前并びに村々御役衆中

以上

書

一、白砂糖六拾斤壹箱

一、菓子料金子千疋壹包

一、壽文一通

一、壽狀一通

吉備郡所持の品の内、白木綿三反娘曳袢へ遣はし呉れ候様、且つ筑後國福光大庄屋
内田市太郎と申す者石見國神主村大寶坊へ借用銀手遣ひに付いては、品々御當國小
倉にて大里屋番右衛門へ相頼み、市太郎へ送り返し呉れ候様、存命の内好助殿へ申

雖、書を終結に候へども、織部所寄の本編は今に於て兎伊へ遣はされ候様相成り難く、右一ツ書の藤々市太郎へ送り返しの儀は書通申渡し旁、正據も之れあるやに相考へられ候に付き、御引渡し申し候間御受取下さるべく候。以上。

天保十二年三月廿日

下關 彌五郎

森山 好助殿

小田 松五郎

添田 利吉殿

右の通り相調へ是場引き調へ好助へ相渡す。好助・利吉より請取を出す。廿日、茂助其の外一書、中元寺村に至り、庄屋彦左衛門及び又三郎・好助・幾平一同立會ひ、死體拾分の上敷衣を以て箱詰にして添田宿迄送り出す。疵所刃物等藏前の又三郎・好助の言に違ふことなし。表類は三階菱紋付形付單物一枚なり。地平一枚、帯一筋のみなり。廿一日朝に至り、織部は××たること専ら風聞ありて、彼の地役方の者人夫差出し書しとの事に行き、彌五郎・松五郎より好助・利吉へ左の一札を出して事済みたり。

其の文に云はく、

佐竹織部事々々と申す里間も之れある由に候へども、全く其筋に之れなく、石州那賀郡那賀村百姓に相違無慮なく候。依つて一札差出し置き申す所件の如し。

天保十二丑三月廿一日

右にて事相済み、同朝添田出立、深更に及び、赤馬國清船、二十四日、萩歸着せり。擬て松本職之重改名佐竹織部は、後三次の々々なることは、登波親しく其の地に至り見聞せし所正實なり。但し豊前にて、一時の僞辭より石見浪人と諸文書に見ゆれども、其の實は然らず。

かくて此之通死骸論に假埋仰付けられ、御注の通り、十二月六日驛育、瀧部村に衆仰付けらる。登波之れを承り、且つ喜び且つ怒り、瀧部村へ走り行きて、死首に向ひ、爾先事父弟切害、我事吉に深手を負はせ、爾へ幸吉妹松をも切殺し、立去り候浪人枯木院之進、十數年曾を假いと、五歳七道身を變し尋ね重めしに回り逢はず、空しく日を送り候處、此の世上種種悲の餘り此くの如く仰付けられ候、思ひ當り候

へと白旗^{しろはた}付^つけ、旗^{はた}を掲^かげ立ち向^むひし由^{よし}。

此の時御代官は張三左衛門至増、其の段政府へ届出で、且つ登波一生一人扶持立て下さるとの事なり。

初め直横目以下豊前へ向ふ時、登波頻りに従行し度きよしを願ひたれども、御作法之れあり、其の望願叶はずとの事にて踏み止りたるが、敵龍之進は彼の地にて自殺し、梟首せられしは飄^{ひょう}飄^{ひょう}の寓^うりたる様の者のみなれば、無念き云はん方なし。商榷^{しょうかく}と預め知りたるは、願なく私に往くべきものと、今に以て遺憾とすと、登波自ら云へり。

登波仇常陸國若柴宿龜松に大恩之れあるに因りて、敵の梟首を告げ知らすべくとて、明年四月、密かに舞子鶴藏と云ふ者九歳に相成るを連れて若柴へ参りしが、惜しいかな親市右衛門も龜松も先年相果てたる由にて、家内の者へ挨拶を述べ、十日程も滞留し、歸りに日光山・善光寺等へ參詣致し、其の年十月角山^{つがやま}へ歸着せり。

其の後十六年日、安政三年丙辰、孝子義人の詮議仰付けらるるに付き、十月御代官御出陣有徳門參越、様表并びに褒美の事取行はれしこと左の如し。

幸吉後家 登波

右文政四年辛巳十月廿九日枯木親之進と申す者、登波身元甚兵衛方一宿せしめ、父萬三郎弟勇助夫妻幸吉姉三人を切殺し幸吉に數ヶ所の疵を負はせ立去り、種々行方御尋ねさせ仰付けられ續處相知れず、夫幸吉も數ヶ處の疵より大いに衰弱に及び續續に歸じ、色々看驗せしめ候處、急に全快も心元なく、兄弟の仇漢に父を敵かざるの遺恨止む隙なく、此の餘強換せしめ候はば轉の蹤跡も失ひ、終には志を得果さぬに盡きり申すべくやと被是氣をもみ、夫幸吉に相談せしめ納得の上心を離さし身をやつし駕籠を立出で、山陰北越の國より江戸に出で、奥羽及び五畿内四國迄を穿鑿せしめ、十二ヶ年の間野臥山臥の艱難心苦を盡し候へども、得尋ね當り申さず御國へおへり掛かり、藝州にて粗ぼ罷之進在處開出し候に付き、萩へ罷り越し敵御討たせ下され候處にと申出で候處、彼れ等式にても御國民一統を洩れずと御座候て、天保十二年辛丑三月捕人九州産山へ差向けられ候處、龍之進密かに様子承り自殺に及び歸に付き、死骸を斬罪、首を瀬岡村に掛けらる御國法に處せられ候に付き、生に復

備せずといへども、偏に此の者の孝心御仁政の餘澤にあらはれ、且つは天地神明の冥助により宿志を果し候處、深く賞するに餘りあることに候。今般孝子義人の詮議仰付けられ候處、幸に登波存命にて比類なき者に付き、門戸に旌表仰付けられ候事。

安政三年丙辰十月

覽

幸吉後家 登波

一、幸一倭

右先年父甚兵衛弟勇助殺害に遭ひ、横死せしめ候後、憤を發し復讐の事を神佛に誓ひ、數年竊に身を養ひ終に上御威光を以て宿志を果し候處、寔に拔群の孝義感心の事に候。此の度右等の御詮議之れあり、門戸に旌表仰付けられ候に付き、時に於て褒美として之れを下され候事。

辰十月

此の年登波五十八歳にて存生に付き、勝間田氏勘場カシノへ呼出され、年來の憂患辛苦を觀

しく問はれ、前段の二事申渡されければ、登波は勿論在座の者一同感泣の袂を絞りしとかや。

此の詞集則田氏登波を詠める歌あり。

向津久むつくの繫つりをかね袖かひは乾かかぬ袖かひを獨ひとりりにぞ見る。向津久の繫をね袖は乾かぬ袖を獨りにぞ見る。向津久の繫をね袖は乾かぬ袖を獨りにぞ見る。

此の歌の詞集なり。吾月牛山が巻末食録に、此の歌の詞集なり。吾月牛山が巻末食録に、繪時景海此の事を聞きて、「只獨り乾かぬ袖のそれ故

に幾その人か猶ほぬらすらん」と詠めり。

夫事言は家を出て、後に行衛知れず。登波美濃國を去りたる跡へ、數日して尋ね往きたるよし。其の事は諸國經廻り、再び其の地に歸りたるとき、初めて聞きたれども、最早尋ねべき道なし。歸國の後、石見の津和野邊にて病死と告ぐる者あれども、是れ亦福かならざることを散、夫れのみにて打過ぎ居たるが、今茲安政四年丁巳九月、余が友兼工松浦松洞角山に往き、烈婦登波を親し、話次に、加禰の貞烈の婦として夫の死所を夫れなりにして置くことは何如にと語りければ、登波も言下に大いに感激し、早速装束を束ね、十五日の朝より家を出て、石見に往き所々探索せしが、二十六年前幸吉

と云ふ者津和野にて病死せしを聞き、往き尋ぬるに、夫れは紀伊人にて而も醫書一卷を所持せし由なれば、吾が夫には非ず、前に津和野にて幸吉は病死と傳へしも、多分是れならんと思ひ、他に尋みべき手がかりなく大いに力を失ひ、所々の官番へ若し知るる事もあらば、申送り呉れられよと頼み置き、空しく歸りしなり。此の行往來吾が家に立寄りて、因つて詳かに討賊の始末を聞き、其の口説を以て原稿を改竄すること無し。幸吉の死所知れざるは、幾重も遺憾なれども、松洞の一言の下に感激して直ちに石見に走るは、則ち感すべきのみ。

其の後戊午の年、津兩國中町地方孝人奇特人其の外褒美の詮議仰付けられしとき、登波と小郡等道の石、郡濃郡深浦の正、三人は孝義拔群にて老練の者もあれば、若しや此の諸半途中に意外の事ありてはとて、四月三日三人のみは引抜きて褒美ありしたり。時に登波は向後宮番の唱差除かれ、平民一統の戸籍相加へらるるとの事なり。抑、登波事平民に加へらるるは頗る大議にて、初め周布政之助兼東御代官たりし時、政府へ申出たれども、政府にて先例なければ、事姑く止めになりたり。已にして、政府よ

り、**郡方**へ、**義例**はなきかと問ひければ、**郡方**本紳佐藤寛作對へて曰く、「昔矣人傑を以て立大夫とす。是れ例を先例に預らん。天下孝義より重きはなし。登波義しと云へども、豈に松の比ならんや。松の功、豈に登波の孝義にしかんや。且つ官番かかる復讐せしことも又を例なし。非常の事なれば非常の賞案より當れり」と。政府一嘆して已む。但り**府船方**中村清太郎前出曰く、「孝義固より重し。然れども本部も各分を重んじ難きを別つ。此の議輕易にすべけんや。此の議を慎重するは、即ち孝義を重んずる所以なり」と。ここに於て、儒者近藤晋一郎方樹に命じて是れを讀せしむ。芳樹吉松を引きて例とし、此の議疑ふべからざる由を建白す。政府乃ち其の議を採り、且つ**登波**事件爲替の百姓にて、非吉も元來奥阿武郡の百姓なれば、一旦官番となると云へども、疑を放ちて良に違ふの誤なれば疑なしと決したるなり。嗚呼、是れ登波の榮のみならず、實に政府の美事を稱すべきなり。

附 註

石の事跡は諸家の詩文歌詠の寄贈も少なからず。就中先輩楊井謙藏の贈られた長篇

(一) 宿松
縣は五山の名
寺あり

の詩は五山雲詩話にも載す。又轉相傳くわんぱん小郡の代官たりし時、葬はれたる養生ようじやうの
處として、石の事跡を記したるものあり。又柴田しばた規矩きくその道話續々篇には、いと詳かに
此の事を説きたれば、世の人皆しる所なり。獨り正の孝は、石よりは優るに似たれ
ども、世の人未だ是れを傳へざれば、爰に戊午の歲喪稱の詞を直ちに附書し、人を
して其の大概を知らしむ。松洞畫史亦曾て深浦ふかうに往き、正の像を肖せ歸り、家に藏
す。蓋し不朽を謀るなり。喪稱の詞に云はく、

烏濃郡宰判末武下村庄屋堀吉郎右衛門春内深浦畔頭清木八郎右衛門組百姓

宇吉祖母 末左

右の者事當年九十六歳に罷り成り候處、兩親存生中孝養を盡し、父助八儀は八十四歳
にて相果て、母は數年限病相煩ひ終に盲人に相成り九十歳計りにて死去せしめ候處、
繼て賣賣寄に付き回品等も之れなく、預り作たど致し又は落葉を拾ひ、牛馬飼草を賣
代となし、女身にて艱難辛苦を厭はず種々相働き日夜孝養にのみ心力を盡し候處、近
邊の者も見慕ね少々宛の助勢致し候へども、落葉刈草を以て其の得意に報じ、前康養

予之計あり無慮責窮を見限り蒙出せしめ、其の後も聲子相勸め候へども、夫之れあり
候ては却つて高麗への心油難かに相成り候に付き、兩親死去後は尼になりとも罷り成
り後世之咎ひ相すべしと終に縁違仕へず、孝心の外更に他念なく稀なる孝行の者に付
き、直々御褒美遣はされ公達御付出（おだて）にも加り、宅前へ孝女滿佐と豫し候石達理相成り、
一生獨身に罷り居り只今の宇吉は妊の子にて是れ又祖母へ懇ろに仕へ、家内體敷く相
暮し、滿佐嫡孫の辛勞妻女の名譽を得候。奇特の行狀稀なる高麗歩（たかまろ）、委細概負殿聞
し召し届けられ、甚だ以て神妙の事に依つて、間近く身柄（みかた）一生真綿をも立下され候へ
ども、猶ほ又厚き御詮議を以て御褒美の爲め永く名字差免され候事。

討賊始末取徴文書

宇吉口書一通

登波口書一通

田中文後口書一通

登波申上一通

子十月登波申分一通

目頭松五郎申上一通

寺庄屋久保平右衛門書一通

寺紙記一卷 靜間衛介記

登波申分書取覽 同人

烈婦登波碑文附紙 同人

里問答書 同人

直様目茂助取廻一件一卷 茂助記

此の如地名細り書き者は國郡全國・赤木興地圖・長門繪圖・同附録・諸國道中繪

圖・永代聖明無盡藏條に書りて是れを決す。

列婦登波の碑

烈婦登波は登波、長門の國大津郡角山村の宮齋寺の妻たり。父を其兵衛と曰ひ、母を

勇健と目し、幸吉と號を同じうし、舊川原の瀬河に居り。富春の職は神劍を掃除し、幾く盜賊を糾捕すれども、良民の害する所とならず。而して三人は任侠自負し、劍客陣徒往々これに過る。幸吉に妹あり、枯木龍之進の妻となる。龍は偏後の××たり、自らは石見の漢人と稱し、妻を携へて諸國を往來し、盤劍を以て人に教ふ。文政辛巳十月廿九日の夜、枯木夫妻は幸吉と同じく萬兵衛の家に會す。龍は先妻の一女あり、甫めて八歳、時にこれを乞兒小市の所に匿す。龍は乃ち其の妻を幸吉に託して獨り上國に遊ばんと欲す、實は之れを去らんとするなり。其の妻と幸吉とは之れを知り、切に其の非義を直む。龍意色氣に懸し、坐客爲めに之れを慰め解く。而して龍は遂に無と斷を經ちて將に去らんとす。時に夜暗く雨甚だし、萬兵衛之れを留め留す。丑夜、龍起きて善く其長・勇助・幸吉及び夫妻を収りて去る。三人は即斃し、獨り幸吉のみ救えず。烈結變を聞き急遽馳ぎ援うて及ばず。首め復讐を以て請ふ。藩爲めに龍を捕せしも知る所なし。久しうして幸吉の創稍已えしも、轉じて他の症となり、尋に在ること五年、烈結の看護其きに到る。然れども烈結心常に大讐の未だ復せざるを

悼み、又夫の病輕く起つべからざるを料り、間に乘じたに語るに志を以てす。幸吉大いに悦びて曰く、「夫の賊は既に汝が父弟の讐たり、又我が妹の讐たり。我れ汝と久しく借借を繋る、汝が父弟は猶ほ我が父弟のごときなり。今我れ不幸にして病癘す、假令汝を助けて讐を復する能はずとも、寧んぞ汝が志を斷ぐるに忍びんや。汝速かに出てて賊を探せ。我れも病少しく平がば當に追うて汝を助くべけんのみ」と。烈結且つ泣き且つ拜し、行装して家を出づ。實に己酉三月なり。時に年二十七。

烈結既に家を出で、山陰より東上す、近江・美濃を過ぎ、伊勢より紀伊を回り、東畿諸國、搜索遺すなし。ここに於いて、賊復た近くに在らざるを測り、中山より東下し直ちに南部の懸山を極め、奥羽を擧り關東を搜し、北陸を経、東海を歷り、轉じて南海を廻り、反りて安藝を過ぐ、外に在ること蓋し十二年、辛苦具さに嘗め、然る後に賊の在る所を調査するを得たり。龍の女にて乞兒の所に匿せし者は、彦山の山伏が救護する所となり、既に長じて人に嫁し、龍の母は備後の三次に居り。故を以て龍時に或けその國を往來す。烈結既に具さに實を得、大いに悦びて國に歸り、事を以て官に

(一) 十二年

白し、復び復讐を以て請ふ。未だ許さず。烈婦家を出て後一年、幸吉も亦病を力めて出でて賊を探りしが、其の終る所を知るものなし。烈婦痛哭して志を棄ること益々堅く、益々赤山に如きて賊を撃たんと欲す。烈婦の東海を歴しとき、獨り常陸に留る。二十三年、援を求めて龜嶽を得たり。龜嶽は筑波郡若柴郡の境なり、國より壯健義を好む、烈婦の志を憐み、復讐を助くるを許す。ここに至り首として其の謀に賛成し、因つて縣に平關に至りしも、代官所の遺止する所となれり。藩乃ち追捕を赤山に遣し、賊巢を探問せしむ。天保辛丑三月、賊捕へられて自殺す。因つて護国村に梟首す。烈婦走りて首の下に就き、じ首を之に懸し、睨み且つ罵りて曰く、「汝豈に我れを証するや、吾れは藩兵衛の女、勇助の姉、而して幸吉の妻なり。汝吾が父と吾が弟とを殺し、吾が夫を傷け、又吾が夫の妹を殺す。吾れ爲めに讐を報いんと欲し、五歳七道、探問相済まず。而して一撃を汝が身に逞うする能はざりしは、是れ吾が憾みなり。然れども天道酬恩は遂に汝をここに致すを得たり。汝其れ其の罪を知れ。汝豈に我れを記するや」と。遂に本郡の代官張村幸城之れを證とし、建白して一日米を賜ひ其の身

10

終る。夫人曰。安政丙辰、壽命、孝義を告表す。代官豊岡郡新盛谷田郷を連白し
 て、其の門下に進出し、膝に奉一巻を賜す。明年、余君に代り來つて此の郡を坐す。
 讀むと、奉吉は身如きに如きと雖も、而も志は實に其の妻と同じければ、則ち夫妻
 けずしく來り其の富貴の國を免じて、良民に歸することを得しむべしと。藩議寮重、
 且可くを得たり。余君も因つて郡を遷りて烈婦を引見す。烈婦時に五十九歳、身體
 尙常に十二三歳似た裏へす、其れをして其の復讐始末を語らしむるに、感慨悲愴、聲
 淚俱に下る。余既に其の志を悲しめ、又其の事の久しくして或は泯滅せんを恐る。こ
 こに於て碑を建てて文を刻し、其の跡を紀し、其の烈を表し、之れに重ぬるに銘を
 以てす。銘に曰ふ。

有誤傳疑は成る。而るに青誓の奥に蘭女とは、海に故事なり。ことを以て蘭女と稱し、蘭碑の事と相合く停止す。然れども烈婦の事跡はここに表れて其の粗を

得たり。後に作る者あらば、將に取らる所あらん。丁巳七月既望、議す。

戊午の冬、金波轉に良民に齒す。而して公輒は則ち去りて他の軼となり、建碑の
事遂に復た議せずと云ふ。重ねて議す。己未五月。

解 題

『野山猿文庫』は野山猿の秋の野山猿在獄中の漢文稿で、安政元年（一八四九）年より安政二年中、即ち二十五歳の暮より二十七八歳に至る間の筆に成り、秋陰自の編するものである。但し「等約載する所の諸篇に題す」以下の二篇は、安政二年十二月十五日獄を免されて松本村に實成杉原の幽室に歸つてからの筆である。本全集に非脱し獄文に使用せる原本は細て舊全集と同じで、本文稿の原本は松市秋陰神社の御藏に在る。原本には末尾に京都の俳者山田柳東（一七九七—一八五七）の「野山猿文庫を讀む」と題したる評文の他に、伊勢津藩の儒者上井龍牙（一七九七—一八五七）の評文があるが、本全集編纂の原典としてこれ等他人の批評加筆は省略することにした。尚ほ目次中に別出とせるものは他の文庫の場合と同様であるが、各々本全集の他の個所に一咸書として收載されるものに對してあるので、これも亦省いた。その中で「幽囚録御金子重輔行狀」は原本にも目次にあるのみで本文にはない。本全集では第一巻に收載した。「清國威靈鎮記序」は第二巻に、「治心氣勝養生に興へる談合問答を寄する書」は第二巻野山猿著の「談合問答」中に、「評定判官傳」は第三巻に、「貳月雜草に題す」は第二巻に收載してある。

『内辰齋集』の題に於て野山遺文稿に轉録して宣統三年、二十七歳の時の海濱に於ける津文結である。爾來河秋市松陰神社に藏せられてゐる。爾來集にはなほ東京市吉田家所藏本に依りて編輯し、竹田家の評語を傳へ載せたが、本集に於てはこれを省略した。目次に別出とせる『生元加藤紀事抄』は第十三卷に、『藤室鈴語』に於て『太紫翁の落安別記評後の後に書す』の二文に於ては、竹田家に於ては第一卷に各々收載してある。但し『生元』に關ふものの一文は原本目録にあるのみで如何なる理由か分るゝが本文には附けてゐる。後條の『外野翁』は資料會館所藏の真蹟によつて藤室紀事本文稿に附載したものである。

『武藝會通續集』は宣統三年九月二十二日から同年十月六日迄の間に、目を定めて親戚子弟のため山田國村の武藝會場を請じた時の講話の平綴であるが、内容は全書四回の大體小巻のみで終つてゐる。武藝會場本場の講話として皆御合的に郷土の前に請じたものが第一巻に『武藝會通續集』として編纂してあるが、藤室は從來『松陰先生武藝講話』の體裁で講話が直に出さるゝとある。原本は松山松陰神社所藏の古筆本で、和文であるが、文の大部分の漢文は書流しに改めた。

『子已録』で結は宣統四年、二十八歳の時の津文稿で、内辰齋集文稿に續いて松陰の講話に於ける比較的平明に記述され、藤室武藝の文章體は、特に松山村の模倣、その教育

本書の編纂に際し、即ち「外蕃通略」の編纂に際して、上下二冊に編纂されてゐる。目次に別
載である「外蕃通略」は第十二巻に、「討賊始末」は「烈婦登波の碑」は五
巻討賊始末の中に、「孫子評註に跋す」は第六巻に收載してある。

討賊始末は長門大津郡の烈婦登波の復讐事件を事實に據り考證を饒にして編録した史傳と
考證するもので、和文で書かれてゐる。す已藏室文稿中にも登波に關する記事が處々出て
来るが、農民階級に屬する者とはいへ、その意氣は獨り士人の氣となすに足ることを示して、
當時動亂の世相を暴露せんとした點に意圖を窺ふことが出来る。す已藏室文稿中「諸生に
示す」の文中に「諸翁のやう一文を編みたるも、實、考證に傳つあり、建事に能く繼ずる實に
非ず。因つて茲に一言を附し、諸翁を稱絶し物事を興棄し、以て之れを成敗せんと欲す」と
ある一文は、この討賊始末に關してのことであると推はれる。木井の成就したのは鼓吹によ
り第四巻六・七の二巻であることと見て、原本は二巻あるが、木全集は東京市吉田屋藏
本によつて、第五・六の二巻を八巻に改題して四す一一あるから江がに送られる直前に改題入れ
て四巻したものである。この點には附屬として「家藏書目之卷」や「新編諸家集」の中の「討
賊始末」の條を引し讀むべきであらう。これは實説の復讐事件に取替したもので、然し其
實の諸事本上巻に載つてゐる。木全集の「外蕃通略」は、次に考證の二巻を附

「源氏物語」の如く、仁化三年丙午、皇親大臣藤原良衡、若菜永常、手は武朝、猶ほ義朝を中興にせしむるに志あり。大敵は老翁を圖にして、其の著はす所、眞實な對策・後援、桓胤の如きものなり。貴族並に後醍醐天皇に救はつては、頗る親切にして兵事に従ふり。但し、其の人徳無難なるを以て、此の書の如き、能く漢書觀るに非ふべからず。予其の五冊中を讀算するに之を十六卷あり。内七卷は経義、餘ふにも是らず。又六條江事紀撰後説へ、本然れども、深く考へざるに足らず。但た三の巻、夜夜盜を描へし語、互ひ疑、劫奪は帝親の罪を討もと請、及び此の語とは奇特の事蹟と稱すべし。而して判明論は於未だ此の真意を料す。細り此の話、何處種寫以て其の浮妄を斥くることを得、四の二卷に基の由を起す。故に文藏の末裔、鶴河にあり、事實にあらず。故に其の事實に於ける淨安長たしも歸さ、余故に二冊の功を没せず。全文を錄し、從つて其の一二を許さし付録加未清算す。聖武十已四月念四日、二十一回城土樂家記す。

西郷土本屋には四冊の述作を収めたが、その編纂の流し並びに校訂にあつては、野山屋の能く、西郷國忠を鑑み、武藏全書編纂委員新村出等、丁巳國史文稿に委員西川幸吉、討賊始末の委員廣瀬瀧が加當つた。

昭和十三年十一月十九日印刷
昭和十三年十一月二十二日發行

吉田松陰全集第四卷

編纂者

山口縣教育會

右代表者 齋藤彦一

發行者

岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

印刷者

白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十一番地

印刷所

精興社
東京市神田區錦町三丁目十一番地

發行所

岩波書店
東京市神田區一ツ橋二丁目三番地

電話(33) 一一八七・一一八八番
九段(33) 一一八九・一一八〇番
振替口座東京七四四一六番



昭和十三年十二月九日

寺門正元所藏



EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO



3 1761 03017 4619